サラリーマンの生きがいに関する調査

〔第2次調査〕

平成5年3月

財団法人 シニアプラン開発機構

サラリーマンの生きがいに関する調査

〔第2次調査〕

平成５年３月

財団法人 シニアプラン開発機構

ごあいさつ

わが国は、世界にも例を見ない速さで高齢化しており、社会のさまざまな分野にそのインパクトが生じつつあります。こうした中で、わが国では、勤労者が全就業者の四分の三以上を占めており、サラリーマン及びサラリーマンＯＢの社会観、勤労観、生活観が社会に与える影響は極めて大きなものになってきています。

このような状況を踏まえて、財団法人シニアプラン開発機構では厚生年金基金加入員及び受給者を主たる対象として、サラリーマン及びサラリーマンＯＢの視点に立ち、生活設計（家計、健康、生きがい）や新しい社会システム（シニアプラン）の提供など、職域型福祉事業の企画開発、調査研究、啓発支援を行っています。

当財団では平成３年７月に「生きがいに関する研究会」を発足させ、概ね50歳以上のサラリーマンシニアの「生きがい」に関する調査研究事業の一環として、まずアンケート調査である『サラリーマンの生活と生きがいに関する調査－サラリーマンシニアを中心として－』（第１次調査）を実施し、昨年３月、その結果を報告したところであります。

このたび、第１次調査で得られた結果をより深めるために、グループインタビュー、デプスインタビューなどの手法を用いた『サラリーマンの生きがいに関する調査』（第２次調査）を実施し、その結果をご報告できることとなりました。この調査結果は今後の超高齢社会に生起する諸問題の研究基礎資料として意義のあるものと考えており、広くご活用いただければ幸いです。本調査の取りまとめにあたり、貴重なご助言とご協力をいただいた「生きがいに関する研究会」の斎藤座長をはじめとする各委員の方々、並びに関係各位に対し、ここに厚く御礼申し上げます。

また、お忙しい中、今回の調査に快くご協力くださった全国の厚生年金基金及びその加入員と受給者の皆様方に、心から感謝申し上げる次第です。

平成５年３月

財団法人 シニアプラン開発機構

理 事 長　　吉 原 健 二

目　次

ごあいさつ

目次

本調査の実施にあたって …… 1

「生きがいに関する研究会」メンバー …… 3

調査実施概要 …… 5

1. 調査の背景と目的 …… 5

2. 調査仮説 …… 6

(1) 第1次調査仮説の検証 …… 6

(2) 第2次調査における仮説 …… 7

3. 調査の構成と分担 …… 8

4. 調査研究実施機関 …… 8

5. 本報告書を読むにあたって …… 9

(1) 本報告書における用語について …… 9

(2) 本報告書における数値の取り扱い及び図表について …… 10

調査結果の要約 …… 11

1. 事前調査結果 …… 11

(1) 分析標本の基本属性 …… 11

(2) 生活自立度 …… 11

(3) 生活適応度 …… 11

(4) 生きがいの有無と生活適応度 …… 11

2. グループインタビュー調査・個人面接調査結果 …… 12

(1) グループインタビュー調査対象者の基本属性 …… 12

(2) 個人面接調査の対象事例 …… 12

(3) グループインタビュー調査におけるグループ別の発言構造 …… 12

(4) 定年・退職と生きがい喪失の関係 …… 14

(5) 定年後の生きがいのとらえ方の変容 …… 15

(6) 定年後の生きがい獲得の「場」 …… 15

(7) 生きがい喪失・創造のプロセスと性格 …… 16

3. デプスインタビュー調査結果 …… 17

(1) シニア期の生きがい創造のメカニズムに関する事例研究 …… 17

(2) 定年前後の夫婦関係と生きがいについて …… 20

調査結果

第Ⅰ部　事前調査

第Ⅰ章　調査実施概要 …… 24

Ⅰ・1　調査の設計 …… 24

(1)　調査対象者と標本数 …… 24

(2)　調査実施方法 …… 24

(3)　調査実施時期 …… 24

(4)　調査内容 …… 24

Ⅰ・2　回収結果 …… 25

Ⅰ・3　調査対象候補者の割当 …… 25

第Ⅱ章　分析標本の基本属性 …… 26

Ⅱ・1　年齢・定年経験 …… 26

Ⅱ・2　家族 …… 26

Ⅱ・3　健康状態 …… 26

第Ⅲ章　調査結果の詳細 …… 27

Ⅲ・1　社会活動 …… 27

Ⅲ・2　生活自立度 …… 28

(1)　日常生活においてできること …… 28

(2)　日常生活において行っていること …… 29

Ⅲ・3　生活適応度 …… 30

(1)　自尊感情 …… 30

(2)　モラール …… 32

Ⅲ・4　生きがい …… 35

(1)　生きがいの意味 …… 35

(2)　現在の生きがいの有無 …… 36

(3)　生きがいの有無と生活適応度 …… 37

第Ⅱ部　グループインタビュー調査結果・個人面接調査結果の詳細

（東京都老人総合研究所　佐藤眞一，㈱ＣＲＣ総合研究所）

第Ⅰ章　調査の設計 …… 42

Ⅰ・1　グループインタビュー調査の設計 …… 42

(1)　調査方法 …… 42

(2)　グループ設定 …… 42

(3)　対象者の選定 …… 43

(4) 質問紙調査の実施 …… 43
(5) 実施日時 …… 43
第Ⅱ章 グループインタビュー調査結果 …… 44
Ⅱ・1 インタビューの内容 …… 44
(1) ＯＢグループのインタビュー内容 …… 44
(2) 現役グループのインタビュー内容 …… 45
Ⅱ・2 分析標本の基本属性 …… 46
(1) 各グループ出席者の基本属性 …… 46
(2) 生活態度および性格特性の特徴 …… 52
Ⅱ・3 発言の概要 …… 56
(1) Ａ；喪失経験グループ …… 56
(2) Ｂ；積極性上位グループ（社会活動あり） …… 58
(3) Ｃ；積極性上位グループ（社会活動なし） …… 60
(4) Ｄ；積極性中・下位グループ …… 62
(5) Ｅ；現役グループ …… 64
(6) Ｆ；女性グループ …… 66
Ⅱ・4 グループ別にみた発言構造の分析 …… 69
(1) Ａ；喪失経験グループ …… 70
(2) Ｂ；積極性上位グループ（社会活動あり） …… 72
(3) Ｃ；積極性上位グループ（社会活動なし） …… 74
(4) Ｄ；積極性中・下位グループ …… 76
(5) Ｅ；現役グループ …… 78
(6) Ｆ；女性グループ …… 80
Ⅱ・5 詳細分析 …… 82
(1) 定年前後の生活変化と生きがい喪失の危機 …… 82
(2) 生きがい …… 83
(3) 生きがいを得る場 …… 87
(4) 生きがい創造に関わる行動 …… 90
(5) 生きがい喪失・創造のプロセスと性格 …… 92
(6) 生きがい創造に向けての阻害要因と施策要望 …… 96
第Ⅲ章 個人面接調査結果 …… 98
Ⅲ・1 調査の設計 …… 98
(1) 調査対象者 …… 98
(2) 調査実施方法 …… 98

(3) 調査内容 …… 98
(4) 実施日時 …… 98
Ⅲ・2 対象者のプロフィール …… 99
(1) 分析標本の基本属性と選定理由 …… 99
(2) 事例の概要 …… 99
Ⅲ・3 事例の分析 …… 102
(1) 事例1（定年退職後に転居経験のある事例） …… 102
(2) 事例2（生きがいを持つべきとの考えに懐疑的な事例） …… 104
(3) 事例3（資格取得により定年後の再就職に成功した事例） …… 106
(4) 事例4（定年退職後の精神的な落ち込みから立ち直った事例） …… 108
(5) 事例5（現役サラリーマンの事例） …… 110
(6) 事例6（未婚の女性ＯＢでひとり暮らしの事例） …… 112

第Ⅳ章 グループインタビュー調査・個人面接調査結果総括 …… 114
Ⅳ・1 定年・退職と生きがい喪失の関係 …… 115
(1) 定年の迎え方または退職の仕方の問題 …… 115
(2) 定年に対する評価 …… 116
(3) 定年ショックへの対処 …… 117
(4) 仕事に対する意識の転換 …… 117
Ⅳ・2 定年後の生きがいのとらえ方の変容について …… 118
(1) 生きがいの対象と内容について …… 118
(2) メタ概念としての生きがい …… 119
Ⅳ・3 定年後の生きがい獲得の「場」の変容について …… 119
(1) 生きがいを得る「場」の特性について …… 120
(2) 生きがいを得る「場」の検討 …… 120
Ⅳ・4 生きがい喪失・創造のプロセスと性格 …… 122
(1) 生きがい喪失と性格の関連 …… 123
(2) 生きがい創造と性格の関連 …… 124

第Ⅲ部 デプスインタビュー調査結果の詳細
第Ⅰ章 シニア期の生きがい創造のメカニズムに関する事例研究
（東京家政大学 西村純一，帝京大学 滝聞一嘉）
Ⅰ・1 課題と方法 …… 126
(1) 課題 …… 126

(2) 方法 …… 128
Ⅰ・2 対象者のプロフィール …… 131
Ⅰ・3 事例の分析 …… 135
(1) 早期に引退を決めた事例（A氏） …… 136
(2) 生きがいに懐疑的な事例（B氏） …… 138
(3) 仕事が生きがいの事例（C氏） …… 140
(4) 早期に妻と死別した事例（D氏） …… 142
(5) 定年後に転居した事例（E氏） …… 144
(6) 悠々自適の引退生活の事例（F氏） …… 146
(7) 海外での生活を決意した事例（G氏） …… 148
(8) 社会奉仕が生きがいの事例（H氏） …… 150
(9) フリーの仕事が生きがいの事例（Ⅰ氏） …… 152
(10) 地位の落差を感じている事例（J氏） …… 154
(11) 最近妻を亡くした事例（K氏） …… 156
(12) 趣味に打ち込んでいる事例（L氏） …… 158
(13) 解放感を味わっている事例（M氏） …… 160

Ⅰ・4 全体的考察 …… 162
(1) 仮説1についての考察 …… 162
(2) 仮説2についての考察 …… 171
(3) 仮説3についての考察 …… 173
(4) 仮説4についての考察 …… 176
(5) 今回の面接調査で示唆されたことから …… 177
第Ⅱ章 シニア期の夫婦関係と生きがいのパラドックス …… 179
（聖心女子大学 藤崎宏子，(財)統計研究会 西 三郎）
Ⅱ・1 課題と方法 …… 180
(1) 問題関心 …… 180
(2) 課題 …… 183
(3) 方法 …… 183
Ⅱ・2 調査対象のプロフィール …… 185
(1) 事例A …… 185
(2) 事例B …… 190
(3) 事例C …… 196
(4) 事例D …… 201

(5) 事例E …… 207
(6) 事例F …… 213
(7) 事例G …… 217
(8) 事例H …… 221
Ⅱ・3 考察 …… 224
(1) 職業キャリアの連続・不連続 …… 224
(2) 職業キャリアと家族キャリア …… 226
(3) 退職前の準備と退職時の心境 …… 228
(4) 現在の関心事と心境 …… 230
Ⅱ・4 総括 …… 232

第Ⅳ部 調査結果のまとめ …… 235

（付）調査票及び単純集計結果 …… 245
1. 事前調査 …… 247
2. グループインタビュー実施時調査 …… 253
3. デプスインタビュー（西村グループ）実施時調査 …… 259

本調査の実施にあたって

“人生８０年時代”という言葉が使われるようになってから随分と時間が経過し、各方面で高齢化社会に関する様々な議論が展開されるようになりました。また、わが国においては、全就業者の四分の三以上が勤労者（サラリーマン）であり、その数は、5,000 万人にものぼっています。さらに従来の物質的な豊かさ優先（モノ志向）から、環境問題や社会貢献等の議論を契機とした、精神面の豊かさ優先（ココロ志向）へと考え方が変わりつつあり、個人個人の「生きがい」に関心が寄せられるようになってきています。

しかしながら、この「生きがい」は多分に個人的なものであり、「生きがい」とは何か、「人々は何に生きがいを感じているのか」といったことについては、理論的にも、具体的にも余り研究がなされていないようです。

反面、現実には5,000 万人もの勤労者のほとんどが60歳前後で定年を迎え、退職後の四半世紀を過ごすことになりますので、サラリーマンの定年後の「生きがい」についての研究は、わが国にとっての喫緊の課題でありました。

こうした問題意識から、財団法人シニアプラン開発機構は、平成３年７月に「生きがいに関する研究会」を発足させ、サラリーマンを対象に「生きがい」の調査研究を行っています。その研究の一環として、アンケート調査『サラリーマンの生活と生きがいに関する調査－サラリーマンシニアを中心として－』（第１次調査）を実施し、平成４年３月にその結果を報告したところであります。

その第１次調査結果からは、「生きがい」が極めて個人的な問題であり、個人の内面的な要因が深く関与することが推察できました。これを踏まえて、第１次調査で得られた結果を構造的に深めることを目的に、前回調査にご協力いただいた方々の中から、グループインタビューやデプスインタビューといった調査方法を用いた『サラリーマンの生きがいに関する調査』（第２次調査）を実施し、このたび結果をご報告できる運びとなりました。

これらの調査結果を踏まえて、今後はサラリーマンの生きがいを構成する要素、定年退職による生きがい喪失のメカニズムの解明及び防止策を検討することにより、新たな生きがいを創造するための新しい社会システム（シニアプラン）の構築を目指して行きたいと考えております。

今回の調査が、厚生年金基金や企業の人事セクションなどを軸とする職域福祉の増進に寄与するのみならず、中高年者の生涯教育に携わる方々、また高齢社会を取り巻く諸問題を研究されておられる研究機関、専門家などにも広く活用され、学際的な幅広い意見交換がなされる契機となることを願っております。また、この報告書がサラリーマンシニアの生きがいについて、広く関心を呼びおこし、精神的な豊かさを基盤とした心地良い長寿社会の実現に向けての一助となれば幸いです。

財団法人 シニアプラン開発機構
生きがいに関する研究会
座 長　斎 藤 茂 太

「生きがいに関する研究会」メンバー（敬称略、平成４年10月１日現在）

座　長：斎藤　茂太　　斎藤病院院長　医学博士

副座長：東　　清和　　早稲田大学教授

副座長：香川　正弘　　上智大学教授

阿部　實　　日本社会事業大学助教授

今井　通子　　東京女子医科大学講師　医学博士　登山家

大友ひろ子　　日本ロイス（株）主任研究員

小倉　恒雄　　山一証券（株）企業年金部部長

京極　高宣　　日本社会事業大学教授

佐々木正治　　広島大学教授

佐藤　眞一　　東京都老人総合研究所研究員

塩田　幸雄　　（財）長寿社会開発センター企画運営部長

滝口　徳重　　東京倉庫業厚生年金基金常務理事

西村　純一　　東京家政大学助教授

濱口　晴彦　　早稲田大学教授

藤原　房子　　日本経済新聞社編集委員

松村　孝雄　　東海大学教授

宮坂　広作　　山梨学院大学教授　東京大学名誉教授

事務局：財団法人 シニアプラン開発機構

（研究開発部長　鈴木　秀幸
主任研究員　　矢野　浩一、奥村麻基子）

調査実施概要

1. 調査の背景と目的

財団法人シニアプラン開発機構では、平成3年7月に「生きがいに関する研究会」を発足させ、「生きがい」という概念の体系化とともに、サラリーマンの「生きがい」が個人の置かれた立場や環境の中で、どのように変化、実現、創造されるのかについて、学問的、学際的な調査・研究を行っている。その一環として平成3年度は、定年前後のサラリーマンシニア層を対象に、定年前後の生活や意識等、生きがいに関連する基礎的な資料を得ることを目的とし、アンケート調査『サラリーマンの生活と生きがいに関する調査－サラリーマンシニアを中心として－』（第1次調査）を行っている。

本調査は、この第2次調査として位置づけられるものである。本調査は、「生きがい」が極めて個人的な問題であり個人の内面的要因が深く関与すると思われる点をふまえ、質的な調査方法を用いることにより、第1次調査で得られた結果を構造的に深めようとするものである。

なお、「生きがいに関する研究会」では、サラリーマンの生きがいを構成する要素と定年退職による「生きがい」喪失のメカニズムの解明、「生きがい」喪失を防止するための方法の確立、新たな「生きがい」創造のための社会システムの構築の3点を最終課題としている。

2. 調査仮説

(1) 第1次調査仮説の検証

前年度調査の設計時点で設定された仮説と対応する結果は以下のとおりである。いずれの仮説についても調査結果によって修正の必要があることが明らかとなった。仮説1に関しては、定年による「仕事・会社」から得る生きがいの喪失の存在は明らかとなったが、それが生きがい全体の喪失になるケースは、予想に反してさほど多いとはいえないと思われる結果が得られた。また、仮説2に関しても、仮説に反してサラリーマンが定年前後に生きる場を拡大している様子がうかがえる結果がいくつかみられた。

仮説1；サラリーマンにとって定年退職は大きな転機であり、定年を機に生きる目標や目的を失うケースがある。

〔仮説1を肯定する傾向の第1次調査結果〕

○現役サラリーマンの生きがいは、「家庭」と「仕事・会社」が主たる“取得の場”であり、定年を機に現役時代に「仕事・会社」から得ていた生きがいを喪失する。

○OBのうち、無職、嘱託・パート等の者には、有職の者に比べて生きがい喪失者がやや多い。

〔仮説1を否定する傾向の第1次調査結果〕

○「生きがい」を持つ者の比率は現役よりOBに多い。

○定年によって仕事から一気に引退せず、何らかの形で仕事につきながら、徐々に引退に向かうのが一般的なコースとなっており、退職後に発生した生活問題は、定年前の本人の予想を下回る。

仮説2；サラリーマンは、 1. 仕事を生きがいとする人が多く、 2. 会社以外の交流が希薄であるために、 定年後に新しい生きがいを見いだす機会や場を得ることが難しい。

〔仮説2を否定する傾向の第1次調査結果〕

○現役サラリーマンの生活が「仕事・会社」に重心がおかれている点は事実であるが、意識的にはそれを否定的にとらえており、気持ちの面では必ずしも仕事ベッタリではない。

○現役時代から、地域、グループなど仕事、家庭以外の帰属意識が徐々に高まっているなど、生きる場を拡大しようとする傾向がみられる。

○退職後の友人獲得の場の拡大傾向、所属団体の増加など、退職後の生きる場の拡大傾向がみられる。

(2) 第2次調査における仮説

これらの結果をもとに、新たに導くことができた仮説は以下のとおりである。本調査では、以下の4つを仮説として設定し、その検証を目的とした。

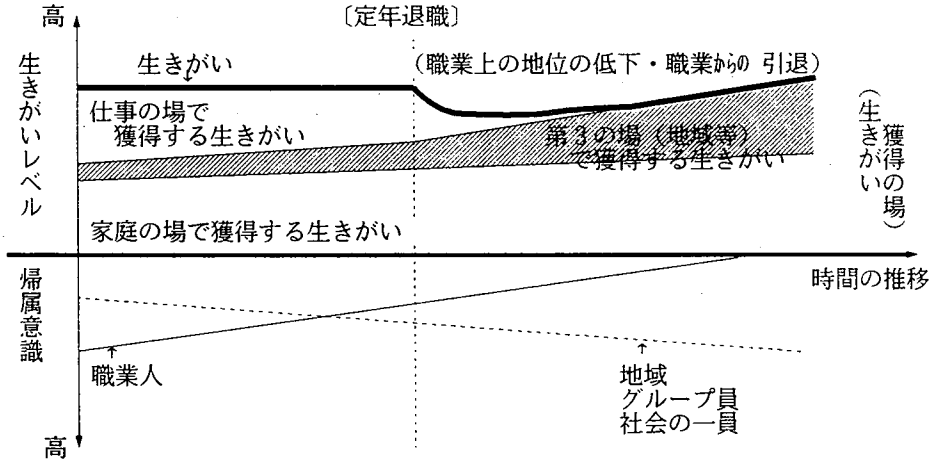
仮説1；職業を全く失うことや職業上の地位の低下は、生きがい喪失の要因となりうるか。その場合、それに関与する要因は何か。

仮説2；定年退職後、生きがいのとらえ方は変容する。

仮説3；定年退職後、生きがいを得る「場」は変容する。

仮説4；生きがい喪失・創造のプロセスと性格特性との間には一定の関連がある。

〔第1次調査から仮定されるサラリーマンの生きがいの変容（参考）〕



3. 調査の構成と分担

本調査では、質的調査の手法としてグループインタビュー調査、個人面接調査、デプスインタビュー調査を用い、３つの調査研究グループにより調査を実施した。本報告書はこれらの３つの調査を総括したものである。また、質的調査の対象者選定を目的として、前回調査の回答者のうち追跡調査を応諾した者を対象とした事前調査を実施した。調査全体の構成及び各調査の設計の概要、調査設計、実施の担当を以下に示す。各調査の詳細な設計、内容については、『調査結果』に後述する。

〔調査全体の構成と各調査の概要〕

第１次調査

〔平成３年度・既実施：サラリーマンの生活と生きがいに関する調査〕
対　　象；全国の厚生年金基金の加入員と受給者（35～74歳）　4,000サンプル
方　　法；郵送配布郵送回収法
有効回収数；3,051 サンプル

第２次調査

事前調査

対　　象；第１次調査で追跡調査を応諾した者のうち住所不明等を除く810ｻﾝﾌﾟﾙから質的調査の設計に基づき選定した328ｻﾝﾌﾟﾙ
方　　法；郵送配布郵送回収法
有効回収数；275サンプル

ｸﾞﾙｰﾌﾟｲﾝﾀﾋﾞｭｰ調査・個人面接調査

〔ｸﾞﾙｰﾌﾟｲﾝﾀﾋﾞｭｰ調査対象〕
・１ｸﾞﾙｰﾌﾟ５～７名、６グループ
・関東在住

A
B
C
D
男性ＯＢ
生きがい、社会活動の有無、性格特性を条件として４グループに区分
Ｅ；男性現役
Ｆ；女性ＯＢ

〔個人面接調査対象〕
・６事例
・ｸﾞﾙｰﾌﾟｲﾝﾀﾋﾞｭｰ対象者の中から、代表的な事例を各ｸﾞﾙｰﾌﾟ１名選出

〔調査設計・実施〕
東京都老人総合研究所　佐藤眞一
㈱ＣＲＣ総合研究所　総合研究本部　総合研究部

デプスインタビュー調査

西村グループ	西グループ
〔調査対象〕 ・13事例 ・男性ＯＢ （関東在住７事例 関西在住６事例）	〔調査対象〕 ・８事例 ・関東在住の男性で配偶者のある者 （現役２事例 ＯＢ６事例）
〔調査設計・実施〕 東京家政大学　西村純一 帝京大学　滝聞一嘉	〔調査設計・実施〕 ㈶統計研究会　西　三郎 聖心女子大学　藤崎宏子

（敬称略）

4. 調査研究実施機関

株式会社ＣＲＣ総合研究所　総合研究本部　総合研究部

5．本報告書を読むにあたって

(1) 本報告書における用語について

①「サラリーマン」「現役」「ＯＢ」

本調査においては、男女の企業就業者及びその経験者を「サラリーマン」とよぶ。

そのうち、現在企業に勤務中の現役の人を「サラリーマン現役」（現役）とよび、定年などの退職経験者を「サラリーマンＯＢ」（ＯＢ）とよぶ。なお、「サラリーマンＯＢ」は、退職後の再就職の有無を問わない。

②「自尊感情」

「自尊感情」とは、自分自身についての価値や重要性をどのように感じているかという自己評価意識を意味する。つまり「自尊感情」が高いということは、自分自身の生き方、考え方、行動の仕方などを肯定的に判断し、自分を価値ある存在として感じているということである。

③「モラール」

「モラール」とは、普段の生活における気分や精神状態、個々人の主観的判断で今の生活に幸福感をどれほど感じているかを意味する。つまり「モラール」が高いということは、日常生活で気分や精神状態が良好であり、また主観的幸福感を強く感じているということである。

④「標準偏差」

「標準偏差」とは統計学の用語であり、いくつかの得点の合計点からその平均を計算しているとき、各々の得点がどの程度平均点から離れているかを表すものである。例えば、〔４点、５点、６点、７点、８点〕の平均は６点であり、〔２点、４点、６点、８点、10点〕の平均も６点である。しかし、後者の５つの得点の方が前者の得点よりも幅広く散らばっている。このような平均と各得点との隔たりを数値によって示すものが「標準偏差」である。

⑤「分散分析」

「分散分析」とは統計学の用語であり、ある得点が１つもしくは複数の要因によって影響を受けているかどうかを分析するものである。例えば、積極的な性格であるか消極的な性格であるかによって、ボランティア活動への参加意向に影響すると考えられる。また、日本人かアメリカ人かによってボランティア活動の参加回数が異なるとも考えられる。そこで、性格と国籍の２つを要因として、１年間のボランティア活動への参加日数に違いがあるかを統計的に検定する手法として分散分析を用いるのである。

⑥「ｔ検定」

「ｔ検定」とは統計学の用語であり、２つの平均に差があった場合、その差を客観的に意味づけるものである。例えば、英語のテストでＡグループの平均が80.0点、Ｂグループの平均が83.5点であった場合、単純にＢグループのほうがＡグループよりも英語ができるとはいい切れない。何点以上の差があった場合、どちらのグループのほうが勝っていると判断できる基準がないからである。そこで統計的手法の「ｔ検定」によって、ＡグループとＢグループの平均の

差は統計的に意味のある差といえるかどうかを検定するのである。もし、統計的に意味のある差が認められれば、平均の高いグループが英語のテストで出来がよかったと判断できるのである。

⑦「メタ概念」

「メタ概念」とは、ある言葉が指し示す個々の要素を総合的に把握するための、個人の有する上位概念のことである。例えば、「生きがい」という言葉は同じであっても、どのようなことを感じることが「生きがい」なのか、何をすることが「生きがい」なのかは、その「生きがい」を感じるそれぞれの人によって異なる。つまり、その人が「これが『生きがい』だ」と感じる時の、具体的な感情、価値、行動、等々が「生きがい」の構成要素であり、この構成要素を総合するのが「生きがい」に対する個人の「メタ概念」である。例えば、「生きがいとは努力してつかみとるものである」というのが「メタ概念」としての生きがいであり、「私の生きがいは、菊作りである」というのは生きがい対象である。

⑧その他の用語

原則として、その用語がはじめて出現するときに説明を加えてある。

(2) 本報告書における数値の取り扱い及び図表について

本報告書では、数値を以下のように扱っている。

①アンケートへの回答は、単数回答（1つだけ選択する回答）と複数回答（2つ以上を選択する回答）とがある。

②調査結果の数値は、原則としてパーセンテイジ（%）で表記した。%値の母数は、原則としてその質問項目の該当標本数（回答すべき人の数）であり、図表には「n」（一部の表では「標本数」として表示してある。

③原則として%値は、小数点以下第2位を四捨五入し、小数点以下第1位までを表記してある。従って、単数回答の合計が必ずしも 100%ではない場合（99.9%または、 100.1%など）がある。同様に、複数の選択肢を合わせた場合や小計等では、内訳の%値を単純加算した数値とは 0.1%異なる場合がある。

④統計的手法による分析の分散分析及び t 検定の値については、小数点以下第3位までを表記してある。

⑤分析対象項目がはじめて出現する図表では、回答選択肢のすべて及び「無回答」を表記してある。その後に示す同じ項目の図表では、煩雑さを避けるために、選択肢の言葉や文章を省略形にしたり、「その他」「無回答」等の表示を省略する場合がある。

調査結果の要約

1. 事前調査結果

(1) 分析標本の基本属性

本調査の回答者は、32.4%が現役サラリーマン、62.5%がサラリーマンＯＢである。これは調査対象者の選定条件による偏りであるといえるが、前回調査に比べてＯＢが多く、年齢層も高い。

(2) 生活自立度

掃除、洗濯、外出の身じたくなど、日常生活における事柄について、自分ができることと、実際に行っていることをたずねた。まず、できることをみると、「外出の身じたく」、「部屋の掃除」は９割近くが回答しているが、「妻の友人を知っている」、「洗濯」、「食事作り」は約６割、「トイレの掃除」、「アイロンかけ」、「領収書等の書類の所在がわかる」では約半数にとどまっている。「外出の身じたく」、「出張や旅行の荷造り」は実際にも行っている者が８割をこえるが、その他の項目は、実際に行っている者はできるとする者を10ポイント以上、下回っている。

(3) 生活適応度

生活適応度を、自分自身の価値や重要性をどのように感じているかという自尊感情*1と、日常生活における精神状態、主観的幸福感の程度をモラール*2で測定した。

自尊感情について、自分自身に対する肯定的な評価に高得点を与え、０～30点までの自尊感情得点を算出した。全体の平均は22.4点になり、現役は21.2点、ＯＢは22.9点で、現役に比べてＯＢは自尊感情得点が若干高い。

モラールについても、主観的な幸福感を強く感じているものに高得点を与え、０～17点のモラール得点を算出したところ、全体の平均は12.9点であった。現役が12.5点、ＯＢが13.1点とモラールについても現役に比べ、ＯＢの得点が若干高い。

(4) 生きがいの有無と生活適応度

生きがいの意味を問う設問に続き、そのような生きがいを現在持っているかをたずねた設問では、83.6%が生きがいを「持っている」と回答している。この生きがいの有無と生活適応度

との関連をみると、生きがいを「持っている」とする『生きがいあり』のグループは、「前は持っていたが今は持っていない」、「持っていない」、「わからない」を合わせた『生きがいなし』のグループに比べて自尊感情、モラールともに得点が高く、統計的にも意味のある差があることが示された。

2. グループインタビュー調査・個人面接調査結果

（東京都老人総合研究所　佐藤　眞一，㈱ＣＲＣ総合研究所）

(1) グループインタビュー調査対象者の基本属性

６グループのうち、現役グループを除く５グループがＯＢで構成されている。ＯＢグループ出席者の年齢は56～78歳である。喪失経験グループ（平均62.6歳）と積極性中・下位グループ（平均61.0歳）で出席者の年齢層が比較的低く、定年後の経過年数も短い。積極性上位グループ〔社会活動あり〕（平均69.2歳）、〔社会活動なし〕（平均67.4歳）では出席者の年齢層が比較的高い。女性グループは平均64.8歳で、これらの中間に位置している。現役グループの出席者の年齢は41～59歳である。

就労状況は、積極性中・下位グループでは全員が有職、積極性上位グループ〔社会活動あり〕では無職が大半を占める。また喪失経験グループでは、年齢層の近い積極性中・下位グループに比べて無職の者が多い。

(2) 個人面接調査の対象事例

事例１；定年退職後に転居経験のある事例（Ａ－ｄ氏　67歳，ＯＢ男性）

事例２；生きがいを持つべきとの考えに懐疑的な事例（Ｂ－ｃ氏　62歳，ＯＢ男性）

事例３；資格取得により再就職に成功した事例（Ｃ－ｅ氏　70歳，ＯＢ男性）

事例４；定年退職後の精神的な落ち込みから立ち直った事例（Ｄ－ｃ氏　65歳，ＯＢ男性）

事例５；現役サラリーマンの事例（Ｅ－ｅ氏　53歳，現役男性）

事例６；未婚の女性ＯＢでひとり暮らしの事例（Ｆ－ｅ氏　65歳，ＯＢ女性）

(3) グループインタビュー調査におけるグループ別の発言構造

各グループの発言を比較すると、ＯＢの場合はいずれのグループでも、グループ内の大半の出席者の反応として、生活変化に対する否定的な自己評価が大なり小なりみられた。しかし、定年後の生活においてこの否定的な評価への対処として、生きがいの維持、創造に向けての動きがみられるかどうか、またその内容にはグループによる違いがみられる。結果として現在の生活状況や今後の生活についての展望もグループにより異なったものになっている。

また、生きがいを得る場としては「定年前の仕事、職場との関係」「定年後の仕事」「家庭」「地域活動」「趣味・学習活動」「ボランティア活動」などについての発言がみられ、そ

れぞれの場が各人の生きがいの喪失・創造に占めるウエイトや、それぞれの場での生きがい創造に関与すると思われる意識・行動に、グループによる特徴がみられる。

以下に各グループの発言構造の特徴を示す。

〔A；喪失経験グループ〕

定年前後の生活変化に対する否定的な評価が多く、肯定的な評価がほとんどみられない。また、生きがい獲得の場のいずれにおいても、趣味が少ない、夫婦関係が希薄、地域とのつながりがないなど、生きがい喪失に関与すると思われる実態がみられる。こうした状況は他のグループでもみられるが、このグループではこうした実態を生きがいの創造に向けて変化させようとする意欲に乏しく、具体的な行動が少ない。また無職者に再就職の意向が強いが、仕事に対する要求水準が高いため困難な状況にあり、生きがい喪失の危機に陥っている。

〔B；積極性上位グループ（社会活動あり）〕

定年前後の生活変化に対して否定、肯定の両面が評価されている。現役時代の生活が仕事中心で、家庭、地域、趣味のいずれの場でも生きがい喪失に関与すると思われる定年前の実態がみられる点は喪失経験グループと同様である。しかし、このグループでは定年退職後、地域活動、ボランティア活動いずれかの実践が既にある（グループ設定条件）だけでなく、家庭や趣味の場でも生きがい創造に向けて、意欲や希望だけでなく顕在化した行動や努力がみられる。定年後の生活変化を否定的な面も含めて自覚し、積極的に新しい生活に適応しようとする姿勢がみられる。

〔C；積極性上位グループ（社会活動なし）〕

有職の者は定年前と同様に仕事中心の生活を送っており、無職の者も大半が定年前の職場とのつながりを強く維持している。そのためか定年前後の生活変化に対する認識が低く、生活変化に対処した行動もあまりみられない。生きがいを得る場としては、家庭、趣味、地域といった場での生きがい創造に向けての具体的な努力や行動が少なく、意欲も乏しいが、現在の仕事、定年前の職場との関係のウエイトが極めて高く、生きがい喪失の状態には陥っていない。

〔D；積極性中・下位グループ〕

定年後の生きがい創造に向けての意欲に関しては、積極性上位グループ（社会活動あり）と同様の発言構造がみられ、家庭、趣味、地域、ボランティアのいずれの場においても努力や行動の意向が示されている。具体的な行動や努力は、家庭、趣味に関して多くみられ、定年前から趣味や家庭生活が充実しており定年後の適応もスムースであったとするケースもある。地域活動、ボランティア活動に関しては、意欲は強いが具体的な行動を起こすには至っていない。

〔E；現役グループ〕

ラインからはずれる、出向するなどにより、時間的、精神的なゆとりが生じ、仕事中心の生活からの変化がみられる者が多い。仕事以外に視野が広がることにより、趣味や学習活動をはじめる、生きがいや定年後の生活にも関心が向くなど、結果として定年後に向けての準備になっているようである。一方、依然として仕事中心の生活を送っているとする者は、趣味などの活動を行うゆとりがない、定年後について考えていないといった発言がみられる。

〔F；女性グループ〕

男性グループと大きく異なる点は、会社以外の人間関係、趣味・学習活動に関して定年前からの実態が既にある者が多く、それが生きがいの維持・創造に関与していると思われる点である。また、男性にはみられなかった反応として、定年後には家庭生活を楽しみたいといった発言がみられる。

(4) 定年・退職と生きがい喪失の関係

〔定年の迎え方または退職の仕方の問題〕

喪失経験グループの特徴として、定年・退職の際にトラブルや問題点があり、それが解消されていないということが認められる。こうした問題点はどのグループでもみられ、これが直接生きがい喪失に結びつくわけではないが、喪失経験グループの発言には現役時代の仕事に対する不満と未練が顕著である。「会社は冷たい」と会社に捨てられたとの定年イメージを形成しており、これが、仕事以外の場での新たな行動を起こす意欲を妨げているようである。

〔定年に対する評価〕

積極性上位グループ（社会活動あり）、積極性中・下位グループ及び女性グループでは、定年に対して否定、肯定の両面が評価されており、その中で今後の生活に向けて肯定的な側面に注目して具体的に対処しようとする姿勢がうかがえる。一方、喪失経験グループでは定年の否定的な側面に対する発言が多く、否定的な面への対処法のイメージが希薄であり、自己の中で定年ショックを解消しようとする意欲さえみられない。定年の否定的側面の評価自体はいずれのグループでもみられており、問題はこれにいかに対処するかという点のようである。

〔定年ショックへの対処〕

喪失経験グループでは、定年ショックへの対処法として具体的な行動は認められず、「考えようとしない」との方法が取られる傾向にあった。積極性上位グループ（社会活動なし）でも同様の傾向がみられるが、退職時に役職者だった者が多く、定年後も仕事を継続していたり、退職後も会社を中心とした人間関係が継続している。そのため定年のイメージそのものが希薄であり、こうした状況の継続が今後の問題となろう。積極性上位グループ（社会活動あり）、

積極性中・下位グループでは、定年後の仕事以外の生活の場に対する再評価、あるいは実際の行動がみられる。

(5) 定年後の生きがいのとらえ方の変容

〔生きがいの対象と内容〕

対象者の多くは現役時代の生きがいの源泉を仕事ととらえているが、それが退職後変化したか否かについてはＯＢ４グループの立場が概ね２つに分かれている。喪失経験グループ、積極性上位グループ（社会活動なし）は仕事に代わり得るものはないとの立場であり、積極性上位グループ（社会活動あり）、積極性中・下位グループでは仕事は生きがいを与えてくれるものであるが、定年後は他の分野にも目を向け、それが生きがいとなっているとの立場である。仕事以外の生きがいの対象としては、全てのグループでボランティア活動があげられている。

〔メタ概念*3としての生きがい〕

「生きがいとは何か」についての考えがあるか否かが、定年後の生活に影響を与えるように感じられる。定年後、生きがい創造に向けての具体的な行動が多くみられる積極性上位グループ（社会活動あり）、積極性中・下位グループでは、「生きがいとは何か」との発問が多く見受けられる。

(6) 定年後の生きがい獲得の「場」

喪失経験グループは、定年後の生きがいの場の転換がスムースにいっておらず、新たな生活の場が生きがいを得る場となっていない。一方積極性上位グループ（社会活動あり）、積極性中・下位グループでは、生活の場の変容に沿って生きがいを得る場も変容させようとする努力がみられる。また、これらのグループで生きがいの場の転換に成功している例では、生きがいを非日常ではなく、日常生活の中に求めているという傾向がみられる。

〔仕事・会社〕

定年後の再就職の必要性についてはどのグループでも多くの発言がみられた。しかし、喪失経験グループにみられるように、再就職の仕事に現役時代と同じ水準を求める場合には、再就職はきわめて困難になる。再就職や仕事の継続の成功には、現役時代の仕事に対する考え方から何らかの転換が必要である。個人面接調査事例３のＣ－ｅ氏は定年後の資格取得により個人で仕事を始めるという「組織から個人への転換」により仕事の継続に成功、事例４のＤ－ｃ氏は「仕事は生活の張りになり健康維持にも有効」と価値観の転換を行うことにより再就職に成功している。

〔家族・夫婦〕

夫婦のつながりが少ないなど、定年前の家族、夫婦の関係の問題点をあげる発言はいずれのグループでもみられたが、中でも喪失経験グループでは「家族のお荷物になっている」など否定的な発言が多く、その状況を打開する動きに至っていない者が多い。一方、積極性上位グループ（社会活動あり）、積極性中・下位グループでは、定年後に新しい夫婦関係を築いていくことの難しさを指摘した上で、その努力をしている者が多い。

〔地域活動・ボランティア〕

定年前の地域とのつながりはほとんどないとする対象者が大半であり、定年後地域に入っていくことの難しさについての発言も多くみられた。いずれのグループでも帰属集団を持ちたい、地域の役に立ちたいなど、地域とのつながりを求める発言は多いが、実際に定年後、地域とのつながりができたとする事例はわずかである。一方で地域はあきらめ、地域をこえたサラリーマン組織などを拠り所にしたいとする発言もみられる。また、地域とのつながりは求めるが、老人会の活動には拒否反応を示すという者もみられた。

一方、ボランティア活動は全てのグループで生きがいの対象として期待する発言がみられる。自己の価値や存在を確認することは趣味では難しく、社会的な有用感を感じられるボランティア活動への期待が大きい。しかし、現実にボランティア活動の経験のある者は数名にとどまっており、ボランティア活動が組織あるいはシステムとして誰もが入っていきやすい状況になることは必要であろう。

〔趣味・学習活動〕

若い頃から多趣味で、定年後スムースに趣味を中心とした生活に移行している事例が、積極性中・下位グループ、女性グループの一部にみられた。しかし対象者の大半は現役時代はゴルフなど以外にこれといった趣味を持たなかったものが多い。定年後に新たな趣味や学習活動を始める動きは喪失経験グループを除く全てのグループでみられる。地域活動、ボランティア活動等に比べると行動を起こしやすい場であるようである。趣味に対しては、それを通じての人間関係を重視する発言が多いが、ただ楽しむだけではなく、達成感、評価感といった要素を重視する発言もみられる。

(7) 生きがい喪失・創造のプロセスと性格

〔生きがい喪失と性格〕

喪失経験グループでは、他のグループに比べて出席者間での雑談、自発的な発言が比較的少ないなど、社交上の未熟さが目立った。また行動を抑制するような発言傾向がみられ、積極性や意欲の低さが感じられた。また事前調査で測定した、現在の生き方や性格に対する肯定的な自己評価の程度を測る「モラール」の得点が、積極性上位グループ（社会活動あり）に比べて

低くなっている。

〔生きがい創造と性格〕

定年後の生きがい創造に成功した事例をみていくと、これに関与する性格は、何を生きがいと感じるかによると思われる。自己実現型の生きがいの場合は思考が内省的で粘り強くなければ達成は容易ではない。一方、対人型の生きがいは自己実現型に比べると比較的容易に満足を得ることができるが、これには社交性に優れ、決して受け身ではなく、率先して行動に出るマメさなどが必要なようである。

3. デプスインタビュー調査結果

(1) シニア期の生きがい創造のメカニズムに関する事例研究

（東京家政大学　西村純一，帝京大学　滝聞一嘉）

① 対象事例

対象とした事例は以下の13事例であり、すべてＯＢである。

事例１；早期に引退を決めた事例（Ａ氏，61歳）
事例２；生きがいに懐疑的な事例（Ｂ氏，62歳）
事例３；仕事が生きがいの事例（Ｃ氏，65歳）
事例４；早期に妻と死別した事例（Ｄ氏，66歳）
事例５；定年後に転居した事例（Ｅ氏，68歳）
事例６；悠々自適の引退生活の事例（Ｆ氏，73歳）
事例７；海外での生活を決意した事例（Ｇ氏，62歳）
事例８；社会奉仕が生きがいの事例（Ｈ氏，68歳）
事例９；フリーの仕事が生きがいの事例（Ｉ氏，71歳）
事例10；地位の落差を感じている事例（Ｊ氏，63歳）
事例11；最近妻を亡くした事例（Ｋ氏，74歳）
事例12；趣味に打ち込んでいる事例（Ｌ氏，64歳）
事例13；解放感を味わっている事例（Ｍ氏，68歳）

② 定年退職と生きがい喪失の関係

本調査では、考察にあたり「生きがい」に関して次のように定義している。「生きがい」とは、生きる原動力となる心的エネルギーを高めるもので、心的エネルギーを感じている状態を「生きがい感」、生きがいを見いだす対象ないしは源泉を「生きがい対象」とする。また、個々の「生きがい対象」から得られるそれぞれの「生きがい」の総和としての「生きがいレベ

ル」という概念を考える。

また、人生の大まかな浮き沈みをライフカーブとして記述してもらっている。ライフカーブの高さは、心的エネルギーレベルを反映していると考え、その変化から被面接者の「生きがい」の喪失・創造についての要因を取り出すことを試みた。

13の事例のライフカーブは、定年移行期におけるカーブの変化から次の３つのタイプに大別できる。

《タイプ１》定年後、関連会社、別会社への再就職によりライフカーブが下降。

（A氏，C氏，E氏，I氏）

《タイプ２》定年後、親会社や再就職先の関連会社において副社長ないしは社長を経験し、しばらくはライフカーブが上昇または現状維持するが、その後ライフカーブが下降する。（D氏，J氏，K氏）

《タイプ３》定年後、ライフカーブがほとんど変化していない。

（B氏，F氏，G氏，H氏，L氏，M氏）

タイプ２では、社長等への就任というプラス要因が働くことによりライフカーブの高さがしばらくの間維持されているが、最終的にライフカーブが下降しているという点ではタイプ１と同様である。タイプ１とタイプ２は、定年移行期において、職業を失うことや職業上の地位の低下が「生きがい」の喪失をもたらし、それが「心的エネルギーレベル」の低下に反映されている事例であるといえる。

定年移行期の「心的エネルギーレベル」低下後の経過としては、再び上昇している事例とそうでない事例とがある。「心的エネルギーレベル」が再び上昇している事例としてはA氏、C氏、D氏、I氏、J氏、上昇していない事例としてはE氏、K氏があげられる。

「心的エネルギーレベル」、つまりライフカーブの上昇の原因は事例により様々であり、現役時代にできなかった趣味に熱中すること、フリーの職業を通じた社会参加に成功したこと、職業からの引退を仕方のないことと割り切ったことなどである。これらの事例では、いわゆる「定年ショック」後の「生きがい創造」がある程度なされているといえよう。

一方、「心的エネルギーレベル」が上昇していない事例をみると、その原因は、E氏の場合は特に「心的エネルギーレベル」を高めるような強烈なものがないこと、K氏の場合は妻の死や自分の健康への自信喪失などのようである。

また、タイプ３の定年移行期にライフカーブが変化していない事例は、その原因から以下の２つに大別できよう。１つは現役時代から仕事そのものにそれほどの「生きがい」を見いだしていなかったために、仕事上の変化がライフカーブに影響を及ぼしていない事例、もう１つは、現役時代から打ち込める趣味を持っていたこと、現役時代からの精神的な準備等により、定年後に仕事以外のことから「生きがい」を得ているためにライフカーブが変化していない事例である。

③定年期における生きがいのとらえ方の変容

本研究では、生きがいのとらえ方を、構造化されない自由な面接、投影法的な文章完成法、コンボイ調査法で自発的に表明された言葉を手がかりとした。また、自発的に表明された言葉についても、それ自体の分類より、どのような文脈の中でその言葉が表出されたかに注目した。こうした文脈的な観点からみると、生きがいのとらえ方は変容すると考えられる。それは、定年により個人をとりまく状況が構造的に変化すると考えられるからである。

本研究では、定年前後の人間関係の変化を把握するためにコンボイ調査を行っている。これは、定年前と定年後という自分を中心とした2つの円の中に、もっとも大切な人、その次に大切な人というように会社、妻、子ども、趣味の仲間など自分をとりまく人間関係を記入してもらうものである。この結果から、定年により個人をとりまく状況が構造的に変化することが示されている。

多くの事例で定年前後にコンボイが大なり小なり変動する傾向がみられ、特に、定年後に現役時代の会社との関係が、コンボイの中心から軌道の外に遠のいていく様子がいくつかの事例でみられる。このような場合、単に会社や仕事に対する愛着が減少するという量的な問題ではなく、その人にとっての会社や仕事の意味合い自体が変容せざるを得なくなると思われる。

一方、コンボイ調査から定年後に比較的重要性を増してくるネットワークもいくつか示唆されている。A氏のコンボイでは、定年後は子どもよりも妻に比重を置く傾向がみられる。また、定年後に会社や仕事の関係をあまり重視しなくなったケースの中には、兄弟、親戚、友人、近所、地域のいずれかとの交流を重視する傾向がうかがわれた。これは、定年退職にともない生きがいのとらえ方を、会社や仕事一辺倒からそれ以外の領域に、新しい生きがいを求めようとする傾向があることを反映しているものと思われる。

このような人間関係の変化を含む様々な状況の変化は、個人の生きがいのとらえ方に影響を及ぼしていると考えられ、またその状況的な変数の中でも人間関係の変数がきわめて重要な変数の一つであることが示唆されたといえよう。

④定年期における生きがいを得る場の変容

どこで「生きがい」を得ているかということは、何に「生きがい」を感じているか、ということと密接に関連していると考える。そこで、面接の事前に実施した自由記述の回答による「生きがい対象」により、生きがいを得る場についてみてみる。

これによると、定年前と定年後では、「生きがいの場」は変容している事例が多く、また同じ「生きがいの場」であっても、その中のどのような事柄を「生きがい対象」としているかも変容している。

定年前の「生きがいの場」は、多くの事例で職場や家庭となっている。一方、定年後は職場を「生きがいの場」とする事例は少なく、個人生活や家庭が中心となっている。定年後の「生

きがいの対象」としてボランティア、国際友好などをあげ、地域を「生きがいの場」としている事例もみられる。

なお、ライフカーブの変化による3つのタイプそれぞれに特徴的な変容のパターンはみられないようである。

⑤性格特性と生きがい喪失・創造プロセスとの関連

本研究では、面接の中で自分の性格に関する自己評価、信条、他者評価に関する情報を得るように務めた。その中には、その人らしさを反映しているとみられる言葉も多数あるが、断片的なものであり、また少ない回数の面接にもとづくものであるため、現段階ではこれらを性格の指標とするのは危険であると思われる。従って、本研究の範囲では、これらによってとらえた性格と生きがいとの関連について考察するのは困難であると考える。

ただし、性格をより広義にとらえ、その人の興味の持ち方、ライフスタイルなどを含めて考えると、個々人の生きがい創造のあり方はそれらにより異なる傾向があり、性格と生きがいについて密接な関係がある若干の証拠は得られたように思われる。コレクションや模型作りなどを生きがいとしている事例など、なぜそれが生きがいの対象となったのかについて、その人独自の興味や欲求、ライフスタイルがそこに反映されているとしか考えようのない場合がある。そして、その違いはパーソナリティからきていると考えてよいように思われる。ただし、その関係のあり方に一定の法則性があるかは一概にいえず、これについては今後さらに研究をすすめる必要があろう。

(2) 定年前後の夫婦関係と生きがいについて

（聖心女子大学　藤崎　宏子，(財)統計研究会　西　三郎）

① 職業キャリアの連続・不連続

調査対象者の職業キャリアに関して次の3つの特徴があげられる。

第1に、大部分のケースが、必ずしも安定的な職業キャリアを歩んでいるとは言えないことである。経験職業数が最も多いもので7種、最も少ないもので2種になり、特に事例A～Cの転職回数の多さは、初職への就職が第2次世界大戦開戦前であるといった時代背景との関連が大きい。事例Dも転職回数が多いがこれは戦後の産業構造の転換に負うところが大きく、事例F以下では社会的要因が主原因となった職業キャリアの不連続はみられない。

第2に、特に戦前世代のサラリーマンにみられる職業キャリアの不連続は、企業間の移動にとどまらず、業種や職種の変化をともなうものである。このことは、それだけ大きな職業上の変化として意識され、適応上の困難さもより大きかったものと思われる。

第3に、こうした客観的属性レベルでみた職業キャリアの不連続は、必ずしもそのまま本人のキャリアに対する主観的な意味づけの不連続につながるわけではないことがいえる。一貫し

て学校時代に学んだ技術や知識を生かしたものであるととらえている事例や、さまざまな職業を通して時代や社会に対する関心を温め続け、そのことに働く意義を見いだしている事例などがみられる。意味づけのレベルにおいては、連続性を保とうとする姿勢がうかがわれる。

② 職業キャリアと家族キャリアの関連

家族キャリアと職業キャリアとの関連について、第1に注目されるのは、ＯＢのすべてが現役時代の生活が「仕事中心」であり、自らを「仕事人間」であったと評価していることである。今回のＯＢ対象者は終戦時の年齢が13歳から26歳までで、戦後の高度経済成長期とともに職業キャリアを形成していった者である。生活が「仕事が中心」となるような働き方を当然のこととして求められた時代であり、本人にとってそれは選択の余地はないものであった。

第2に、現役時代のＯＢ対象者の家庭人としての部分がそれだけ不十分になりがちだったことがいえる。彼らは、家庭のことは「妻に任せきり」で「内助の功」を求める「亭主関白」だったと述懐しているが、現役時代にとくに夫婦関係に危機が訪れたとの話題は出なかった。妻も夫が「仕事人間」であることを当然のことと受けとめていたものと思われる。

第3に、定年退職を契機として、ＯＢの夫婦関係には質的変化がみられる。一般論として語られたものであるが、定年後の男性は「家庭の不要物」（事例Ｄ）であるといった自嘲的な表現が少なくなく、夫と妻の力関係の変化に関する自覚がみられた。こうしたレッテルを貼られないための対処法としては、「無理にでも外出し、ずっと顔をつきあわせないようにする」といった相互に距離をおくことを重視するものや、「夫婦で共通する趣味をもつ」というものなど多様である。全般的には一定の距離をおいた、ほどほどの関係をよしとする傾向が目立っている。定年後、夫と妻を対等の立場とする意識が強まっているようであるが、こうした関係の「変化」や「再調整」は、現役時代に「思いやり」（事例Ａ）や「感謝の気持ち」（事例Ｂ）をもち続け、結果として培われてきた夫婦の絆が基礎になるものと思われる。

③ 退職前の準備と退職時の心境

退職前の準備のうち、経済、住宅、健康等のハード面については、現役も含めて全員が重要であると強調している。一方、ＯＢが実際に行った準備としては「経済面の備え」が共通にあげられた。「住宅」については調査対象者の全員が現役時代からマイホームをもっていたが、一部に、マイホームの確保以上の意味を「住宅」に求め、「老後を過ごすにふさわしい家」の確保をシニア期の課題と位置づけているケースがみられた。都市部に住むサラリーマンシニアの場合、退職後の住まい方に関して、環境面の連続性を保ちたいという意向を持つものと、まったく異なる環境の中で過ごしたいという意向を持つものとに二分されるようである。

ソフト面の準備については、退職後の「心の準備」が重要であると考え、実際にも「肩書を失いただの人になることを受け入れる」、「いつまでも過去に執着しない」といった生活上の変化に対する心理的な構えをしたという者がみられる。また、これ以上に「人間関係」、「打

ち込める趣味」が重要であるとの自覚が現役、ＯＢともにみられた。ただし「打ち込める趣味」については、ＯＢ全員にその重要性が認識されていたものの、特に定年後の準備を意識して取り組むまでにはいたらなかったというものも少なくない。

実際の退職時の心境は、こうした準備があっても、それほどスムースではなく、多くのものが「手持ちぶさたの感」や「精神的落ち込み」を味わっている。定年前の準備は重要であるが、必ずしもそれによって完璧な老年期への移行が達成されるとは限らないようである。比較的スムースにこの移行が達成されている少数の事例についてみると、職業からの引退が段階的であり、「定年後」の生活への段階的移行が可能であったこと、定年後を第二の人生と明確に割り切り、積極的な姿勢でこれに取り組もうという姿勢がみられることなどがあげられる。

④　現在の関心事と心境

第１に、調査対象となったＯＢの大半は何らかの「打ち込めるもの」をもっており、退職直後の精神的落ち込みのうちにとどまっているものは皆無である。ＯＢの多くが現役時代に漠然と認識していた「趣味」の重要性を実感しているようである。ただし、こうした調査の応諾者は現在の生活に意味を見いだしている人に偏りがちだと思われ、すべてのサラリーマンＯＢが本人にとって「意味ある」生活を送っているわけではないという点には留意が必要である。

第２に、「人間関係」のうち友人関係については、どちらかといえば趣味活動に付随するもの、より楽しくするものというとらえ方がされる傾向にあった。しかし「人間関係」に重きをおいて、そのために趣味活動を始めるものも多いであろう。友人関係と趣味とは、お互いに「目的」にも「手段」にもなりうるのではないかと思われる。

第３に、夫婦関係については、「現役時代よりその重要性を認識するようになった」とする者が多いものの、「生きがい」や「打ち込めるもの」という言葉で、それが語られることはなかった。「趣味」や「打ち込めるもの」を夫婦で共有しているものもほとんどなく、趣味等に関しても「つかず離れずの関係」を求める意識が強い。夫婦間で共通する趣味をもつことなどにより培われるコンパニオンシップの規範は、現在のサラリーマンシニアにはまだ定着しにくいようである。

（注）*1、*2、*3については、「調査実施概要　5.本報告書を読むにあたって」を参照。

調 査 結 果

第Ⅰ部　事前調査

第Ⅰ章　調査実施概要

デプスインタビュー、グループインタビューの実施に先立ち、これらの対象者を選定することを主たる目的として、事前調査を実施した。

Ⅰ・1　調査の設計

(1)　調査対象者と標本数

全国の厚生年金基金の加入員と受給者を対象とした第1次調査（平成3年度）において、追跡調査を応諾した回答者から住所不明等のものを除く 810人から、デプスインタビュー、グループインタビューそれぞれの対象者選定条件をもとに、関東地区の現役及びＯＢの男性、関西地区、愛知県のＯＢ男性である、計 328件を事前調査の対象として選定した。

(2)　調査実施方法

郵送配布郵送回収法

(3)　調査実施時期

平成4年8月20日～9月20日

(4)　調査内容

第1次調査の調査時点からの属性面の変化をとらえる項目など調査対象者選定に必要な項目を中心とし、各調査研究グループの調査実施・分析にあたって必要な項目を加えた。主な調査内容は以下のとおりである。（巻末「（付）調査票及び単純集計結果　1．事前調査」を参照。）

○生きがいの意味、有無

○社会活動への参加状況

○生活自立度

○職業生活上の変化

○生活適応度（自尊感情、モラール）

○未既婚、年齢、健康状態

○質的調査への参加意向

Ⅰ・2　回収結果

現役／ＯＢ	居住地区	設計数	有効回収数	有効回収率
現役	関東	128	103	80.5%
ＯＢ	関東	123	104	84.6%
ＯＢ	関西	59	53	89.8%
ＯＢ	愛知	18	15	83.3%
合　計		328	275	83.8%

Ⅰ・3　調査対象候補者の割当

有効回収サンプルのうち質的調査への参加を応諾したものを、デプスインタビュー、グループインタビューそれぞれの対象者選定条件に沿って、対象候補者として割り当てた。

第Ⅱ章　分析標本の基本属性

本章では、今回の調査の分析標本（有効回答者）の基本属性を示す。なお、第１次調査結果によるものには【第１次調査】と記し、また事前調査結果については【事前調査】と記す。

Ⅱ・１　年齢・定年経験

①年齢【事前調査】　（%）

	標本数	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65～74歳	無回答
全　体	275	7.3	12.7	31.6	48.4	0.0

②定年経験の有無【第１次調査】　（%）

	標本数	定年前（現役）	ＯＢ小計	定年を過ぎた	定年前に退職した	無回答
全　体	275	32.4	62.5	56.4	6.2	5.1

（注）第１次調査の後、定年を過ぎたか否かを事前調査により確認し、集計している。

Ⅱ・２家族

③未既婚【事前調査】　（%）

		標本数	未　婚	有配偶	離　別	死　別	無回答
全　体		275	0.4	94.2	0.4	5.1	0.0
	現　役	89	1.1	97.8	1.1	0.0	0.0
	Ｏ　Ｂ	172	0.0	91.9	0.0	8.1	0.0

Ⅱ・３　健康状態

④現在の健康状態【事前調査】　（%）

		標本数	非常に健康	まあ健康	注意点はあるが、生活に支障はない	注意点があり、生活に制限がある	病気がち・療養中	無回答
全　体		275	17.8	44.7	33.1	1.8	2.5	0.0
	現　役	89	24.7	44.9	28.1	2.2	0.0	0.0
	Ｏ　Ｂ	172	14.5	47.1	32.6	1.7	4.1	0.0

第Ⅲ章　調査結果の詳細

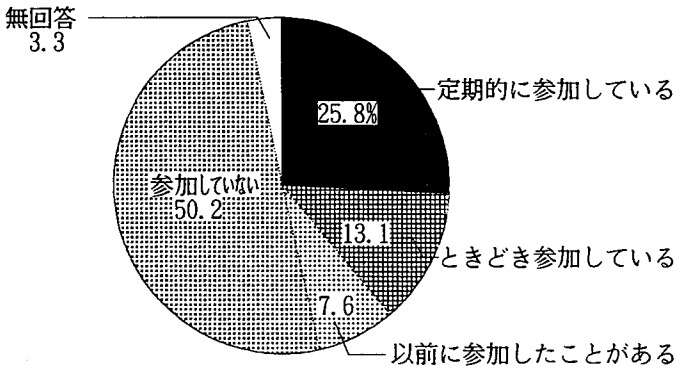
事前調査は、前述のとおりグループインタビュー調査、およびデプスインタビュー調査の対象者選定を主たる目的として行ったものである。しかしながら、第１次調査に加えて事前調査で新たに設定した項目もいくつかある。本章では、それらを中心として調査結果に分析を加え、質的調査の参考資料とする。

Ⅲ・１　社会活動

地域活動やボランティアなど、社会に役立つ活動への参加状況を図表Ⅰ－Ⅲ－１に示す。

「参加していない」とする回答が約半数を占めているが、「定期的に参加している」と「時々参加している」を合わせた社会活動への参加率は38.9%である。これは、第１次調査の24.8%（「定期的に参加している」12.2%、「時々参加している」12.6%）と比べるとかなり高い。比較的、社会活動参加率の高いＯＢの構成比が高いことや、追加調査応諾者という対象条件が関与しているものと思われる。

図表Ⅰ－Ⅲ－１　現在の社会活動（n= 275）



Ⅲ・2　生活自立度

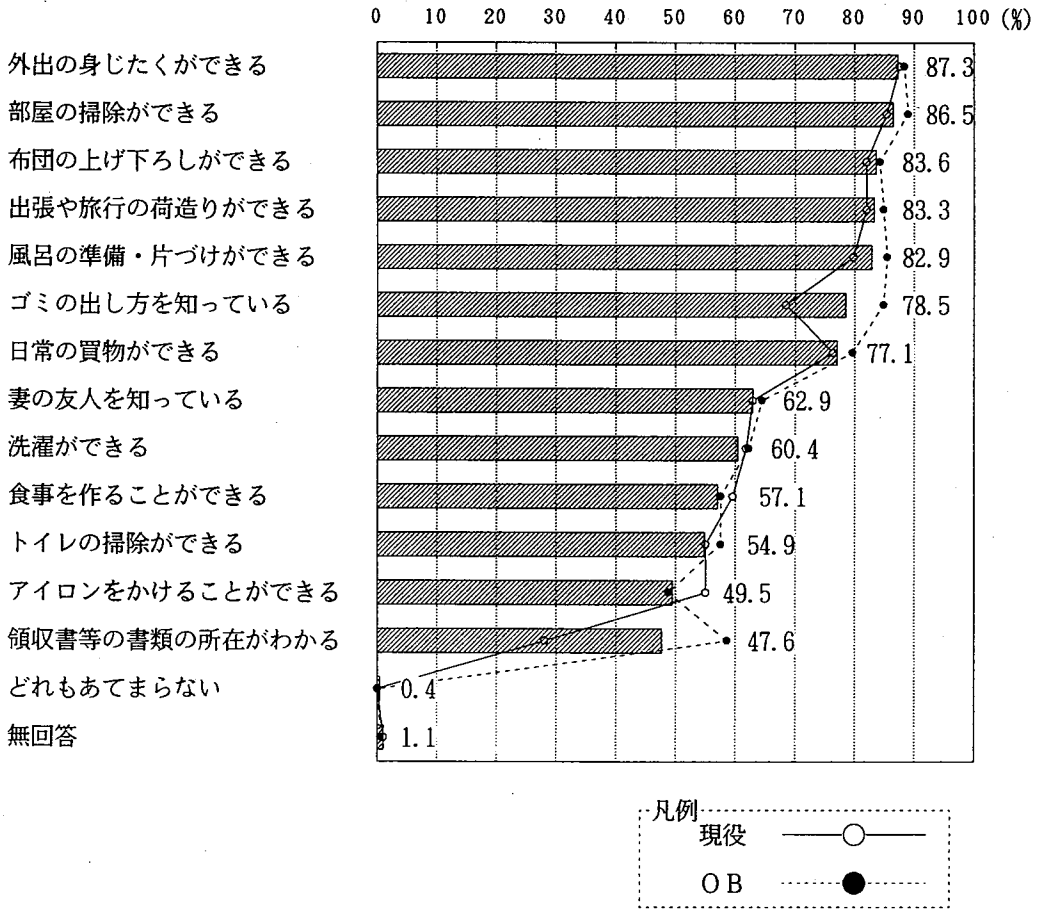
(1)　日常生活においてできること

日常生活におけることがらを表す13項目を示して、「自分ができる」と思うものを複数回答で答えてもらった。結果は、図表Ⅰ－Ⅲ－2に示すとおりである。

「外出の身じたく」、「部屋の掃除」は9割近くが「できる」と回答しているが、「妻の友人を知っている」、「洗濯」、「食事を作ること」では「できる」とする回答は約6割であり、「トイレの掃除」、「アイロンをかけること」、「領収書等の書類の所在がわかる」では半数程度にとどまっている。

現役とＯＢの回答を比較すると、ほとんどの項目でＯＢのほうが現役よりも「できる」という回答が多い。現役がＯＢの回答よりも上回っている項目は、「食事を作ることができる」と「アイロンをかけることができる」の2項目のみである。

図表Ⅰ－Ⅲ－2　日常生活においてできること（現役／ＯＢ別；複数回答）（n=275）



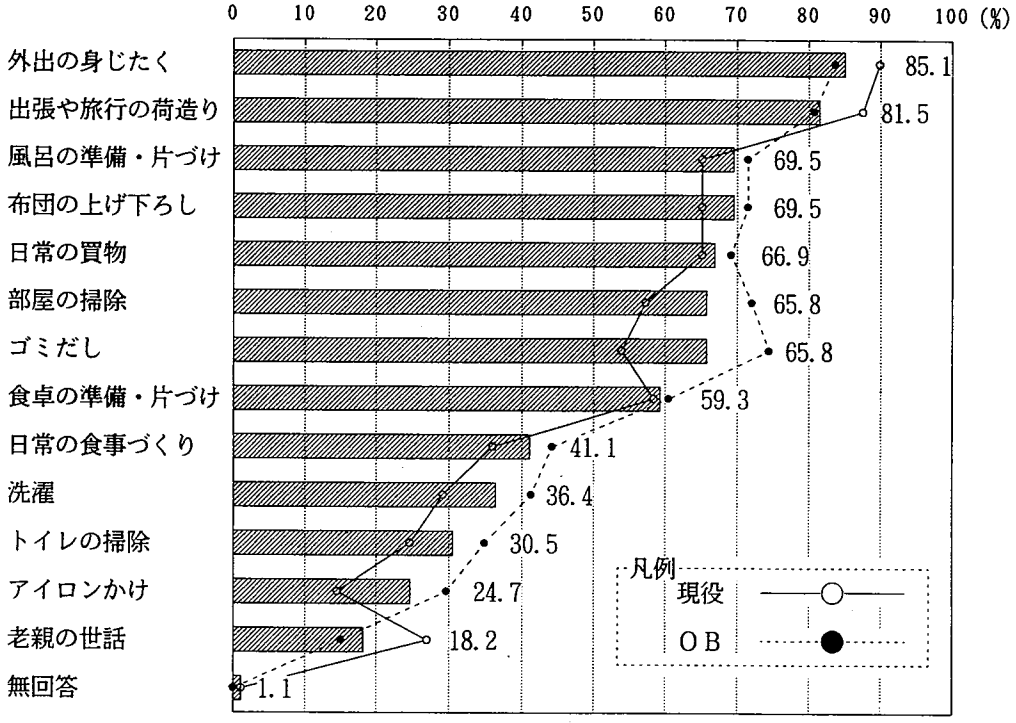
(2) 日常生活において行っていること

日常生活におけることがらを表す13項目を示して、実際に「行っていること」はどのようなことであるかを、「いつもする」から「まったくしない」の4段階で回答してもらった。その結果を、「いつもする」という回答に注目してまとめたものが、図表Ⅰ－Ⅲ－3である。

全体的には、「自分ができる」という回答が多い項目では、実際に「いつも行っている」との回答も多いという傾向がみられ、「外出の身じたく」、「出張や旅行の荷造り」では8割以上が実際に「いつも行っている」と回答している。しかしながら、この他の項目については、実際に「いつも行っている」は「自分ができる」を10ポイント以上下回っている。また、「自分ができる」と思う項目では第2位であった「部屋の掃除」は、実際に「いつも行っている」の回答では、65.8%と第6位である。日常生活において、できると思っていても実際には行っていないという回答もみられ、特に「洗濯」、「トイレの掃除」、「アイロンかけ」では「いつも行っている」と「自分ができる」の比率には25ポイント程度のギャップがみられる。

現役とＯＢを比較すると、全体的にＯＢの方が実際に「行っている」との回答が多い。「外出の身じたく」、「出張や旅行の荷造り」の項目では、現役の方がＯＢを上回り、現役の方が年齢的に若く、仕事の関係で外出や出張が多いことを反映している。

図表Ⅰ－Ⅲ－3　日常生活において行っていること（現役／ＯＢ別；複数回答）(n=275)



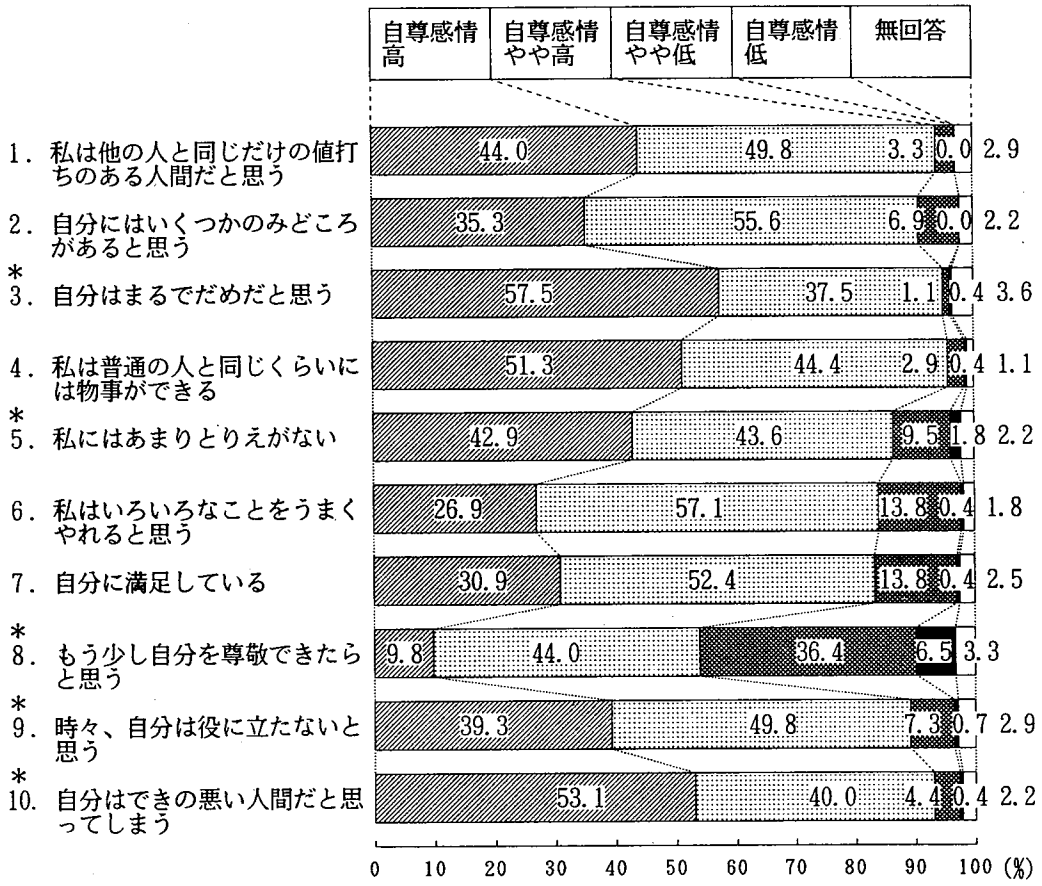
Ⅲ・3　生活適応度

(1)　自尊感情

日常の生活適応度を調べる指標として、まず自尊感情を設定した。自尊感情とは、自分自身の価値や重要性をどのように感じているかという、自己評価意識を意味する。図表Ⅰ－Ⅲ－4に示すとおり、自分自身についてどう評価しているかを測定する10の文章を示し回答してもらった。文章には、自分自身に対して評価の高い表現の5項目と、逆に評価の低い表現の逆転項目5項目がある。各項目には、「そう思う」から「ぜんぜんそうは思わない」までの4段階の選択肢を設定した。そして、自己評価の高い表現の5項目に対し、「そう思う」の肯定的な回答を《自尊感情高》、「まあそう思う」を《自尊感情やや高》、「あまりそうは思わない」を《自尊感情やや低》、「ぜんぜんそうは思わない」の否定的回答を《自尊感情低》とした。また逆転項目に対しては、否定的な回答を《自尊感情高》として、順次逆の方向で位置づけた。

全体的に自己評価が高い方向の回答が多いことが示されている。

図表Ⅰ－Ⅲ－4　自尊感情（n= 275）



（注）自尊感情スケールは、Rosenberg, M.(1965) Society and the Adolescent Self-Image. Princeton, N.J:Princeton University Press. による。＊は逆転項目であることを示す

自尊感情を測定する各選択肢に得点を与え、その合計点により自尊感情得点を算出した。各項目の選択肢に対する得点の与え方は以下のとおりである。

自尊感情を測る10項目のうち、５項目は自己に対して肯定的な内容を表したものであり、他の５項目は否定的な内容を表した逆転項目である。いずれの項目でも、自分自身に対して評価の高い《自尊感情高》の回答に高得点を与え、その合計点により０～30点の自尊感情得点を算出している。自尊感情得点が高いほど、自分自身の価値を高く感じている、または自己を肯定する傾向が強いことを示す。

・自尊感情高・・・・・３点	・自尊感情やや高・・・・・・・２点
・自尊感情やや低・・・１点	・自尊感情低・・・・・・・・・・０点

図表Ⅰ－Ⅲ－５に示すとおり、回答者全体の自尊感情得点の平均は22.4点である。この値は、参考調査の値とほぼ同じである。また、現役とＯＢを比較すると、現役はＯＢよりも 1.7点低く、全体平均よりも 1.2点低い。逆に、ＯＢでは全体平均をやや上回り、 0.5点高くなっている。

図表Ⅰ－Ⅲ－５　自尊感情の得点（現役／ＯＢ別）

	平　均*1	標準偏差*2
全　体（n= 275）	22.4	4.2
現　役（n=　89）	21.2	3.8
Ｏ　Ｂ（n= 172）	22.9	4.3
参考調査（n=1349）*3	22.1	5.3

（注）＊1 各選択肢の不明回答については、不明を除いた全体の平均点を代入して得点を算出した。

＊2 回答者の各得点が平均点からどの程度離れているかを表す統計値。

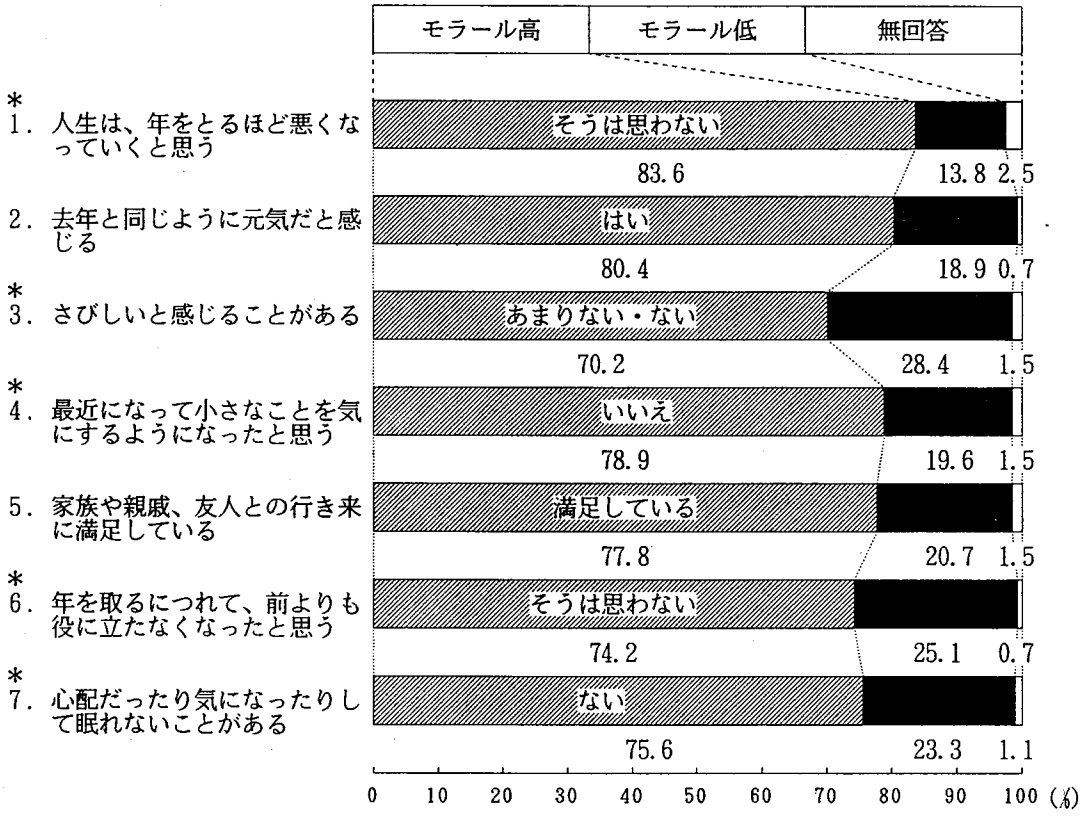
＊3 東京都老人総合研究所心理学部門が1991年に板橋区在住の50歳～74歳の男女を対象に行った調査結果のうち、男性の結果を表示している。

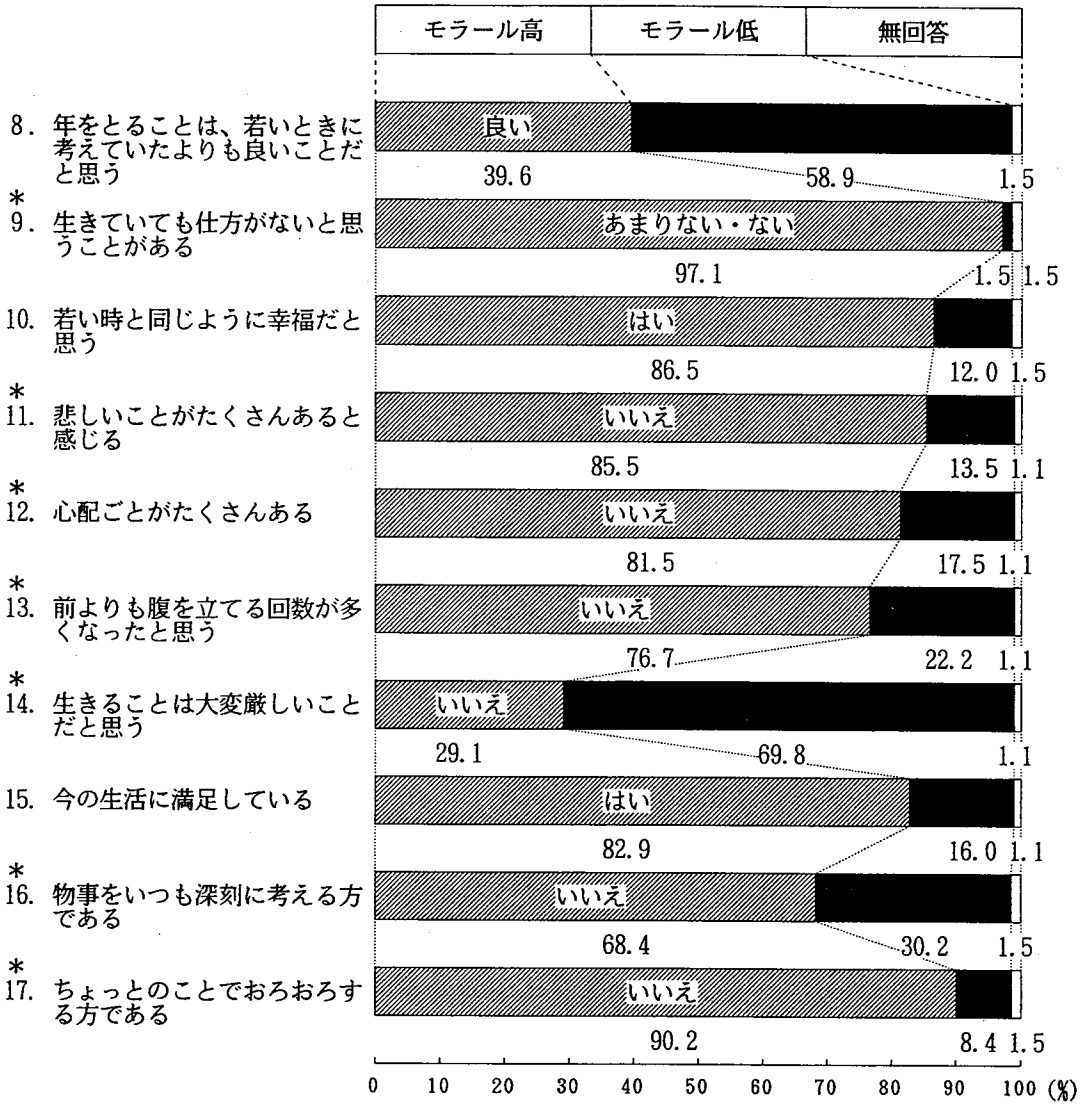
(2) モラール

日常の生活適応度を調べる指標として、前述の自尊感情のほかに、モラールを設定した。「モラールが高い」とは、日常の生活において気分や精神状態が良好であり、主観的幸福感を強く感じていることを意味する。図表Ⅰ－Ⅲ－6に示すとおり、普段の生活について17の文章を示して、自分自身の考えに近いと思うものを回答してもらった。文章には、今の生き方に対して前向きである表現の5項目と、逆に後退的な表現の逆転項目12項目がある。各選択肢は、項目の内容に対して「そう思う」、「そうは思わない」や「はい」、「いいえ」などの2段階のものから、「ない」、「あまりない」、「時々感じる」、「いつも感じる」などの4段階のものとがある。そして、今の生き方について前向きである表現の5項目に対し、「そう思う」などの肯定的な回答を《モラール高》とし、「そうは思わない」などの否定的な回答を《モラール低》とした。また、逆転項目に対しては、否定的な回答を《モラール高》、肯定的な回答を《モラール低》とした。

全体的に、モラールが高い方向の回答が多い傾向がみられる。

図表Ⅰ－Ⅲ－6　モラール　(n=275)





（注）モラールは、Lawton, M.P.(1975) The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale:A revision. Journal of Gerontology, 30, 85-89. による。＊は逆転項目であることを示す。

自尊感情と同様に、モラールを測定する各選択肢に得点を与え、その合計によりモラール得点を算出した。各項目の選択肢に対する得点の与え方は以下のとおりである。

モラールを測る17項目のうち、5項目は今の生き方に対して前向きである内容を表したものであり、他の12項目は後退的な内容を表した逆転項目である。いずれの項目でも、今の生き方に対して前向きである《モラール高》の回答に高得点を与え、その合計により0～17点のモラール得点を算出している。モラール得点が高いほど、日常の生活で気分や精神状態が良好であり、主観的幸福感を強く感じていることを示す。

・《モラール高》・・・・・・・・・1点
・《モラール低》・・・・・・・・・0点

図表Ⅰ－Ⅲ－7に示すとおり、回答者全体のモラール得点の平均は、12.9点である。この値は、参考調査の値を1点上回っている。また、現役とＯＢを比較すると、現役はＯＢをやや下回り 0.6点低く、全体平均よりも 0.4点低い。ＯＢの値は、全体平均とほぼ同じである。

図表Ⅰ－Ⅲ－7　モラールの得点（現役／ＯＢ別）

		平　均*1	標準偏差*2
全　体（n= 275）		12.9	3.1
	現　役（n=　89）	12.5	3.0
	Ｏ　Ｂ（n= 172）	13.1	3.2
参考調査（n=1349）*3		11.9	3.5

（注）＊1 各選択肢の不明回答については、不明を除いた全体の平均点を代入して得点を算出した。
＊2 回答者の各得点が平均点からどの程度離れているかを表す統計値である。
＊3 東京都老人総合研究所心理学部門が1991年に板橋区在住の50歳～74歳の男女を対象に行った調査結果のうち男性の結果を表示している。

Ⅲ・4　生きがい

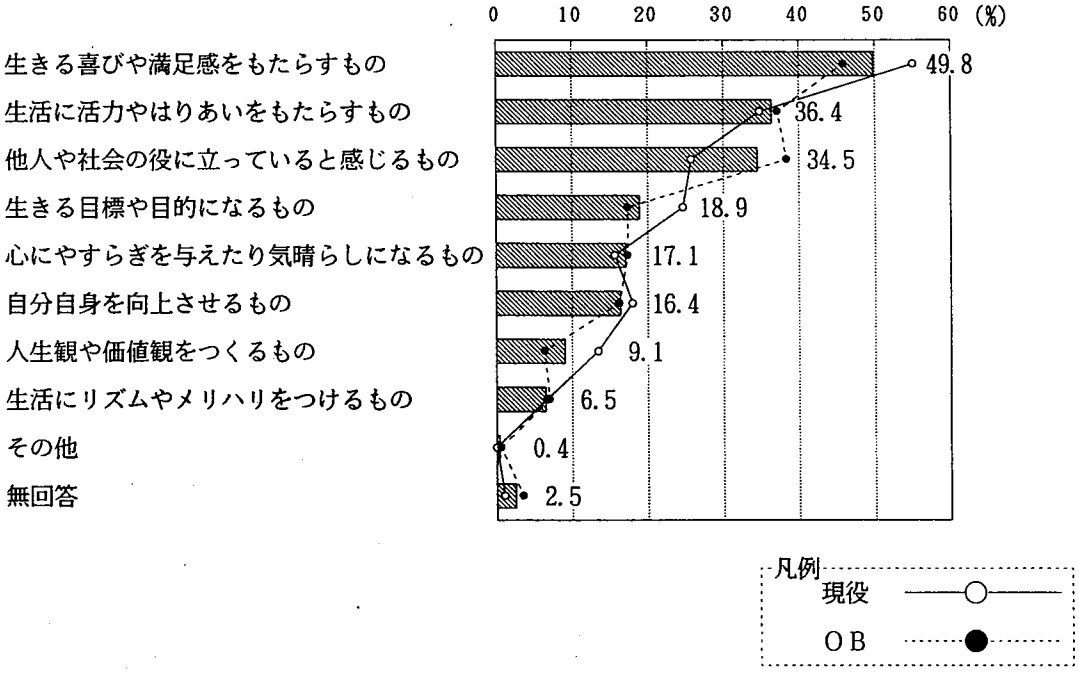
(1)　生きがいの意味

「生きがい」という言葉を表す表現を８つ示して、自分の考えに最も近いものを複数回答（２つ選択）で答えてもらった。図表Ⅰ－Ⅲ－８にその結果を示す。

最も回答の多かったものは、「生きる喜びや満足感をもたらすもの」49.8%である。以下、「生活に活力やはりあいをもたらすもの」36.4%、「他人や社会の役に立っていると感じるもの」34.5%と続く。

第１次調査においても、回答の多い上位３項目は今回の事前調査結果と同様であった。第１次調査では、「生きる喜びや満足感をもたらすもの」47.0%、「生活に活力やはりあいをもたらすもの」35.2%、「他人や社会の役に立っていると感じるもの」25.5%であり、今回の事前調査では、第３位の「他人や社会の役に立っていると感じるもの」の項目が第１次調査をやや上回っている。また、特に現役よりもＯＢで、他人や社会に対する有用感を感じることを生きがいとする回答が多い。

図表Ⅰ－Ⅲ－８　生きがいの意味（現役／ＯＢ別；複数回答）(n=275)



(2) 現在の生きがいの有無

先の生きがいの意味を問う質問に続けて、そのような生きがいを現在持っているかを回答してもらった。図表Ⅰ－Ⅲ－9にその結果を示す。

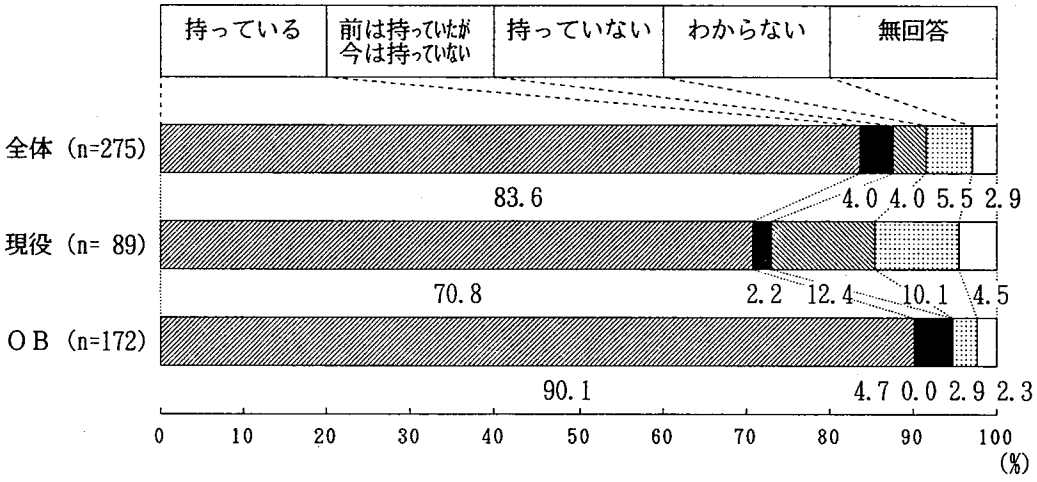
回答者全体では、「持っている」とする回答が83.6%を占めて多く、以下、「わからない」5.5%、「前は持っていたが今は持っていない」4.0 %、「持っていない」4.0 %である。

第1次調査では、生きがいを「持っている」が66.2%であり、今回調査ではこれに比べて生きがいを「持っている」との回答が多い。第1次調査では、「わからない」9.2 %、「前は持っていたが今は持っていない」13.1%、「持っていない」9.7 %と、いずれも今回調査の回答結果を上回っている。

現役・ＯＢ別にみると、今回調査では生きがいを「持っている」という回答は、現役が70.8%、ＯＢが90.1%と、ＯＢの方がかなり多い。また、「持っていない」と「わからない」を合わせた回答では、現役が22.5%と、ＯＢの 2.9%を大きく上回る。しかし、「前は持っていたが今は持っていない」という生きがい喪失経験を表す回答では、ＯＢが 4.7%で現役の 2.2%をやや上回っている。

第1次調査でも同じような傾向があり、「持っている」という回答では、現役が60.9%、ＯＢが75.3%とＯＢの方が多く、「持っていない」と「わからない」を合わせた回答では、現役が30.2%でＯＢの11.2%を大きく上回る。しかし、「前は持っていたが今は持っていない」という生きがい喪失経験を表す回答では、ＯＢが11.7%で現役の 7.6%を上回っている。

図表Ⅰ－Ⅲ－9　生きがいの有無（現役／ＯＢ別）



(3) 生きがいの有無と生活適応度

日常の生活で生きがいを持っているか、持っていないかということは、自分自身や、自分の生き方をどう評価しているかに関連すると考えられる。そこで、生きがいの有無と生活適応度の自尊感情、モラールの得点との関係をみた。

生きがいの有無については、生きがいを「持っている」という回答が約8割を占めるため、「前は持っていたが今は持っていない」、「持っていない」、「わからない」の回答については《生きがいなし》のグループとしてまとめ、比較を行った。生きがいの有無による自尊感情とモラールの平均点と標準偏差を示したものが、図表Ⅰ－Ⅲ－10である。

回答者の数に差があることに注意しなければならないが、自尊感情においては《生きがいあり》のグループの方が《生きがいなし》のグループよりも 2.9点高い。また、モラールにおいても同様に、《生きがいあり》のグループの方が《生きがいなし》のグループよりも 2.9点高い。

生きがいの有無と自尊感情、モラールとの関係を現役・ＯＢ別にみると、現役、ＯＢのいずれも同様に《生きがいあり》のグループの方が《生きがいなし》のグループよりも、自尊感情、モラールともに得点がやや高い。また自尊感情、モラールのいずれでも、現役における生きがい有無の得点差は、ＯＢにおける生きがい有無の得点差よりもやや小さい。

図表Ⅰ－Ⅲ－10　生活適応度の得点（現役／ＯＢ別，生きがいの有無別）

		自尊感情		モラール	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差
全　体	(n=275)	22.4	4.2	12.9	3.1
	生きがいあり (n=230)	22.9	4.1	13.2	2.9
	生きがいなし (n= 37)	20.0	3.7	10.3	3.6
現　役	(n= 89)	21.2	3.8	12.5	3.0
	生きがいあり (n= 63)	21.9	3.5	13.0	2.9
	生きがいなし (n= 22)	19.9	4.2	11.4	3.4
Ｏ　Ｂ	(n=172)	22.9	4.3	13.1	3.2
	生きがいあり (n=155)	23.2	4.3	13.3	2.9
	生きがいなし (n= 13)	20.1	3.3	8.6	3.6

こうした傾向を、統計的な手法（２要因の分散分析）により検定した結果が、図表Ⅰ－Ⅲ－11である。

検定の結果、現役であるかＯＢであるかという状況の違いは、自尊感情にもモラールにも影響していないことが示された。生きがいの有無については、自尊感情、モラールのいずれについても、《生きがいあり》のグループと《生きがいなし》のグループの間に統計的に意味のある差がみられた。つまり、生きがいを持っていることが自分自身の価値を高く評価し、日常の生活においても気分や精神状態が良好で主観的幸福感を強く感じていることが統計的に示されたといえる。また、モラールについては、生きがいの有無と現役・ＯＢの組合せによっても統計的に意味のある差がみられた。

図表Ⅰ－Ⅲ－11　生活適応度の検定結果（n= 275）

要　因 ＼ 生活適応度	自尊感情	モラール
現役・ＯＢ	0.868	2.626
生きがいの有無	10.827＊＊	23.894＊＊
生きがいの有無×現役・ＯＢ	0.511	8.522＊＊

（注）表内の数字は、２要因の分散分析の値（Ｆ値）を表す。
＊＊は、統計的には非常に顕著（１％ 水準）な差があったことを示す。

モラールについて、生きがいの有無と現役・ＯＢのどの組合せにおいて差がみられるかを、統計的な手法（ｔ検定）により検定した。その結果を図表Ⅰ－Ⅲ－12に示す。

現役どうしの組合せにおいては、生きがいの有無による統計的な差はみられない。それに対してＯＢどうしの組合せでは、生きがいの有無によってモラールの得点に違いがあることが統計的に示された。

図表Ⅰ－Ⅲ－12　モラールの検定結果（n= 275）

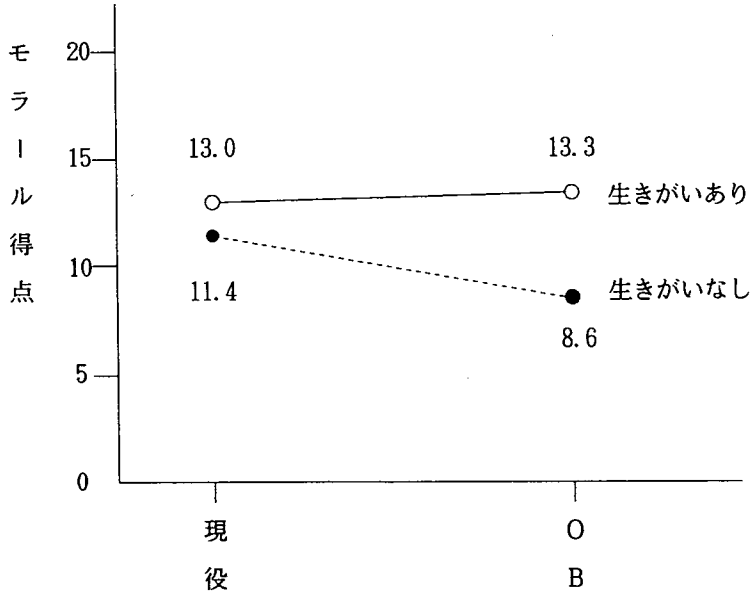
２要因の組合せ	ｔ検定の値
生きがいあり・現役　×　生きがいあり・ＯＢ	1.654
生きがいあり・現役　×　生きがいなし・現役	1.512
生きがいあり・現役　×　生きがいなし・ＯＢ	4.064＊＊
生きがいあり・ＯＢ　×　生きがいなし・現役	2.728＊＊
生きがいあり・ＯＢ　×　生きがいなし・ＯＢ	5.143＊＊
生きがいなし・現役　×　生きがいなし・ＯＢ	2.468＊

（注）＊＊は、統計的には非常に顕著（１％水準）な差があったことを示す。
＊は、統計的には顕著（５％水準）な差があったことを示す。

モラールについて、現役・ＯＢ別に生きがいの有無による差を示したものが、図表Ⅰ－Ⅲ－13である。

現役では、生きがいの有無によるモラール得点の差は小さく、統計的に意味のある差はみられない。一方、ＯＢでは生きがいの有無によるモラール得点の差が大きく、統計的に意味のある差であることが示されている。現役でいるあいだは、普段の気分が良好であるとか、主観的に強く幸福感を感じるとかを意味するモラールは生きがいの有無によってあまり影響がない。しかし定年を経験した後では、生きがいを持っている人は日常も気分よく生活しているのに対し、生きがいを持っていない人では定年前に比べて気分的な落ち込みがあることが示されている。

図表Ⅰ－Ⅲ－13　モラール得点（現役／ＯＢ別，生きがいの有無別）



第Ⅱ部　グループインタビュー調査結果
・個人面接調査結果の詳細

（東京都老人総合研究所　佐藤　眞一，㈱ＣＲＣ総合研究所）

第Ⅰ章　調査の設計

Ⅰ・1　グループインタビュー調査の設計

(1)　調査方法

グループインタビュー調査

5～7名の対象者グループを設定し、分析者がインタビュアーとなって用意した話題（インタビューフロー）に沿った話し合いを行わせ、出席者がお互いに影響し合う場面の中から仮説検証のための情報収集を行った。

(2)　グループ設定

本調査では基本的に男性ＯＢを対象とし、比較群として男性現役のグループ、女性ＯＢのグループを設けた。また調査の仮説に沿って、グループ設定の条件として定年退職の経験、生きがいの有無、性格特性、社会活動の有無をとりあげ、これらの条件に沿って4グループの男性ＯＢグループを設定した。

また性格特性としては、第1次調査における性格の因子分析により抽出された因子のうち、生きがいの有無との関連が最も強くみられた「積極性」の因子をとりあげている。

各グループの設定条件は以下のとおりである。

（グループ名）	（グループ設定条件）
Ａ喪失経験グループ	ＯＢ*1　生きがい喪失経験あり*2
Ｂ積極性上位ｸﾞﾙｰﾌﾟ（社会活動あり）	ＯＢ　生きがいあり*3　積極性上位*4　社会活動あり*5
Ｃ積極性上位ｸﾞﾙｰﾌﾟ（社会活動なし）	ＯＢ　生きがいあり　積極性上位　社会活動なし*5
Ｄ積極性中・下位グループ	ＯＢ　生きがいあり　積極性中・下位*4
Ｅ現役グループ	現役*1　生きがいあり
Ｆ女性グループ	女性　ＯＢ　既婚（配偶者あり）又は未婚*6　生きがいあり

（注）*1　「定年前の退職をした」「定年をすぎた」と回答した者をＯＢ、「まだ定年前」と回答した者を現役とした。（事前調査問5・第1次調査問24の回答の組合せ）

*2　事前調査問1付問、第1次調査問11付問のいずれかで生きがいを「前は持っていたが今は持っていない」と回答した者。

*3　事前調査問1付問で生きがいを「持っている」と回答した者。

*4　第1次調査標本 3,051サンプルのうち回答の不備により因子得点が算出できなかったものを除く2,908 サンプルを「積極性」の因子得点により上位、中位、下位の3群に分け、上位群を積極性上位とした。Ｄ積極性中・下位グループについては、グループインタビュー対象候補のうち該当するサンプルが少なかったため、下位群の他、中位のうち因子得点の低いサンプルから順に2サンプル（下位50％以下）を対象として含めている。

*5　事前調査問２で「定期的に参加している」「ときどき参加している」と回答した者を「社会活動あり」とした。
*6　グループ内の対象者属性のばらつきを抑えるため、第１次調査Ｆ５未既婚の回答をもとに、離別、死別を除き、未婚のサンプルと既婚（配偶者あり）のサンプルを
半数ずつ含めた。

(3)　対象者の選定

前述の事前調査の回答者の中から、事前調査及び第１次調査の回答をもとに、各グループの対象者選定条件（グループ設定条件）に合致する対象候補者を選定した。その際、実施上の制限から対象者の居住地区を関東に限定している。

さらに、電話による出席依頼を行い、同一日時に出席可能な者の中から各グループ５～７名の対象者を選定した。

(4)　質問紙調査の実施

グループインタビュー調査対象者に対して、分析の上で必要ないくつかの項目について、事前調査とは別に質問紙調査を行った。この質問紙調査は、グループインタビュー調査実施時に配布し、後日郵送により回収した。設問内容は以下のとおりである。

（巻末「（付）調査票及び単純集計結果　２．グループインタビュー実施時調査」を参照。）

○志向性及び志向性満足度

○思考的外向及びのんきさ

○ライフヒストリー

○出席後の感想等（自由記述）

(5)　実施日時

Ａ；喪失経験グループ	平成４年10月４日（日）	10:30～ 12:30
Ｂ；積極性上位ｸﾞﾙｰﾌﾟ（社会活動あり）	平成４年９月30日（水）	10:30～ 12:30
Ｃ；積極性上位ｸﾞﾙｰﾌﾟ（社会活動なし）	平成４年９月30日（水）	14:00～ 16:00
Ｄ；積極性中・下位グループ	平成４年９月23日（水）	15:30～ 17:30
Ｅ；現役グループ	平成４年10月４日（日）	14:00～ 16:00
Ｆ；女性グループ	平成４年10月25日（日）	14:00～ 16:00

第Ⅱ章　グループインタビュー調査結果

Ⅱ・1　インタビューの内容

(1)　ＯＢグループのインタビュー内容

喪失経験グループ、積極性上位グループ（社会活動あり、なし）、積極性中・下位グループ、女性グループの５グループのインタビュー内容及びフローは以下のとおりである。

インタビュー項目	時間配分	ﾌﾛｰ
（導入）○挨拶、同席者の紹介、進め方の紹介 ○出席者自己紹介（名前、家族構成、定年退職後のライフコース 現在の就労状況、趣味）	15(15) 分	≪導入・背景情報≫
1．現役時代の生活と定年後の生活の変化 〔実態〕○帰宅時間（残業の状況） ○平日退社後の時間、休日の時間の使い方（誰と、何を） ○家族との関わり（子ども、妻と一緒の行動、会話） ○交友関係（職場関係、その他、定年後の新しい交友関係） ○社会活動への参加状況（参加していない 理由、今後の参加意向） （現役／定年後の変化）	20(35)	≪テーマ導入≫
〔意識〕○定年前に考えていた理想の定年後生活と現実とのギャップ （仕事（再就職）・家庭生活・経済・交友関係等） （理想が実現できない理由／経済面・家庭面・その他） ○定年を迎えた時の気持ちとその後の変化 ○仕事上の変化（地位、職種等）についてどのように感じたか	20(55)	⇩ ≪展開≫
2．生きがいについて ○あなたにとって生きがいとは何か ・何に生きがいを感じるか（生きがいの対象） ・どのような気持ちが得られるのか（生きがい感） ・対象のどのような 面にその感情を持つか（生きがいの内容） ○その生きがいにより何を獲得し、 どのように消費（時間・お金）しているか ○その生きがいには経済的な面が影響すると思うか ○生きがい対象、生きがい感の定年前後の変化	45(100)	⇩ ≪追求≫
3．定年後の生活に対する支援への要望	10(110)	≪結語≫
4．今後のライフコース ○就労継続意向（いつ頃まで、どの程度働きたいか、働きたい理由） ○今後の抱負（生活イメージ、やってみたいこと（社会活動、その他）	10(120)	⇩

(2) 現役グループのインタビュー内容

現役グループのインタビュー内容及びフローは以下のとおりである。

インタビュー項目	時間配分	フロー
（導入） ○挨拶、同席者の紹介、進め方の紹介 ○出席者自己紹介（名前、職種、家族構成、趣味）	15(15) 分	≪導入≫ テーマ導入≫ 背景情報≫ ⇩
1．現在の生活実態 ○平日退社後の時間、休日の時間の使い方（誰と、何を） ○家族との関わり（子ども、妻と一緒の行動、会話） ○交友関係（職場関係、その他、定年後の新しい交友関係） ○社会活動等への参加状況 （参加していない理由、今後の参加意向）	20(35)	
2．生きがいについて ○あなたにとって生きがいとは何か ・何に生きがいを感じるか（生きがいの対象） ・どのような気持ちが得られるのか（生きがい感） ・対象のどのような面にその感情を持つか（生きがいの内容） ○その生きがいにより何を獲得し、どのように消費（時間・お金）しているか ○その生きがいには経済的な面が影響すると思うか ○仕事の中での生きがいの構造（生きがい感、内容） ○生きがい対象、生きがい感の変化 ○仕事に対する生きがい感の変化	45(80)	≪展開≫ ⇩ ≪追求≫
3．定年について ○定年後生活のイメージ ○理想の定年後生活 （仕事（再就職）・家庭生活・経済・交友関係等） ○定年に向けての準備	30(110)	
4. 定年後の生活やその準備に対する支援への要望	10(120)	≪結語≫ ⇩

II・2　分析標本の基本属性

(1)　各グループ出席者の基本属性

①　A；喪失経験グループ

出席者の平均年齢は62.6歳である。定年退職後の経過年数は平均 2.9年と、積極性上位グループと比較するとやや短く、積極性下位グループとほぼ同様である。しかし、現在の就労状況は積極性下位グループに比べて無職の者がやや多い。

第１次調査結果の性格類型（下表の注参照。）をみると、孤独型、個性希薄型、楽天型、人見知り型があり、積極性の面ではばらつきがあるが、比較的親和性が低い傾向がみられる。

出席者	a	b	c	d	e	備考
年齢	６０	６４	５７	６７	６５	平均62.6歳
健康状態 *1	注意する点あり	まあ健康	まあ健康	まあ健康	注意する点あり	
配偶者の有無（就労状況）	あり（自営）	死別	あり（無職）	あり（内職）	あり（無職）	
世帯構成	夫婦と子供	自分と子夫婦	夫婦と子供	夫婦だけ	夫婦と子供	
住居	一戸（持家）	民間の借家	一戸（持家）	一戸（持家）	一戸（持家）	
居住年数	20～30年	10～20年	20～30年	５年未満	30年以上	
年収（万円）	800 ～1000 *6	500 ～600	500 ～600	300 ～400	400 ～500	平均 475万円 *5
定年前の会社 職種 会社規模 *2	管理職 300 ～999 人	事務職 1000人以上	技能職 100 ～299 人	管理職 300 ～999 人	管理職 100 ～299 人	
定年年齢（定年後経過年数）	60歳（1年経過）	60歳（４年）	55歳（２年）	64歳（３年）	60歳（５年）	（平均2.9 年）
退職後の就労	―――	別企業再就職	前の会社継続	出向先に移籍	別企業再就職	
現在の就業 職種 会社規模 *2	無職（1年経過）	嘱託・パート 事務職 1000人以上	嘱託・パート 技能職 100 ～299 人	無職（３年）	無職（1年経過）	
性格類型 *3	孤独型 積極性上位	個性希薄型 積極性下位	楽天型 積極性中位	人見知り型 積極性中位	楽天型 積極性中位	
生きがい（第１次調査） *4	喪失 （わからない）	わからない （喪失）	あり （喪失）	あり （喪失）	あり （喪失）	
その他	昨年11月以降 定年退職	昨年11月以降 配偶者と死別		定年後に転居		

（注）*1　注意する点あり；注意する点はあるが、日常生活に支障はない。
*2　会社全体の従業員数（支社、営業所等含む）。
*3　第１次調査において、回答者の性格を「問18あてはまる性格」の回答の因子分析、クラスター分析により類型化したもの。詳細は第１次調査報告書（36ページ）参照。
*4　事前調査における問１付問における回答。喪失；前は持っていたが今は持っていない。
*5　概数（年収階級の中間の値）を用いて算出した平均値。
*6　定年退職前の年収につき、平均値算出の際、計算値より除いてある。

② B；積極性上位グループ（社会活動あり）

出席者の平均年齢は69.2歳であり、定年退職後の経過年数は平均10.3年で、半数が10年を超えている。6名の出席者中5名が無職である。

性格類型ではマイペース型、外交・リーダー型が多く、喪失経験グループに比較すると親和性が高い。

項　目	a	b	c	d	e	f	備考
年齢	70	65	62	72	68	78	平均69.2歳
健康状態 *1	注意する点あり	まあ健康	まあ健康	注意する点あり	注意する点あり	非常に健康	
配偶者の有無（就労状況）	あり（無職）	あり（嘱託・パート）	あり（無職）	あり（無職）	あり（無職）	あり（無職）	
世帯構成	夫婦と子ども	夫婦	夫婦と親	夫婦	夫婦	夫婦と子ども	
住居	一戸（持家）	一戸（持家）	一戸（持家）	一戸（持家）	一戸（持家）	一戸（持家）	
居住年数	30年以上	20～30年	30年以上	30年以上	20～30年	5～10年	
年収（万円）	300～400	500～600	1000～1500	300～400	400～500	200～300	平均 530万円 *4
定年前の会社 職種 会社規模*2	技能職 1000人以上	販売職 1000人以上	管理職 1000人以上	技能職 1000人以上	管理職 1000人以上	専門技術職 300～999人	
定年年齢（定年後経過年数）	55歳（15年）	60歳（5年）	60歳（2年）	60歳（12年）	60歳（8年）	58歳（20年）	（平均10.3年）
退職後の就労	別企業再就職	前の会社継続	再就職	別企業再就職	出向先へ移籍	別企業再就職	
現在の就業 職種 会社規模*2	無職（3年）	無職（1年未満）	嘱託・パート 管理職 1～29人	無職（4年）	無職（4年）	無職（6年）	
性格類型 *3	気くばり型	マイペース型	外交・リーダー型	マイペース型	マイペース型	外交・リーダー型	
その他						定年後に転居	

（注）*1 注意する点あり；注意する点はあるが、日常生活に支障はない。
*2 会社全体の従業員数（支社、営業所等含む）。
*3 第1次調査において、回答者の性格を「問18あてはまる性格」の回答の因子分析、クラスター分析により類型化したもの。詳細は第1次調査報告書（36ページ）参照。
*4 概数（年収階級の中間の値）を用いて算出した平均値。

③　C；積極性上位グループ（社会活動なし）

出席者の平均年齢が67.4歳、定年退職後の経過年数が平均10.5年である。７名中４名は退職後の経過年数が10年を超えている。平均年齢が比較的高いにもかかわらず、現在も就労している者が多く、無職の者は７名中３名である。定年前の職種はほとんどの者が管理職である。

項　目	a	b	c	d	e	f	g	備考
年齢	６２	６６	６２	６８	７０	７３	７１	平均67.4歳
健康状態*1	注意する点あり	まあ健康	まあ健康	非常に健康	注意する点あり	まあ健康	まあ健康	
配偶者有無（続柄）	あり（嘱・パート）	あり（無職）	あり（無職）	あり（嘱・パート）	あり（無職）	あり（無職）	死別	
世帯構成	夫婦	夫婦	夫婦と親	夫婦と子供	夫婦と子夫婦	夫婦と子供	本人と子供	
住居	分譲ﾏﾝｼｮﾝ等	一戸（持家）	分譲ﾏﾝｼｮﾝ等	一戸（持家）	一戸（持家）	分譲ﾏﾝｼｮﾝ等	分譲ﾏﾝｼｮﾝ等	
居住年数	10～20年	20～30年	5 ～10年	10～20年	10～20年	10～20年	5 ～10年	
年収（万円）	600 ～800	500 ～600	500 ～600	500 ～600	600 ～800	800 ～1000	400 ～500	*4 平均557万円
定年前会社 職種	管理職	管理職	管理職	事務職	管理職	管理職	管理職	
会社規模*2	1000人以上	1 ～29人	1000人以上	1000人以上	1000人以上	1000人以上	1000人以上	
定年年齢（定年退職年数）	55歳（ 7年）	― （役員）	60歳（２年）	55歳（13年）	57歳（13年）	64歳（10年）	53歳（18年）	（平均10.5年）
退職後就労	前の会社継続	前の会社継続	別企業再就職	別企業再就職	前の会社継続	引退	別企業再就職	
現在の就業 職種	嘱託・パート	正規社員	正規社員	無職（４年）	自営・自由業	無職（10年）	無職（１年）	
会社規模*2	管理職 1000人以上	管理職 1 ～29人	管理職 30～99人		講師 ――			
性格類型*3	ﾏｲﾍﾟｰｽ型	ﾌﾟﾛﾌｪｯｼｮﾅﾙ 型	外交・ﾘｰﾀﾞｰ型	孤独型	外交・ﾘｰﾀﾞｰ型	外交・ﾘｰﾀﾞｰ型	外交・ﾘｰﾀﾞｰ型	
その他								

（注）*1　注意する点あり；注意する点はあるが、日常生活に支障はない。
*2　会社全体の従業員数（支社、営業所等含む）。
*3　第１次調査において、回答者の性格を「問18あてはまる性格」の回答の因子分析、クラスター分析により類型化したもの。詳細は第１次調査報告書（36ページ）参照。
*4　概数（年収階級の中間の値）を用いて算出した平均値。

④　D；積極性中・下位グループ

出席者の平均年齢は61.0歳と比較的若い者が多い。定年退職後の経過年数も、喪失経験グループと同様に比較的短い者が多く、最も長い者で6年である。全員が現在も就労しており、職種は作業員、事務職、管理職など様々である。

積極性が中・下位のグループであるが、性格類型としては気くばり型、プロフェッショナル型の者で構成されており、積極性はやや低いが親和性が高いという傾向がみられる。

項　目	a	b	c	d	e	備考
年齢	59	67	65	58	56	平均61.0歳
健康状態 *1	まあ健康	注意する点あり	非常に健康	注意する点あり	注意する点あり	
配偶者の有無（就労状況）	あり（無職）	あり（無職）	あり（嘱・パート）	あり（内職）	あり（自営）	
世帯構成	夫婦と子供	夫婦	夫婦	夫婦と子供	夫婦と親	
住居	分譲ﾏﾝｼｮﾝ等	分譲ﾏﾝｼｮﾝ等	一戸（持家）	一戸（持家）	一戸（持家）	
居住年数	20～30年	10～20年	10～20年	20～30年	20～30年	
年収（万円）	600 ～800	500 ～600	300 ～400	500 ～600	500 ～600 *5	平均 *4 537.5 万円
定年前の会社 職種 会社規模*2	管理職 1000人以上	管理職 30～99人	技能職 1000人以上	管理職 300 ～99人	サービス職 1000人以上	
定年年齢（定年超過年数）	56歳（3年）	61歳（6年）	60歳（5年）	55歳（3年）	56歳（1年未満）	（平均 3.5年）
退職後の就労	前の会社継続	別企業再就職	別企業再就職	別企業再就職	前の会社継続	
現在の就業 職種 会社規模*2	嘱託・パート 事務職 1000人以上	正規の社員 管理職 1～29人	嘱託・パート 作業員 300 ～999 人	正規の社員 管理職 1～29人	正規の社員 事務職 1000人以上	
性格類型 *3	気くばり型	気くばり型	気くばり型	ﾌﾟﾛﾌｪｯｼｮﾅﾙ 型	ﾌﾟﾛﾌｪｯｼｮﾅﾙ 型	
その他					昨年11月以降定年退職	

（注）*1　注意する点あり；注意する点はあるが、日常生活に支障はない。
*2　会社全体の従業員数（支社、営業所等含む）。
*3　第1次調査において、回答者の性格を「問18あてはまる性格」の回答の因子分析、クラスター分析により類型化したもの。詳細は第1次調査報告書（36ページ）参照。
*4　概数（年収階級の中間の値）を用いて算出した平均値。
*5　定年退職前の年収につき、平均値算出の際、計算値より除いてある。

⑤　E；現役グループ

平均年齢53.0歳、全員が正規従業員として就労している。職種としては管理職が6名中5名と多い。概数（年収階級の中間の値）を用いて算出した平均年収は約1300万円になり、第1次調査における分布からみてもかなり年収の高い者が多い。

性格類型では、親和性、積極性ともに高い外交・リーダー型が2名、親和性のやや低い人見知り型が3名みられる。

項　目	a	b	c	d	e	f	備　考
年齢	55	41	58	59	53	52	平均53.0歳
健康状態 *1	非常に健康	非常に健康	非常に健康	非常に健康	まあ健康	まあ健康	
配偶者の有無（就労状況）	あり（嘱・パート）	あり（無職）	あり（正職員）	あり（無職）	あり（無職）	あり（嘱・パート）	
世帯構成	夫婦と子供	夫婦と子供	夫婦と子供	夫婦と子供	夫婦と子供	夫婦と子供	
住居	一戸（持家）	一戸（持家）	一戸（持家）	一戸（持家）	一戸（持家）	一戸（持家）	
居住年数	10～20年	30年以上	20～30年	10～20年	5～10年	5～10年	
年収（万円）	800 ～1000	1000～1500	1500以上	1000～1500	1500以上	800 ～1000	*4 平均1300万円
現在の就業 職種 会社規模*2	正規の社員 管理職 1000人以上	正規の社員 管理職 30～99人	正規の社員 管理職 30～99人	正規の社員 管理職 1000人以上	正規の社員 管理職 1000人以上	正規の社員 事務職 1000人以上	
性格類型 *3	外交・リーダー型 積極性上位	マイペース型 積極性中位	人見知り型 積極性上位	人見知り型 積極性中位	外交・リーダー型 積極性上位	人見知り型 積極性中位	
その他							

（注）*1　注意する点あり；注意する点はあるが、日常生活に支障はない。
*2　会社全体の従業員数（支社、営業所等含む）。
*3　第1次調査において、回答者の性格を「問18あてはまる性格」の回答の因子分析、クラスター分析により類型化したもの。詳細は第1次調査報告書（36ページ）参照。
*4　概数（年収階級の中間の値）を用いて算出した平均値。

⑥　F；女性グループ

6名中3名が既婚で有配偶、3名が未婚の女性である。平均年齢は64.8歳で、定年退職後の経過年数は半数が約10年、2名が5年、1名は1年である。現在の就労状況としては、有配偶女性は1名が有職、2名が無職、未婚女性は1名が無職、2名が有職である。

性格類型ではタイプの異なる型が混在しており、外交・リーダー型、プロフェッショナル型、マイペース型、気配り型がみられる。

項　目	a	b	c	d	e	f	備考
年齢	61	65	65	67	65	66	平均64.8歳
健康状態 *1	まあ健康	注意する点あり	非常に健康	まあ健康	まあ健康	まあ健康	
配偶者の有無（就労状況）	あり（正規社員）	あり（正規社員）	あり（正規社員）	未婚	未婚	未婚	
世帯構成	夫婦	夫婦	夫婦と子ども	本人と弟夫婦	本人のみ	――――	
住居	公営（賃貸）	分譲（持家）	一戸（持家）	一戸（持家）	分譲（持家）	公営（賃貸）	
居住年数	20～30年	10～20年	20～30年	30年以上	5年未満	10～20年	
年収（万円）	600 ～800	200 ～300	300 ～400	200 ～300	400 ～500	500 ～600	平均 *4 425万円
定年前の会社 職種 会社規模*2	事務職 1000人以上	事務職 1000人以上	管理職 30～99人	技能職 1000人以上	事務職 30～99人	事務職 30～99人	
定年年齢（定年後経過年数）	60歳（1年）	60歳（5年）	55歳（10年）	56歳（11年）	60歳（5年）	56歳（10年）	（約6年）
退職後の就労	引退	出向先へ移籍	前の会社継続	引退	前の会社継続	前の会社継続	
現在の就業 職種 会社規模*2	無職（1年）	無職（1年未満）	嘱託・パート 事務職 30～99人	無職（11年）	正規社員 事務職 30～99人	嘱託・パート 事務職 30～99人	
性格類型 *3	外交・リーダー型 積極性上位	プロフェッショナル型 積極性中位	マイペース型 積極性中位	気くばり型 積極性中位	気くばり型 積極性中位	マイペース型 積極性下位	
その他							

（注）*1　注意する点あり；注意する点はあるが、日常生活に支障はない。
*2　会社全体の従業員数（支社、営業所等含む）。
*3　第1次調査において、回答者の性格を「問18あてはまる性格」の回答の因子分析、クラスター分析により類型化したもの。詳細は第1次調査報告書（36ページ）参照。
*4　概数（年収階級の中間の値）を用いて算出した平均値。

(2) 生活態度および性格特性の特徴

グループインタビュー時調査及び事前調査において、生活態度、生活適応度、及び性格特性についての各対象者の得点を、それぞれの尺度を用いて測定している。ここでは、これらの得点をもとに、生活態度、生活適応度、性格特性について、各グループの特徴をみる。

まず、日常の生活のなかで、どのような人生を望んでいるかという生活態度を調べる指標として、生活の志向性を設定した（グループインタビュー時調査）。この志向性は《達成－安楽》と《親和－独自》の２つの中心的な尺度と、《活動－安定》と《指導－受動》の２つの補助尺度から構成されている。

《達成－安楽》の尺度は、常にやる気を持って目標達成のために努力しようと志向しているか（達成志向）、それとも常にマイペースでのんびりした人生を送ろうと志向しているか（安楽志向）を測るものである。また、《親和－独自》の尺度は、まわりの人とのつながりを大切にして仲良くやっていくことを志向するか（親和志向）、それともひとりで孤高を楽しみ、自分の信念をを大切にすることを志向するか（独自志向）を測るものである。

《活動－安定》の尺度は、いろいろなことに興味を持って行動する傾向があるか（活動志向）、それとも一つのことをじっくりとやっていこうとする傾向があるか（安定志向）を測るものである。さらに、《指導－受動》の尺度は、集団のなかでリーダーとして活躍しようとする傾向があるか（指導志向）、回りと協調したり人から学んだりして行動する傾向があるか（受動志向）を測るものである。

以上の４つの尺度に関して、意味の相反する２つの文章を示し、自分の考えに近いほうを回答してもらった。《達成－安楽》と《親和－独自》の主となる尺度には、９組の項目を設定し、《活動－安定》と《指導－受動》の２つの補助尺度には、６組の項目を設定した。

各項目の組合せに対して、《達成－安楽》の尺度では「達成志向」を表す項目に、《親和－独自》の尺度では「親和志向」を表す項目に、《活動－安定》では「活動志向」を表す項目に、《指導－受動》の尺度は「指導志向」を表す項目を選択した場合に１点を与えて得点化した。グループごとの各尺度の得点の平均と平均点からの得点の散らばり方を表す標準偏差の値を示したものが図表Ⅱ－Ⅱ－１である。

《達成－安楽》の尺度では、「達成志向」の傾向がどのグループでもみられ、特にＦグループで最も高い。《親和－独自》の尺度では、「親和志向」の傾向がどのグループでもみられ、Ｄグループで最も高い。また、《活動－安定》の尺度では、「活動志向」の傾向がＢグループで最も高く、Ｃ、Ｄ、Ｆグループは、「安定志向」の傾向を示しており、中でもＤグループが最も「安定志向」の傾向を示している。《指導－受動》の尺度では、「指導志向」の傾向がＤグループで最も高く、Ａグループで最も「受動志向」の傾向の方を示している。

図表Ⅱ－Ⅱ－1　グループごとの平均と標準偏差（志向性）

尺度			Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ	Eグループ	Fグループ	基準
志向性	達成（9）－安楽（0）	平均	6.0	5.8	5.6	6.0	6.0	6.3	5点以上が達成志向
		標準偏差	1.9	1.0	2.1	1.6	2.6	2.0	
	親和（9）－独自（0）	平均	6.8	6.2	5.0	7.2	5.7	5.3	5点以上が親和志向
		標準偏差	2.1	0.4	3.1	1.5	1.9	2.2	
	活動（6）－安定（0）	平均	3.4	4.8	2.7	2.0	3.5	2.7	3点以上が活動志向
		標準偏差	2.1	1.2	1.6	1.0	2.1	1.8	
	指導（6）－受動（0）	平均	2.8	4.0	3.9	4.8	4.0	3.8	3点以上が指導志向
		標準偏差	2.6	1.8	2.3	2.2	2.8	1.7	

（注）各尺度の（　）内の数字は、それぞれの尺度の両極となる得点。例えば《達成－安楽》の尺度では、最も「達成志向」の強いものを9点、最も「安定志向」の強いものを0点としている。また基準の欄では、何点以上であればどちらの志向性の傾向であるかを示した。

どのような人生を望んでいるかということと、自分の現在の状況に満足しているかということは、必ずしも一致しない。例えば、現在のんびりした生活を送っており、その事には満足していても、本当は何かを達成しようと常に努力するような生き方を望んでいることも考えられる。そこで、全グループの対象者に、日常の生活のなかで自分の志向する生き方がどの程度実現できているかを、志向性満足度の尺度を使って調べた。「達成志向」、「安楽志向」、「親和志向」、「独自志向」のそれぞれが満足されている内容を表す文章を示して、「非常にそう思う」から「まったくそうは思わない」までの4段階で回答してもらった。回答の結果、各選択肢に対して以下の様に得点を与え、その合計により得点化した。

・非常にそう思う・・・・・・3点　・だいたいそう思う・・・・・2点
・あまりそうは思わない・・・1点　・まったくそうは思わない・・0点

グループごとに各尺度の得点の平均と分散の値を示したものが図表Ⅱ－Ⅱ－2である。全ての尺度の満足度でBグループの得点が最も高い。また、「達成志向」と「安楽志向」の満足度でもっとも低いのはAグループであり、「親和志向」と「独自志向」の満足度でもっとも低いのはCグループである。

図表Ⅱ－Ⅱ－2　グループごとの平均と標準偏差（志向性満足度）

尺度			Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ	Eグループ	Fグループ	満点
志向性満足度	達成	平均	⑥ 1.8	① 2.5	③ 2.3	② 2.4	④ 2.2	④ 2.2	3
		標準偏差	0.5	0.6	0.8	0.6	0.4	0.8	
	安楽	平均	⑥ 1.5	① 2.7	③ 1.7	⑤ 1.6	④ 1.7	② 2.0	3
		標準偏差	0.5	0.5	1.1	0.9	0.5	0.0	
	親和	平均	③ 2.3	① 2.7	⑥ 2.1	④ 2.2	⑤ 2.2	② 2.3	3
		標準偏差	0.4	0.5	0.4	0.5	0.4	0.8	
	独自	平均	④ 2.0	① 2.7	⑥ 2.1	③ 2.2	④ 2.0	② 2.3	3
		標準偏差	0.7	0.5	1.1	0.5	0.0	0.5	

（注）○内の数字は、各尺度における各グループの平均の高さの順位を示す。

行動の背景にある性格特性として内省的な性格特性を調べるために、性格検査の一つである「ＹＧ（谷田部ギルフォード）検査」の中から、思考的外向の尺度とのんきさの尺度を使った。この２つの尺度により、思考的外向の得点が低く（思考的内向）、のんきさの得点も低い（のんきでない）傾向を、内省的な性格特性として測ることができる。思考的外向とは、ものごとを外向的に考える性格傾向であることを意味し、のんきさとは、気軽に考える性格傾向であることを意味する。これら２つの傾向を調べるのに各々10項目を設定し、「はい」、「いいえ」、「どちらでもない」の３つの選択肢で回答してもらった。また、この性格特性についても以下の様に得点を与え、その合計を求めた。

・はい・・・・・２点　・どちらでもない・・・１点　・いいえ・・・・０点

思考的外向及び、のんきさの得点の各グループの平均と分散を示したものが図表Ⅱ－Ⅱ－３である。思考的外向では、Ｆグループでもっとも高く、ＡグループとＤグループでもっとも低い。のんきさでは、Ｅグループでもっとも高く、ＢグループとＣグループで最も低い。

図表Ⅱ－Ⅱ－3　グループごとの平均と標準偏差（内省）

尺度			Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ	Eグループ	Fグループ	満点
内省（YG）	思考的外向	平均	⑤10.8	②12.2	④11.2	⑤10.8	③11.8	①12.3	20
		標準偏差	4.5	4.0	4.1	1.6	4.9	4.4	
	のんきさ	平均	④ 9.8	⑤ 9.3	⑤ 9.3	②12.0	①12.2	③11.0	20
		標準偏差	3.6	4.8	3.5	3.0	4.3	3.3	

（注）○内の数字は、各尺度における各グループの平均の高さの順位を示す。

事前調査で測定した自尊感情とモラールについて、グループごとに各尺度の得点を求めた結果を図表Ⅱ－Ⅱ－4に示す。

自尊感情においては、Cグループで最も高く、全体平均より 2.6点上回っている。逆に、Fグループで最も低く、全体平均を 1.2点下回っている。

モラールにおいては、Fグループで最も高く、全体平均より 2.9点上回っている。逆に、Aグループで最も低く、全体平均を 1.1点下回っている。

図表Ⅱ－Ⅱ－4　グループごとの平均と標準偏差（自尊感情とモラール）

尺　度		全　体	Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ	Eグループ	Fグループ	満点
自尊感情	平　均	22.4	22.6 ④	23.8 ②	25.0 ①	22.0 ⑤	23.5 ③	21.2 ⑥	20
	標準偏差	4.2	3.2	3.5	1.6	2.9	3.6	3.1	
モラール	平　均	12.9	11.8 ⑥	15.3 ②	13.0 ④	12.6 ⑤	14.2 ③	15.8 ①	20
	標準偏差	3.1	1.8	1.9	3.7	1.8	2.0	1.2	

（注）○内の数字は、各尺度における各グループの平均の高さの順位を示す。

II・3　発言の概要

(1)　A；喪失経験グループ

	a	b
プロフィール	現役時代は会社中毒で、定年後気持ちの落ち込み経験	地域とつながりなく、定年後、崖淵に立たされた感じ
年齢 家族 前就労 定年 現在就労 その他 *1志向性尺度 *2志向性満足度 *3内省尺度 *4自尊感情 *5モラール	60歳 妻、娘（既婚）、他２人 メーカー（塗料） 海外事業部（中国担当） 60歳（今年定年） 無職 適当な職があれば勤めたい 妻が食堂経営 達成　8/9　親和　5/9 活動　5/6　指導　6/6 達成　2/3　安楽　1/3 親和　2/3　独自　1/3 思考的外向　14/20 のんきさ　7/20 25/30 13/17	64歳 妻死亡、1人暮らし、子供２人別居 建設会社 60歳 厚生年金基金（事務長、92年11月退職予定） 再就職の意欲あるが難しいと思う 達成　5/9　親和　9/9 活動　5/6　指導　0/6 達成　1/3　安楽　−/3 親和　1/3　独自　−/3 思考的外向　17/20 のんきさ　13/20 20/30 11/17
現役時代と定年後での生活の変化	（前）朝６時過ぎに家を出ていた 会社中毒 （後）妻の食堂手伝う（皿洗い） 妻と海外旅行計画	（前） （後）
地域とのつながりや友人などとの人間関係	地域活動は妻に任せっきり、回りから地域活動をしていないと非難	女性は地域とのつながりあるが、男性はチャンスが少ない 仕事を通じての研究会に参加
趣味	ゴルフ、囲碁、将棋	囲碁、魚釣り
社会活動やボランティア	ボランティア活動等に参加するきっかけがない	やがてボランティア等の活動に参加したいが、地域のグループに入らないと活動できない
定年の準備		
定年を迎えた時の気持ち	毎日が日曜日なのでゴルフを毎日やろう→気が進まない→家族のお荷物という意識→落ちつこうとしている	（地域とつながりなく）崖淵に立たされた感じ 会社は慈善事業ではないのでやはり冷たい
生きがいとは	仕事を成し遂げる使命感 仕事と趣味とは同列でない 自分や回りを楽しませる事に興味無くなる 市が紹介する草刈り等の仕事が生きがいではない 村祭りに参加する等の活動	満足感、熱中する事 結果的に見て生きがいを感じる（その時は分からない）、定義することは難しい
定年後・今後やってみたいこと	やりがいのある仕事が実際にはない	無理して働く事はないが、経験を活かす仕事ならやってみたい
その他	自分の考えを持つ事が大切	自分が進んでやれる仕事を見つける事が重要 趣味、家庭の仕事、ボランティティアが、生活の1/3 ずつになるのが理想

＊１～５『／』の左右の数字は、左が各個人の得点を、右が各尺度および自尊感情、モラールの満点の値を表す。

＊１　達成は《達成－安楽志向》、親和は《親和－独自志向》、活動は《活動－安定志向》、指導は《指導－受動志向》の尺度をそれぞれ意味する

c	d	e
趣味のテニスに熱中	定年退職後、転居しており、気分が落ち込む時期があった。現在は落ちついている	会社は冷たい、再就職も難しいと感じている
57歳 妻、義母、息子２人、娘 広報関係 55歳定年 前の会社に嘱託（93年３月定年） 妻が大正琴の師匠 達成　8/9　親和　6/9 活動　4/6　指導　2/6 達成　2/3　安楽　2/3 親和　3/3　独自　2/3 思考的外向　9/20 のんきさ　13/20 27/30 9/17	67歳 妻、息子２人 電気機器メーカー→子会社 営業→営業顧問（ｺﾝｻﾙﾀﾝﾄ） 61歳定年→64歳退職 無職 平成１年妻が健康を害す 達成　5/9　親和　9/9 活動　3/6　指導　5/6 達成　2/3　安楽　2/3 親和　2/3　独自　3/3 思考的外向　7/20 のんきさ　11/20 21/30 13/17	65歳 妻、息子 通信関係部品メーカー→商事会社 →　嘱託（営業） 60歳定年→今年退職 ゴルフクラブ製造会社 パートタイマー 達成　4/9　親和　5/9 活動　0/6　指導　1/6 達成　2/3　安楽　1/3 親和　2/3　独自　2/3 思考的外向　7/20 のんきさ　5/20 20/30 13/17
（前） （後）収入が減ったその他あまり変化なし	（前） （後）退職後半年位家族との間で気まずい時があった	（前） （後）家族と海外旅行実施
テニス仲間と交際 地域の活動で嫌な思いをした	定年後転居したので地域に知人がいないし、地域のつきあいには妻が出る、同窓会が唯一の楽しみ	仕事で昼間いなかったから地域との接触がない
軟式テニス	ゴルフ（最近は年１回位）、中国語、鉄道模型	
10数年前は、地域社会に貢献するという意味で、地域の子供達の指導を行った		
	中国旅行のため中国語勉強 再就職中に年金の対策	
		会社は冷たいものだ 65歳定年の人が羨ましい
趣味を生かして生活をエンジョイ 趣味のために金を使い、稼ごうとする活力 国に頼るのではなく、自分でどうにかする努力が大切	雲を摑む様な摑み所のないもので分からない 趣味が生かせて収入がある （経理知識など） 何か良い趣味を持つこと 絵を描いたりすると、心が落ちつき、時間も潰せる	
	来年息子のいる海外に行ってみようかと考えている	年金だけでは遊べないし、かといって再就職も難しい 書道の講座など受講したい
65歳は精神的にも肉体的にも若い 行政のデータなどを体系的にまとめて提供して欲しい 社員教育で、若い世代に人とのかかわりの大切さを教える事が必要	将来65歳まで働ける環境が必要 幅広い知識と技術をもって働く事が大切	自分に１番あった仕事を選ぶのが大切 （企業、業種等の目先の優劣に眩惑されず）

(2) B；積極性上位グループ（社会活動あり）

	a	b	c
プロフィール	まわりとの調和を大切にする	知的好奇心が旺盛で、定年後に大学の公開講座に通う	誰もが生きがいを持つことに懐疑的
年齢 家族 前就労 定年 現在就労 その他 *1志向性尺度 *2志向性満足度 *3内省尺度 *4自尊感情 *5モラール	70歳 妻、息子、娘２人 サービス業（自動車保険関係） 55歳定年 無職 妻が23年間保育所に勤め今年退職 達成　4/9　親和　6/9 活動　3/6　指導　4/6 達成　2/3　安楽　2/3 親和　2/3　独自　2/3 思考的外向　19/20 のんきさ　8/20 20/30 13/17	65歳 妻と２人暮らし 百貨店 呉服売場→ＯＢ会事務局 60歳定年→５年間嘱託 無職 妻が消費者センターの相談員（18年） 達成　2/9　親和　3/9 活動　1/6　指導　3/6 達成　2/3　安楽　3/3 親和　3/3　独自　3/3 思考的外向　8/20 のんきさ　2/20 22/30 17/17	62歳 妻、母、息子 製薬会社 総務開発担当 ５年ほど前に退職 自宅に設計事務所（顧問・取締役、弟と始める） 達成　6/9　親和　6/9 活動　6/6　指導　6/6 達成　3/3　安楽　3/3 親和　3/3　独自　3/3 思考的外向　11/20 のんきさ　15/20 25/30 17/17
現役時代と定年後での生活の変化	（前）仕事一筋 （後）	（前）やりたい学問ができなかった （後）掃除、洗濯、料理をやり始めて楽しい 大学の公開講座で漢詩と歴史の勉強	（前）仕事が主体、休みは盆・暮れと日曜 （後）退職後ゴルフ始める 特に困ったことはない
地域とのつながりや友人などとの人間関係	グループ活動は、助け合い、積極的に行動する気持ちが大切	引退して地域に入れる人がうらやましい 企業ＯＢの地域別ネットワークができるとよい	地域の老人会にはボスがいてやりづらい
趣味	釣り、植木、ゲートボール（審判員）	旅行（友人や家族と毎月）	ゴルフ（親戚や昔の友人）、旅行（妻）、俳句、油絵
社会活動やボランティア	ボランティア活動に参加するのはちょっと・・・	社会に役立つ活動（ボランティア）をしたい	ボランティア（ハンディキャップの会運転手）をしている
定年の準備	年金のことなど頭になかった	大学の講座案内などを取り寄せた	定年後の計画なし
定年を迎えた時の気持ち		社会に対して貢献するようなつながりを持ちたい	家族との暮しに違和感、すれ違いが多い 会社への執着心を断ち切る頑固にならない、 穀潰しのようでストレスがたまる
生きがいとは	体を動かすのが生きがい	生涯現役で仕事をすることが一番のぞましいが、せめて奥行きの深い趣味をみつけてライフワークにしたい	何かやろうとする目標 老人がボランティアに参加すれば生きがいにつながるかも
定年後・今後やってみたいこと	世の中みんな幸せになれば良い	心の平安・安らぎを大切に贅沢せず、簡素な生活を心掛けたい	地域のボランティア活動に老人という大きな集団が参加できる雰囲気作り
その他	努力することが１番大切		生きがいを誰もが持つことが重要なのか疑問 年寄りはずるくて頑固

＊１～５『／』の左右の数字は、左が各個人の得点を、右が各尺度および自尊感情、モラールの満点の値を表す。
＊１　達成は《達成－安楽志向》、親和は《親和－独自志向》、活動は《活動－安定志向》、指導は《指導－受動志向》の尺度をそれぞれ意味する

	d	e	f
	定年後の落ち込みはあるが趣味や家事に前向きである	退職後、仕事中心の生活から生きがいを趣味にかえる	近隣との交流がさかんで友人が多い
	72歳 妻、息子、娘２人 （共に既婚） 工業関係の工場 （工場長） 60歳退職 無職 達成　7/9　活動　6/6 指導　2/6　親和　6/9 達成　2/3　安楽　3/3 親和　2/3　独自　2/3 思考的外向　12/20 のんきさ　7/20 22/30 14/17	68歳 妻、息子２人、娘 （全員既婚） 旅行会社（総務・人事・勤労・営業） 64歳退職 前の会社のＯＢ会世話役 自治会、老人会の会計幹事 妻が華道の先生 達成　6/9　活動　5/6 指導　2/6　親和　6/9 達成　3/3　安楽　2/3 親和　3/3　独自　3/3 思考的外向　9/20 のんきさ　14/20 30/30 14/17	78歳 妻と娘家族 電気機器メーカー→化学メーカー→印刷関係 戦争で退職→62歳退職→73歳退職 無職 戦時中少佐（片肺、胃の回り等喪失） 達成　6/9　活動　4/6 指導　6/6　親和　7/9 達成　3/3　安楽　3/3 親和　3/3　独自　3/3 思考的外向　14/20 のんきさ　10/20 12/30 17/17
	（前）引退すれば苦しみから解放される （後）急に友達が減った ライフワークを考えた若い人との交流 皿洗いや料理の買物で妻との会話増える	（前）仕事一途で暇がない 仕事が生きがい 本当の意味の楽しみない 家の事は何もしない （後）食後の後片付けと風呂掃除をする	（前） （後）
	同じ目標持つ友人に性別や年齢は関係ない 新聞見て社交ダンスクラブに参加	地域には初め入り難かったが今では気軽に付き合う	すぐに友達できる 老人会で和気あいあい
	社交ダンス・卓球	ｺﾞﾙﾌ、ｹﾞｰﾄﾎﾞｰﾙ、歩く会、カラオケ、麻雀、ビリヤード、	ゲートボール（審判員資格あり）
	気軽に入れるボランティアの制度が欲しい	週１回程度ボランティアしたい、社会に還元	草刈り、農家の人に指圧をしてあげる
	ライフワークとか定年後の張りとか高齢化とか考えてなかった	特になし	
	孤独感に苦しむ	これから長い人生をゆっくり歩こうと思った	
		体を動かす 生きがいは３つ（ゴルフ、旅、１つは秘密） 自分が求めるもの、夢	遊び、畑、人とのつきあいを大切にする事 自分と家族の健康が１番
	このまま軌道修正せずにやっていく	こまめに動く 健康と経済的充実が基本	いい友達を作る
	40歳前からライフワークを持つ		台所仕事などしない

(3) C；積極性上位グループ（社会活動なし）

	a	b	c
プロフィール	定年後のライフプランをきちんと考えていた	社会奉仕への意欲は大きいが、実際には行ってない	今でも働くことが生きがいと感じている
年齢 家族 前就労 定年 現在就労 その他 *1志向性尺度 *2志向性満足度 *3内省尺度 *4自尊感情 *5モラール	63歳 妻、娘２人（両方既婚） 商社 （営業担当） 定年は迎えたが退職せず 前の会社に嘱託 （厚生年金基金常務理事） 達成　6/9　親和　3/9 活動　2/6　指導　2/6 達成　3/3　安楽　2/3 親和　2/3　独自　3/3 思考的外向　15/20 のんきさ　10/20 25/30 16/17	66歳 妻、子供２人（両方既婚） 業界団体 役員なので２年ごと改選 役員として20年（今後は健康であれば継続したい） 達成　4/9　親和　4/9 活動　4/6　指導　4/6 達成　3/3　安楽　1/3 親和　2/3　独自　2/3 思考的外向　3/20 のんきさ　1/20 27/30 16/17	63歳 妻、母親入院中、息子２人（両方既婚） 建設会社 営業部長→嘱託 60歳定年→１年後退職 別会社再就職 （建設コンサルタントの営業部長兼経理部長） 達成　5/9　親和　8/9 活動　3/6　指導　3/6 達成　2/3　安楽　0/3 親和　2/3　独自　0/3 思考的外向　10/20 のんきさ　12/20 26/30 6/17
現役時代と定年後での生活の変化	（前）仕事人間 （後）人生の余禄	（前） （後）	（前） （後）
地域とのつながりや友人などとの人間関係	今の仕事を通じ異業種の人人ともつながりが拡がる。（多くの人々との交友は自分の財産）	老人会でゲートボール等行う	
趣味	登山や旅行。絵や外国語を修得（公民館で）	ゴルフ（10年位やっていない）	寄席演芸、ゴルフ
社会活動やボランティア	外国語を生かす方法で、地域社会に役立ちたい（ボランティア）	地域社会のために無償で社会奉仕をしたい	
定年の準備	ＰＬＰセミナー（年金生活設計教育）により、引退時を喜びで迎えられるよう心の準備		
定年を迎えた時の気持ち	未知	年金もらう年になったなあその時考えてもすぐ忘れる	
生きがいとは	生きがいは人によって違う 自己実現のプロセス 肩をたたき合う友人がいる やりたいことをやる		今でも働くことが生きがい 自分の知識を部下に教育 世のため人のためになる事 妻を大切にする事
定年後・今後やってみたいこと	やりたいことは何でもやってみる	世間に迷惑をかけないで明るく生きていく事を目標 無償で社会奉仕する	年金をもらって当然になってから考える
その他			

＊１～５『／』の左右の数字は、左が各個人の得点を、右が各尺度、自尊感情、モラールの満点の値を表す。
＊１　達成は《達成－安楽志向》、親和は《親和－独自志向》、活動は《活動－安定志向》、指導は《指導－受動志向》の尺度をそれぞれ意味する

d	e	f	g
引退後の落ち込みはない 語学に興味を持ち勉強中	資格取得により定年後の再就職に成功	今でも会社人間で老人会などの参加は嫌い	会社の人間関係が中心で老人会などの参加は嫌い
68歳 妻、息子、娘 銀行→証券会社 55歳定年→65歳退職 無職 戦時中軍隊経験あり 達成 2/9 親和 0/9 活動 0/6 指導 0/6 達成 2/3 安楽 3/3 親和 2/3 独自 3/3 思考的外向 5/20 のんきさ 8/20 22/30 10/17	70歳 妻、子供 石油関係メーカー 経理担当→基金担当 55歳定年→65歳退職 講師 （社会保険関係） ｺﾝｻﾙﾀﾝﾄ のﾃｷｽﾄ作成 達成 7/9 親和 8/9 活動 2/6 指導 6/6 達成 3/3 安楽 1/3 親和 3/3 独自 2/3 思考的外向 8/20 のんきさ 6/20 25/30 14/17	74歳 妻、息子２人 （長男既婚） 化粧品メーカー 人事役員→理事 63歳定年→65歳退職 無職 達成 8/9 親和 4/9 活動 3/6 指導 6/6 達成 1/3 安楽 3/3 親和 2/3 独自 3/3 思考的外向 12/20 のんきさ 5/20 26/30 14/17	71歳 妻死亡、息子２人 業界団体 専務理事 70歳退職 無職 達成 7/9 親和 8/9 活動 5/6 指導 6/6 達成 2/3 安楽 2/3 親和 2/3 独自 2/3 思考的外向 17/20 のんきさ 15/20 24/30 15/17
（前） （後）主体性を維持 引退後の落ち込みはない	（前） （後）	（前）会社だけ 休日ごろ寝 （後）早起き 今でも会社人間で人間関係持続	（前）仕事にかまけている （後）会社の人間関係持続 退屈はしていないが、ルーズになった
ＯＢ会に入っているが、人生観等話し合う場がない	老人会に入っているが年金の説明以外に話す事が無い	年寄りのやる事は好きでないしゲートボールもやる気がしない 職場の人間関係１番強い	（老人会等）くだらない ｹﾞｰﾄﾎﾞｰﾙはやる気がしない 会社の後輩その他の交友関係が大切
ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ語を大学の先生から個人教授、園芸		ゴルフ（前の会社の後輩部下）	ゴルフ（同じｺｰｽのﾒﾝﾊﾞｰや前の会社の後輩）、旅行
	無職になった場合のタイムテーブルを描く 人や妻とつき合える趣味	若い人には、結婚前に貯蓄しておくと、結婚後も定年後も安心と強く説明	趣味、交友関係の持続を考えた
			余生を如何に生きるべきかを考えた
生きがいのない人間は特殊 誰でも生きがいを持っている 生きがいの定義は難しい 自己を客観視する 自己満足という事	趣味は１０種類を持つ 妻と同じ趣味を持つ	僅かでも金を稼ぐこと 65歳で引退し10年位遊ぶ 人に迷惑をかけない 子供に経済的負担をかけない 妻を大切にし仲良く遊ぶ 自分の枠内で自由闊達 生に執着しない生き方	人に役立つ事 友人関係が続く事 生きがいの定義は難しい 評価される事 健康が一番 無欲
	今後、妻と末永く仲良く	年寄りの知恵を若い世代に伝える	引退した人でも気力体力のある人には働く場を提供する制度が必要 老人を活用するのであり再就職を斡旋するのではない
会社が生きがいや生き方の教育をする（リモートコントロール）		50や60歳位の大学の先生が書いた「生きがい」の本など役に立たない	

(4) D；積極性中・下位グループ

	a	b
プロフィール	定年後雇用延長しており仕事が生きがいだが、今後の妻とのつながりに不安	子供を小さい頃に亡くし妻と２人暮らし
プロフィール　年齢 家族 前就労 定年 現在就労 *1志向性尺度 *2志向性満足度 *3内省尺度 *4自尊感情 *5モラール	59歳 妻、子供２人（息子、娘各１） 電気機器メーカー（単身赴任４年） 工場管理 56才（管理職定年） 厚生年金基金・年金相談室 （定年間際の社員OBの相談業務主体、最近は「生涯生活設計ｾﾐﾅｰ」等主催） 達成　7/9　親和　7/9 活動　2/6　指導　6/6 達成　3/3　安楽　2/3 親和　2/3　独自　2/3 思考的外向　9/20 のんきさ　9/20 22/30 11/17	67歳 妻、（子どもを幼いころ亡くす） メーカー（ダンボール関係）→会社の転業により退職→１カ月半後に現職 独立した後輩の会社に勤務 達成　4/9　親和　5/9 活動　1/6　指導　5/6 達成　2/3　安楽　2/3 親和　2/3　独自　3/3 思考的外向　13/20 のんきさ　13/20 23/30 15/17
現役時代と定年後での生活の変化	前）非常に忙しかった、仕事も気になり夜も眠れない状態 家庭は妻任せ 後）仕事内容 180度転換、1年間は猛勉強、その後楽すぎる 程になったが 最近はｾﾐﾅｰ主催等で多忙、仕事内容に 生きがいあり 。一番変わったのは 給料(30%減)	前）時間に追いかけられていた 後）時間が余る 妻と晩酌 収入減
地域とのつながりや友人などとの人間関係	夫婦２人になった時お互いが理解しあえるか不安 →他に趣味を求めなければいけない 子どもが独立するとﾊﾘがなくなるようで心配 ﾏﾝｼｮﾝ住まいで地域活動は活発ではない	
趣味	『無趣味も趣味のうち』 ｺﾞﾙﾌ、ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞｾﾝﾀｰ通い、読書	ﾊﾞｰﾄﾞｳｵｯﾁﾝｸﾞ ・区の野鳥モニター 旅行（旅の会）
社会活動やボランティア	現在の仕事を更に極め、自分と同じ年代層の人のために更に役立てたい	
定年の準備	直前になるまでぴんとこなかった	
定年を迎えた時の気持ち・対応	56歳の定年時には62歳位までの雇用継続の内定もあり、全く不安感じず現在の仕事を退職した時にどうなるかが心配 →心配は生きがい、趣味がないこと （経済面、健康面は不安なし）	ボケてしまうのではないかと不安 →体を鍛えるために毎朝3ｷﾛ 歩く （現在も継続） →ﾜｰﾌﾟﾛ（職業訓練校で指導を受ける） 何か決まったことをしていないと自信が持てない 定年前は健康面、経済面等心配だったが予想していたより楽
生きがいとは	現在の仕事に生きがい感じる(いつまでやれるか) ベースは健康、趣味がないのが不安 地域社会とのつながりが必要 何かに前向きに取り組むこと ﾌﾞﾙｰｶﾗｰの人の方が定年後活き活きしている 現役時代の経歴を引きずってはいけないと思うがつい出てくる→疎まれる （最近は自然体に ）	声を出してしゃべる 同僚、先輩の死に接する時、生きがいを考える 趣味を生かしたボランティア 必要とされている、役に立つという自己満足 定年前は生きがいを意識することがなかった
定年後・今後やってみたいこと	一つは妻と共通の趣味を（書道） 現在の仕事を長く生かしていきたい	楽しい歳を重ねていかなくては 人間関係を大事にしていきたい
その他	相談業務の中で、ﾌﾞﾙｰｶﾗｰの定年者の方が既に現役時代から自分の趣味を持ち地域社会の中で人との関係を作りあげていると感じる	今の女の人（妻の所に遊びにくる友だち）はとにかく元気

＊１～５『／』の左右の数字は、左が各個人の得点を、右が各尺度および自尊感情、モラールの満点の値を表す。
＊１　達成は《達成－安楽志向》、親和は《親和－独自志向》、活動は《活動－安定志向》、指導は《指導－受動志向》の尺度をそれぞれ意味する

c	d	e
定年後、精神的な落ち込みがあったが再就職により持ち直す	定年前は職場の人間関係に悩む 趣味は多数	妻との共通の趣味を持とうとしたり、休日の炊事を引き受ける
65歳 妻、息子、娘（既婚） 自動車部品製造業→定年→嘱託→人間関係ｲﾔで退職→数カ月無職→福祉事業団→現職 60歳 現職 福祉事業団（４時間勤務） 達成　6/9　親和　7/9 活動　1/6　指導　6/6 達成　2/3　安楽　2/3 親和　2/3　独自　2/3 思考的外向　12/20 のんきさ　9/20 18/30 11/17	58歳 妻、息子、娘 自治体職員（社会保険関係）→定年→現職 55歳 建設業・健康保険組合常務 達成　5/9　親和　8/9 活動　3/6　指導　1/6 達成　3/3　安楽　2/3 親和　2/3　独自　2/3 思考的外向　10/20 のんきさ　16/20 21/30 14/17	56歳 妻、母、息子、娘（既婚） 電気機器メーカー→定年→雇用延長 同じ会社で継続勤務 厚生年金会館（接客、事務） 妻；床屋経営 達成　8/9　親和　9/9 活動　3/6　指導　6/6 達成　2/3　安楽　0/3 親和　3/3　独自　2/3 思考的外向　10/20 のんきさ　13/20 26/30 12/17
前）仕事中心、高度成長時代で趣味を考える時間もない状態 退社後も仕事の事で頭がいっぱい	前）組合との関係で職場の人間関係が複雑で職場がギスギス 残業、休日出勤が多く、妻との接触ほとんどなし 後）妻との交流、ｺﾞﾙﾌ練習時間増加 天下りへの反発あり、2年間は職場の人間関係に苦労	前）毎日残業、帰宅は早くて10時 帰宅後は食事して寝るだけ 現職に変わってからは余裕ができ、趣味の時間もさけるようになった 後）ﾜｰﾌﾟﾛをはじめた　（仕事が暇） 収入減(5%減) 妻との関係が変化（接近してきた）
ゴロゴロしてると妻の目がヒカル 園芸を共通の趣味にして「なんとかつないでいける」 妻が仕事をしているので、掃除を分担→ 少しでも協力すると気分がいいだろうと思って	妻との外出が増え妻とのｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝは良好 地域活動は自分から遠ざかっていたが、今後は関わりを深くしていきたい	共通の趣味を持つことが大事だと思い、先のことも考えて書道を始めた 妻が休日仕事のため、休日の炊事を担当（現役時代から）
ﾊｲｷﾝｸﾞ、書道、盆栽（庭が20坪）	ﾜｰﾌﾟﾛ、旅行を兼ねたﾄﾞﾗｲﾌﾞ、写真、ｼﾞｮｷﾞﾝｸﾞ、園芸（今年から挑戦）	俳句、書道（俳句・書道は妻と共通の趣味）、菊作り、料理
		趣味がボランティアに結びつく（俳句、書道を教える等）
定年間際になって「これじゃだめだ」と悩む		
もう行かなくて良い、責任がないという脱力感 精神的、肉体的緊張が一気になくなる リズムがくずれ、とまどいを感じた 健康第一→現役時代と同じ時間に起床、万歩計を持ち、朝2ｷﾛ歩いた →嫌になって再就職 なるべく外出するようにしている １年間は健康、精神面のｶﾊﾞｰに苦労		延長勤務のため定年という感覚なし 収入減はｼｮｯｸ（時間的余裕できたが・・矛盾） 40代に考えていた定年後生活と実際とは大きな開き 40代；定年後はのんびり 実際；そんなにゆっくりしていいのかな 人間死ぬまで働くべき
最終的にはﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ（草むしりでも何でもいい）、地域社会への奉仕 定年前は生きがいを意識することなし	まず健康がﾍﾞｰｽでその上に地域社会への関わり（自分がいなくては） 平均的人間を作る教育が、一人では何もできない人間を作る→生きがいを持てない 帰属集団を持ち、その上で自分自身の趣味があることが理想→ひとつではダメ 定年前は生きがいを意識することなし	地域での活動も生きがいにしていきたい （地域の一人暮らし老人の支援） 何かをやっているという自負心 趣味を楽しむだけではダメ 定年前は生きがいを意識することがなかった 生きがいを考える必要なし 仕事が生きがいだと思ってしまっている
元気なうちは頑張りたい	妻とドライブ旅行	理髪サービスのボランティアで老人ホームを回りたい
台所に入ろうとするといやがられる 高齢になり体力、能力が衰えた時不安あり 回りの定年退職者に消極的な人が多い	現在の不満；長期の休みがとりにくい 経済設計は難しい（まだ子どもにお金がかかる） 趣味を同じくする者のﾈｯﾄﾜｰｸ作りの支援	経済面より自分の健康問題、親の介護問題が心配 きっかけ作りの支援充実が国等にもとめられる

(5) E；現役グループ

	a	b	c
プロフィール	定年後のライフプランを考えはじめている。趣味多数	義父の会社に勤務。英語の修得に励んでいる	単身赴任のため時間的に余裕がある。趣味多数
年齢 家族 現在就労 *1志向性尺度 *2志向性満足度 *3内省尺度 *4自尊感情 *5モラール	55歳 妻、娘、息子 電気機器メーカー 年金担当 達成 6/9 親和 6/9 活動 5/6 指導 6/6 達成 2/3 安楽 1/3 親和 3/3 独自 2/3 思考的外向 14/20 のんきさ 18/20 25/30 13/17	41歳 妻、息子 銀行→機械部品塗装会社 総務、営業担当 達成 2/9 親和 2/9 活動 0/6 指導 1/6 達成 2/3 安楽 2/3 親和 2/3 独自 2/3 思考的外向 7/20 のんきさ 5/20 25/30 15/17	58歳 妻、息子、娘 経理関係担当（単身赴任） 達成 9/9 親和 6/9 活動 3/6 指導 6/6 達成 3/3 安楽 1/3 親和 2/3 独自 2/3 思考的外向 12/20 のんきさ 11/20 27/30 14/17
現在の生活実態	仕事に対し猪突猛進だったが、時間的余裕ができて戸惑う	通勤は自転車か自動車 いつも同じ時間に帰宅 家族と夕食後、英語を勉強している 読書	週末だけを自宅で過ごす 一人暮らしなので時間的余裕がある（ワープロ、パソコンを勉強しはじめた）
家族との関係	家族の内で干渉しない	子供と釣りやｻｲｸﾘﾝｸﾞをする	
地域とのつながりや友人などとの人間関係	同窓会とかでは積極的に忙しい役を引き受ける 地域の活動には、主（ぬし）がいて入りづらい	学校時代の友人ともあまり会わない	仕事関係の会合や、同窓会などの集まりでは世話役をやる 町内会の様なものに参加
趣味	登山、旅（東海道五十三次を歩く）、書道、能・歌舞伎の鑑賞	読書、英語（通信教育・英会話教室）、釣り	大学の公開講座・市民講座受講、寺巡り
社会活動やボランティア			
定年の準備	老人ホームを見学し、将来手伝える事、自分が世話になる時の事を研究 現場でやってきた人達は第２の人生に入りやすいが、ホワイトカラーはダメ ライフプランを考え始めた		体の動く範囲でやれることを見つけたいが模索中
生きがいとは	目的があってそこに到達する過程が生きがい 現役の時は仕事が生きがい 引退したら何か挑戦し達成する過程が生きがい	会社が軌道に乗り、先が見えてきて何もやることがないから勉強でもしようと考えた いろいろな資格取得も生きがいの１つと考え、探しているうちに英語に興味を持った	仕事が生きがいだった 引退したら何も無くなってしまうので非常に寂しい 何か求める事 町内会の会合などで声をかけてくれる 生きがいはいくつかが複合したもの
定年後・今後やってみたいこと	JASSクラブに加入し趣味を楽しむアウトドア、インドア両方の活動が必要 夫婦ともできるだけ長生きする	多少時間的余裕もあるのでいろいろやってみて、これからの選択肢を広げる	人生晴れたり薄曇りだったりして終わるのが良い 飽きてもすぐ次に何かやる事があると良い 市民教室などに出る
その他	今の老人は昔より５歳若い 座右の銘は道、道を歩き続け、自助努力をする		妻は憧れの生活を夢見てよく話してくれる 生涯青春を座右の銘にする

＊１～５『／』の左右の数字は、左が各個人の得点を、右が各尺度および自尊感情、モラールの満点の値を表す。
＊１　達成は《達成－安楽志向》、親和は《親和－独自志向》、活動は《活動－安定志向》、指導は《指導－受動志向》の尺度をそれぞれ意味する

d	e	f
会社人間を否定。好奇心旺盛で、趣味は多い	趣味が多く、仕事だけしかない人間は好きではない	毎日仕事で忙しい。お金と趣味が大切だと考えている
59歳 妻、娘、実姉 情報処理関係 団体役員 達成　8/9　親和　6/9 活動　4/6　指導　6/6 達成　2/3　安楽　2/3 親和　2/3　独自　2/3 思考的外向　5/20 のんきさ　13/20 20/30 15/17	53歳 妻、娘２人 保険会社 スタッフ的な仕事 達成　7/9　親和　7/9 活動　6/6　指導　5/6 達成　2/3　安楽　2/3 親和　2/3　独自　2/3 思考的外向　17/20 のんきさ　14/20 26/30 17/17	52歳 妻、娘、息子 パン製造会社 人事担当 達成　4/9　親和　7/9 活動　3/6　指導　0/6 達成　2/3　安楽　2/3 親和　2/3　独自　2/3 思考的外向　16/20 のんきさ　12/20 18/30 11/17
人並みの生活 10年前から定年の準備を始めた	通勤１時間20分 １日１万歩実践 平日はテレビ、最近週末に食事の後片づけを始める	通勤１時間位 朝６時半に家を出て、夜10時頃帰宅 土曜日も半分くらいは出勤
特に問題なし	家族で出かけることは少ない	
書道教室で近所の人を教える 航空少年団（妻が主体）で団員のお世話 ｵｰﾄｷｬﾝﾌﾟ仲間との交流	同窓等の集まりでは率先して幹事を引き受ける 友人との関わりがこれから１番大事	会社の友達はいつか切れる 隣近所との交流なし
（活動）書道（師範、日曜教室）、ゴルフ、日曜大工、ｵｰﾄｷｬﾝﾌﾟ、ｽｶｲｽﾎﾟｰﾂ	ラグビー、ヨット、ゴルフ 寺巡り、バードウォッチング、合唱	ゴルフ、カラオケ、軽い畑仕事
ボランティアは責任が重く長く続けるのは大変 気軽にやれれば良いかも	まだ余裕がないが定年後健康で家庭も安定していたらボランティアをやりたい（今の職場を離れた後）	社会活動は何もやっていない
経済的な問題、健康、広い意味での生きがいの３つが揃わないとダメ 経済的には厚生年金、企業年金、自助努力で何とかなりそう、これからが本当に自分の人生だと思う	体力の問題もあるからその時の問題 会社を辞めたときには凄い淋しさがあると思う	いずれ引退なので、何をすべきか人に聞いたり本を読んだりするが具体的には何もしていない 今から対策を考え実行すれば良いだろうが難しい
自分が社会の役に立っていると感じる事 好きな事に熱中している時 仕事が生きがいと言える人は幸せだと思う 自己実現（広い意味で） 自分がやっている事は自分が好きで選んだ事だと思うこと	仕事だけが生きがいというのは好きではないし淋しい 自分が役に立っていると感じる事 人とのかかわり合い	仕事は生きがいでもあり、生活の糧でもある 生きがいに影響するものはお金 お金があれば何でもできる お金に加えて自分の本当にやりたい趣味を持つ
ニュージーランドと日本とカナダで何カ月毎に住み変えるのが夢 自分に合ったﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動、他、いろいろやってみたい	65歳までは働きたいが、新しい職場の環境など心配 心身ともに健康 気分的に若さを失いたくない	先が長いので分からない 健康が１番不安 60歳を過ぎても充実していくにはどうすればいいか考えながら生活する
一律に引退の時期を決めてしまうのではなく、その人がしたい時に引退できる制度（仕事、年金）が欲しい		

(6) F；女性グループ

	a	b	c
プロフィール	定年前から、精神的にも経済的にも生活設計を考えて実践	定年後落ち込むことなく家庭に入り、楽しく過ごしている	現在も仕事についているので家庭と仕事の両立難しい
年齢 家族 前就労 定年 現在就労 生きがい 積極性 *1志向性尺度 *2志向性満足度 *3内省尺度 *4自尊感情 *5モラール	61歳 夫と２人 40年間小売業に勤務 60歳（昨年） 無職 あり 上位 達成　7/9　親和　5/9 活動　4/6　指導　6/6 達成　3/3　安楽　2/3 親和　2/3　独自　3/3 思考的外向　11/20 のんきさ　9/20 26/30 16/17	65歳 夫と２人 運送会社（人事部）→子会社→定年→65歳退職（今年） 60歳 無職 わからない 中位 達成　7/9　親和　8/9 活動　5/6　指導　3/6 達成　2/3　安楽　2/3 親和　3/3　独自　2/3 思考的外向　11/20 のんきさ　15/20 18/30 15/17	65歳 夫、娘、息子（海外在任） 40年間卸売業に勤務→定年→定年延長 55歳 前の会社勤続（財務担当） あり 中位 達成　5/9　親和　7/9 活動　2/6　指導　2/6 達成　3/3　安楽　2/3 親和　3/3　独自　3/3 思考的外向　14/20 のんきさ　11/20 22/30 17/17
居住状況	マンション		
現在の生活実態	仕事からはなれ家庭に入って楽しくやっている	家庭に入り、あちこち出かけて忙しく過ごしている	家庭と仕事の両立で忙しい 休日は友達との交流
家族との関係	退職後は夫孝行をしている 週１回は夫と出かける	兄弟姉妹が多いので、いろいろ用事があって出かけていく	２・３年前に夫が体を壊す→最近ずっと家にいて大変
現役時代と定年後での生活の変化	（前）会社、会社と気持ちが向いてた （後）家庭生活をエンジョイしている人間関係が縦から横に	（前）本社時代は毎日残業→子会社では定時に退社 （後）家にいるようになってから生活費がかかるようになった	（前）仕事が忙しくて余裕がなかった （後）ある程度仕事がセーブされてゆとりが出た
地域とのつながりや友人などとの人間関係	JASSｸﾗﾌﾞで異業種の人との交流が楽しみ←→会社のＯＢ会でも肩書を気にせずつき合う	友人の子供に枕を作ってあげたりする	同窓会が多く全国を飛び回る家庭を持っていると仕事関係の夜のつきあいはできない
趣味	ｽｷｰ、ｺﾞﾙﾌ、歴史ｻｰｸﾙ、美術鑑賞 大学の公開講座受講、旅行	洋裁、手芸、麻雀、健康クラブで体操、茶道、芝居を観る	読書、観劇
社会活動やボランティア	以前ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱをやり、本人の死に直面し、悲しい思いをしたが、これからも機会があればﾎﾞﾗﾝﾃｨｱはやっても良い	老人の世話等はちょっと無理かもしれないが時間があれば週に１回くらい手伝いたい	ボランティアをやりたいと思うがなかなか踏み込めない 暇になったら何か役に立ちたいとは思っている
定年の準備	定年の数年前から、心の切替えや金銭計画をした 個人主体の生活意識を持つこを心掛けた		定年になったら年金が二人でいくらになるとか夫と話してずいぶん切り詰めないといけないと思っている
定年を迎えたときの気持ち	集団生活にどっぷりひたっていた為、孤立感に悩んだ	ああ、これから遊べる 落ち込んだりしなかった	
生きがいとは	出会いがあった人（友人）との関係を大切にする	好きな事をするのが生きがい	生きがいと言われてもぴんとこない 友達を大事すること
定年後・今後やってみたいこと	趣味を広げるように努力していかなければいけない 大学の公開講座を優先して、生活が面白くなる工夫をする	中国に友人がいるので中国語を覚えたい 体だけは気をつけて、体操だけは続けたい	習字や絵を習ったりしたい 自分がぼけないよう用心 計画を練って老後を生きがいのあるものにしたい
その他	60～65歳は、老人として諸制度上に恩典が少なく中途半端		

＊１～５『／』の左右の数字は、左が各個人の得点を、右が各尺度および自尊感情、モラールの満点の値を表す。
＊１　達成は《達成－安楽志向》、親和は《親和－独自志向》、活動は《活動－安定志向》、指導は《指導－受動志向》の尺度をそれぞれ意味する

d	e	f
独身だが弟家族と同居。生活には困らない	独身、一人暮らしのため健康を損ねた時のこと考えると不安	独身で母と二人暮らし。団地の活動に参加している
67歳 弟の家族 自動車会社に勤務 56歳 無職 あり 中位 達成　8/9　親和　2/9 活動　0/6　指導　3/6 達成　1/3　安楽　2/3 親和　1/3　独自　2/3 思考的外向　5/20 のんきさ　6/20 19/30 16/17	65歳 一人暮らし 電気機器メーカー→関連会社→現関連会社（経理）→55歳出向 65歳　→定年→現職 関連会社勤務 あり 中位 達成　8/9　親和　4/9 活動　2/6　指導　6/6 達成　2/3　安楽　2/3 親和　2/3　独自　2/3 思考的外向　16/20 のんきさ　11/20 23/30 17/17	66歳 母（88歳） 銀行→戦災疎開(5年）→上京→調査機関→定年→現職 45歳 証券関係団体秘書（嘱託） あり 下位 達成　3/9　親和　6/9 活動　3/6　指導　3/6 達成　2/3　安楽　2/3 親和　3/3　独自　2/3 思考的外向　17/20 のんきさ　14/20 19/30 14/17
二世帯住宅に弟家族と同居	５年前に家を購入	県営住宅なので気が楽
お稽古ごとや宗教関係の行事で毎月出かける	休日は、友人と麻雀などで遊ぶ	休日はテレビばかり見てしまう
現役時代は母が家事をやってくれた		母が年の割によくしてくれるので助かっており、感謝している
（前）男性は仕事がなくても重役がいると帰宅しない、私は仕事がない時は定時退社 （後）母の死後、自分のやりたい趣味をやっている	（前）最初の会社では残業も多かったが、それでも、退社後お花や洋裁の免許を取りに通った （後）	（前） （後）経済的に一時苦しかったがそれなりの生活をしている
やりたいことが沢山あるから老人会には参加しない	友人と麻雀 保険関係の旅行に行ったら、いろんな人と出会えて楽しかった	小学校、女学校時代の友人と月１回以上会ったり、年に1・2回宿泊旅行、団地の活動に参加
宗教（密教）、梵字、謡	洋・和裁、華道、書道 スポーツとかもやってみたい	旅行、観劇、運動
フランス料理の基礎があり、宗教の集まりで、昼食の奉仕をしている	朗読など自分の体に重荷にならない程度のボランティアをやってみたいが、掃除やお使いは出来ない	団地の活動として地域のボランティアもやっていきたい
	元気なうちは良いが、（経済的には大丈夫だが）一人暮らしなので不安なときもある	
大きな後ろ楯がなくなった感じ		
密教を究めるということが生きがい	今は仕事をしているから仕事が生きがい→引退後は趣味を生かしていくことが生きがい	今は仕事が生きがい→引退後は何か一つ目標を持ってやる
密教の免許を本当に中身のあるものにするため、精進していきたい	現在の仕事が出来れば一番良いスポーツやボランティア	団地でボランティア
日本は福祉の後進国		最近通勤途中に、一過性の目まいで１週間ばかり入院した

Ⅱ・4　グループ別にみた発言構造の分析

グループインタビューにおける出席者の反応について、各グループごとにＫＪ法を利用した分析を行った。ここでは、ＫＪ法による分析結果に反応量を加味し、定年退職後の生きがい喪失、生きがいの維持・創造のプロセスを中心とした各グループの特徴を概観する。

図表Ⅱ－Ⅱ－５～10は、各グループの発言構造を図示したものである。図の中段は定年前後の生活変化に対する自己評価及び生きがい創造に向けての努力・行動を示している。上段、下段は生きがい獲得の場を大きく６つに分け、それぞれの場における生きがい喪失・創造に関わると思われる意識、行動についての発言を示す。それぞれの発言は、生きがい喪失・創造のどちらに関与する内容であるか、また意欲や希望にとどまるものなのか、顕在化した行動、その行動の効果の実感についての発言であるのかによって分類した。また、それぞれの場における生きがい創造に関与すると思われる以前からの実態や意識、行動の変化がみられる場合には中段右の『生きがい創造に向けての意識・行動』の枠に向けて矢印がのびている。矢印の太さは概ねの発言量を示し、顕在化した努力や行動を実線、意欲、希望など意識のレベルにとどまっているものは点線で示してある。これとは逆に、生きがい喪失につながると思われる実態や意識がみられる場合には中段左の『生きがい喪失の危機』に向けて矢印がのびている。また、６つの生きがい獲得の場のうち、生きがい創造に関わる意欲、希望が特に大きいものについては枠を太く強調してある。つまり、それぞれの場から『生きがい創造に向けての意識・行動』、『生きがい喪失の危機』のいずれに多く矢印が向いているか、矢印の太さ、点線か実線かといった図のパターンにより各グループの特徴を示している。

まず、定年後の生きがい喪失の有無についてみると、ＯＢの場合はいずれのグループでも、共通反応として定年退職による精神的な落ち込み、生活変化に対するマイナスの自己評価が大なり小なりみられる。しかし、定年後の生活における生きがいの維持、再創造に向けての意識や行動については、グループによる差がみられ、結果として現在の生活状況や今後の展望の認識が異なったものになっている。

また、定年後の生きがい喪失、維持、創造に関与する要因、生きがいを得る場としては、定年前の仕事の状況や定年前の職場との関係、定年後の仕事、家庭生活、地域活動、趣味・学習活動、ボランティア活動などについての反応があり、それぞれが各人の生きがいの喪失、維持、創造に占めるウエイトや、それぞれの場における生きがいの喪失、維持、創造に関与すると思われる実態や意識・行動に、グループによる特徴がみられる。

以下では、各グループごとに発言構造の特徴をみていく。

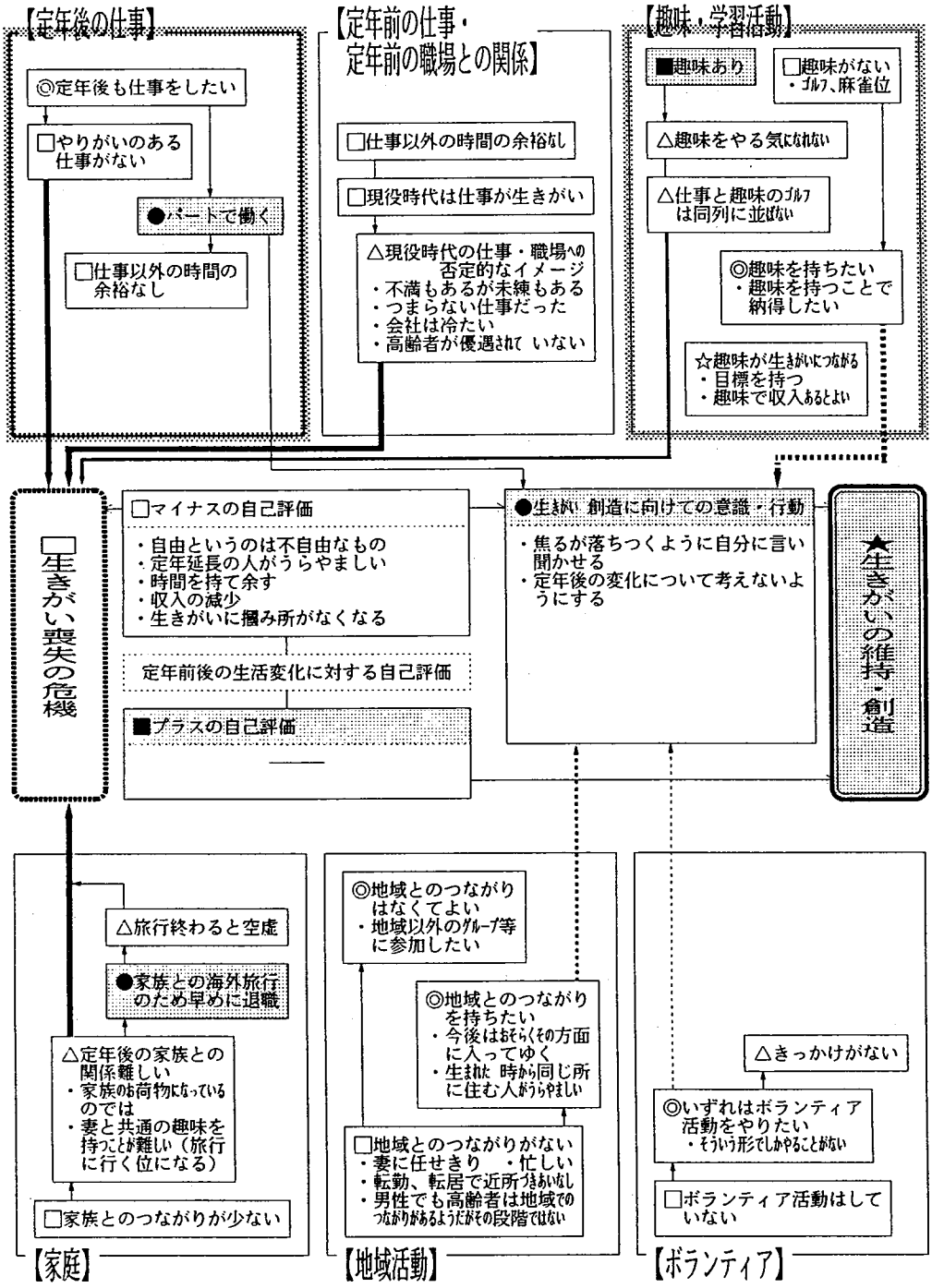
(1) A；喪失経験グループ

このグループは、第1次調査、今回の事前調査のいずれかで、生きがいの意味を問う設問に続く、「そのような生きがいを持っていますか」との設問に対して「前は持っていたが、今は持っていない」と回答したグループである。従って事前調査で生きがいを「持っている」と回答した者が出席者5名のうち3名含まれている。しかし、定年前後の生活変化に対してマイナスの自己評価が多く、プラスの自己評価が全くみられない。生きがい創造に向けての意欲や行動も乏しく、他のグループと比較すると生きがい喪失の危機にあるグループであるということがいえよう。

まず定年前後の生活の実態をみると、現役時代は仕事中心の生活で、家族とのつながり、地域とのつながりが少ない。趣味・学習活動に関しても「仕事に使命感を感じてやっていると、自分自身やまわりを楽しませることに興味が向かなくなる」との発言に代表されるように、時間がなくてできないというよりはむしろ、やりたいと思わずにすごしてきたというのがグループの大半の実態のようである。生きがい喪失状態に関与すると思われる実態は、家庭、地域活動、趣味・学習活動のいずれの場においてもみられる。ただしこうした実態自体は、他のグループにも共通するものであり、喪失経験グループの特徴はむしろ、こうした喪失につながる実態を、生きがいの再創造に向けて変化させようとする意欲に乏しく、具体的な行動がほとんどみられない点にある。定年退職後の生活変化に対する対応が「落ちつくように自分に言い聞かせる」、「定年後の変化について考えないようにする」といった消極的なものであり、趣味・学習活動、地域活動についても「それで納得していきたい」、「他にやることがない」など、他のグループほど積極的、具体的なものではない。ボランティア活動については、自発的な発言が全くなく、インタビュアーの問い掛けに対して一部の出席者が「いずれはやりたいが、きっかけがない」という反応を示したにすぎない。

また、他のグループに比べ、現役時代の仕事や職場に対して、「会社は冷たい」、「つまらない仕事だった」といった否定的な反応が多くみられ、これも喪失状態に関与している様子がうかがえる。また、定年後の再就職に関する意向は非常に強いが、労務的な仕事でもよいという割り切りをする者は少ない。あくまでやりがいのある仕事、失業保険や年金を犠牲にする価値のある仕事というように仕事の内容に関する希望が高く、結果として就職先が見つからない、仕事はしたいがあきらめるといった生きがい喪失の危機につながる実態に陥っている。

図表Ⅱ－Ⅱ－5　グループインタビューにおける発言構造〔A；喪失経験グループ〕



1. 【　】で示す枠は生きがい獲得の場を、枠の太さは生きがい創造に関わる意欲・希望の発言の多さを示す。
2. □△は生きがい喪失に関与すると思われる発言（□定年前後の実態，△意識）、◎■●☆★は生きがい創造に関与すると思われる発言を示す。（◎意欲・希望，■定年前後の実態，●顕在化した行動，☆行動の効果への期待、★行動の効果の実感）
3. 実線の矢印（ ⟶ ）は顕在化した行動が、点線の矢印（ ⇢ ）は意識や意欲・希望についての発言が各々生きがい喪失、創造のどちらに関与するものかを示し、矢印が太い程発言量が多いことを示す。

（注）

⑵　B；積極性上位グループ（社会活動あり）

このグループは、事前調査で生きがいを「持っている」と回答し、地域活動やボランティアなど何らかの社会に役立つ活動を既に行っているとするグループである。さらに、性格特性としては、積極性が前回調査回答者中上位３分の１の範囲に入るという特徴を持つ。

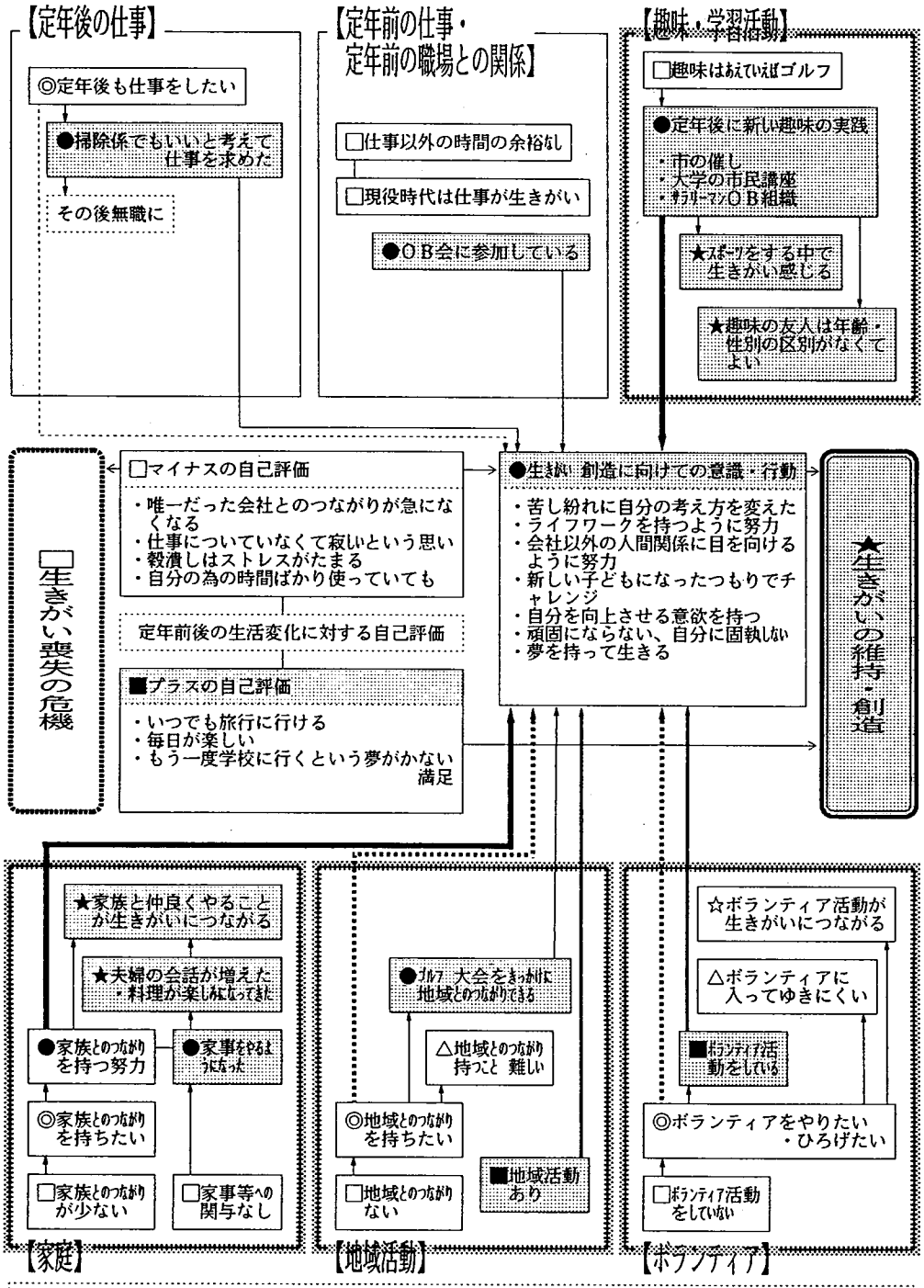
まず、定年前後の生活変化に対する自己評価としては、マイナス、プラスの両面が評価されている。マイナス評価が全くみられず、希望どおりの定年後生活に満足しているとの反応も１名みられる。

現役時代の生活は仕事中心で、家庭、地域活動、趣味・学習活動のいずれにおいても生きがい喪失に関与すると思われる実態があるという結果は、喪失経験グループと同様である。しかしながら、定年退職後の動きとして地域活動、ボランティア活動のいずれかの実践が既にあるだけでなく、家庭、趣味の場においても、生きがい創造に向け、意欲にとどまらない顕在化した行動や努力がある。さらに一部の出席者からは「同じ目標を持つ趣味の友人は年齢も性別もなくてよい」、「家族と仲良くやっていければそれが生きがい」といった、行動や努力が生きがい創造につながっているとの実感ととれる発言もみられる。定年退職後の生活変化を自覚し、「会社以外の人間関係に目を向ける」、「これまでの自分の考え方を変えた」など積極的に新しい生活に適応しようとする姿勢があり、これが行動につながっている。中でも、１ケースでは典型的な定年後の生きがい喪失、再創造のプロセスが本人にも自覚されている。定年退職直後「唯一だった会社とのつながりが急になくなり、趣味も家族とのつながりも全くない」という事実に愕然とし、以後家族とのつながりを持つ努力から始めて、趣味を広げる努力を行い、結果として趣味がボランティア活動にもつながっている。今後も軌道修正せずにやっていきたいと現状を肯定する発言があり、生きがい再創造に成功しているとみることができよう。

一方、生きがいを得る場としてあがっているもののうち、生きがい創造に向けての行動に阻害があるとの反応が比較的大きいのは、地域活動とボランティア活動である。このグループは設定条件として地域活動、ボランティア活動のいずれかの実践があるが、それぞれ実践のないものについて意欲はあるが難しいとの反応がみられ、ボランティアに関しては、実践のある者からも、気軽に地域ごとに活動できるシステムを求める発言がみられる。

また、定年後の仕事に関する意向は、喪失経験グループに比較すると弱い。現役時代の延長線上での仕事への意欲は一部にはあるが、難しさを自覚し、他に目を向けようというスタンスである。再就職の希望者は、職種を選ばないという姿勢で求職し、再就職を果たしている。

図表Ⅱ－Ⅱ－6　グループインタビューにおける発言構造
〔B；積極性上位グループ（社会活動あり）〕



（注）
1. 【　】で示す枠は生きがい獲得の場を、枠の太さは生きがい創造に関わる意欲・希望の発言の多さを示す。
2. □△は生きがい喪失に関与すると思われる発言（□定年前後の実態，△意識）、◎■●☆★は生きがい創造に関与すると思われる発言を示す。（◎意欲・希望，■定年前後の実態，●顕在化した行動，☆行動の効果への期待、★行動の効果の実感）
3. 実線の矢印（ ——→ ）は顕在化した行動が、点線の矢印（ ----→ ）は意識や意欲・希望についての発言が各々生きがい喪失、創造のどちらに関与するものかを示し、矢印が太い程発言量が多いことを示す。

(3) C；積極性上位グループ（社会活動なし）

このグループは、積極性上位グループ（社会活動あり）と同様に事前調査において生きがいを「持っている」と回答し、積極性が上位であるが、地域活動、ボランティア活動の実践のない者で構成されている。

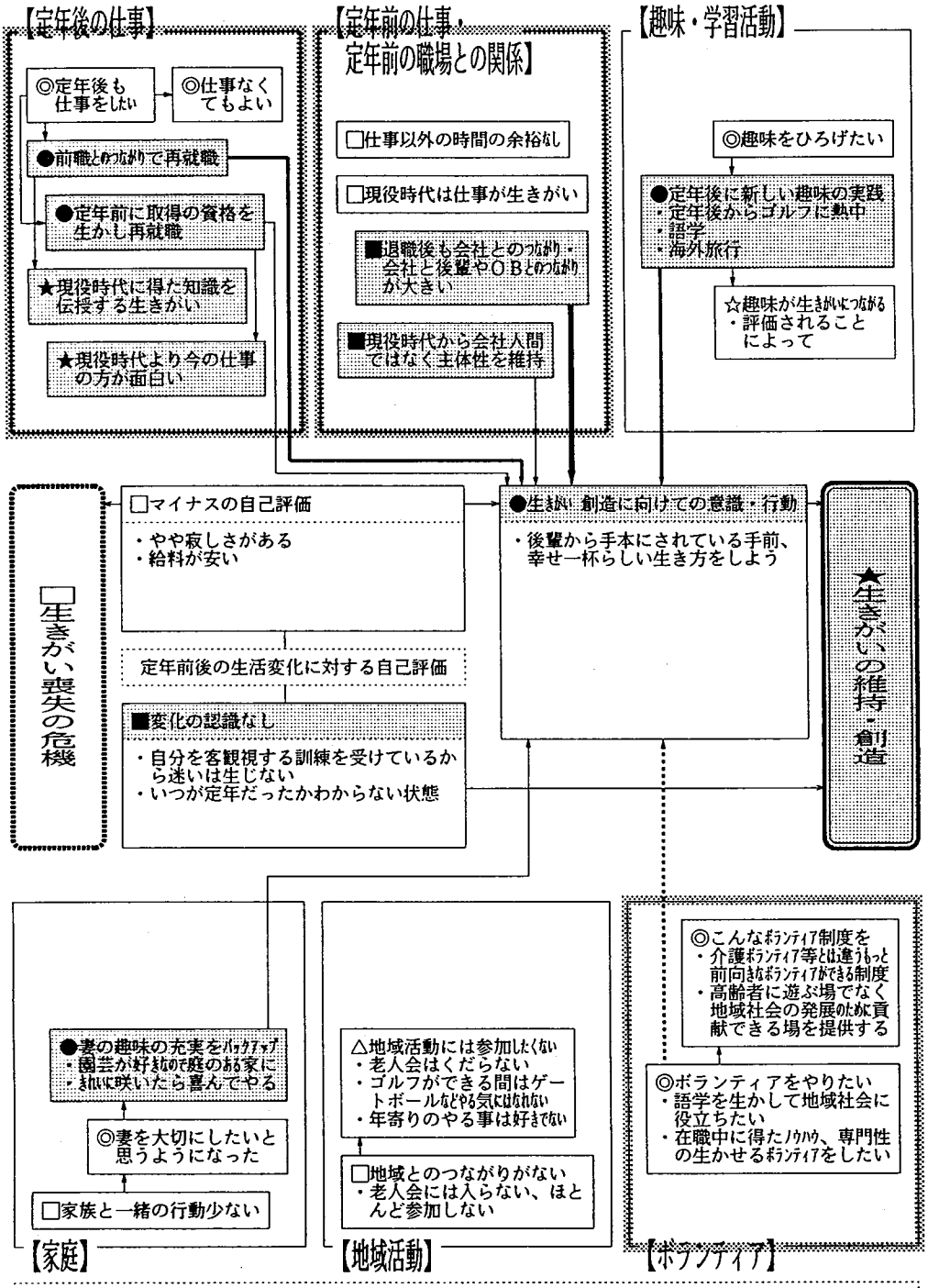
前述の分析標本の基本属性のところでみたように、年齢的には積極性上位グループ（社会活動あり）とほぼ同じであるが、定年後の現在も仕事に就いており、しかも現役時代と同様の仕事中心の生活を送っている者が多い。現在無職の者も大半は定年前の職場とのつながりを強く維持しており、他のグループに比べ生活の中で仕事の占めるウエイトが極めて高いといえよう。また、定年後10年以上が経過している者が半数以上を占めるにもかかわらずこうした状態にあるということは、これまでの職業生活の上でかなりの成功を収め、仕事の上での自信も大きいものと推察される。

定年前の生活は他のグループと同様に仕事中心の生活であり、「働くことが楽しみだった」、「役に立っているという満足感が生きがいにつながっていた」といった反応がみられる。また、定年後の生活変化に関してはマイナス評価が少なく、無職の者も「やや寂しいと感じる」、「幸せ一杯らしい生き方をしようと思っている」といった発言がある程度である。ただし、このグループでは全般に「○○したいができない、難しい」といった現状を否定的に捉える発言が極めて少なく、本音が表出されることが少なかったとも考えられる。

生きがいを得る場としては、以上のように定年後の仕事、定年前の職場との関係のウエイトが非常に大きく、それ以外の家庭、趣味・学習活動、地域活動、ボランティアに関しては、生きがい創造に向けての具体的な努力や行動があまりみられない。意欲の面でも他のグループに比べるとやや乏しい傾向にある。また、このグループがボランティアについて希望しているのは、「語学を生かして地域社会に役立ちたい」、「地域社会の発展のために貢献できる場が欲しい」といったことであり、福祉ボランティアをイメージするものではない。あくまで自分自身が仕事の中などで得てきた能力をもう一度生かしたいという意向である。

また、地域活動に関しては、ボランティアへの意向として「地域社会に貢献したい」との発言がみられるものの、老人会、ゲートボールにはほとんどの者が拒否反応を示し、地域とのつながりを求める意向はみられない。

図表Ⅱ－Ⅱ－7　グループインタビューにおける発言構造
〔C；積極性上位グループ（社会活動なし）〕



（注）
1. 【　】で示す枠は生きがい獲得の場を、枠の太さは生きがい創造に関わる意欲・希望の発言の多さを示す。
2. □△は生きがい喪失に関与すると思われる発言（□定年前後の実態，△意識）、◎■●☆★は生きがい創造に関与すると思われる発言を示す。（◎意欲・希望，■定年前後の実態，●顕在化した行動，☆行動の効果への期待、★行動の効果の実感）
3. 実線の矢印（ ⟶ ）は顕在化した行動が、点線の矢印（ ⇢ ）は意識や意欲・希望についての発言が各々生きがい喪失、創造のどちらに関与するものかを示し、矢印が太い程発言量が多いことを示す。

(4) D；積極性中・下位グループ

このグループは、積極性上位の２グループと比較してやや積極性の低いグループであるとの位置づけである。しかし、前述の分析標本の基本属性で述べたとおり、グループインタビューの対象者全体が第１次調査時の分布からみてやや積極性が高い者が多く、積極性中・下位という特徴は、あくまで相対的なものである。また、親和性が比較的高いという傾向を持つ。

定年後の生活変化に対しては、マイナス、プラスの両面の評価がみられる。

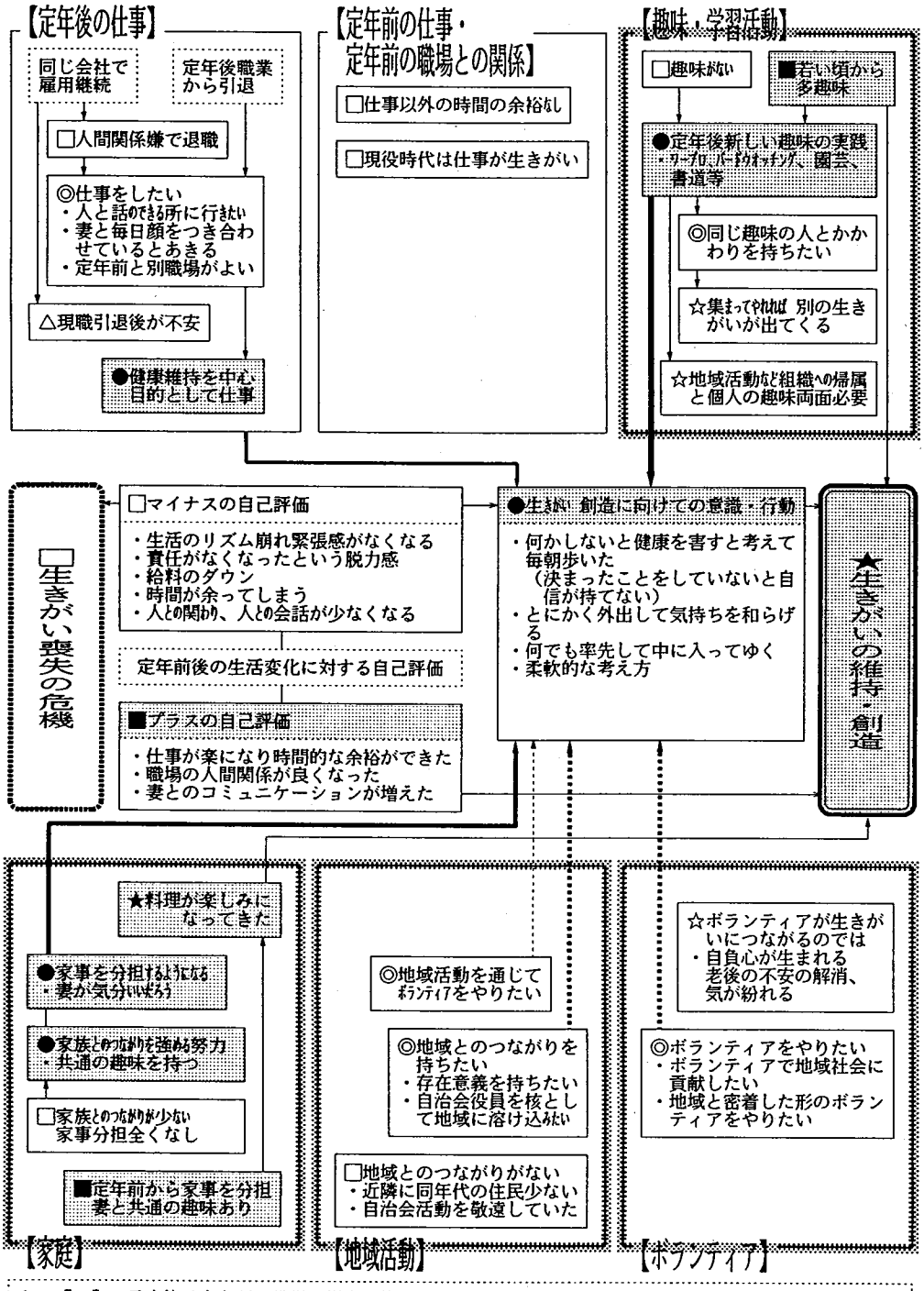
定年直後に喪失状態に陥った経験があるとする者も２名みられるが、両名とも、家庭、趣味・学習活動、定年後の仕事に関する生きがい創造への努力、行動の結果、定年後の生活に適応している様子がうかがえる。

またこのグループでは、定年前から多趣味であり、妻が自宅で商売を営んでいた関係で、日曜日の料理を分担したりと家庭生活への関与も定年前からあったとする者も１名みられる。このケースでも、定年前に仕事が忙しく、趣味に時間がさけない時期があったとされているが、配置転換によって仕事に余裕が出てくるに従って、趣味生活の拡大が自然に行われている。

生きがいを得る場としては、家庭と趣味・学習活動の場において、生きがい創造に向けての具体的な行動や努力がみられる。定年後の仕事についても、意欲がみられるが、定年前の延長線上での仕事を求める意向ではなく、「健康維持を中心目的として」仕事をするというスタンスであり、仕事だけを求めるのではなく、併せて趣味・学習活動、家庭の場での生きがい創造の動きも加えながらソフトランディングしていこうとする姿勢がみられる。

地域活動、ボランティアに関しては、意向は強いが具体的な行動を起こすに至っている者はなく、意向のレベルにとどまっている。この点が積極性上位グループ（社会活動あり）と大きく異なる点であるといえよう。

図表Ⅱ－Ⅱ－8　グループインタビューにおける発言構造〔D；積極性中・下位グループ〕



1. 【　】で示す枠は生きがい獲得の場を、枠の太さは生きがい創造に関わる意欲・希望の発言の多さを示す。
2. □△は生きがい喪失に関与すると思われる発言（□定年前後の実態，△意識）、◎■●☆★は生きがい創造に関与すると思われる発言を示す。（◎意欲・希望，■定年前後の実態，●顕在化した行動，☆行動の効果への期待、★行動の効果の実感）
3. 実線の矢印（ ⟶ ）は顕在化した行動が、点線の矢印（ ⇢ ）は意識や意欲・希望についての発言が各々生きがい喪失、創造のどちらに関与するものかを示し、矢印が太い程発言量が多いことを示す。

（注）

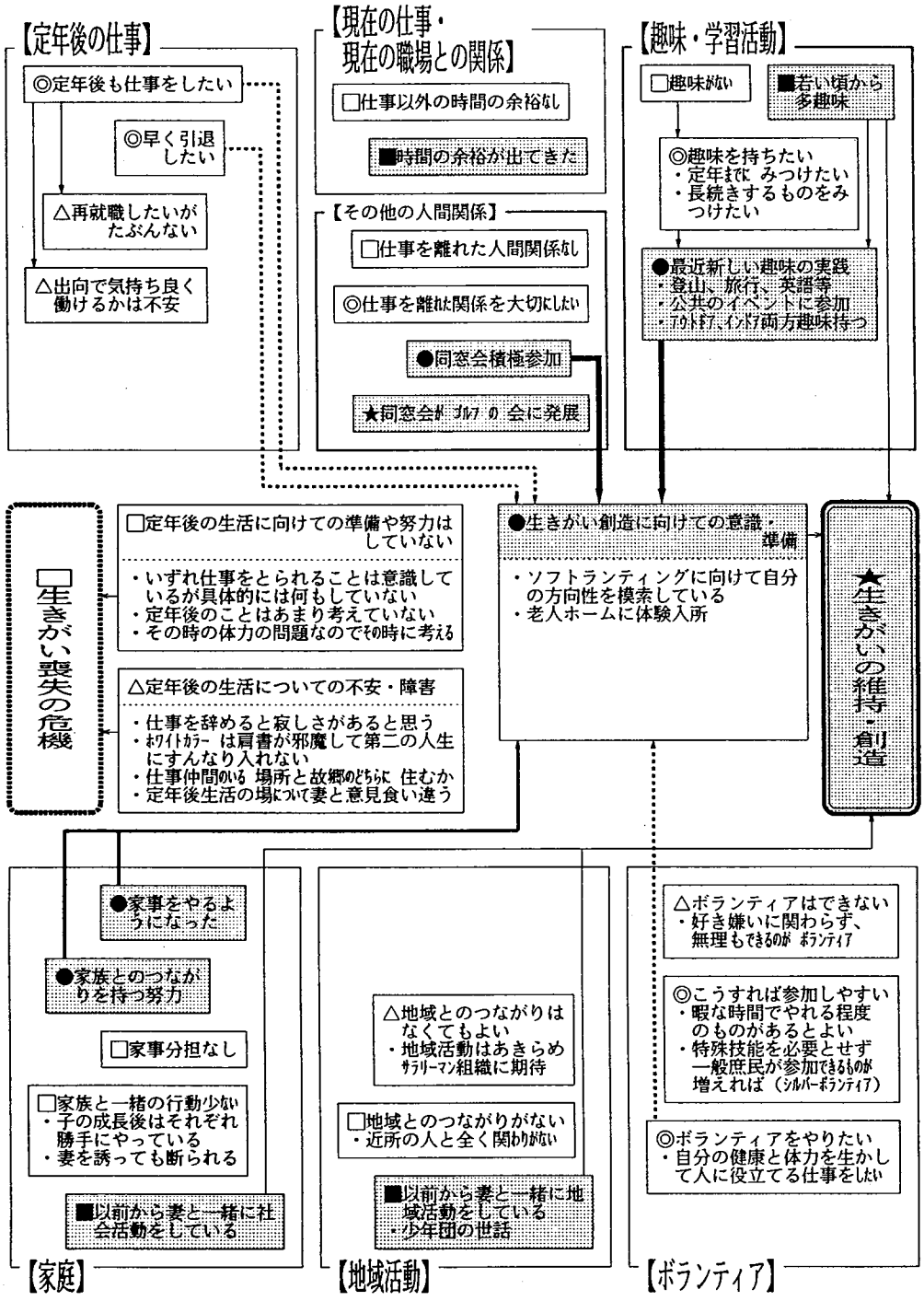
(5) E；現役グループ

現役グループは、全員定年退職を経験していない者であるが、昇進ラインからはずれる、出向するなどにより仕事の面で精神的、時間的な余裕が出てきている者が多い。これらの者では、生活が仕事中心の状態から変化している様子がうかがえる。仕事だけに関心が偏った状態から視野が広がることによって、趣味や社会活動、地域活動など活動の場のひろがりがみられる。また、生きがいや定年後の生活にも関心が向くようになり、結果として定年後のソフトランディングに向けての準備になっているようである。一方、依然として仕事中心の生活を送っている者では、趣味や社会活動などを行うゆとりがなく、定年後の生活についてはあまり考えていないとする発言がみられる。

定年退職後の生きがいの維持・創造に向けての動きとしては、仕事以外の人間関係の充実、趣味・学習活動の場での努力や行動がみられる。特に、仕事以外の人間関係の充実について熱心な者が多く、「会社の友達は友達ではない」との意識で積極的に同窓会等に関わっている。同窓会がゴルフの会等に発展し、仕事以外の人間関係の拡大につながっているとの発言もみられる。

また、ボランティアに関する意向もあるが、具体的に行っている者はない。「将来的にはやりたいと考えているが・・」との反応であり、「暇な時間でやれるものがあるとよい」、「特殊技能を必要としないシルバーボランティアがあるとよい」など、阻害要因や施策要望についての発言がみられる。

図表Ⅱ－Ⅱ－9　グループインタビューにおける発言構造〔E；現役グループ〕



（注）
1. 【　】で示す枠は生きがい獲得の場を、枠の太さは生きがい創造に関わる意欲・希望の発言の多さを示す。
2. □△は生きがい喪失に関与すると思われる発言（□定年前後の実態，△意識）、◎■●☆★は生きがい創造に関与すると思われる発言を示す。（◎意欲・希望，■定年前後の実態，●顕在化した行動，☆行動の効果への期待、★行動の効果の実感）
3. 実線の矢印（ ⟶ ）は顕在化した行動が、点線の矢印（ ⇢ ）は意識や意欲・希望についての発言が各々生きがい喪失、創造のどちらに関与するものかを示し、矢印が太い程発言量が多いことを示す。

(6) F；女性グループ

女性ＯＢのグループでは属性的な特性を統制するために、離死別のサンプルは除き、既婚でかつ現在配偶者がいる者、未婚の者という２層でグループを構成している。

現在就労している者が半数であり、これらの者は定年前と同じように仕事中心の生活を継続しており、定年退職による生活変化をさほど経験することなくきている。生活変化はむしろ今後の問題であるという認識である。無職の者からは定年後の生活変化に対してマイナス、プラスの両面が反応として出てきているが、３名の無職者のうち２名は、「特に変化はない」、「退屈することもない」など、定年退職後の生活に難なく適応している様子である。１名については、定年前から気持ちの切替えをはじめ、準備を整えて定年を迎え、マイナスの生活変化を認識しながらも、家庭、趣味・学習活動面での努力によって、生きがいの維持、再創造の過程にある。

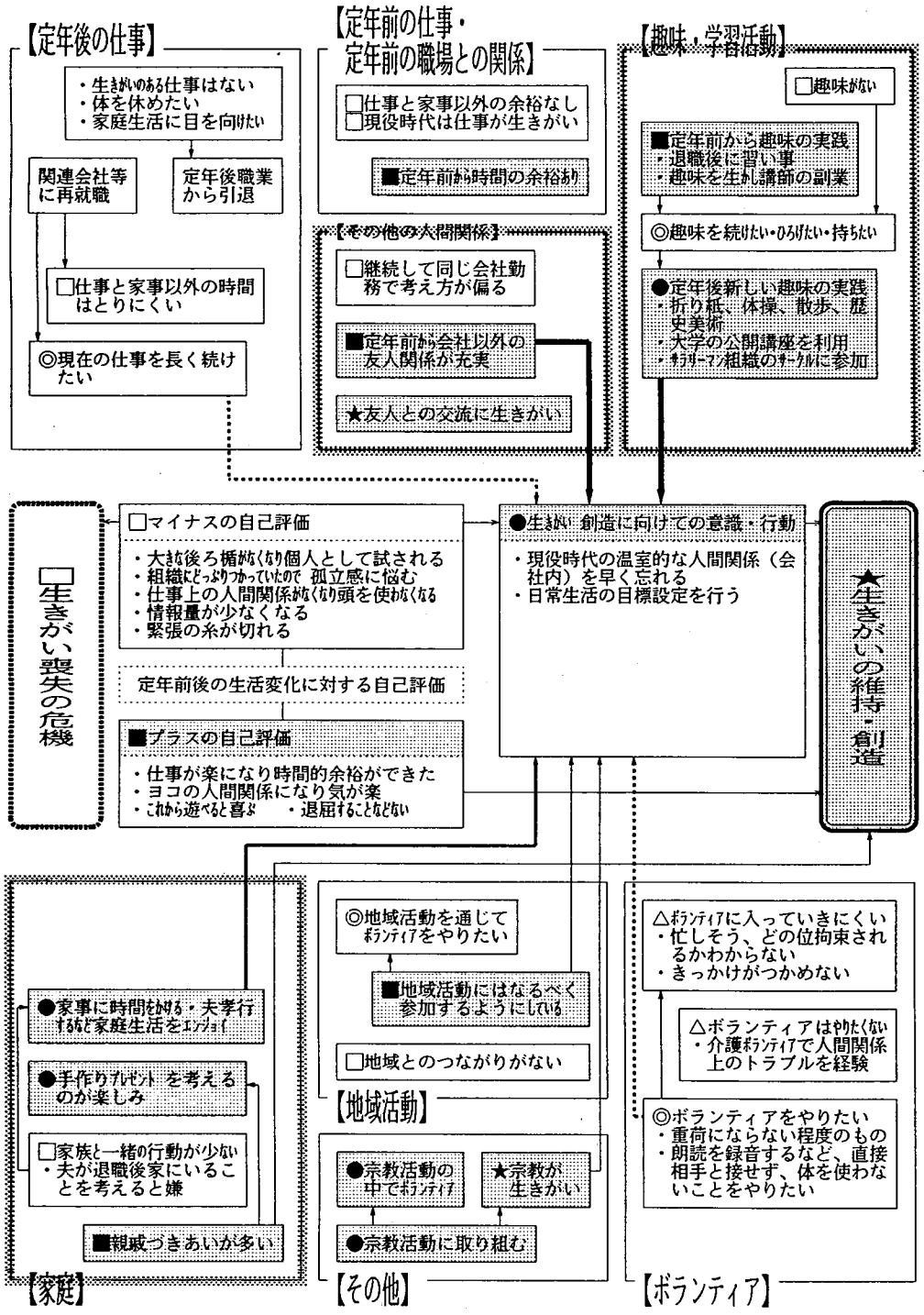
男性グループと大きく異なる点は、会社以外の人間関係、趣味・学習活動に関して、定年前から既に実態があり、生きがいの維持・創造に関与していると思われる点である。人間関係の面では、既婚者は家事との両立のためにやむを得ずという面もあるが、定年前から決して会社べったりではなく、学生時代等の友人関係を持続し、またこれを非常に重要なものと位置づけている。また、趣味・学習活動に関しては、定年前から残業はほとんどなく時間的な余裕があったとする者もみられるが、そうでない者でも忙しい仕事の合間をぬって、退社後のけいこごとを続けている。

また、男性にはみられなかった反応として、「定年退職後は家庭生活をエンジョイしたい」、「家事に手をかけたい」といった発言がみられる。男性グループで多くみられたような、定年後家庭に戻ろうとする時の軋轢というものは感じられず、スムースに家庭に戻っている様子である。

地域活動の面では、つながりが少ないという点で男性と同様であり、地域活動に対する意向もさほど大きくない。

ボランティア活動に関しては、将来的な意向はあるが、具体的な行動には至っていない。時間がとられることへの不安感もあり、直接人に接するボランティアよりもむしろ、自分のペースでやることのできるボランティアへの希望が大きい。

図表Ⅱ－Ⅱ－10　グループインタビューにおける発言構造〔Ｆ；女性グループ〕



1. 【　】で示す枠は生きがい獲得の場を、枠の太さは生きがい創造に関わる意欲・希望の発言の多さを示す。
2. □△は生きがい喪失に関与すると思われる発言（□定年前後の実態，△意識）、◎■●☆★は生きがい創造に関与すると思われる発言を示す。（◎意欲・希望，■定年前後の実態，●顕在化した行動，☆行動の効果への期待、★行動の効果の実感）
3. 実線の矢印（ ⟶ ）は顕在化した行動が、点線の矢印（ ⇢ ）は意識や意欲・希望についての発言が各々生きがい喪失、創造のどちらに関与するものかを示し、矢印が太い程発言量が多いことを示す。

（注）

II・5　詳細分析

(1)　定年前後の生活変化と生きがい喪失の危機

①現役時代の生活と定年後の生活に向けての準備

ＯＢが回想する現役時代の生活は、男性では各グループとも仕事中心であったとする者が大半である。「土日はゴロ寝」、「本当の意味の楽しみは全くない状態」という発言に代表されるように、仕事以外の生活の拡がりに乏しい状態であった者が多いようである。「趣味や生きがいなど考える余裕もない」という状態で、家族と一緒の行動が少ない、妻とつっこんだ会話がないなど家族とのつながりが少なく、地域活動も「全て妻任せ」というように地域とのつながりも希薄である。しかしながら、「我々の時代は仕事が楽しみ」、「仕事が生きがいだった」といった発言が多く、現役時代の生活が仕事中心であったことに対する否定的なイメージは、少なくとも現役当時にはなかった者が多いようである。

一方女性ＯＢでは、現役時代から退社後のプライベートな時間を確保し、習い事や趣味の活動等を行っていたというタイプと、多くの男性と同様に仕事中心、あるいは仕事と家事中心であったというタイプの２つに分かれる。後者のタイプでは、男性同様、趣味や社会活動まで手がまわらないとの発言がみられる。ただし、女性の場合は仕事中心の生活であったとする者でも学生時代の友人など職場を離れた友人との交流が保たれている様子がうかがえ、大半の男性と比較すると生活の場が多様な傾向がある。

現役時代の生活が一時期仕事中心であったとする発言は、共通反応としていずれのグループでもみられるが、積極性上位（社会活動なし）、積極性中・下位、現役の３グループでは一部の者に、定年が近づくに従って仕事中心の生活から仕事以外の場への生活の拡がりがみられる。そのきっかけは出向、配置転換等による業務内容の変化、年金関係の仕事に就き定年後の生活に関心が向くなど様々であるが、こうした者では、趣味を持つように心がける、定年後の再就職に向けて資格取得を行う、生きがいに関する本を読む、職場を離れた人間関係を大事にするなどの意識や行動の変化が多くみられる。これが結果として退職準備の役割も果たしているようである。また、女性グループでは退職前教育をきっかけとして定年後の準備を始めたとする者が１ケースみられた。

しかし、定年後の生活に向けての準備に関しては、一部に上記のような準備を行っている者がみられるものの、全体的な傾向としては特に準備はしていないという者が多いといえよう。「いずれ仕事を取られることは意識しているが具体的には何もしていない」という発言が代表的なものである。

②定年退職後の生活変化とその評価

定年退職後の生活変化に対する評価には、否定的な側面、肯定的な側面の両面がみられ、否定的な側面としては、「孤独感を感じる」、「緊張感がなくなる」、「人との関わりが減少す

る」、「時間を持て余す」といった点があげられている。一方肯定的側面としては、「いつでも旅行に行ける」、「ヨコの人間関係になり気が楽」、「時間的な余裕ができた」といった点があげられている。「時間的余裕」に関しては、肯定、否定両面の評価がなされており、定年後の生活への適応の状況が端的に現れている発言であるといえよう。

ＯＢの場合はいずれのグループでも定年退職後の生活変化に対する否定的な自己評価が大なり小なりみられ、肯定評価が否定評価を上回って発言されたグループはみられない。

しかしながら、定年退職後の生活変化に対する肯定的側面と否定的側面の評価のバランスにはグループ差がみられる。積極性上位グループ（社会活動あり）、積極性中・下位グループでは肯定的・否定的の両面が評価されているのに対し、喪失経験グループは否定的側面の評価が目立ち、肯定的側面の評価がほとんどみられない。

また、積極性上位グループ（社会活動なし）は定年後、現役時代と同様のやりがいが得られる職業生活の継続に成功、または退職後も現役時代の人間関係を維持しているために、定年退職後の生活変化そのものの認識に乏しい傾向にある。このグループでは肯定的側面の評価がみられないとともに、否定的側面の評価も他のグループに比べて少ない傾向がみられる。

喪失経験グループで否定的側面の発言量が特に多いという傾向はみられない。積極性上位グループ（社会活動あり）、積極性中・下位グループとの違いは、こうした否定的側面に対処した、新しい生活への適応に向けての意欲や具体的な行動に乏しいという点にあり、これが生きがい喪失状態につながっているようである。定年後の新しい生活に適応し、生きがいを持って生活しているグループでは、定年後の生活の否定的側面を客観的に認識することで、新しい生活の場への意識の拡がりがみられている。

また、定年後のライフコースにより生活変化があると認識するか否かについても差が大きい。定年を迎えても同じ企業内で雇用継続しているなどの場合には定年を過ぎたという意識自体が希薄であり、むしろ現役の者と同様に今後を不安に感じる発言がみられる。前述のように定年前に職業生活上の変化が段階的にあった者では、それが定年後の生活への準備を喚起していることもあり、定年後の適応がスムーズであるようである。さらに、定年後に一気に引退して無職の状態になったために生きがい喪失に苦しみ、悩んだ末に「どんな仕事でも」と再就職を果たしたことで、趣味など仕事以外への意欲も芽生えてきたというケースも何例かみられる。第１次調査でも指摘されている点であるが、定年前後に職業生活上で段階的な変化を経ることは、一時期に職業を離れる場合に比べてリスクが少ないことが指摘されよう。

(2) 生きがい

①生きがい感

第１次調査において、「生きがい」を表すのに最も適当なものをあげてもらったところでは、「生きる喜びや満足感」をあげる回答が47.0%にのぼり、「生活の活力やはりあい」を35.2%「他人や社会の役に立つ」を25.5%、「心のやすらぎや気晴らし」を24.9%があげている。今

回の事前調査でも上位3項目は共通であるが、第1次調査に比べて「他人や社会の役にたっていると感じるもの」との回答がやや多い傾向がみられた。一方、グループインタビューの中で直接表出された生きがい感に関する発言は図表Ⅱ－Ⅱ－11のとおりであり、第1次調査、事前調査で最も多かった『満足感』についての発言は少なく、生きがいの意味として『貢献感』、『評価感』、『有用感』、『達成感』といったものを求める発言が多くみられる。特に積極性上位グループ（社会活動なし）、積極性中・下位グループ、現役グループではこうした傾向が目立つ。こうした生きがい感の対象を仕事ととらえている場合には、現在の実感あるいは過去の回想として発言されているが、積極性中・下位グループでは、趣味やボランティア活動など仕事以外の活動の中で、『貢献感』、『評価感』といった感覚を得たいとする願望として語られることが多かった。しかし、女性グループでは『達成感』や『貢献感』といった感覚を生きがいに求める発言はみられず、生きがいに男女の違いがあることが示唆された。

図表Ⅱ－Ⅱ－11　生きがい感についての発言内容（グループ別）

A	・仕事を成し遂げる使命感　・満足感 ・物事に熱中すること　・趣味を目標を持ってやる ・お金を使う部分と自分で稼ぐことの両方がないと活力がでない
B	・何かに到達する過程　・私自身毎日が楽しみであればよい ・スポーツの中で厳しいコーチにほめられた時
C	・生きがいという言葉は非常に漠然としているが、集約すれば自己満足 ・働いて世のため、人のためになっているなと思うことが生きがい ・絵でも、一人で描いて誰も見てくれないのでは生きがいとはいえず、評価されることが生きがいにつながる ・生きがいは評価されることだから、生きがいの最たるものは、わずかでもお金を稼ぐことぐこと ・組織のなかで役に立っているという楽しみが一つの生きがいになっている
D	・必要とされている、役に立っているという 自己満足　・自分は何かをやっているという自負心 ・自分がいなくてはというもの、自分もこの位のことができるというものに関わる ・一緒に何かをやっていくという仲間意識　・趣味も楽しむだけでは生きがいにならない
E	・何かに挑戦し達成する過程　・自分が何かの役に立っているという気持ちが持てる ・好きな事に熱中している状態　・人とのよい関わりを持てること
F	・好きなことをするというのが生きがい

（注）A；喪失経験グループ　B；積極性上位グループ（社会活動あり）
C；積極性上位グループ（社会活動なし）　D；積極性中・下位グループ
E；現役グループ　F；女性グループ　図表Ⅱ－Ⅱ－12～19についても同様。

②生きがいの対象

現役時代に関しては、仕事が生きがいであったとする発言が大半を占める。「振り返ってみれば仕事が生きがいだが、当時はそう思っていなかった」など現役時代にはっきりと仕事が生きがいであると認識していたという者は少ないようであるが、少なくとも現役時代に仕事以外の対象に生きがいを持っていたとする者はごく少数である。

定年後も、「仕事が生きがい」とする発言はみられ、特に喪失経験グループと積極性上位グループ（社会活動なし）では生きがいの対象として仕事以外のものをあげる発言が少ない。趣味を生きがいにしたいとの発言が一部にみられるが、これも目標のある趣味、評価される趣味

といった表現であり、ただ趣味を楽しむだけでは生きがいにはならないという評価である。

一方、積極性上位グループ（社会活動あり）、積極性中・下位グループでは仕事以外の日常生活の中で生きがいを感じているとの実感が一部に表出されており、ボランティア活動を生きがいの対象として期待する発言が多くみられる。

現役グループでも「仕事が生きがい」との発言がみられるが、友人関係、宗教など仕事以外のものに生きがいを感じているとの発言もみられる。

図表Ⅱ－Ⅱ－12　生きがいの対象についての発言内容（グループ別）

A	・仕事が生きがい ― 仕事と趣味のゴルフは同列に並ばない ・失業保険や年金の問題もあるので、それを キャンセル するだけのやりがいのある仕事だったらやりたい ・草刈りだとかビル掃除だとかの仕事は生きがいだとは思えない ・村のお祭りに入れてくれるのなら喜んで行く ・何か良い趣味を持つことが大事（目標のある趣味、収入のある趣味等）
B	・ゴルフは好きだが、生きがいとはいえない　・体を動かすこと　・趣味のスポーツ ・自分がやる気になって、終わって生きがいを感じるようなボランティアのシステムがあるとよい ・自分の子供たちの家族と仲良くやっていければ、それが生きがい ・生きがいは、まず健康で、毎日自分に与えられたもの、遊び、畑、人とのつきあいを やっていくこと
C	・自分が定年までに得てきたノウハウを若い経営者に吹き込んで会社をよくしてやること ・生きがいは評価されることだから、生きがいの最たるものは、わずかでもお金を稼ぐこと ・組織のなかで役に立っているという楽しみが一つの生きがいになっている ・自己実現のプロセス　・生きがいには 友人とのつながりが大切　・評価される 趣味 ・地域社会の発展のために貢献する
D	・仕事を生きがいとして長く続けたい　・帰属集団を持った上で個人の趣味を持つ ・最後は草むしりでも清掃でも地域でのボランティアで生きがいを見いだしたい ・自分の趣味を生かしたボランティアを率先してやること ・ボランティアで地域社会に貢献する　・やりたいことをやるというのが生きがい
E	・仕事が生きがい　・仕事だけが生きがいという生き方は嫌と若い頃から思う ・若い頃は仕事が生きがいだが、定年後仕事から離れたら何もなくなってしまうのでは寂しいので何かを求めるようになる ・お金があり、自分が本当にやりたい趣味を持つ
F	・仕事をしているから、やっぱり仕事が生きがい。それがなくなれば、趣味を活かして自分でやっていくということが生きがいになる ・密教を極めること　・友達といつまでもつきあうこと

（注）グループ名は図表Ⅱ－Ⅱ－11の（注）を参照。

③生きがいのとらえ方

生きがいについて話題を投げかけた時の出席者の反応には、一応にとまどいがみられ、現在、過去の仕事など生活の状況についての話題に比べると、活発な発言が出にくい傾向があった。生きがいに関して特に意識することなく生活してきた者が大半のようであり、「生きがい」について改めてたずねられると、自信を持ってこれが「生きがい」であると答えられる者は少な

かった。現役、あるいは定年後でも継続的に就労している者では仕事が生きがいとしてあげられることが多いが、生きがいの対象としての仕事を失った時に、それにかわる対象を見いだすことは容易ではないようである。前述のように既に仕事以外の対象に生きがいを感じているとする発言も一部にみられるが、大半は新たな生きがいを求めて模索しているという状況のようである。そうした中で、「生きがいというのは持たなければいけないのか」といった発言もみられる。しかし、「仕事が生きがい」とする考え方に対しても、積極性中・下位グループからは「現役時代は仕事が生きがいだと錯覚しているだけで、働きがいと生きがいは違うのでは」とする発言がみられ、定年を契機に「生きがいとは何か」について再考する動きもみられる。

また、生きがいの前提条件として健康、経済面の充実が必要とする発言は、共通反応としてみられた。しかし、経済的な面を重視する程度はグループによって異なり、積極性上位グループ（社会活動あり）では経済面の必要性が強調される傾向にあったのに対し、積極性中・下位グループでは「経済面は他のものでカバーできる」との発言がみられた。

図表Ⅱ－Ⅱ－13　生きがいのとらえ方（グループ別）

A	・結果的にみてそれが生きがいと判断　・特にこれが生きがいと考えていない
B	・あなたの生きがいは何ですかと真っ向からぶつけられたら困る ・生きがいとはどういうものか分からない。今の生活に満足したり、楽しんでいたりすることか、目標なのか、心の支えなのか ・生きがいは自分の求めるもので人から与えられるものではない ・生きがいを持つか持たないかで人生は変わる ・生きがい、夢は大きいほうがいい、そうすればなかなか到達しないから ・生きがいは、自分が一生懸命やっていて 時々くるもの、それが毎日続くと生きがいでなくなる ・名刺みたいに、人に言えるような生きがいを持たないといけないのか ・老人はいろいろな過去を持っているから、まとめて生きがい教育をしてもダメ ・生きがいは人により 大きいのも、小さいのもあるから、人の生きがいは聞くものではない ・生きがいはあるけど、人には言わない
C	・生きがいと改めて聞かれたら答えにくい ・生きがいのない人間なんて特殊な人間で、皆ある意味では生きがいを持っている。内容は千差万別だから探索しても意味がない ・退屈していないことが生きがいを持っていること ・孤立していては生きがいは生まれない ・お金がない、時間がないといった制約があったら生きがいにならない。自分の枠内で自由闊達に動ける状態にあることが生きがいのある毎日 ・生きがいなど作らなくても、人に迷惑をかけずに生きていけばよい
D	・生きがいとは何かは難しい　・生きがいが何かは人によって違う ・現役時代は仕事が生きがいだと思ってしまっている　・働きがいは生きがいと違う ・ゴルフやテレビが生きがいだというと笑われそうだけど 、ボランティアが生きがいだというと恰好が良い
E	・人にやらされてやっているというのは生きがいではない ・生きがいは一つではなく、いくつもが複合して生きがいになる

（注）グループ名は図表Ⅱ－Ⅱ－11の（注）を参照。

(3) 生きがいを得る場

Ⅱ・4で述べたとおり、インタビューの中では、生きがいを得る場として、「仕事・会社」、「家庭」、「地域活動」、「ボランティア」、「趣味・学習活動」、「仕事を離れた友人関係」といった発言が多くみられた、ここでは、これらの場ごとに、定年前後の生きがい喪失・創造の動きをみてみる。

①仕事・会社

定年後の仕事・会社の場における生きがい創造に向けての動きとしては、2つの方向性がみられる。1つは現役時代に仕事に生きがいを見いだしていた延長線上で、定年前と同様の内容の職業や現役時代の職場との関係を維持しようとする動きであり、もう1つは定年前とは異なるスタンスで仕事を求める動きである。前者の方向性としては、就業上の地位、職務内容等のレベルが維持されていると自己評価されている雇用継続や再就職が多い。この場合「いつが定年だったかわからないような状態」との発言が多くみられる。この他には定年前に役員などの役職に就いており、定年後無職になった後も「以前の部下がゴルフに誘いにくる」など現役時代の人間関係が維持されているために生活の転換の必要性を実感していないと思われるケースや、定年後の再就職に向けてシニア期に資格取得を行い、その資格を生かした再就職を果たしているケースなどがみられる。こうしたケースは積極性上位グループ（社会活動なし）に多い。しかしながら、このような職業や職業上の関係の維持は、そう容易なものではないと思われる。定年後の再就職に定年前と同じレベルの内容を求めようした場合には、職を得るのは非常に困難である。喪失経験グループでは、これに失敗して喪失状態に陥っている者が多くみられる。

一方、後者の現役時代とは異なるスタンスで仕事を求める動きは、「パートでもいいから働く」、「健康維持を中心目的として働く」というように、現役時代の仕事とは切り離し、仕事に対する価値観を転換させて再就職を求めるもので、積極性上位グループ（社会活動あり）、積極性中・下位グループにみられた。こうしたケースでは、定年前後の生活変化やそれに伴う喪失状態を経て考え方を変化させている様子がうかがえる。現役時代と異なり仕事の場だけに生きがいを求めている様子がなく、仕事以外の、家庭、地域活動、趣味活動といった場への関心や生きがい創造に向けての具体的な行動がみられる。これに対して、前者の仕事・会社に対して現役時代と同様の価値観を維持しようとする方向性では、定年前後の生活変化への認識が乏しく、考え方や行動を変化させる動きが少ないという傾向がインタビューの発言からうかがえる。やがて無職になる場合を考えると、このことは将来的に生きがい喪失の事態に直面する危険性を内包していると考えられる。

②家庭

サラリーマンの生活が仕事中心であり、家庭生活への関与が少ないことはよくいわれることであり、今回のグループインタビューでも定年前の生活では夫婦関係や親子関係が希薄である、

家庭内の仕事への関わりが少ないという者が多くみられた。「妻とのつっこんだ会話がない」、「子どもが成長してからは家族と一緒の行動が少ない」、「すれ違いの生活」といった発言をする者が多く、家事に関与していたとする者もごく少数であった。

一方、定年後のサラリーマンにとっての『家庭』においては、親子関係よりもむしろ夫婦関係が重要となってくる。定年後の夫婦関係についても、問題があるとする発言が全てのグループでみられたが、中でも喪失経験グループにおいて特に否定的な発言が多く、かつその状況を打開する動きに至っていない発言が多くみられた。例えば喪失経験グループでは「家族のお荷物」、「粗大ゴミのように思われているのでは」、「共通の趣味を持つといっても難しく、一緒に旅行にいく程度」といった否定的な見方をしている。一方、積極性上位グループ（社会活動あり）、積極性中・下位グループでは、定年前の夫婦関係の問題点と定年後に新しい夫婦関係を築いていくことの難しさを述べた上で、それに関して努力をしている者が多くみられる。これまで会話がほとんどなかった妻に対して、日常生活の上で「質問することからはじめた」とする者や、「協力すると妻の気分が良いだろう」と家事を分担する者、妻の趣味に関心を向けて共通の趣味を持つよう努力する者などがあり、料理を始めたとする者では、「こんなに楽しいものだったのか」と新しい楽しみを見いだせたとする評価もみられる。

女性グループで配偶者のいる者では、「定年後は家庭生活をエンジョイ」、「夫孝行を」など、これまで家庭と仕事との両立の中で家庭生活が充実できていないとの思いから、定年後の生活を家庭と結び付けてイメージする傾向にある。しかしその反面、男性の発言と同様に「ずっと２人で家にいることを思うと嫌になる」との否定的な発言もみられる。夫が無職になった時のことを考えて、休日は努めて夫婦ででかけるようにしているとするケースもみられた。

③地域活動・ボランティア

まず地域活動に関しては、定年前から自治会など地域の活動に参加していたとする者は少なく、いずれのグループでも大半の者が「近所の人との関わりは全くない」、「忙しくて自治会は敬遠していた」など、地域とのつながりが少なかった実態を発言している。

今後の地域活動の意向は、参加したいとする発言と、参加したくない、参加は困難なのであきらめるとする発言とに分かれる。参加したくないとする者は、「変なしがらみが出来て嫌な思いをする」といった理由をあげている。参加は困難なのであきらめるとする者では、地域をこえたサラリーマン組織などで活動を行いたいとする発言等がみられる。地域活動に参加したいとする発言が多かったのは積極性中・下位グループであり、その他のグループでは参加したい、参加したくない、できないとする発言の両方がみられた。

地域活動を求める理由としては、「これまでずっと組織に帰属してきたので、何らかの組織に帰属することと、個人の趣味を持つことの両方が必要」との発言がみられた。

しかし、地域活動への参加の意欲を持つ者で、実際に定年後に地域とのつながりができたとする発言は非常に少なく、積極性上位グループ（社会活動あり）で１ケースみられるのみであ

る。このケースではゴルフ大会への参加をきっかけに地域とのつながりを持ちはじめている。

ボランティア活動は、定年後の新しい生きがい獲得の場としての期待が非常に大きく、喪失経験グループを除く全てのグループで活動意向が表明されている。「何か社会に還元したい」、「役に立つことをしたい」といった発言にみられるように、仕事以外の場での達成感、有用感、貢献感といった生きがい感をボランティアに求めているようである。希望するボランティアの内容としては、庭木の剪定、ひとり暮らし老人の訪問、趣味を生かして人に教えるなど、趣味や地域活動の延長でボランティアをやりたいとする発言が多くみられた。ただし、積極性上位グループ（社会活動なし）がイメージするボランティアは、前にふれたように福祉ボランティア的なものではなく、自分の専門的な知識等を役立てたいとするものであり、他のグループとはややスタンスが異なる印象を受けた。

④趣味・学習活動

若い頃から多趣味で、現在も多くの趣味を持って生活を楽しんでいるという者は積極性中・下位グループと現役グループ、女性グループの一部にみられた。ＯＢで趣味を多く持つ者でも現役時代の一時期、仕事が忙しく趣味に割く時間がなかったとの発言がみられるが、定年後は比較的スムーズに以前から持っていた趣味を中心とした生活に移行しているようである。また、男性ではこのように定年前から趣味活動が充実していた者は一緒に趣味を楽しむなど夫婦関係も密接である様子がうかがえた。

ＯＢの多くは、趣味は「あえていえばゴルフ」との発言に代表されるように、現役時代にはこれといった趣味を持っていなかった者であるが、定年前後に新たに趣味をひろげている様子は喪失経験グループを除けばいずれのグループでもみられる。また、現役グループでも「定年を控えて趣味を持つよう心掛けている」といった発言が多くみられる。

趣味活動の内容は人それぞれであり、活動の方法も市民講座等に参加、ＯＢ会で、サラリーマン組織で、自分一人でなど、多様な発言がみられた。

趣味に何を求めるかについても様々なタイプがあるようである。趣味を通じての人間関係を重視する発言は、積極性上位グループ（社会活動あり）、積極性中・下位グループ、女性グループにみられ、積極性上位グループ（社会活動あり）では「趣味の友人は、同じ目標があって年齢も性別もなく、とても良い」と、趣味での人間関係に充実感を見いだしている者がみられる。この他、「コンクールに出展する」、「書道などで級を上げるのが目標」、「趣味も評価されることがなく、ただ楽しむだけでは生きがいにはならない」、「趣味を生かしてボランティアを」など達成感や評価感を重視する発言もみられる。

また、積極性上位グループ（社会活動なし）では現在有職の者を中心に現在も趣味・学習活動を行っていない者が多い。行っている者の内容は、語学、ゴルフ、旅行といったものであり、こうした活動の中での新しい人間関係の広がりはみられない。

⑤仕事を離れた友人関係

仕事を離れた友人関係を重視する発言は、現役グループ、女性グループで特に多くみられた。現役グループでは、「会社の知人との酒、マージャン、ゴルフのみで定年後が不安」、「会社の友達は本当の友達ではないとわかってきた」といった現在の交遊関係を危惧する発言がみられ、同窓会に積極的に参加する、幹事を引き受けるといった動きがみられる。

女性グループでは、学生時代の友人を中心とした友人関係を、現役時代から大切にしてきたとする発言が多くみられ、そうした友人との会合や旅行に充実感を感じている。

(4) 生きがい創造に関わる行動

① 現在行っている生きがい創造に向けての行動

グループインタビューの発言から定年後の生きがい創造のプロセスについてみてみる。定年退職前のサラリーマン、特に男性の生活は仕事が中心で、仕事以外の場への生活の拡がりに乏しいため、定年退職後、仕事という場を失うと精神的な落ち込みを感じる場合が多く、また定年前後の生活変化に対して否定的な自己評価がみられる。極めてスムースに定年後の生活に適応し、生活変化への否定的な評価がない事例も一部にみられるが、稀なケースであるといえよう。しかし、定年退職後の生活変化に対して否定的な自己評価を持つこと自体は、それが直接生きがい喪失の状態に結びつくものではなく、その後、その否定的に自己評価される状態から生きがい創造に向けての意欲や行動がみられるか否かが、生きがい喪失状態を招くか、あるいは新しい生きがいを創造して定年後の生活に適応していくかの分かれ目になるようである。

図表Ⅱ－Ⅱ－14は、各グループの発言にみられる定年後の生きがい創造に向けての行動とみられるもの（現在行っているもの）をまとめたものである。喪失経験グループ、積極性上位グループ（社会活動なし）が他のグループに比べると生きがい創造に向けての行動が比較的少なく、また行動の内容に仕事に関するものが多い傾向がみられる。生きがいを得る場ごとに行動をみると、最も多様な場で行動がみられるのは積極性上位グループ（社会活動あり）、積極性中・下位グループであり、家庭、仕事、趣味、地域活動のいずれの場でも何らかの行動がみられる。また、積極性中・下位グループは、「とにかく体を動かす」ことを志向する発言が多くみられた。

② 生きがい創造に向けての心がけ、今後の行動意向

生きがい創造に向けての心がけや今後の意向に関する発言としては、喪失経験グループを除いてボランティアをやりたいとする発言が目立った（図表Ⅱ－Ⅱ－15）。喪失経験グループでは今後の意向としても仕事に関する希望が発言されており、特徴的である。これに対して積極性上位グループ（社会活動あり）では仕事に関連して「会社に対する気持ちを断ち切ることが大切」との発言がみられる。

図表Ⅱ－Ⅱ－14　生きがい創造に向けての定年後の行動（グループ別）

A	・定年後、１ヵ月ほど家族でヨーロッパ旅行に出かけた。その後、家でぶらぶらしていると何かしなくてはという気持ちになって、仕事を始めた【家庭・仕事】 ・定年後家でぶらぶらしているのはよくないと、新聞のチラシで見つけてパート勤務【仕事】 ・中国語を習ったり、暇つぶしに本を読んだりしている【趣味】 ・土日にテニスをしており、テニス仲間とのつきあいあり、趣味だけでやるのはつまらないので、大会で勝つことを目標にする【趣味】
B	・妻との会話を始めた【家庭】 ・妻が仕事を持っているので、料理をやるようになった。自分でやってみて結果を見られるのは楽しいなと思いはじめた。夫婦の会話も増えた【家庭】 ・何でも良いから臨時で使ってくれと民間のところへ行った【仕事】 ・若い人に頭を下げたこともなかったが、ペコペコ下げてダンスを習った。その後インストラクターになった【趣味】 ・血の巡りが悪くならないようにと卓球を始めた【趣味】 ・定年後、これではいけないとライフワークを真剣に考えた【趣味】 ・好きなゴルフを死にものぐるいでやっている【趣味】 ・大学の講座に出席し、キャンパスライフを楽しんでいる【趣味】 ・ＯＢ会、自治会、老人会などで世話役などを引き受けている【地域・その他】 ・ボランティア（身障者のデリバリー）をやっている。穀潰しのストレス解消、自己満足【ボランティア】 ・深いことは考えない。健康で、ゲートボール、人の世話焼き、畑仕事と好きなことをやるだけ
C	・在職中に取得した資格を活かして再就職【仕事】 ・自分が定年までに得てきたノウハウを、若い経営者に吹き込み会社をよくしてやる【仕事】 ・ライフプランの重要性を考え趣味を拡げた【趣味】 ・インドネシア語に興味を持った。語学に自信あったが、上達しないので全力投球【趣味】 ・定年後はゴルフ三昧【趣味】 ・60歳過ぎての給料は人生の余禄と思い、全部使い切る方針で頻繁に海外旅行【趣味】 ・昔勉強した中国語を、公民館の講座を利用して勉強している【趣味】
D	・声を出して話しをする ・なるべく外出する（家にいるとゴロ寝→つまらないことを考える） ・健康維持のため 万歩計持ち毎朝３キロ歩く（決まったことをしていないと　自信が持てない） ・家事を分担。料理に凝る（自分専用の包丁）【家庭】 ・妻と共通の趣味を持つ努力（妻の趣味に合わせる）【家庭】 ・妻とよく一緒に出かけるようになる【家庭】 ・どんな仕事でも良いから働く【仕事】 ・区の催しに参加してバードウオッチング、野鳥モニター（やってみると楽しい）【趣味】 ・旅行のサークルに入って同年代の人との旅行【趣味】 ・ワープロに挑戦（職業訓練校、通信教育を利用、職場で）【趣味】 ・通信教育で書道（上の級に昇格する努力）【趣味】 ・菊作りコンクール 入賞をきっかけに熱を入れるように【趣味】 ・自治会役員を核に地域社会に溶け込む【地域】
E	・１日１万歩実践 ・一生懸命女房孝行【家庭】 ・英語の勉強をはじめる（通信教育）【趣味】 ・ワープロ、パソコンの勉強をはじめる【趣味】・青少年団体の世話【趣味】 ・休日に書道教室を開く【趣味】　・大学の公開講座等に参加【趣味】 ・寺回り、地域をくまなく歩く（新聞でみつけた 郷土史研究家と一緒に歩くイベント参加）【趣味】 ・できるだけ県等主催のイベントに参加する【趣味】 ・静的なもの、動的なもの（インドア、アウトドア）と趣味をバランスよく持つ【趣味】 ・同窓会に積極参加、世話役 ・老人ホームに体験入所して将来手伝えることがないか考える
F	・日常生活の行動目標を立てる ・仕事をやめても 親戚や友人のところに 出かけたりと忙しく、退屈することない【家庭】 ・毎日10キロを目標に歩いている ・健康のために体操を続けていく ・稽古事や習い事で毎月出かけることがたくさんある【趣味】 ・旅行と芝居を楽しんでいる【趣味】 ・大学の公開講座や区民大学に通っている【趣味】 ・友人たちと旅行や麻雀【趣味】 ・洋裁は目が大変なので、お花や書道【趣味】 ・宗教活動にとりくみ、免状取得 ・他の会社の人と旅行に行ったら楽しかった、そういう会合に出るのもいいものだと 思う

（注）グループ名は図表Ⅱ―Ⅱ―11の（注）を参照。

図表Ⅱ－Ⅱ－15　生きがい創造に向けての心がけ・今後の行動意向（グループ別）

A	・趣味は土日に若い方と一緒にやって、平日は何かで稼いで生活したい。お金を使う部分があって、それに対して稼ぐということがないと活力がでない【仕事】 ・定年後、趣味を活かしていくらか収入があるというのは必要【趣味・仕事】 ・定年後は趣味をもっと活かして生活をｴﾝｼﾞｮｲ することで納得していきたい【趣味】 ・村のお祭りに参加させてくれるというのなら喜んでいったかもしれない
B	・会社に対する気持ちを断ち切ることが大切 ・新しく、子どもに帰ったような気持ちになって始めることが大切 ・なるたけ頑固にならない。自分に固執しない ・自分の子供たちの家族と仲良くやって行きたい【家庭】 ・ゆっくりと時間をかけた旅行をしてみたい【趣味】 ・社会に貢献する何か、ボランティアなどをしたい【ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ】 ・自分の体を動かして、皿洗いでも良いからできることから入っていきたい【ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ】 ・何か社会に還元していきたい【ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ】
C	・中国語を活かして地域社会のために何か役に立ちたい【ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ】 ・年寄りの知恵を子どもや青年に伝える場を作る【ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ】 ・同じ業種だけでなく、地域社会でも何でも広く人と交わることに 積極的になるほうがよい ・「幸せ一杯」らしい生き方をするのが目標
D	・地域活動の中でﾎﾞﾗﾝﾃｨｱをしたい（ひとり暮らし高齢者を訪問する）【ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ】
E	・全国組織のサラリーマンの会などで趣味などやりたい【趣味】 ・定年後健康で家庭も安定していたらボランティアをやりたい【ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ】 ・定年までに体の動く範囲でできることをみつけたい
F	・（現役のころの）温室的な人間関係を早く忘れること ・中国語を覚えたい【趣味】 ・スポーツとかに取り組みたい【趣味】 ・団地に住んでいるので地域のボランティアをやっていきたい【ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ】 ・退職後は、体を使わない（肉体的に大変でない）、朗読などのﾎﾞﾗﾝﾃｨｱをやりたい【ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ】 ・暇になったら何か人の役に立ちたい【ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ】 ・古くからの友人を大切にしていく

（注）グループ名は図表Ⅱ－Ⅱ－11の（注）を参照。

(5)　生きがい喪失・創造のプロセスと性格

①グループインタビュー時の行動観察

図表Ⅱ－Ⅱ－16に、グループインタビュー時の観察から各グループを特徴づける様子を表現したものを示した。

6グループのうち、喪失経験グループだけがおとなしく、雑談が少なかったのが目立った。他のグループではインタビュー開始前から自発的に相互の自己紹介や雑談がはじまる場合が多かったが、喪失経験グループではそれが全くなく、出席者はインタビューが始まるまでの間無言で座っているという状態であった。また、他のグループに比べて、グループ内の同意を求めたり、逆に賛同を表現する態度に乏しかった。

積極性上位グループ（社会活動あり）では、構成員の意見が異なっていても一定の理解を示し、自分の今の有り様を率直に示そうとする態度がみられた。笑い声が頻繁に見られるようなことはなかったが、全体的に真面目で、温かい雰囲気であった。

積極性上位グループ（社会活動なし）は、年長者の意見に追従する傾向がみられた。また、以前の会社や現在の仕事に関する話題が多く、テーマから離れて雑談になることも多かった。

積極性中・下位グループは、発言、笑い声とも多く、和気あいあいとした雰囲気であった。

現役グループは、複数の趣味を持つものが多く、話題も豊富で積極的な発言が多かった。特に、グループ全体の親近感は強く、最もまとまりのあるグループであった。

女性グループは、笑い声も多くみられたが、特定の人物の発言が多かった。ただし、全体の雰囲気は明るく、今の生活に満足しており、自信を持っている様子がうかがえた。

図表Ⅱ－Ⅱ－16　グループインタビュー時の行動観察による特徴

A	・インタビュー開始前の自発的な相互の挨拶、雑談が全くない ・全体的に無口な感じの対象者が多い ・自発的な発言は少なく、雑談もない ・否定的な発言が多い
B	・全体的に自分の意見をきちんと伝えようとしている ・自発的な発言は多いが、他者の話もきちんと理解しようとする態度がみられる ・終始、真面目な姿勢がみられる
C	・全体的に年長者の意見に賛同する傾向がある ・自発的な発言は多いが、雑談からテーマをそれた話題になってしまう ・自信に満ちた話し振りが多い
D	・全体的に和気あいあいとした雰囲気 ・自発的な発言は多く、笑い声も多い
E	・開始前に電話でどんな服装で来ればよいかと問い合わせた対象者がいた ・物腰は非常に丁寧 ・趣味に関する話題が豊富で笑い声も多く、終始、和気あいあいとした雰囲気 ・積極的で、自発的な発言も多いが、テーマからはずれてしまうことはない ・ｲﾝﾀﾋﾞｭｰ終了後、今後も会合を持つ話が持ち上がり、ビールでも飲もうと全員で出かける
F	・定年退職後のライフプランに積極的に取り組んできた対象者１人の話に、残りの参加者が感心する場面が多い ・自分の生活に対する自信は全員から感じられる ・終始、和やかな雰囲気で、他の対象者が発言している時に他の参加者の間で別の話が始まることがある

（注）グループ名は図表Ⅱ―Ⅱ―11の（注）を参照。

②性格特性との関連

今回調査では、Ⅱ・２で述べたとおり生活適応度、性格特性を測る尺度として自尊感情、モラール、志向性及び志向性の満足度、思考的内向・のんきさ、をとりあげた。これらの得点のグループによる特徴は、「Ⅱ・２（２）生活態度および性格特性の特徴」に前述したが、このうち、モラール得点が、喪失経験グループで最も低い点は、グループインタビュー中の発言傾向と一致するものであり興味深い。これまで繰り返し述べてきたように、喪失経験グループは他のグループと比較して否定的な発言が多く、趣味、地域活動、家庭といったいずれの場においても定年後の生きがい創造に向けての動きが乏しい傾向がみられる。こうした傾向は、モラールの低さを反映したものと思われる。

③発言からみたグループ特性

図表Ⅱ－Ⅱ－17に、グループごとの特徴的な否定的発言内容を示した。

喪失経験グループは、否定的発言の多かったグループであり、その特徴は、現役時代の会社や、仕事に向けられている点である。「会社は冷たい」、「お気に入りしか面倒を見てもらえない」などの発言は、自分が帰属していた会社組織への不満である。また、「営業なんて本当に馬鹿な仕事をやってきたものだと思う」という発言は、現役時代の自分の仕事にさえ充実感を抱けないでいる様子がうかがえる。そうした反面、「再就職の話は、もう無理だと思う」などと、再就職に積極的に取り組もうとする姿勢も見られない。

積極性上位グループ（社会活動あり）と積極性中・下位グループについては、「60歳で仕事をやめて遊んでいるとき、孤独感に苦しんだ」や、「現役時代の肩書をはずしてつきあうことは、わかっているができない」など、定年後の落ち込みはあるものの、仕事から離れた生活をしようと試みていることがわかる。

積極性上位グループ（社会活動なし）は、「（現在も）仕事に追われて好きなことが出来ない」や、「今は仕事に精一杯。肝心の仕事がなくなったらどうなるか不安」など、定年を過ぎても仕事とのかかわりが強く、現役時代とあまり変わらない様子がうかがえる。また、「ＯＢ会は、世間話をするだけで、人生観を語り合う場ではない」とか、「年寄りのやることは好きではない」など、仕事以外の関係を持とうとする姿勢もみられない。

現役グループは、全体的に否定的発言が少なかったが、その中でも、「定年後に仕事を離れ会社以外で、地域、友人などの人間関係が持てるか非常に不安」とか、「仕事をやめると寂しさがあると思う」など、定年後への不安を感じていることがわかる。現役であるため、定年後の生活の変化に対してまだ実感がわいていない者が多いようである。

女性グループは、仕事に対する否定的発言よりも、「（夫が）始終家にいると考えたら嫌だ」とか、「生活情報が、勤めている人より狭くなる」など、自分の生活に身近で具体的な問題に関心が向いている。

図表Ⅱ－Ⅱ－17　否定的発言（グループ別）

A	・家族のお荷物になっているのではないかと思う【家族】 ・失業保険をもらっているので、変な所に勤めたら引かれてしまう【仕事】 ・小さな会社だとお気に入りしか面倒を見てもらえない【仕事】 ・会社は冷たいものだと思った【仕事】 ・妻は粗大ゴミのような感じでみているのではないかと思う【家族】 ・地域での活動は変なしがらみが出てきて嫌な思いをした体験がある【その他】 ・営業なんて本当に馬鹿な仕事をやってきたものだと思う【仕事】 ・再就職の話は、もう無理だと思う【仕事】
B	・60歳で仕事をやめて遊んでいるとき、孤独感に苦しんだ【仕事】 ・妻と今まで口を聞いていないから、急に話をしようとしてもみっともない【家族】 ・仕事についていなくて寂しいという気持ちがある【仕事】 ・ボランティアはやりたいけど非常に入りにくくて、動けない【その他】 ・名刺に何の肩書も無いというのは寂しいし、都合が悪い【仕事】 ・老人クラブにも、若い人のなかにも入れないという中途半端【その他】
C	・（現在も）仕事に追われて好きなことが出来ない【仕事】 ・定年後、さてのんびりしようと思うと、やっぱり寂しさがある【生きがい】 ・ＯＢ会は、世間話をするだけで、人生観を語り合う場ではない【その他】 ・年寄りのやることは好きではない【その他】 ・心配事はほとんど無いが、寝たきりにはなりたくない【自分】 ・今は仕事に精一杯。肝心の仕事がなくなったらどうなるか不安【仕事】
D	・健康第一とウォーキングを始めたが長続きしない【その他】 ・給料ダウンはショック【その他】 ・仕事がなくなって、急に妻の生活に入り込んでもうまくいかない【家族】 ・定年後の経済的な不安があった【その他】 ・書道を始め、道具も揃えたがうまくならないので中断している【生きがい】 ・このまま引っ込んでしまったら自分自身がなくなってしまう【自分】 ・現役時代の肩書をはずしてつきあうことが、わかっているができない【その他】
E	・定年後の生活の場について妻と意見が分かれて難しい【家族】 ・社会活動ゼロ、友人との関わりゼロで家族との関わりが少しある位【家族】 ・定年後に仕事を離れ会社以外で、地域、友人などの人間関係が持てるか非常に不安 ・仕事をやめると寂しさがあると思う【仕事】　【その他】
F	・自分自身が寝込んだり、ボケないように用心しなくてはと思っている【自分】 ・生活情報が、勤めている人より狭くなる【その他】 ・ＯＢ会は、（会員が）現役のころを引きずっていて気が休まらない【その他】 ・お年寄りが近所にいたけど、顔を出すのを控えた。何か、迷惑がられると思った ・独りで住んでいるので、ちょっと不安なときがある【その他】　【その他】 ・（夫が）始終家にいると考えたら嫌だ【家族】 ・選ぶとなるとなかなか仕事がない【仕事】

（注）グループ名は図表Ⅱ―Ⅱ―11の（注）を参照。

(6) 生きがい創造に向けての阻害要因と施策要望

① 阻害要因

定年後の生活の中で新しい行動を起こす上での、阻害する要因についての発言をまとめたものが図表Ⅱ－Ⅱ－18である。

全てのグループを通してみると、地域活動、ボランティアに関して阻害要因が多く発言されている。地域活動に関しては、「高齢期の転居」、「しがらみが出来る」、「新しく入る人がいじめられる」、「マンション住まいで活動不活発」、「老人会はやることが決まっている」ために参加しにくい、参加したくないとの発言がみられる。ボランティア活動の阻害要因に関

図表Ⅱ－Ⅱ－18　生きがい創造に向けての行動の阻害要因（グループ別）

A	・定年後、妻は粗大ゴミのような感じで見ているのではないかと思う【家庭】 ・失業保険を貰っており、変なところに勤めたら引かれてしまうので、適当なところがあるまではこのまま生活していたほうがよいと考えている【仕事】 ・何か収入源をと思って再就職先を捜しているが、うまくみつからない【仕事】 ・ゴルフ、旅行などやりたいと思っていたが、定年後は経済的な問題でなくそういう気持ちになれなかった【趣味】 ・年金だけでは旅行などには行けない【趣味】 ・一番失敗したのは転居したこと。近所が知らない人ばかりでつきあいがない【地域】 ・地域での活動は、変なしがらみが出てきて嫌な思いをした体験がある【地域】 ・定年後勤めていると、パート待遇でもフルタイムだと休日は休養が先になってしまい、趣味に時間が割けない【趣味】
B	・仕事をしている間は、家族と突っ込んだ会話はない【家庭】 ・お互いを理解するといってもかなり表面的なことだったのが、時間がとれるようになると、全く新しい人間と生活を始めたような違和感を感じる【家庭】 ・妻ともこれまでほとんど口をきいていないから、妻と急に話をしようとしても、みっともなくてできない【家庭】 ・地域に入ることが難しい【地域】 ・老人会は80歳すぎのボスが仕切っている。新しく入る人はいじめられる【地域】 ・ボランティアはやりたいけど非常に入りにくい。気持ちがあってもすぐ動けない【ボランティア】
C	・仕事に追われて好きなことができない【仕事】 ・ＯＢ会は寄り合って世間話をするだけで、人生観を語り合ったりする場はない【その他】 ・年寄りのやることは好きじゃない【地域】 ・老人会はくだらないという感じが強い【地域】
D	・これまでの夫婦関係が希薄で今後２人の生活で新しい関係を築くのが難しい【家庭】 ・将来子どもと同居ができるかどうか（息子の嫁次第）【家庭】 ・仕事中心の生活で趣味が全くない【趣味】 ・同じ趣味を持つ人と交流したいがきっかけがない【趣味】 ・地域とのつながりが重要と思うがマンション住まいで地域活動は活発でない【地域】
E	・妻と一緒に外出しようとしても断られる【家庭】 ・65歳まで働きたいが新しい職場環境などが心配【仕事】 ・合唱が好きだが仲間がいないのでできない【趣味】 ・ジョギングなど始めるが中々長続きしない【趣味】 ・地域活動には主がいて入りづらい【地域】 ・ボランティアをしたいが、何が出来るのかよくわからない【ボランティア】 ・暇があったらやればよいという位のうまいボランティアがない【ボランティア】 ・シルバーボランティアが特殊技能を持つ人ができることだけに限られている【ボランティア】
F	・（夫が）始終家にいると考えたら嫌だ。困る【家庭】 ・再就職で仕事を選ぶとなると仕事がない【仕事】 ・老人会はあまりよくない。やることが決まっている【地域】 ・ボランティアでお年寄りの世話をしていたが、その親戚の人から図々しいと思われて、ショックを受けた。ボランティアは難しい【ボランティア】 ・お年寄りが近所にいたけど、顔を出すのを控えた。何か迷惑がられるように思った【ボランティア】 ・ボランティアは大変だからうっかりやれない。直接人に接してやるボランティアはしたくない【ボランティア】

（注）グループ名は図表Ⅱ―Ⅱ―11の（注）を参照。

しては現役グループ、女性グループに特に発言が多く、「何ができるかわからない」、「暇があったらやればよいという位のうまいボランティアがない」といったことが指摘されている。

この他、趣味活動に関しては、経済的な制限や同じ趣味を持つ人との交流の難しさ、なかなか長続きしないことなどがあげられている。

② 施策要望

インタビューの中で、国や地方公共団体、当財団（シニアプラン開発機構）などへの、定年後の生活に関する要望について発言を求めた。図表Ⅱ－Ⅱ－19はこうした施策要望に関する発言をまとめたものである。これらのうち、積極性上位グループ（社会活動なし）の「年金生活者を有効に使うシステムを作ってほしい」との発言は、グループ内での賛同の発言が多く、同種の発言が他にもみられる。定年退職しても、現役時代の仕事に代わる、達成感、貢献感を得られる場を用意して欲しいとの意向が非常に強い共通反応として表明されている。また、女性グループでは㈳日本セカンドライフ協会（ＪＡＳＳ）のサークルへの参加者の体験談から、こうした組織の有効性が話し合われる中で、高齢になるにつれて遠くへの外出は億劫になるので、住まいの近くにこうした活動の拠点があるとよいとの発言がみられた。このように、高齢になるにつれ行動範囲が狭くなることを考えると、サラリーマンを対象とする組織や、施設も地域ごとに設置されることが望ましいと思われる。サラリーマンを対象とする組織などに関して、都心部に通って活動するという形に限界のあることが指摘されている。

図表Ⅱ－Ⅱ－19　施策要望（グループ別）

A	・生きがい事業団等から提供される仕事は生きがいにつながるようなものがない ・村のお祭りなどに参加させてほしい ・成人学校のようなものがあると良い ・失業保険や年金を貰っているとので、変なところに 勤めると （かえって）収入が減ってしまう
B	・ボランティアも行政からノルマを与えられるような形ではボランティアではない ・気軽にボランティアの手伝いができるシステムが欲しい ・アメリカのシルバーユニオンのように、老人の団体もネットワークを強くして、政治に圧力をかけられるようになるとよい ・地域ごとにボランティアに参加できる雰囲気を作るためのリードをして欲しい ・ＯＢの中には、ボランティアの参加予備軍が大勢いるが、地域でのﾎﾞﾗﾝﾃｨｱは個人がﾘｰﾀﾞｰｼｯﾌﾟ をとると問題がおこりやすいので自治体等がﾘｰﾀﾞｰｼｯﾌﾟ をとってほしい
C	・日本の社会では「生きがい」、「生き方」について会社が相当面倒を見なければだめ ・高齢化社会に向けて、高齢者にもう少し期待して欲しい ・看護などと 違う、もう少し前向きなﾎﾞﾗﾝﾃｨｱの制度など、年金生活者を有効に使うｼｽﾃﾑが欲しい ・リタイアした人を活用する方法、働く場を考えて欲しい ・シルバー人材センターは再就職の斡旋にすぎない。有償の職業ではなく、無償で社会奉仕をするシステムが欲しい ・年寄りの知恵を子どもや青年に伝える場を作る
D	・国、自治体、財団、企業の施設、方策をﾈｯﾄﾜｰｸし行動のきっかけを提供する ・施設のＰＲの充実
E	・長く働く人にも、少し早めに引退する人にも相応の年金を与える制度が欲しい
F	・ＪＡＳＳクラブ（㈳日本ｾｶﾝﾄﾞﾗｲﾌ 協会のｻｰｸﾙ等）のようなものが近所にあると良い ・60歳から65歳までを対象とした公共機関のサービスが少ない

（注）グループ名は図表Ⅱ―Ⅱ―11の（注）を参照。

第Ⅲ章　個人面接調査結果

Ⅲ・1　調査の設計

(1)　調査対象者

グループインタビュー対象者の中から、特徴的な事例、各グループ1名を選出し、計6名を対象とした。調査対象者の属性及び、選定理由についてはⅢ・2で後述する。

(2)　調査実施方法

対象者の指定した日時・場所において個人面接調査を実施した。面接時間は約2時間とし、面接者は分析にあたる者2名とした。

(3)　調査内容

グループインタビューにおける発言内容をもとに、それを補足、又より詳細にたずねる形で、主として以下の内容について面接を行った。できるだけ対象者に自由に語ってもらうように努め、また面接内容は、対象者の選定理由に沿って適宜追加、省略した。

○略歴（職業生活上の変化）
○家族構成、家族の状況
○定年前後の生活の変化
○家族関係・その他の人間関係
○趣味・学習活動
○地域活動、ボランティア活動
○生きがい
○これまでの人生で影響を受けた人、本など
○今後の抱負等

(4)　実施日時

平成4年11月11日～11月29日

Ⅲ・2　対象者のプロフィール

(1)　分析標本の基本属性と選定理由

事例	グループ・対象者	年齢	性別	定年経験	現在の就業状態	選定理由
1	A－d	67	男	OB	無職	・定年退職後に転居している ・定年退職後の精神的な落ち込みがみられる
2	B－c	62	男	OB	嘱託	・定年後の生活に適応、ボランティア活動あり ・生きがいを持つべきとの考えに懐疑的
3	C－e	70	男	OB	嘱託	・中高年期の資格取得により定年退職後の再就職に成功
4	D－c	65	男	OB	パート	・定年退職後に精神的な落ち込みの経験があり再就職によって生きがい再創造過程にある
5	E－e	53	男	現役	正規従業員	・現役サラリーマン ・趣味が多く、ボランティアの意向もある
6	F－e	65	女	OB	正規従業員	・未婚で一人暮らしの女性OB

(2)　事例の概要

①　事例1（定年退職後に転居経験のある事例）

会社役員・顧問を勤めていたが、前のオーナーの息子と意見が合わずに退職。退職後、妻の健康を考えて転居。退職後半年くらいの間、気が抜けた様に感じていたが、再就職はしていない。いまでも前の会社の決算を見たり、株の売れ筋を見たりして楽しんでいる。散歩と中国語の学習と読書が継続している趣味であり、生きがいについては摑み所のないものでわからないとしている。

②　事例2（生きがいを持つべきとの考えに懐疑的な事例）

役員退任後、再就職せず、週2日程度親族の会社を手伝っている。定年後は会社に対する執着心を断ち切り、元の職場以外の人間関係に目を向けて新しい生活を送ることが大切と考える。ボランティア活動を行っており今後も広げていきたいとの希望を持つ。生きがいは持つ必要があるのか、と生きがいを持つべきとの考え方には懐疑的。

③　事例３（資格取得により再就職に成功した事例）

定年後に社会保険労務士等の資格取得を行い、９年の雇用延長の後、専門学校講師、添削指導などの仕事を得て現在も仕事中心の生活を送っている。現在でも１日３時間勉強するなど仕事に関わる努力を続けている。仕事のウエイトが低くなった生活については考えたくないと述べ、生涯現役で仕事に関わっていくことを希望している。

④　事例４（定年退職後の精神的な落ち込みから立ち直った事例）

定年前は仕事中心の生活を送っており、定年時には特に趣味もなく、地域とのつながりも希薄であった。定年退職後無職になってから約１年間は健康面、精神面のカバーに非常に苦しんだという。その後仕事に対する意識を転換し、健康維持を中心目的として作業的な職業に就いてからは、趣味の活動への意欲も生まれ、現在は充実した生活を送っている。園芸、旅行、ハイキングなどを楽しみ、将来仕事を辞めてからは趣味を生かしたボランティア活動を行いたいと考えている。

⑤　事例５（現役サラリーマンの事例）

保険会社に30年以上勤務しており、いくつかの支社・支店を転勤した後、１年前に東京本社に戻る。最後の支店で次長にまで昇進するが、現在は昇進のラインを外れた立場である。定年後の準備らしいことは全くやっていないが、今後も出向や転勤の可能性があり、具体的な定年後の見通しは持っていない。趣味は、スポーツやバードウォッチングなど多彩で、特に体を動かすことに充実感を感じる。人とのつながりを大切に思いながらも、仕事の話しかできない人間はつまらないと思っている。生きがいとは何かは、よくわからないとしている。

⑥　事例６（未婚の女性ＯＢでひとり暮らしの事例）

５年前にマンションを購入し、ひとりで生活している。定年後も関連会社に再就職し、正規従業員としてフルタイムで就労しており、定年前と生活状況に大きな変化はない。現役時代から華道、洋裁など趣味が多く、洋裁は人に教えた経験も持つ。しかし生きがいは現役時代、現在を通じて仕事であると感じており、退職後は仕事に代わるものとしてボランティアに充実感を求めたいと考えている。学生時代の友人、趣味の友人など仕事を離れた人間関係も現役時代から充実している様子がうかがえる。

Ⅲ・3　事例の分析

(1)　事例１（定年退職後に転居経験のある事例）

① プロフィール

年　　齢	67歳	定年後のコース	定年（64歳）⇨無職
家族の状況	同居；妻（60歳），長男家族（子供２人） 別居；次男－既婚（海外在住，子ども２人）		
現在の就業状況	無職		
住居の状況	東京近郊，一戸建て持家，居住年数２年半		
年収	300～400 万	健康状態	まあ健康
性格特性等 志向性尺度 志向性満足度 内省尺度 自尊感情 モラール	人見知り型，積極性上位 達成　5/9　活動　3/6　指導　5/6　親和　9/9 達成〔達成2/3　安楽2/3 〕親和〔親和2/3　独自2/3 〕 思考的外向　7 /20　のんきさ　11/20 中　(4/6) 13/17		

② ライフヒストリー

年)	1925	39	43	45	48	51	55	57	59	64	66	73	76	82	89	90
		第２次世界大戦・開戦		終戦				ナベ底不況	岩戸景気	東京オリンピック	オイルショック				元号が平成に変わる	
歳)	0 関西生まれ	14	18 A無線会社入社	20 関東のB電気機器会社に転職	23 大阪のC自動車会社に転職	26 B電気機器会社の専務に誘われ転職	30 結婚	32 東京へ転勤	34	39	41 会社経営悪化	48 販売会社分離役員に就任	51 親会社の役員に就任	57 販売会社の社長に就任	64 退職　妻が健康を害す	65 妻の健康を考え転居　長男家族と二世帯住宅に住む

③ 定年時の状況・定年後の生活変化

現役時代は、会社で破格の出世をしたと思っているが、会社オーナーの息子と意見が合わず、「貧乏でも気を遣わない生活」を望んで退職した。退職後の準備は特にしていなかったが、経済的には困らない程度の年金はもらっている。それでも退職後半年くらいは、気が抜けたような感じを味わっている。また、妻は別に何も言わないが、自分を粗大ゴミのようにみているのではないかと感じており、毎日いなかった自分が家でごろごろしていたら嫌になるのではないかとも思っている。

退職直後にそれまで25年住んでいた所から転居したので、新しい地域の人とのつながりが全然ない。ゴルフなどのスポーツもやらなくなり、散歩や孫の子守のほか本ばかり読んでいる。

今は、中国語の勉強に興味を持って取り組んでいる状況。

現役の頃は、かなり高い地位の役職につき、仕事に満足感を持っていた様子がうかがえる。しかし、退職に至るきっかけが会社のオーナーの息子との意見の食い違いであるため、会社は要領の悪い人間には冷たいという気持ちも抱いている。自分の成した仕事に対する自負心を持ち、一方で会社の冷たい対応を感じながら、今でも会社の決算を気にしたりするなど、会社や仕事と完全に離れた生活を志向するには至っていない。

④　生きがいのとらえ方・対象

現役時代は仕事が生きがいだったが、退職した現在は、雲をつかむようなつかみどころのないものと感じている。生きがいというものをどう定義したらよいのかわからないし、生きがいとは何なのか答えが出るなら教えてほしいとも述べている。また、こういう生き方をしている人がいるとか、こういう考えでやってみたらどうだろうかなどと、モデルを提示してほしいと述べるなど、生きがいに対する確固としたイメージを持ってはいない。

そこで、あえて言うなら生きがいとはどういうものかとたずねると、社会奉仕やボランティア活動をすることであると答えている。具体的にボランティア活動をした経験をたずねると、全くないということであり、手に技術がないと役に立たないなどとも述べている。さらに、今後参加したいボランティア活動の内容については、特に思いつかないとしながらも、ボランティアのエキスパートの人達や役所が、海岸の整備や掃除などの参加を募ったりすれば参加してみたいと述べている。社会に対する有用感を得る活動として、観念的にボランティアを生きがいの対象として答えているようであるが、受け身的ながらもボランティア活動に参加できる機会を欲してもいる。

⑤　定年後の生きがい喪失・創造に関わる意識・行動

現役時代は仕事が生きがいであったとするＡ－ｄ氏は、仕事での成果や高い地位に対する自負心が強いだけに、退職後の無職の生活の中で生きがいを見いだせず、生きがい喪失に陥ったようである。

仕事以外での生きがいについては、ボランティアをあげながらも、実際に参加した経験はなく、すぐに取り組むような計画もしていない。どちらかというと、受動的に構えている。むしろ、趣味でやっている中国語の学習を継続し、通訳なしの中国旅行に行くという希望の方が、積極的な達成動機を持った行動であり、今後の生きがい創造に発展すると考えられる。

人間関係については、人とのつきあいが苦手であると述べている。また、定年後の転居のために地域とのつながりが浅いことから、地域で新しい人間関係を持つことを今後の生きがいにしようとする意向は持っていないようである。

(2) 事例２（生きがいを持つべきとの考えに懐疑的な事例）

① プロフィール

年　　齢	62歳	定年後のコース	定年（58歳）⇨無職⇨別企業再就職
家族の状況	同居；妻（57歳），長男－未婚，母（同一敷地内別棟）		
現在の就業状況	自宅１階で親族が経営する会社の顧問・取締役（経理・税務等担当） 週２日、１時間程度（不定期），食品関係団体理事（無給）		
住居の状況	東京都内，一戸建て持家，居住年数30年以上		
年収	1000～1500万	健康状態	まあ健康
性格特性等 志向性尺度 志向性満足度 内省尺度 自尊感情 モラール	外向・リーダー型，積極性上位 達成　6/9　活動　6/6　指導　6/6　親和　6/9 達成〔達成3/3　安楽3/3 〕親和〔親和3/3　独自3/3 〕 思考的外向　11/20　のんきさ　15/20 中　（ 5/6） 17/17		

② ライフヒストリー

年）	1929	第2次世界大戦・開戦 39	終戦 45	50				ナベ底不況 57			岩戸景気 59		東京オリンピック 64	オイルショック 73					82		元号が平成に変わる 86	89
歳）	0	10	16	20	21		24	27	28		29			45	47	48	49	53		56	58	
	東京都生まれ			薬科大卒業	中小製薬会社を経て大手A製薬入社 研究所勤務		企画・広報を担当 本社へ転任	病気で入院	結婚	労組委員長に就任	人事課長に昇進 労働争議を経験	労働争議裁判に関わる		資材関係に転任	総務部長に昇進	役員就任	企画開発部長	食品関係販売会社	ゴルフ場開発など手掛ける	監査役就任	退任	

③ 定年時の状況・定年後の生活変化

退職後の準備は特にしなかったが、助走期間の後に退職した（自分の意志でいつでも辞められる役員であった）ので軟着陸できたと感じている。退職時に再就職を考えなくもなかったが何が何でも仕事をとの意欲はなく、引退。現在は定年前の職務上のつながりで団体理事（月２回出勤）をボランティアで行う他、名刺に何の肩書がないのも不都合との理由もあり、親族経営の会社の顧問・取締役として不定期に経理・税務等を担当している。縁があれば現役時代に培ってきたノウハウを生かして働きたいという気持ちもあるが、自分からの売り込みは特にしておらず、もう再就職することはないのではないかと考えている。時間に縛られることは少なく、仕事の他は週１～２回のゴルフ、ボランティア活動、妻との旅行などで過ごしており、第二の人生を歩んでいるという心境。

④ 生きがいのとらえ方・対象

名刺のように「これが生きがいです」と提示できるものを持つべきなのか、そうだとすれば肩書同様に生きがいにもランクが出来て肩肘張らなくてはいけなくなる、と生きがいが必要であるとの考えに懐疑的であり、生きがいとは何かをつきつめることなく、自然体で生活すればよいと述べている。

しかし、現役時代は敢えて言えば仕事が生きがいであり、将来会社をたよりにしたくないと経済的な面で自助努力することも生きがいだったと述べている。現役時代、様々な職種を経験しているが、いずれも興味を持ち成果を上げてきたとの自負があり、「仕事をしているはりの良さ」は何物にも替えがたいと感じている。現役時代は、毎日新しい人と会い、非常に優秀な人と専門知識がストレートに入ってくるような人間関係を持つことに充実感を得ており、現在の生活ではこのように対人関係の中で知的好奇心が満足させられることがないと感じている。

このように、生きがいの必要性を懐疑しつつも、現在の生活の中に仕事にかわるものはないと感じており、充実した生活の中でもその点は、空虚に感じることもあるとしている。趣味は、プロの域に達する程度でなければ生きがいにはならないと考える。しかし、生きがいの対象としての仕事を再び求める意欲は強くなく、定年後は青年の心にかえり、新たなる心の成長を求めたいと考えている。その方法については模索しているところである。

また、現在経済的な不安が全くないことは生活の充実に大きく関わっており、経済的なゆとりの有無は、定年後の生活の充実や人間的なものも左右すると感じている。

⑤ 定年後の生きがい創造に関わる意識・行動

生きがいの必要性に懐疑的なＢ－ｃ氏は、定年後の行動に関して生きがいを意識した発言はないが、定年後にボランティア活動を始めるなど生活の充実に向けての動きはみられる。車椅子専用車の運転手のボランティアを月に２～３回行っており、今後も世の中の役に立つことにもっと時間を割きたいと考えている。ボランティアについては現役時代から途上国の医療サービスボランティアをやりたいとの夢を持っていたが、介護の必要な母と同居しているため長期間家を空けることは難しく、できる範囲でやれることを始めた。しかし一方で「穀潰しは楽しいが、ストレスがたまる」と働いていないことのストレス解消のためとも述べる。

夫婦関係では、定年後の妻との関係に全く新しい人間と生活を始めたような感じがあり難しい面があると感じているが、週に１回は二人で温泉旅行に行くなど努力している。

また定年後の生活の姿勢として、現役時代の職場とは別の、新しい人間関係を拡げる努力が必要と考えている。会社関係の付き合いはごく少数の気の合う人だけに限り、定年後に始めたゴルフも一人でクラブに出かけてそこで出会った人とプレイするなどしている。

(3) 事例３（資格取得により定年後の再就職に成功した事例）

① プロフィール

年　　齢	71歳	定年後のコース	定年⇨延長継続⇨別企業再就職
家族の状況	同居；妻（70歳），長男夫婦－既婚		
現在の就業状況	社会保険労務士講師，添削請負等，業界団体嘱託（週３回）		
住居の状況	東京近郊，一戸建て持家，居住年数10～20年		
年収	600～ 800万	健康状態	注意する点はあるが生活に支障なし
性格特性等 志向性尺度 志向性満足度 内省尺度 自尊感情 モラール	外向・リーダー型，積極性上位 達成　7/9　活動　2/6　指導　6/6　親和　8/9 達成〔達成3/3　安楽1/3 〕親和〔親和3/3　独自2/3 〕 思考的外向　8/20　のんきさ　6/20 高　（ 6/6） 14/17		

② ライフヒストリー

年)	1921	35	39	43	45	55	57	59	64	73	75	76	78	81	82	84	89
		第2次世界大戦・開戦			終戦		ナベ底不況	東京オリンピック 岩戸景気		オイルショック							元号が平成に変わる
歳)	0 九州生まれ	14 母死去	17	22 高等職業学校卒業	24 九州で就職 経理業務に携わる	34 東京に転勤 経理業務に携わる	36	38	43	52	54 人事部に転任	55 定年退職・嘱託就任 厚生年金基金に出向	57 社会保険労務士資格取得	60 年金相談室に就任 宅地建物取引主任資格取得	61 行政書士資格取得	63 嘱託退任	67 （社会保険労務士講師・団体嘱託職員） 再就職

③ 定年時の状況・定年後の生活変化

定年前、人事部に転任するまでは残業も多く多忙であり、転任後は開放されたとの感じを持った。転任後就職斡旋に関わって再就職の難しさを痛感し、長く会社にいられるように、また定年後の小遣い稼ぎになればと思い、資格取得を考えた。定年後は定年前の勤務先に雇用延長で勤務し、退職までの間に社会保険労務士など３つの資格を取得している。役員以外では稀な長期の雇用延長は、資格取得のおかげだと考えている。退職前から、資格取得のために通った専門学校からの誘いで講師の仕事をするようになり、退職後はフリーで講師を努め、添削指導や教材の作成に関わっている。また、定年前の職務に関連する団体でも事務全般を嘱託として担当しており、同居の息子が自宅で開業している会社の経理にも関わっている。このように、講師の仕事も退職前からはじめており、いつが定年だったかわからないような状態で、特に生活の変化は感じていない。現在も定年前と同様に仕事中心の生活を送っている。

④　生きがいのとらえ方・対象

定年退職後の現在でも「仕事が生きがい」であり、生活の中での仕事のウエイトが低くなった時の生活、無職になった時の生活については考えたくないとしている。ただし、C－e氏の場合、生きがいの対象としての仕事の内容は定年前から変化しており、現役時代の仕事よりもむしろ現在の講師の仕事の方が面白いと感じている。人に教えるのが好きで、生きがいのある仕事がみつかったと考えている。今回調査でも現役時代は仕事が生きがいであったとするサラリーマンが多く、定年後も生きがいのある仕事を継続することは多くが望むところであるが、実際には非常に実現が難しく、それに固執するがゆえに現実とのギャップで生きがい喪失に陥るケースもみられた。C－e氏の場合は、定年後も生きがいの対象としての仕事を維持することに成功した稀なケースであるといえよう。今後の仕事の意向については、これ以上の拡大は無理であるが、縮小のつもりはなく、80歳位まではこのままのペースで仕事を続けたいとしている。生涯現役として仕事を生きがいとしていきたいとの希望を持っているようである。

⑤　生きがい創造に関わる意識・行動

C－e氏の生きがい創造に関わる行動としては、まず中高年期からの資格取得があげられる。結果として3つの資格取得に成功し、それを活かした再就職によって仕事に関しては現役時代を上回る生きがいを見いだしている。現在でも資格取得の際の習慣が継続して毎日3時間の勉強をしている。残された人生の目的は社会保険労務士として独り立ちしていく後輩の指導、育成だと考えており、これを生きがいとして努力したいと述べている。生徒などから相談の電話が入ることもあり、嬉しいと感じる。現在の仕事に関連した勉強、努力やその成果、仕事に関連した人間関係の広がりなどが、C－e氏の生きがいにつながっているようである。

趣味に関しては、厚生年金基金関係の仕事に就いていた関係でライフプランニングに関する知識も多く、趣味を持つこと、妻と共通の趣味を持つこと等の重要性はわかっているが、実際には仕事が忙しく思うようにいかないと述べている。1日1万歩の実践、書道（妻と共通の趣味）などを行っている。しかし現在の生活には満足しており、仕事以外に何かしたい、のんびり遊びに行きたいといった希望は特になく、妻とすごす時間をもう少し持ちたいと思う程度とのことである。仕事以外の事柄は、あまり視野に入っていない様子である。

夫婦関係については、コミュニケーションを図るため休日に一緒に近所を散歩するなどしている。定年後の添削指導の仕事は妻も協力して行っており、資格取得にも妻の協力が大きかったと述べる。仕事の上でも協力関係にあり、夫婦のつながりを重視している様子がうかがえる。

(4) 事例4（定年退職後の精神的な落ち込みから立ち直った事例）

① プロフィール

年　　齢	65歳	定年後のコース	定年（60歳）⇨嘱託⇨無職⇨別企業再就職職
家族の状況	同居；妻（61歳）　別居；長男－未婚（東京近郊在住） 長女－既婚（子どもなし，東京近郊在住）		
現在の就業状況	中高年雇用福祉事業団作業員（商品の仕分け），週6日午後のみ		
住居の状況	東京近郊，一戸建て持家，居住年数10～20年		
年収	300～400 万	健康状態	非常に健康
性格特性等 志向性尺度 志向性満足度 内省尺度 自尊感情 モラール	気くばり型，積極性下位 達成　6/9　活動　1/6　指導　6/6　親和　7/9 達成〔達成2/3　安楽2/3 〕親和〔親和2/3　独自2/3 〕 思考的外向　12/20　のんきさ　9/20 中　（ 4/6） 11/17		

② ライフヒストリー

年）	1927	39	45	57	59	61	64	68	73	84	87	89	92
	第2次世界大戦・開戦		終戦	ナベ底不況	岩戸景気	東京オリンピック		オイルショック				元号が平成に変わる	

歳）	0	12	15	18	28	30	32	34	37	41	46	57	60	62	65
	N県生まれ	卒業後農業を営む	上京・商業学校に入学	東京大空襲のため在学途中に帰郷	結婚		地元自動車部品メーカーに就職	工場移転のため東京近郊に転勤		管理監督に抜擢される		安全衛生管理職に転任	定年・嘱託退職数日で嘱託就任	別企業に再就職（新聞広告を見て）	中高年雇用福祉事業団を通じて転職

③ 定年時の状況・定年後の生活変化

定年前は残業も多く、土日も家に仕事を持ち帰るような状態であった。休日に家庭サービスで家族と一緒に出かけることはあっても自分の趣味に時間を費やすという状況ではなく、仕事中心の生活を送っていた。定年後2年間の予定で作業員として雇用継続になるが、かつての同僚や部下などと違う職種で同じ職場にいるのが嫌で退職。再就職を希望したが、適当な職はみつからなかった。定年後のことは嘱託勤務の間に考えるつもりでいたが、急に退職となって戸惑い、精神的な空白に襲われたと述べている。責任がないという脱力感があり、精神的、肉体的緊張が一気になくなり、また毎朝同じ時間に起床して通勤という生活のリズムが崩れ、再就職するまでの1年間は健康面、精神面のカバーに非常に苦しんだという。退職後、健康を維持しようと現役時代と同じ時間に起床し、万歩計を持って毎朝2キロ歩くことを日課にするが、それも嫌になり、再就職すればまた何か考えが浮かぶだろうと考えるに至っている。

④　生きがいのとらえ方・対象

定年前は生きがいについて意識することなどなかったと述べる。現役時代は仕事中心の生活で、管理監督に抜擢されて以後は仕事上の成果をあげ、評価されてきたとの自負もある。現役時代は仕事に生きがいを感じていたものと推察される。定年退職した時点のＤ－ｃ氏は、特に趣味もなく、地域とのつながりもほとんどない状態であり、定年間際になってこれではだめだと悩んでいる。しかし現在は、適度な仕事と趣味の活動で充実した生活を送っているようであり、定年後の精神的な落ち込みを過去の話として「あの頃は辛かった」と述べ、現在はこうした状態から立ち直ったと感じている。精神的な落ち込みから抜け出す契機になったのは、再就職であると述べる。仕事をすることにより友達ができ、生活にはりができて園芸や旅行などの趣味の活動にも積極的に取り組めるようになったとしている。ただし、現在の仕事の位置づけは、現役時代のように、それ自体を生きがいの対象とするものとは異なるようである。現在の仕事は健康維持を中心目的としたものと述べており、生活のリズムを保ち、活力となるものであるととらえている。仕事はあくまで趣味活動の余力を残せる範囲のものとし、再就職後、勤務時間の短かい仕事に転職している。Ｄ－ｃ氏が生きがいを得る場は、現役時代の仕事が中心との状況から仕事、趣味、家庭生活へと拡がりをみせている。中でも中心となる場は仕事から趣味へと変化しているようである。また、仕事はあと１、２年は続けたいが、その後は仕事に代わるものとしてボランティア活動の希望をもっている。趣味の園芸を生かしたボランティアをしたいと考えており、趣味を楽しむだけの生活では張りに欠けると感じているようである。

⑤　定年後の生きがい創造に関わる意識・行動

仕事に対する意識を転換して再就職する他、趣味や家庭生活に関しても生きがい創造に関与すると思われる行動がみられる。趣味は園芸、書道、ハイキング、旅行などで、園芸は雑誌を購入して独学で庭の手入れをしている。地域の人とのつながりも園芸をきっかけに出来つつあり、散歩途中に知り合った人と園芸を通じて付き合いがはじまっている。書道は通信教育を利用し、上級の取得に向けて努力している。ハイキング、旅行は、旅行会社の旅の会に入会して年５回程度参加する他、東京近郊のハイキングコースに一人で出かける。妻は仕事をしていて休日が合わないことが多く、旅行やハイキングには一人で気軽にでかける。行った先で友人ができることも多いとのことである。家族関係、家庭生活に関しては、妻が仕事を持っているため定年後は掃除を自分の担当としてやり始める、９人いる兄弟で兄弟会を作り、毎年旅行を計画するなどしている。

(5) 事例５（現役サラリーマンの事例）

① プロフィール

年　　齢	53歳	現　　役　（定年は60歳）	
家族の状況	同居；妻（47歳），次女－未婚（就労あり） 別居；長女－未婚（就労あり，北関東の工場に勤務）		
現在の就業状況	大手Ａ保険会社（専門職；保険代理店の指導・点検）（週５日）		
住居の状況	東京近郊，一戸建て持家，居住年数10～20年		
年収	1500 万以上	健康状態	まあ健康
性格特性等 志向性尺度 志向性満足度 内省尺度 自尊感情 モラール	外向・リーダー型，積極性上位 達成　7/9　活動　6/6　指導　5/6　親和　7/9 達成〔達成2/3　安楽2/3 〕親和〔親和2/3　独自2/3 〕 思考的外向　17/20　　のんきさ　14/20 高　（ 6/6） 17/17		

② ライフヒストリー

年)	1939	45	49	57	59	62	64	69	73	75	76	80	83	85	87	89	91
	第2次世界大戦開戦	終戦		ナベ底不況	岩戸景気	東京オリンピック		オイルショック							元号が平成に変わる		
歳)	0	6	10	18	20	22	25	29	34	35	37	41	44	46	48		52
	九州生まれ		家族で上京			Ａ保険会社入社		結婚		住宅購入	課長に昇進	支社長に転任	九州の支社長に転任	次長に昇進	中国地方に単身赴任		東京本社へ異動

③ 現在の状況・定年後の準備

東京本社に戻る前は、九州や中国地方の支店を転勤し、単身赴任も経験しながらキャリアアップをしてきたが、本社に戻った現在は昇進コースからは離れてしまっていると述べている。そのため、現在は仕事に追われることなく自分の時間をかなり持てるようになり、マイペースで生活をエンジョイしている。趣味は、体を動かすことが好きで、ゴルフやジョギングを行っている一方、自宅近くの小川にバードウォッチングをしに出かけたりすることも楽しみの１つである。

定年後の生活に向けては、準備らしいことは何もしてないが、数年後の出向や転勤も有り得るので、その後で考えたいと思っている。

家族とのつながりを大切にしているが、Ｅ－ｅ氏が出かけようと妻や娘を誘っても断られることが多い。あまり共通の楽しみを持てないようであるが、水泳は家族全員ができるので、そ

の方で楽しみたいと述べている。また、近所とのつきあいは妻に任せっきりのためあまりつながりはないようであるが、学生時代の友人との交流を大切にしている。

④　生きがいのとらえ方・対象

会社に入る前から体を動かすことが好きであり、充実感を感じると述べている。また、人とのつながりが人生の楽しみと思っているが、いつまでたっても仕事の話しかできない人間はつまらないとも述べており、仕事第一主義だけでは良くないのではないかと思っている。家族とのつながりや友人関係については、非常に大切だと考えており、人とのつながりを人生の楽しみととらえている。しかし、生きがいとは何かとたずねると、よくわからないと答えている。

いわゆる出世コースから離れた位置にいるようであるが、そのために仕事から離れたところで楽しみを見いだしており、仕事以外の自分の好きなことの中から生きがいを感じている。

現在ボランティアを行ってはいないが、仕事を辞めたあとその時の体力にあったことをやりたい、具体的には身体の不自由な人の手助けも良いと思っている。

⑤　生きがい喪失・創造に関わる意識・行動

現役で仕事をしており、定年までに出向や転勤があると考えているので、定年退職後の具体的な生活のイメージは持っていない。ただし、定年後の仕事については、雰囲気の良いところならお金は二の次で働きたいという意向は持っている。

仕事中心の生活を送っておらず、趣味や人とのつながりを楽しみに感じている。また、体を動かすことが好きであるが、体があまり動かなくなったらその時にまた、いろいろな趣味ができると述べており、スポーツ以外にも、バードウォッチングを楽しんだり、世界中いろいろなところを旅行したいなど、一つのことにとらわれないで柔軟に興味の対象を拡げていく姿勢がうかがえる。

家族との関係は、家族皆で水泳に出かけたり、妻と海外旅行に出かけようと考えたり、休日台所で食器を洗い簡単な朝食を作ったりと、かなり前向きに関係作りをしているようである。しかし、一緒に外出するのを家族に断られたり、一度海外旅行に出かけた際には、自分も妻も一緒に行ってもつまらないと感じたと述べている。今後の夫婦関係については、子どもの独立後に妻との関係をさらに大切にし、深めていきたいといった発言は特にみられない。

実際に定年を迎えた時に、どういう気持ちを抱き、生きがいに対してどのような影響があるかは不確定であるが、仕事中心の生き方をしておらず、趣味や人間関係への興味も強いことから、定年ショックによる生きがい喪失には陥らないのではないかと考えられる。

(6) 事例６（未婚の女性ＯＢでひとり暮らしの事例）

① プロフィール

年　　齢	65歳	定年後のコース	定年（60歳）⇨関連会社再就職
家族の状況	同居；なし　別居；妹－夫と死別（東京近郊在住） 第２人（東京近郊在住）		
現在の就業状況	正規従業員、経理事務		
住居の状況	東京近郊，ﾏﾝｼｮﾝ 持家，居住年数５年		
年収	400～500 万	健康状態	まあ健康
性格特性等 志向性尺度 志向性満足度 内省尺度 自尊感情 モラール	気くばり型，積極性中位 達成　8/9　活動　2/6　指導　6/6　親和　4/9 達成〔達成2/3　安楽2/3 〕親和〔親和2/3　独自2/3 〕 思考的外向　16/20　　のんきさ　11/20 高　（ 6/6） 17/17		

② ライフヒストリー

年）	1927	39	45	47	57	59	60	61	64	68	69	73	82	87	89	92
		第２次世界大戦・開戦	終戦		ナベ底不況	岩戸景気		東京オリンピック			オイルショック			元号が平成に変わる		
歳）	0 東京近郊Ｋ市生まれ	12	18 商業学校卒業 地元大手電気メーカー就職	20 洋裁学校に通い始める	30	32	33 各種学校で洋裁教師を始める	34 華道家元教授免許状取得	37	41 父死去	42 母死去	46	55 子会社に出向	60 マンション購入	62 転居・ひとり暮らしとなる	65 定年退職 関係会社に再就職

③ 定年時の状況・定年後の生活変化

現役時代は継続して経理事務に携わってきた。洋裁、華道などの習い事を現役時代から続けており、一時期、昼間は会社で働きながら夜は各種学校で洋裁を教えるということもあった。

定年時には退職することも考えたが、転居したばかりで近所に知人も少なく、働きつづけた方がよいと考えて再就職している。定年後もフルタイムで週に５日働いており、生活に特に変化はない。勤務先が現役時代より近くなり、通勤が楽になった位である。現在は残業もほとんどなく、退社後の時間は会社の人と飲みに行ったり、カラオケに行ったりすることもある。

ひとり暮らしは５年程前に自分のマンションを購入し転居してからである。それまでは両親が健在の間は実家で両親、上の弟家族と同居、両親の死後は部屋、台所を分け、お互い干渉しないで生活するようになった。マンション購入は、関連会社の販売する物件を紹介されたものである。資金は若い頃から知人に勧められ株の購入を続けており、また株価も頂点に達した頃

だったため、ほとんど融資を受けずに用意できた。弟家族と同居していた頃は気兼ねもあったが、今は好きな時に友人を自宅に呼べるし、良かったと思っている。偶然、転居先から徒歩で行き来できる所に学校時代からの友人が住んでおり、一緒に麻雀をするなどしている。

④ 生きがいのとらえ方・対象

生きがいは仕事から出てくると思う、と述べる。職場の人間関係や仕事で評価や収入が得られるという点でもなく、仕事をして会社の為になるという点に生きがいを感じているという。仕事内容も自分に合っていると感じており、自分が長くやってきたことを生かせることが生きがいであるとも述べる。有用感を実感できることが生きがいにつながっているようである。

一方でＦ－ｅ氏は現役時代から様々な習い事をし、洋裁、華道などいずれも人に教えるレベルにまで達している。洋裁学校に行きはじめた動機は、会社が男女平等について考える時代ではなく、一生懸命に働いても評価されない状況で、別に特技を身につけた方が良いと考えたためである。洋裁では各種学校講師をした時期もあり、洋裁店を開くという夢を持ったこともあったという。しかしその頃でも昼間の仕事がつまらないと感じることはなく、両方が楽しく、生きがいが感じられるものであった。趣味は仕事の余暇にやるもので、いくら趣味が楽しくても仕事の代わりにはならないと感じており、楽しみも仕事の中で得られることの方が多いと述べている。このように、Ｆ－ｅ氏は趣味を楽しみつつも生きがいは仕事であると考えている。定年後も継続して就労しており、やはり現在も仕事に生きがいを感じ、可能なら70歳位までは働き続けたいと考えている。しかし退職後の生活についても考えはじめており、退職するまでに何かをみつけたいと述べ、仕事に代わるものとしてボランティアをやりたいと考えている。

⑤ 定年後の生きがい創造に関わる意識・行動

学校時代の友人、会社の友人、洋裁など趣味を通じた友人との関係を大切にしており、これらの友人との行き来や麻雀、旅行を楽しんでいる。洋裁関係の知人、会社の知人などよく一緒に旅行に行くグループがいくつかあり、海外旅行にも比較的若い頃から何度も出かけているという。趣味は一人でコツコツできるものが好きで、定年後は書道をはじめた。ボランティアは既に行っている友人の話を聞いて興味を持ち、朗読ボランティア、得意な経理やソロバンを利用したボランティアなどができればと考えている。ボランティアには、趣味とは違い仕事での充実感に近いものが得られるのではないかとの期待がある。

今後の生活については、ひとり暮らしで病気の時の心配はあるが、経済的には全く不安がないと述べている。これもＦ－ｅ氏の生きがいを支える大きな基盤となるものであろう。

第Ⅳ章　グループインタビュー調査・個人面接調査結果総括

人は、その生涯の中で様々な出来事を体験する。定年あるいは退職は、サラリーマンの出会うこうしたライフイベントの主要なものの一つと位置づけることができる。

ところで、ライフイベントそのものの持つ意味を一義的に規定することは、必ずしも正しくない。なぜなら、ある特定のライフイベントが、個人を取り巻く外的状況やそれに対する主観的な認知、あるいは個人の内的諸事情・諸要因等によって肯定的にも否定的にも作用し得るし、また評価もされるからである。定年あるいは退職も同様である。定年や退職を迎える個人に対して、その事実は肯定的にも否定的にも作用し得るし、個人の側からの定年や退職に対する主観的な評価も様々である。

また、ライフイベントが個人に与える影響、あるいはそのライフイベントに対する個人の側からの評価は、特定の一時点でなされるわけでもない。これが、ライフイベントを検討する際に考慮しなければならない第二の側面である。ライフイベントは、その事実が発生する一連の時間経過の中でとらえなければ、その本質は明らかとはならない。

定年や退職も、その事実の発生する前後の様々な要因の影響を受けて、どの様な定年（退職）の仕方をしたのか、その後どの様な生活に変化していったのかをとらえることで、初めてその事実の個人に対する影響を、評価することが可能となるのである。本調査では、定年（退職）というライフイベントが、生きがいの喪失または創造にいかに影響するかを検討することを目的としているので、定年前後の生活や状況の変化、あるいはその変化に対する主観的な変容を分析することによって、この目的を達成しようとするものである。

今回のグループインタビューおよび個人面接調査は、第１次調査をさらに質的に深めるために企画された。そして、その際の課題として、以下に挙げる４つの仮説を検証することを目的とした。

仮説１　定年・退職は、生きがい喪失の要因となりうるか。

仮説２　定年後、生きがいのとらえ方は変容する。

仮説３　定年後、生きがいを得る「場」は変容する。

仮説４　生きがい喪失・創造のプロセスと性格特性の間には一定の関連がある。

本総括では、上記の４つの仮説に関してグループインタビューおよび個人面接調査の結果を考察していくこととする。

Ⅳ・1　定年・退職と生きがい喪失の関係

グループインタビュー調査を実施した6グループのうち、AからDの4グループは現職の有無にかかわらず定年を経験したグループであり、グループE（現役）とグループF（女性定年経験者）を比較群と位置づけたが、これらの中で生きがい喪失経験があると回答したのはグループA（喪失経験グループ）の構成員であった。したがって、ここでは喪失経験グループの構成員の発言と他のグループの発言を比較しながら、定年または退職と生きがい喪失の関係について検討してみたい。

(1)　定年の迎え方または退職の仕方の問題

喪失経験グループの構成員に共通した特徴の一つとして、定年または退職の際に何等かのトラブルなり問題点が認められ、それがその後の生活の中でも解消されていない、という点が挙げられよう。

定年（退職）時において、仕事や職場に対するいかなる未練も払拭できたという者は、どのグループにもほとんどいなかったし、また定年後の生活に対する具体的な計画なり準備をそれ以前から行っていた者もほとんどいなかったことを考えると、定年時に問題の存在することが、直接的に生きがい喪失に結び付くわけでないことは明らかである。喪失経験グループの発言の中に顕著だったのは、現役時代の仕事に対する不完全燃焼感に基づく不満と未練である。他のグループは、仕事中心の現役時代を過ごし、もちろん未練はあるものの達成感、充実感がそれを上回っていると感じているようであったが、喪失経験グループでは不満と未練に関する発言の方がそれらよりも多いという印象を受けた。

喪失経験グループの構成員の一人であったA－d氏は、退職時には重役であったが、交代したオーナー2世と意見が合わずに子会社を経て退職した。A－d氏の場合、オーナー2世よりも社歴が長く、会社の経営難を中心になって乗り越えてきたという自負もあり、会社との一体感がきわめて強かった。会社が自己の内部の多くを占めることによって自己拡大感を抱いている典型例といえよう。

会社という組織に所属し、何等かの役割を担うことによって、個人の力では不可能な様々なことが可能になる。これを自己の力に帰属するところに自己拡大感が生じるのである。特に、課長、部長、重役といった役職は、会社組織内におけるシステムとしての完成度が高いだけに、上司・部下の関係を単なる役割を越えた、いわば主従関係と取り違えている者さえある。しかも、それは自己拡大感をともなっているだけに、個人にとっての生きがいになりやすい。システムがしっかりしていればいるほどそこから抜け出ることは困難なのであるから、会社という組織の中でこうした自己拡大感を抱いている場合には、定年ショックも大きいであろうことは容易に予測できる。拡大した自己を表す「肩書」は、容易には抜け出せないほどに、既に本人を深く包み込んでしまっているのである。

定年が明確であり、それに対して少なくとも心理的な準備さえしておけば、たとえ会社に対して幻想を抱いていたとしても、定年時における心理的な落ち込みはかなり抑えられるのではなかろうか。A－d氏に限らず、喪失経験グループの構成員の「会社は冷たい」という発言は、会社に捨てられたという定年（退職）イメージを形成しているのである。

(2) 定年に対する評価

定年制度が法律で禁止されている米国では、ハッピー・リタイアメントという言葉もあるように、退職は必ずしも否定的なイメージでとらえられているわけではなさそうである。なぜなら、退職は自らの選択の結果であること、そして労働は金銭を対価として自己を提供すること、というとらえ方が根強いことにあるのだろう。よく言われるように、仕事(work)と労働(labor)の違いといえようか。

自己の仕事を主体的なworkととらえた場合、他律的に定められてしまっている定年には、やはりハッピーとはいえない面があるのではなかろうか。一方、自己の仕事が他律的なlaborであるならば、全ての時間を自分に取り戻せる退職は、ハッピーで有り得るだろう。その意味では、仕事の質からみて、ブルーカラーの人々は、退職を肯定的にとらえるのが自然といえるかもしれず、それに対してホワイトカラーの人々が退職するのは、否定的な現象なのであろう。しかしながら、わが国の場合、たとえ会社勤めのサラリーマンであろうと、あるいはまたその仕事の内容がlaborに相当するものであろうと、会社の側に社員の仕事に対する主体性を限りなく求めようとする現実がある限り、制度としての定年は、肯定的にとらえられることはない。可能性としてあり得るのは、それまでの自己の仕事に決着をつけ、充実感を感じられるように、心理的な準備をしておくことだけである。そのためにも、定年後に来る新たな生活がきわめて魅力的であることは、本来不可欠の条件のはずである。

グループインタビューの結果をみると、積極性上位グループ（社会活動なし）と現役グループに定年のイメージそのものが希薄な傾向はあるものの、肯定・否定五分五分の意見がみられ、また、積極性上位グループ（社会活動あり）と積極性中・下位グループおよび女性グループでは、やはり定年の否定的側面と同時に肯定的な面も評価しており、その中から今後の生活に向けて肯定的な面に注目していこうという姿勢が伺える。一方、喪失経験グループでは、定年ショックが大きかったために、「定年前に予定していた旅行や趣味などもする気にさえならなかった」とういう発言にもみられるように、定年に伴う心理的なストレス反応が強く、したがって定年の否定的な側面に対する発言が多かった。

定年の否定的な側面、例えば、社会とのつながりが希薄になり孤独を感じる、役割や有用感を失って生活に緊張感がない、等の発言はどのグループにもみられたが、問題は、こうした定年の内包するマイナス面にいかに対処するかであろう。喪失経験グループでは、対処法自体のイメージが希薄であり、自己の中で定年ショックを解消しようとする意欲さえ見られない。ところが積極性上位グループ（社会活動あり）と積極性中・下位グループでは、定年を肯定的に

とらえて具体的に対処しようとしている姿勢が窺える。

(3) 定年ショックへの対処

喪失経験グループでは、定年ショックへの対処法として具体的な行動は認められず、「考えようとしない」という対処法が取られる傾向にあった。この傾向は、積極性上位グループ（社会活動なし）にも認められたが、喪失経験グループとの違いは定年後の会社や部下とのつながりの程度に関連している。積極性上位グループ（社会活動なし）の構成員には退職時に役職者だった者が多く、退職後の変化をあまり感じないほどに、人間関係を中心とした会社との関係が継続していた。積極性上位グループ（社会活動なし）にとっては、この関係をいかに維持し続けるかが、今後の生活にとっての重要な課題となるであろう。

一方、積極性上位グループ（社会活動あり）と積極性中・下位グループでは、定年後の仕事以外の生活の場に対する再評価がみられたり、あるいは実際の行動がみられる。例えば、家庭、特に配偶者との関係に対する反省と具体的な行動計画が発言されたり、既に実施している行動（共通の趣味の開始等）の説明が行われる傾向がインタビューの中で目立ったし、そのような発言に対する賛意の表出も他グループに比べて頻繁にあった。また、仕事以外に様々な趣味や活動の場を持っている者もこの両グループに多かったように思われる。

(4) 仕事に対する意識の転換

退職に対するソフトランディングのための定年後の再就職の必要性に関しては、どのグループにおいても多くの参加者から発言があった。しかしながら、定年後の再就職先の仕事の内容として現役時代の水準を求める場合には、再就職はきわめて困難になる。仕事にやりがいと生きがいを求める程度が強いほど、仕事に求める価値を定年後に変換しない限り、たとえ再就職ができても長続きはしないし、かえって生きがい喪失の原因ともなりかねない。長年の経験を生かせる仕事を得ることが、少数の例外を除けばほとんど不可能ともいえる現状では、現役時代よりも質的に下位と考えられる仕事に対して拒否的態度を取る者が、再び職を得ることはほとんど不可能といってもよいであろう。したがって、最も再就職の希望の高い喪失経験グループにおいて、再就職が最も困難だったのではなかろうか。今後の高齢社会では、高齢者が経験と能力を生かせる雇用環境をつくることは、是非とも必要であろう。しかしながら、そのような仕事を求める人のすべてが、それを手に入れられるようになるとは考えられないのであるから、それでもなお仕事をし続けたいのであれば、仕事に対する態度や価値観を転換する以外にはないと思われる。

積極性上位グループ（社会活動なし）のＣ－ｅ氏は、もともと生涯現役で仕事を続けることが希望であった。Ｃ－ｅ氏は、定年が近くなると続けざまに複数の資格を取り、それをもとに個人で仕事をしていくことを決心し、みごとに実現した。組織から個人への転換である。また、積極性中・下位グループのＤ－ｃ氏も一度は再雇用に失敗したものの、その後収入のある仕事

をすることが生活の張りや活力となり、健康維持にも有効である、というように価値観の転換を行うことによって、現役時代の管理的職務から現在の単純作業的労働に適応している。D－c氏の場合、さらに趣味や家庭生活の幅を広げることによって、仕事もそれらと同列に考えられるようになったという。C－e氏やD－c氏の様に、再就職や仕事の継続に成功した例では、必ずや現役時代の仕事に対する考え方から何等かの転換が図られていると思われる。

Ⅳ・2　定年後の生きがいのとらえ方の変容について

今回のグループインタビューの対象者のほとんどが定年前に最も「やりがい」のあったことは仕事であると答え、さらにそう答えた者の多くがそれを「生きがい」ととらえていた。まずこれが前提である。すなわち、多くの者が現役時代は仕事が生きがいの源泉であったということであり、それが退職後変化したか否かということが、ここでの関心の焦点となる。

(1)　生きがいの対象と内容について

男性ＯＢ４グループのインタビューの結果から、生きがい対象については２つに分かれた。喪失経験グループと積極性上位グループ（社会活動なし）は、あくまでも仕事が最高の生きがいを与えてくれるのであり、それに代わり得るものはない、という立場であった。一方、積極性上位グループ（社会活動あり）と積極性中・下位グループは、確かに仕事は生きがいを与えてくれるものではあったが、定年後は他の分野にも目を向けるようになり、それが生きがいとなっている、という立場に意見を集約できるであろう。

前者では、退職後の趣味を中心とした生活は、あくまで遊びであって、仕事をしているときのような目標ややりがいを得ることはできない、と考えられている。したがって、趣味でもやる以上は、目標があり評価の得られるものを持つか、それが困難ならば、趣味を楽しむことで老後生活を納得したい、という消極的な態度がみられた。一方、後者では仕事の価値は認めるものの、定年後は好きなことをやればそれが生きがいになる、という柔軟性と楽観性を併せ持っていた。

積極性上位グループ（社会活動あり）と積極性中・下位グループのインタビューの中からは、「現役時代は仕事が生きがいだと思っていたが、定年後の生活を始めてみるとそうではないことに気づいた」という内容の発言も出てきており、それに対する賛意の表出もみられた。しかしながら、「では生きがいとは何かということになると明確な回答は難しい」ということになったが、比較的多くの参加者から、ボランティアが生きがいにつながるのではないかという声が挙がった。しかも、ボランティアは、すべてのグループに共通して生きがいの対象として挙げられたのである。自己の価値や存在を確認することは、趣味では難しく、他人の役に立っているという有用感を感じられるボランティア活動こそ、定年後に生きがいを与えてくれる場である、と誰もが感じているようであった。このようにボランティア活動を位置づけていなが

ら、現実にボランティア活動をしている、あるいはしたことがあるという者は、個人面接の対象となった積極的上位グループ（社会活動あり）のＢ－ｃ氏ほか数名程度で、他はやりたいという意向のみであった。

Ｂ－ｃ氏は、後の個人面接の中で「ボランティアが生きがいと言っておくと恰好がいいからですよ」と言って、自分のやっているボランティアもまだ生きがいというところまで行っていないと述べていた。女性の一人も、かつて老人のお世話をするボランティアをしたことがあるが、それで良いこともあったが、その老人の親戚から嫌な目にあったこともあったという。ボランティアが真に生きがい対象となるにはこのような難しい点もあるが、インタビューの中でも指摘されていたように、ボランティア活動が、組織あるいはシステムとして、誰もが入りやすく活動のしやすい状況になることは必要であろう。

(2) メタ概念としての生きがい

インタビューを通じて、「生きがいとは何か」についての考えがあるか否かということが、定年後の生活に大きな影響を与えているように感じられた。こうしたいわゆるメタ概念（「調査実施概要　5．(1)本報告書における用語について」参照。）は、人によってはその個人の信念体系を構成している場合もあり、人生そのものに関わってくる。特に積極性上位グループ（社会活動あり）と積極性中・下位グループの構成員の間では、「生きがいとは何であろうか」という発問がしばしば成された。積極性上位グループ（社会活動あり）では、「生きがいとは与えられるものではなく、自分で求めるもの」、「いつも感じているものではない」などの意見が出され、積極性中・下位グループでは、存在感や有用感の得られるものであって、働きがいとは別物であるという意見が注目された。中でもＢ－ｃ氏は、生きがいについて「本物の生きがいは、知性的・芸術的に水準の高い目標へと人生をかけて向かって行くことだと思うが、ほとんどの人の場合それは不可能であるから、仕事をその代償と考えるのであり、定年後にボランティアを生きがいにしたいと答えるのもそれと同じである。そして、それで良いのだ。」と述べている。確かに、生きがいをその個人の生きる意味や価値を表す概念であると考えるならば、Ｂ－ｃ氏の発言は的を得ているし、事実、生きがいについてのそうした考え、すなわち自己実現こそが生きがいであるという考え方は、メタ概念の主流であろう。それが正しいか否かは結論の出せることではないが、このように「生きがいとは何か」について深く考え、信念として自己の中に位置づけられるということは、行動や生活の方向を決めることができるという意味で重要であろう。しかも、定年はそのチャンスでもある。

Ⅳ・３　定年後の生きがい獲得の「場」の変容について

定年または退職後は生きる「場」そのものが変容する。一日の多くの時間を費やしていた仕事の「場」がなくなるのであるから、新たな生活の「場」が生きがいを得る「場」になること

は重要である。

(1) 生きがいを得る「場」の特性について

再就職した場合であったとしても、定年後は主観的にも客観的にも定年前の状況と同じというわけにはいかない、という者が多数であろう。したがって、現役時代に仕事が生きがいの重要な構成要素の一部を成していた多くのサラリーマンにとって、定年後は、再就職の有無にかかわらず、生きがいを得る「場」が変容せざるを得ない。

これまでも繰り返し述べてきたように、喪失経験グループは、定年後の生きがいの場の転換がスムースにいっていないため、新たな生活の場が生きがいの場となっていない。同様に積極性上位グループ（社会活動なし）も、定年後においても生きがいは会社関係とのつながりの中で形成されており、生活の場の変化に対応しているとはいえないが、現在のところ破綻は起きてきていない。一方、積極性上位グループ（社会活動あり）と積極性中・下位グループには、現役時代から徐々に生活そのものや考え方を転換してきている者が多く、生活の場の変容に即して生きがいの場も変容させようとの努力がみられた。女性グループの場合は、常勤で勤めているにもかかわらず男性と対等な扱いを受けてこなかったこともあって、会社への帰属感が希薄なことや会社に対する不信感から、会社とは別の「場」に現役時代から生きがいの場を得ているようなケースもみられた。例えば、女性グループのＦ－ｅさんは、既に若い頃から余暇時間を利用してけいこ事や習い事の教室に通い、資格を獲得していく過程で、会社からの独立を計画していたという。彼女の場合は、独立こそ実現しなかったものの、修得した技術に基づく創作やその中で築いてきた人間関係が、生きがいの源泉になっていた。この点、男性とは異なる特徴であろう。

また、積極性上位グループ（社会活動あり）や積極性中・下位グループで生きがいの場の転換に成功している例は、生きがいを非日常に求めるのではなく、日常生活の中に求めることの重要性に気づかせてくれる。現役時代は、忙しい日常生活から逃れて非日常の世界に遊ぶことを楽しみとし、その願いを定年後に果たそうと考えている者が多数を占めることは、定年後の計画をたずねたときに「旅行をしたい」という回答がいかに多いかをみればすぐに分かる。しかしながら、非日常は重要な楽しみの舞台ではあっても、生きがいの場にはなり得ない。それは、日常があってはじめて非日常が存在するからで、人が生きていく場は日常にしかないからである。その意味でも定年後の生きがい獲得の場は、日常生活の中に探っていかなければならないであろう。

(2) 生きがいを得る「場」の検討

ここでは、グループインタビュー調査の結果から、生きがい獲得の場として挙げられる頻度の多かった①仕事・会社、②家族・夫婦、③地域活動・ボランティア、④趣味活動の４領域に関して検討することにした。

① 仕事・会社

どのグループにおいても、仕事ないし会社は、大なり小なり生きがいの一部を構成しているように思われた。仕事は、生きがいの重要な構成要素としての使命感、役割達成感、充実感、さらには情熱の対象を与えてくれるし、会社という組織に属することで、帰属感やそれに基づく安定感や有用感が得られ、自己拡大や評価の授受（やりとり）が経験でき、さらには人間関係の獲得の最大の場ともなる。このような特性は、明らかに生きがいを提供する場にふさわしい。

近年の社会的風潮として、仕事や会社が生きがいの場である、という人を非難する傾向が見られるが、仕事や会社が、生きがいの場にふさわしい幾つもの特徴を有している以上、こうした非難は必ずしも適切ではないように思われる。

しかしながら、仕事や会社という場が、生きがいの対象であるということの問題点として、そこでの生きがいの対象の多くが自己創造の産物ではないこと、役職上の役割を自己の内部に存在しているものと取り違えてしまう傾向のあること、他律的に決められている定年や退職によって「場」が奪われてしまうこと等、生きがいの場としてふさわしくない面も多々あることが挙げられよう。また、定年後の仕事に対しては、前述したごとく価値観の転換が必要であることも付け加えておく。

② 家族・夫婦

家庭や家族を生きがいの対象とする者の比率も多い。家族成員の中でも、子供はその存在そのものが生きがいの対象となることが多い。しかしながら、配偶者とは、いかなる関係を持つかが、生きがい対象となるか否かの岐路といえよう。

定年後は配偶者との関係を重視したい（している）、という傾向がどのグループにもみられた。そのあり方として、共通の趣味を持つ、家事の分担をする、会話を増やす等が挙げられた。男性の多くが、現役時代にはこれらのことに一切関心と努力を払わなかったと発言しているので、これを考慮すれば、定年後に配偶者との関係を重視したいという発言がみられるのは、夫役割の喪失の影響にほかならない。仕事をして家族を養うという夫としての役割の一側面を喪失した後に、新たな役割の探索の第一歩として、今まで無視してきた夫役割のもう一つの側面の探索が始まったというわけである。

きっかけはともあれ、配偶者との関係を充実することは、定年後の生活にとって重要な側面である。なぜなら、定年後の生活の基礎は、現役の時以上に家庭にあるからである。家庭を基礎にした生活は、男性よりも女性の方が上であるから、夫は、妻の持っている役割や行動を模倣することから、新たな楽しみや生きがいにつながる活動を獲得できるかもしれない。しかし、さらに重要なのは、生きがい獲得の場というよりも、生きがい獲得の背景あるいはリソースとしての家庭の役割であろう。家庭は生きがい獲得の場であると共に、生きがい獲得のための条件でもある。なぜならば、家庭がある場合には、それが安定していてこそ、その上に立ったさらに他の人間関係や自己実現のプロセスを歩むことができるからである。

③　地域活動・ボランティア

地域活動の中でも、ボランティア活動に対する意向は、どのグループでも大変高かった。しかしながら、ボランティア活動以外の地域活動というと、老人クラブや自治会程度しかイメージの中にはない。しかも、これらに対しては、特に都市部の居住者からは拒否的反応が多く、そもそも生きがい獲得の場として考えられていないようであった。この点は行政側にも問題があるのではなかろうか。あるいは、都市化社会においては避けられない現実なのであろうか。今後の超高齢社会における地域住民の相互協力・相互扶助は重要な課題なので、地域活動に対するこのような拒否的態度には、大きな問題が内在していると思われる。

こうした事情が、生きがいとしてのボランティアに対する意向と行動のギャップを生み出しているのかもしれない。ボランティア活動は、「人の役に立っている」、「自分がいなければこの人が困る」といった有用感や使命感を満たしてくれる特性を有するので、自己存在の意味や価値を直接的に実感できる活動とイメージされている。ところが、実際の行動にはほとんど結び付いていないのである。

「生きがいはボランティアだ、と言っておけば格好がいいからですよ」という発言もあったが、意向と行動のギャップの理由はそれだけでもなさそうである。ボランティア活動の障害としては、「きっかけがない」、「構えてしまって気軽に始めることができない」、「束縛されるのではないか」、「難しそうだ」等が挙げられた。中には、具体的にこれこれのボランティアをしたい、と述べた参加者もあったのだから、ボランティア組織の充実を地域の中で実現していくことが、重要な課題なのではなかろうか。

④　趣味活動

趣味活動は、定年後の生きがい作りの大きな柱の一つである。趣味活動といっても、形態としては、物を作る創造型の趣味、旅行を代表とする見聞型の趣味、ダンスやスポーツといった体験型の趣味、文学や歴史などを学ぶ学習型の趣味等に分類できるし、目標追求を課題とする自己実現型、趣味の内容を楽しむことを目的とした享楽型、人との交流を目的とした対人型というように、その目的によって分類することもできよう。

趣味活動を生きがい獲得の場にできるか否かは、自分のやりたいこと（趣味の形態・内容）と自分にとって生きがいとなり得ること（趣味の目的）とが一致するかどうかが重要な要因である。そのための条件として、生きがいに対するメタ概念を発展させること、行動に移すこと、こだわりを持たないこと、積極的であること、マメであること、好奇心を維持し続けること、等が指摘できるのではなかろうか。これらについては、次の性格との関連も見逃せない要因である。

Ⅳ・4　生きがい喪失・創造のプロセスと性格

生きがいを獲得するきっかけは様々であり、以下のようなものが考えられる。

①与えられる（受動的に受け入れる）

②探索する（いろいろと試してみる）

③遭遇する（出会い）

④模倣する（人に誘われて・人のやっているのを見て）

⑤派生する（仕事をきっかけに○○が生きがいになった）

⑥気づく（これが生きがいだったのかと知る）

⑦思い込む（これをしていると楽しいから生きがいのはずだ）

⑧行動化する（生きがいとは○○である。だからこれをやる）

これらのきっかけは、様々な場で得られる。どのきっかけから得られた生きがいが良いとか、長続きするということはなく、こうしたチャンスを生かすことができるか否かが鍵となるものと思われる。この点において、生きがいと性格との関係が示唆されるかもしれない。

(1) 生きがい喪失と性格の関連

生きがい喪失体験があると感じている喪失経験グループの構成員と他のグループ員を比較した場合、最も印象深かったのは、喪失経験グループの構成員の社交上の未熟さである。それを示す次のようなエピソードがある。

インタビュー会場に現れた各グループの参加者は、いずれも初対面同士であった。三々五々現れた参加者は、順に会場に通され、開始の時間になるまで司会者を待つように言われた。こうした状況の中での参加者の行動を観察していると、通常は、他の参加者が入室するたびに互いに挨拶を交わし、自己紹介なり世間話なりを始める。グループによっては、司会者が入室するまでに既に互いに十分リラックスしている場合さえあった。ところが、喪失経験グループだけは、司会者が入室して話し始めるまで、互いに会話を交わすこともなく無言で待つばかりであった。

また、グループディスカッションが始まると、通常、司会者は話の進行役をするだけで、話題を提供すると自発的に討論が進んだのであるが、ここでも喪失経験グループのみは、参加者同士の討論にはならず、司会者の問に個別に答えるという形にしかならなかった。すなわち、司会者からの与えられたきっかけにしか反応しないという傾向が強く印象に残っている。

こうした観察に加えて、喪失経験グループでは、対人関係に失敗した経験があったり、地域の人々とは交流したいがきっかけがない等の発言がみられ、対人関係上の技術の欠如が顕著に認められた。また、配偶者に対しても「定年後は妻を大切にしてやろうと思う」という発言にみられるように、対等な関係として認め合い、生活を共有しようという態度が窺えない。これは、態度の問題は別にしても、そのような発言が一般的に正当なものとして受け入れられるか否かについての感覚の欠如を示すものであろう。

また、喪失経験グループでは「趣味だけの生活では飽きるのではないか」という発言にみられるように、行動を抑制するような考え方をする傾向がみられ、生活の場のバラエティが総じ

て狭いようであった。これは、好奇心の幅の狭いことを反映しているように思われる。

さらには、発言の中で、会社批判が他のグループに比べて多かったこと（他罰的・責任回避傾向）、生きがいについてのメタ概念がないこと（内省的な部分の欠如）、力強さが感じられないこと（積極性や意欲の低さ）などが性格傾向として感じられた。

(2) 生きがい創造と性格の関連

生きがい創造に関与する性格としては、前述の喪失に関連する特徴の無いことがまず挙げられると思うが、さらに、それが創造に至るためには、何を生きがいと感じるかにも関連すると思われる。生きがいは、必ずしも一つのことを指すわけではないし、一人で複数の生きがいを持っていることもある。ここでは、生きがいとして、自己実現型の生きがいと対人型の生きがいを比較してみたいと思う。

自己実現型の生きがいは、思考が内省的で粘り強くなければ容易に成し遂げることができない。したがって、「段」や「級」などの向上のための指針が外的に用意されていると、継続がより容易になる。また、自己の役割や現在の状況に固執しない柔軟性や向上心も要求されるであろう。妻の負担を軽減しようと料理を始めたのがきっかけで、料理教室に通って自作の料理を作るようになったＢ－ｂ氏は、また、大学の公開講座に通って文学と歴史の勉強を始めたところである。

一方、対人型の生きがいは、自己実現型に比べると比較的容易に満足を得ることができる。しかしながら、そのためには積極的にどこへでも出かけて行って、他者との関係を作れるだけの社交性に優れていることが条件である。また、好奇心も強く、話題も豊富でなければ、魅力的な人間関係は維持できない。決して受身ではなく、率先して行動に出るマメさも必要であろう。地方在住のＤ－ｅ氏は、現役時代から仕事と共に地域活動や趣味活動が活発で、その中で指導的立場を果たしながら、最近では一人暮し老人の話相手になってもいる。夢は、配偶者と全国の老人ホームを巡回して理髪サービス（妻が理容師）をすることだというのである。

第Ⅲ部　デプスインタビュー調査結果の詳細

第Ⅰ章　シニア期の生きがい創造のメカニズムに関する事例研究

（東京家政大学　西村純一，帝京大学　滝聞　一嘉）

Ⅰ・1　課題と方法

(1)　課題

生きがい喪失の危機は、若年からシニアにいたるどの世代においても生じうる問題であり、必ずしもシニア期特有の問題ではない。しかし、シニア期には生きがい喪失が生じやすく、また深刻な問題となりがちないくつかの背景が認められる。

人間の一生は、ある意味で獲得と喪失のプロセスであるが、シニア期には特にいくつかの大きな喪失が生じやすい。その主要なものは、「心身の健康の喪失」「経済基盤の喪失」「社会的かかわりの喪失」「生きる目的の喪失」の四つで、しばしば「四つの喪失」と呼ばれている。また、これらの喪失をつきつめたところに「生きる意味の喪失」があると指摘する人もいる。

これらの喪失は、必ずしもシニア期に限られたものではないが、老化が進行し、死が頭をかすめるシニア期に多いことは否めない。年をとると抵抗力が落ちて、心身の健康を害しがちである。定年退職により、何もすることがなくなったり、収入が減少したり、社会的コンタクトが減少したりしがちである。家族や会社のために働くといった目標がなくなってしまいがちである。また、配偶者を亡くす人も少なくない。

もとより、シニア期には喪失のみが生じているわけではない。心身が衰えてくると、それを補う生活の智恵とでも言うべきものがいろいろと働くようになってくる。仕事の煩わしさから解き放たれて、自由に生きる時間ができる。仕事以外にも社会と触れあい充実感を味わうことができることを知る、等々。シニア期において、はじめて獲得される側面も決して少なくないのである。

しかしながら、全体としてみると、シニア期は創造の時代というよりも喪失の時代という印象をもつ人が多い。そうしたシニア期をネガティブなイメージでとらえるいわばステレオタイプが、若者だけでなく、シニア自身のなかにも潜んでいる。このようにシニア期をネガティブにみることは、シニア期の人間発達の可能性を否定し、心豊かな老年期への移行の大きな阻害要因となる。

したがって、こうしたネガティブなバイアスにとらわれずに、シニア期の創造的な生き方の側面にもっと光を当てていく必要があるのではあるまいか。もとより、シニア期の喪失の側面に目をつむるということではない。それも含めて、シニア期の創造的な側面をもっと明らかにしていくことが、心豊かな老後の問題を考える上で重要になってきているのではあるまいか。

本研究では、このような問題意識から、シニア期の生きがいの創造（喪失を含む）のメカニズムを事例研究法によって探ることを意図している。

これまでに生きがい研究会では、生きがいをめぐる文献研究やサラリーマンシニアを対象とした質問紙調査を実施してきた。文献研究の結果によると、そもそも生きがいの概念をめぐって様々なとらえ方があり、定義自体が、研究者の間で必ずしも一致していない。また、サラリーマンシニアを対象とした質問紙調査の結果、個々人の生きがいの受けとり方も人によって様

々であるということが明らかになっている。また、質問紙調査の回答では、研究者によって用意された選択肢の範囲で選んでいるため、一見、同じ生きがいのとらえ方の人がいるように見えるが、実際には、その人がそれを生きがいと感じる文脈は、一人一人違っていることが考えられる。

本研究の課題は、研究者間の生きがいのとらえ方を明らかにするのではなく、あくまでサラリーマンシニア個人の生きがいを明らかにすることにある。こうした課題の性格に鑑みると、質問紙調査のように研究者の側で一方的に操作的に生きがいの意味を用意するのではなく、個人の感じたままの生きがいをとらえることが必要であり、重要であると考えられる。結果的に、一定の概念的理解に基づくアプローチが有効であることが見いだされることがあるかもしれないが、生きがいの概念が確立していない現段階にあっては、できるだけ個々人の実際に感じている生きがいにアプローチしていくべきであると考える。

また、個々人の実際の生きがいの問題は、優れて個性的な内面的世界の問題である。こうした独自の個性と世界にアプローチするには、事例研究法のようなアプローチや個人の内面を投影させるようなアプローチが有効ではあるように思われる。そこで、事例研究法にもいろいろなアプローチが考えられるが、本研究では、構造化されない自由な面接のなかで、本人にあるがままに自己の内面を語ってもらうという方法を用いることとする。もし、本人がそのようにあるがままに語ってくれた場合には、科学的アプローチの及ばない貴重な資料を提供してくれる可能性があろう。また、なかなか言葉では表現しにくい、生きがいのレベルやその基盤となる人間関係の微妙な綾をとらえるために、ある種の投影法的アプローチを試験的に試みる。

このような視点から、本研究では、個人の生きがいの創造のメカニズムをあまり構造化されない面接や投影的方法を用い事例研究法的に分析することとする。また、個々の事例の分析を踏まえて、次のような仮説に若干の検討を加えることを意図している。

・仮説1　定年退職は生きがい喪失の要因となりうるか。

・仮説2　定年後の生きがいのとらえ方は変容する。

・仮説3　定年後、生きがいを得る場は変容する。

・仮説4　生きがい喪失・創造のプロセスと性格特性との間に一定の関連がある。

これまで、シニア期には定年退職による、いくつかの喪失があると想定されていた。定年退職すると、何もすることがなくなったり、収入が減少したり、社会的コンタクトが減少したり、生活の目標がなくなったり、アイデンティティがなくなったり、等々。しかし、シニア期には定年は本当に生きがい喪失の原因となるのであろうか。また、必ずしも定年によって生きがい喪失の状態に陥っていないとすれば、何がその喪失を補償しているのか。仮説Ｉの検討では、そのメカニズムを探ることとする。

最近は、かなり変わってきたようであるが、サラリーマンシニアの中には、仕事が生きがい、で頑張ってこられた方も少なくないとみられる。こうした方々は、定年退職したり、第2の勤めとなると、仕事は生きがいではなくなるのか。定年退職によって、生きがいのとらえ方、感

じ方が変わってしまうのか。また、翻って、仕事が生きがいというのは、何だったのか。仮説Ⅱの検討では、こうした生きがいのとらえ方がどのような文脈で規定されてきているのか検討してみたい。

仮説Ⅱとも関連するが、定年退職したり、再就職したりして、生活の場が変わったり、自由時間が増えると、生きがいの対象や生きがいを得る場が変わるのであろうか。変わるとすれば、何から何へ変わるのか。また、その変わった理由は何なのか。仮説Ⅲでは、こうした生きがい対象の変化の文脈を探ることとする。

生きがいの問題は、優れて個性的問題であるということを指摘したが、生きがいのとらえ方や感じ方にその人のパーソナリティがどのように関連しているのか。パーソナリティの概念は研究者間で必ずしも一致していない。仮説Ⅳでは、昔から自分について感じてきた自分の性格の自己評価、あるいは本人の身近な人の評価などにもとづいて本人のパーソナリティを把握し、それとその人の生きがいとの関連を検討することとしたい。

(2) 方法

① 対象者の選定

平成３年度の質問紙調査で追加調査に応諾した 810件（住所の不備等14件を除く）を対象として応諾者の面接可能性の検討を目的とする事前調査が実施された。

その結果、関東の男性全体、関西と愛知県のＯＢ男性、計 328件が選定され、その中から我々のチームの対象として、関東16件、関西ＯＢ27件、愛知県９件が割り振られた。

当初は、現役にも面接し、定年後の人との比較検討も考えたが、ケースも少なく有効な比較は難しいとの判断から、とりあえずＯＢに絞った。さらに、面接担当者の地理的・時間的な都合により、下記の関東７件、関西６件に絞った。選定に際しては、事前調査の結果から仮説を検討する上で興味深いケース、お互いの面接日時・場所の都合などを考慮した。なお、電話による打診の段階で、拒否が１件あった（健康を害している事例）。

② 面接調査の手続き

a. 事前調査に記入された面接可能日時・場所にもとづいて、電話で個別面接調査を依頼し承諾を得る。

b. 承諾の得られた対象者宛に、依頼状と自由記述式の生きがいに関する調査票（巻末「（付）調査票及び単純集計結果　３．デプスインタビュー（西村グループ）実施時調査」参照）を郵送。調査票を面接当日、調査担当者に渡すこととした。

c. 前日に、面接の日時・場所の確認の電話を入れる。

d. 対象者の指定した日時・場所で面接調査を実施。ただし、面接時間に関しては、対象者と担当者の可能な範囲で適宜、延長した。

③　面接調査の方法

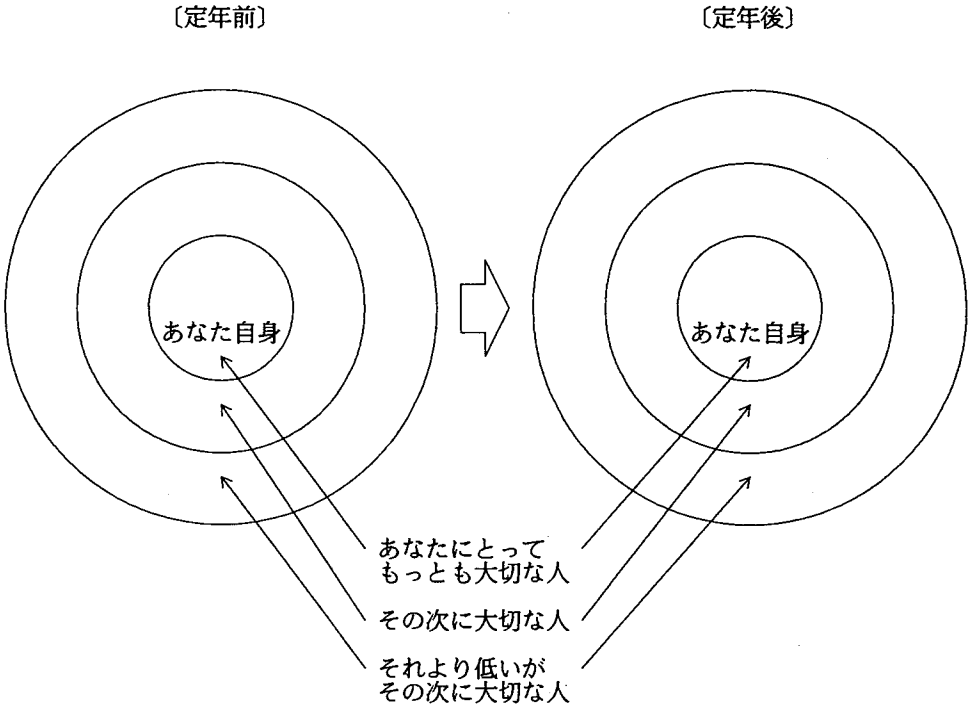
a. 面接調査に際しては、事前に記入してもらった自由記述式の生きがい調査票を回収する。これは、初対面の面接でいきなり生きがいの問題を話すというのは難しい側面もあるので、あらかじめ面接の影響を受けない段階での生きがいについての考えをあるがままに回答してもらうために実施した。定年前と定年後の生きがいについて書くようになっている。しかし、その後の面接では、必ずしもこれにこだわることなく話しを進めた。

b. 面接では、ごくおおまかに、誕生から現在にいたる略歴、職業生活の変化、家庭生活の変化、地域活動の変化、趣味・学習面の変化、パーソナリティ・人間関係の変化、生きがい喪失・創造のプロセスなどを聞くということにした。また、あまり構造化しないかたちの面接を行い、あるがままの回答を得た。

c. 面接の記録は、できるだけ自由に話してもらうために、テープレコーダーによる録音はせず、自由に語ってもらい、できるだけメモをとった。

d. 人間関係の話のなかで、定年前後の人間関係を把握すべく、図表Ⅲ—Ⅰ—1に示す図を使いコンボイ調査を行った。これは、一種の投影法である。また、これにもとづいて、定年前後の人間関係についての話を聞いた。

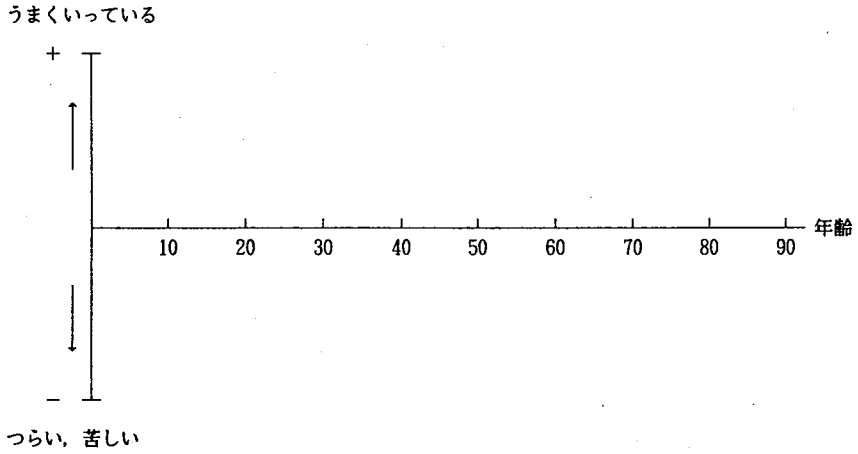
図表Ⅲ－Ⅰ－1　コンボイ調査のための図



e. 生涯的にみた生活適応の状況を把握するために、人生の浮き沈みをライフカーブで描かせた。また、このようなカーブに示される浮き沈みとこれまでの人生の出来事との関連について質問した。（図表Ⅲ—Ⅰ—2）

f. 面接時間については、当初の約束は1回の面接につき2時間ということだったが、対象者の了解を経て適宜、延長した。

図表Ⅲ－Ⅰ－2　ライフカーブ調査のための図



④　実施日時

平成4年9月11日～11月5日

1・2　対象者のプロフィール

ここで、本研究における対象者の略歴と主要な生きがいの内容をおおまかに紹介しておくこととする。

(1)　早期に引退を決めた事例（A氏）

61歳の男性。小学校2年生のときに父親が死亡。家族で父親の親戚を頼って転々とする。母方の祖父の下に落ちつく。中2の頃、学徒動員で軍需工場へ。新制高校の1期生。母親を楽にしたいと、進学を断念して大手メーカーに就職。労務・営業を経験。38歳頃、会社合併による対立、摩擦。その後、労組の専従となる。管理職経験せず、56歳で定年。健保組合の嘱託。60歳で引退。28歳で結婚し、2男あり。自宅一戸建てに、夫婦二人暮らし。30年以上居住。年収は、200～300万円。ただし、妻も年金あり。ローン無し。夫婦とも健康。

現在の生きがいは、現役時代にはできなかった勉強、読書、音楽、シルバー農園、妻の開いている教室等の活動のサポートなど。

(2)　生きがいに懐疑的な事例（B氏）

62歳の男性。一人息子。英才教育を受け飛び級で中学へ。軍人への憧れと教育関係の公務員の父の勧めで、軍の関係の学校へ。戦後、父の勧めで工業専門学校へ。その後大学進学。大手メーカーへ就職。営業を経験。35歳の頃、軍教官の勧誘で、大手建設関係へ転職。管理職を経験。60歳で定年後、嘱託。再び軍同期生の紹介で中堅の建設関係へ再就職。定年前同様、管理職として勤務。現在にいたる。27歳で結婚。1男2女あり。自宅一戸建てに、妻、未婚の娘二人と住む。20～30年居住。年収は800～1000万円。ローン無し。夫婦とも健康。生きがいといえるかどうか、懐疑的ではあるが、軍艦や軍用機あるいは音楽のCD・レコードのコレクションは並大抵のものではない。

(3)　仕事が生きがいの事例（C氏）

65歳男性。11歳の頃、母が倒れ、家業が廃業し、苦労して育つ。兄弟多く、高等小学校卒業後、運輸関係へ就職。その後、軍の関係の学校へ入り、軍人に。終戦後、開墾。25歳頃、保安関係に就職。通信・総務を経験。50歳で定年退職し、関係者の紹介でメーカーへ再就職。管理部門の管理職。60歳定年の際、同じ身分で雇用延長。手術が重なり、65歳で退職。病気療養中。妻も丈夫ではない。子供はいない。公営住宅に夫婦二人で住む。老後は郷里で生活する予定で、既に建築済み。ローンはなし。年収は400 ～ 600万円。現在の生きがいは、郷里で仕事をするための社会保険労務士の資格取得。

(4) 早期に妻と死別した事例（D氏）

66歳の男性。旧制中学3年のときに戦争開始。軍の関係の学校を出て軍人に。戦後、大学へ行きなおし、電気通信関係を専攻。26歳で大手メーカーへ就職。技術部・研究所を経験。38歳頃、合弁会社へ移籍。技術・研究開発の管理職。45歳で役員。48歳で技術関係の賞を受ける。50歳で副社長。65歳で勇退し、現在にいたる。33歳で結婚。1男1女。42歳のときに妻病死。再婚せず。健康。自宅一戸建てに未婚の長男と住む。30年以上居住。ローンはなし。年収は1500万円以上。現在の生きがいは、忙しくてできなかった鉄道模型の製作や友人との交流。

(5) 定年後に転居した事例（E氏）

68歳の男性。11歳の頃、父死亡。小学校卒業後、家事手伝い。15歳頃、運輸関係へ就職。20歳、軍隊へ。終戦後、元の職場へ復帰。現業を経験。38歳、経理関係へ。55歳で定年退職。職場の関係で、金融関係へ再就職、現在にいたる。26歳で結婚。2女あり。二人とも結婚。郷里の自宅一戸建てに夫婦二人で住む。定年後、転居のため居住年数は5年未満。ローンはなし。他に別荘2つ。年収は400 ～ 500万円。妻の年金もある。現在の生きがいは、かつての職場の同僚との海外旅行や別荘生活。

(6) 悠々自適の引退生活の事例（F氏）

73歳の男性。大学（専門部）卒業後メーカーに就職。24歳の時、入隊。27歳の時、除隊。職場に復帰。人事、庶務、総務関係、管理職を経験。58歳で定年。関連会社の役員。65歳で退職。退職引退して8年になる。29歳で結婚。1男2女。いずれも結婚・独立。自宅一戸建てに夫婦二人で住む。30年以上居住。ローンはなし。年収は 300万円。夫婦とも健康。現在の生きがいは、俳句や卓球など趣味を中心とした気儘な生活。

(7) 海外での生活を決意した事例（G氏）

62歳の男性。一人息子。商業学校。戦後、大学へ。父が倒産し、アルバイトで苦学。建設関係へ就職。営業中心に40年間。60歳で定年退職後、関係会社の顧問。1年あまりで退職し、海外での生活を決意。32歳で結婚。2男あり。一戸建てに妻、未婚の息子達と同居。居住年数は30年以上。ローンあり。年収は、500 ～ 600万円。現在、病気入院中であるが、近々生きがいある海外生活へ夫婦二人で出発の予定。

(8) 社会奉仕が生きがいの事例（H氏）

68歳の男性。兄弟6人の内の次男。小学校4年の時に父が破産。高等小学校卒業後メーカーに就職。現業部門。班長、職長を経て検査関係の管理職。55歳で役職定年。傍系会社へ出向、転籍。60歳で定年退職し、引退。29歳で結婚。2男あり。自宅一戸建てに長男夫婦と同居。ローンなし。年収は、300～400万円。夫婦とも健康。現在の生きがいは、様々な地域活動。

(9) フリーの仕事が生きがいの事例（Ｉ氏）

71歳の男性。13歳の頃、父が倒産失踪し、母と苦労する。16歳の時、メーカーに就職。21歳で軍隊。終戦後、27歳までシベリア抑留生活。28歳の時、復員し職工として復帰。労組幹部、営業関係、大型プロジェクトを経験。59歳の時、プロジェクトが軌道に乗ったところで、子会社の役員へ。１年後移籍し、64歳で退職。その後、フリーの経営コンサルタントとして活躍中。28歳で結婚。２男１女あり。自宅一戸建てに夫婦二人で住む。居住年数は30年以上。ローンはなし。年収は、500 ～ 600万円。夫婦とも健康。現在の生きがいは、経験を活かしたフリーの仕事。

(10) 地位の落差を感じている事例（Ｊ氏）

63歳の男性。旧制中学（工業関係）へ進学後、戦争。16歳の時、終戦。中学卒業後、郵便関係に就職し、夜学に通う。20歳の時、祖父の死亡にともない郷里へ戻る。アルバイトなどをしながら大学を受験し、26歳の時にやっと合格。商学を専攻。学生運動に参加。30歳でメーカーに就職。アメリカ、ヨーロッパなど海外進出への拠点づくり。46歳で帰国し、海外事業部、営業部を経て、56歳の時に合弁会社の社長。61歳の時、健康を害し、社長辞任。療養後、嘱託の取締役として復帰し、現在にいたる。36歳で結婚。１女あり。自宅一戸建てに夫婦と娘で住む。居住年数は10年～20年。ローンはなし。年収は、1000～1200万円。社長の座から一役員に転落したショックが癒えていない。

(11) 最近妻を亡くした事例（Ｋ氏）

74歳の男性。父の勧めで商業高校へ。さらに、商業専門学校へ進学。卒業後メーカーへ就職。22歳の時軍隊へ。戦後、シベリア抑留。復員後、職場に復帰。総務、経理、監査室の管理職を経験。56歳で役職定年。関連会社へ移籍。役員。65歳で別の関連会社の社長となり、69歳で退任引退。32歳で結婚。１男あり。70歳、入院手術した直後、妻が病死。妻の急死のショックが癒えていない。現在、自宅一戸建てに一人暮らし。ローンはなし。年収は500～600万円。

(12) 趣味に打ち込んでいる事例（Ｌ氏）

64歳の男性。15歳で工業学校へ進学。徴兵検査の前に終戦。３つの会社を転職した後、大手メーカーに就職。異例の出世で工場長となったが、47歳のとき合理化で次長へ降格。54歳で再び工場長へ返り咲く。60歳ですっぱり退職。退職後、失業保険で生活した後、近くの工場で職人としてアルバイト。27歳で結婚。２男あり。健康。自宅一戸建てに妻、養母と同居。ローンはなし。年収は600～800万円。現在の生きがいは、短歌、弓道などの趣味。

⑬　解放感を味わっている事例（M氏）

68歳の男性。中学へ進学した後、16歳で軍の関係の学校へ。18歳で軍人となり、21歳で復員。３つの会社を変わった後、29歳でメーカーに就職。海外進出にともない多数海外出張。特許技術の考案・開発。スピード出世で43歳で役員へ。61歳で相談役、その後、顧問となり現在にいたる。23歳で結婚。１男１女あり。まあ健康。一戸建ての自宅に夫婦二人暮らし。ローンはなし。年収は600 ～ 800万円。現在の生きがいは、妻や戦友との旅行や音楽などの趣味で解放感を味わっている。

Ⅰ・3　事例の分析

Ⅰ・2では、個々の事例の略歴と主要な生きがいを紹介したが、ここでは、そうした個々の事例において、定年期においていかなる生活上の変化が生じたのか、そのパーソナリティと適応の傾向、生きがい創造（喪失を含む）の文脈、すなわちその人にとっての生きがいの意味を、面接記録にもとづいておおまかに分析しておくこととする。

(1) 早期に引退を決めた事例（A氏）

① 定年期の職業的領域における生活の変化

40代以降、労働組合の専従・幹部として活躍するも、管理職になることなく、56歳で定年となる。定年後、健保組合の常務理事（嘱託）となり60歳で退職する。その後、再就職せず引退し、現在にいたる。

② 定年期の家庭的領域における生活の変化

労組の幹部時代は仕事に忙殺され、あまり家庭にいることはなかった。節目節目で子供達に言うべきことは言ってきたが、大部分、妻にまかせてきた。妻に対してはなにかと苦労をかけてきたという気持ちが強い。妻は、幼稚園の保母として働き、園長も務めた。嘱託として健保組合へ行った頃、妻から園長を止めたら書道教室を開きたいが、家にいてくれるか、と聞かれた。現在、火、水、木、教室の片付け、掃除などの力仕事で妻を手伝っている。炊事・洗濯は妻も気にしており、妻の仕事。現在、息子夫婦のところに痴呆の嫁の母がいるので孫の世話もしている。たまたま再就職しなかったことが、家庭面ではかえってよかったと思っている。

③ 定年期の地域活動的領域における生活の変化

退職後、たまたま組合活動していたことが縁で、地方選挙の際に、組合出身の知人の応援で、マイクをもって駅に立った。その関係で議員の推進しているシルバー農園にも参加している。また、妻が市長夫人と同窓で、民生委員やいくつかの地域的なボランティアを行っている。その関係で、ときには妻の代わりに、独居老人を週に１回お弁当をもって訪問し老人と話をしたり、会合などに代理出席することもあるようである。

④定年期の友人・知人とのつきあいの変化

新制高校の第１期生の同窓会が今でも続いており、幹事をしている。会社時代の各種ＯＢ会の幹事をしている。

⑤ 定年期の趣味・学習面の変化

健康保険組合で、女性事務員から「判を押すだけでなく、ワープロもおやりにならないですか」と嫌みを言われた。「だまってひっこんでられるか」と翌日から練習を開始して、マスターする。戦争中、英語が勉強できなくて、英語にコンプレックスをもっていた。現在、ＮＨＫの基礎英語及び続基礎英語を勉強している。また、最近、スペイン語の学習も始めた。語学には、「こんな意味があったのか」といった未知の発見があることが一つの魅力のようだ。

⑥ パーソナリティと適応

我が道をいくタイプで、人は俺みたいな人間になったらいかん、と。しかし、人みたいなことはやらなくていい、ともいう。好きな言葉に「たとえ地球の滅亡が明日と分かっているとしても、林檎の木を植えよう」を挙げた。希望を失うな、ということのようである。いま一つ、「花をささえる枝、枝を支える幹、幹を支える根、でも根は見えない」という言葉を挙げた。縁の下の力持ちとして尽くしてきた氏の自負心が現れているようだ。

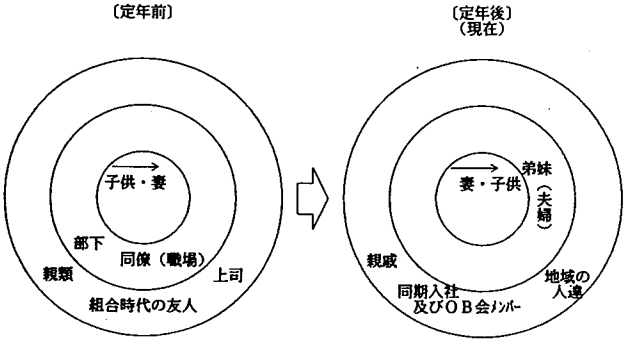
⑦　定年期の人間関係

とくに定年前に比べ定年後は、会社の関係が減っている（図表Ⅲ—Ⅰ—3参照）。

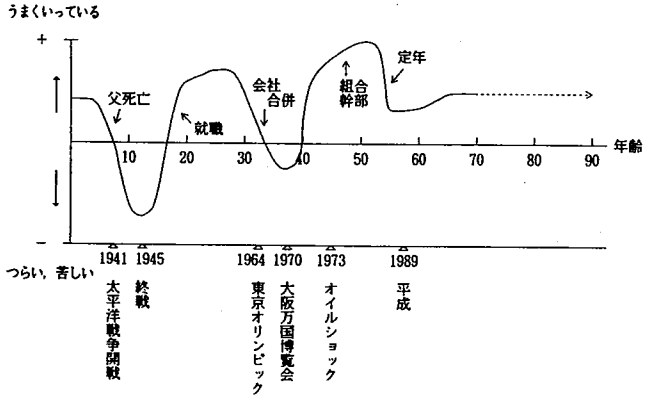
⑧　A氏の生きがい創造のメカニズム

定年前は、苦労して育ててくれた母を助け、妹を結婚させ、弟を大学まで行かせること、自分の家を持つこと、子供の成長などの目標を達成すべく、仕事に打ち込むことが生きがいであった。しかし、振り返ってみると、それが生きがいであったと思えるようであるが、仕事に打ち込んでいるときは、無我夢中であり、特に生きがいというようなことを意識していなかった。定年後は、現役時代にできなかった語学や歴史、文学の学習、本や音楽テープ、ビデオの鑑賞、自然に親しむこと、ボランティア活動や後援会、ＯＢ会での人の世話、などに生きがいを感じている。したがって、これまでの生活のなかでは十分に味わうことの出来なかった生活、自分のなかの十分生きてこなかった側面を充実させることに生きがいを感じているようだ。また、ライフカーブによれば定年後の嘱託の時期に落ち込みがみられるものの、退職後、徐々に回復している（図表Ⅲ—Ⅰ—4参照）。これは、仕事にかわる新たな生きがいを創出しつつあることを反映しているとみられるが、これにはA氏の仕事にこだわらずに前向きに我が道をいく考え方、地域社会とのつながりを保つ豊かな自分や妻のネットワークが大きく影響している。

図表Ⅲ－Ⅰ－3　定年前後の人間関係の変化（A氏）



図表Ⅲ－Ⅰ－4　ライフカーブ（A氏）



(2) 生きがいに懐疑的な事例（B氏）

① 定年期の職業的領域における生活の変化

定年前は、総務関係の管理職をしていた。定年については気にはしていたが余り深く考えなかったという。60歳で定年後、嘱託。軍同期生の紹介で再就職。現在の職業生活は定年前とほとんど変わっていない。

② 定年期の家庭的領域における生活の変化

家庭生活も定年前と基本的に変わっていないようだ。

③ 定年期の地域活動的領域における生活の変化

定年前も後もとくに地域的活動は行っていないようだ。

④ 定年期の友人・知人とのつきあいの変化

父の勧めた憧れていた軍の関係の学校へ入る。わずか4カ月半で終戦を迎え、実戦の経験はない。しかし、ともに訓練を受けた仲間同士は、いまなお強い絆で結ばれている。

⑤ 定年期の趣味・学習面の変化

音楽関係のビデオ、カセット、CD、LPがおびただしい数収集されている。かりに毎日2枚聴いたにしても、7～8年はかかるという。また、軍艦や軍用機のミニチュアのコレクションも相当なものである。自分で製作したものもあるが、業者に依頼したものもあり、その製作費だけでもかなりの額になると推測される。

⑥ パーソナリティと適応

自分の性格のことを、「まじめそうにみえて、実際はそうでもない」、「親切なところもあるし、意地の悪いところもある」、「上にはかみつくが、下には優しい」、「人のことをごちゃごちゃいわない」と。また、「ひとつつっこんだらずっとやっていきたい」。頑固で、特に、家ではそう思われている、という。たしかに、そうした一面は、B氏のコレクションにも現れているように思われる。また、「どたんばになっても、どうにかなる、なんとかなってきたという気持ちが常にある」、という。そうした意味では、楽天家である。

⑦ 定年期の人間関係

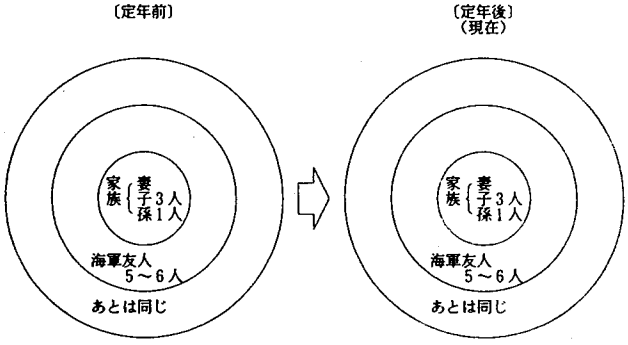
定年前も現在も基本的に変わらないという（図表Ⅲ—Ⅰ—5参照）。戦友との絆の強さ、会社関係の希薄さがうかがわれる。

⑧ B氏の生きがい創造のメカニズム

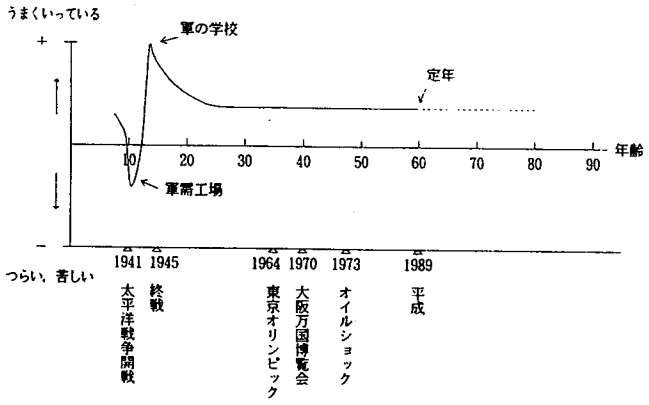
B氏は短い間ではあったが、軍の関係の学校に進学したとき、強烈な精神の高揚を感じたが、それが刻印付けのように後まで残っている。ある意味では、その時がもっとも生きがいを感じていたのかもしれない。その時の強烈な体験に比べると、その後の経験はすべて色あせてしまうのかもしれない。B氏は、現在、定年前とほとんど変わらない職業生活を送っているが、仕事自体は生きがいではないが、充分やりがいは感じているようである。しかし、面接中、仕事の話、家族の話はあまり出てこない。B氏の話は、大半、そのコレクションに終始した。おそらく、仕事では味わえない自己の内面的な充実を、このコレクションによって充足しようとし

たのではあるまいか。コレクションはB氏の精神生活の結晶であるように思われる。たしかに、とことんやらないと気がすまない性格のようではあるが、自己の精神生活、精神的な世界をきわめたいという要求が、そこまでコレクションを徹底させていったのではあるまいか。B氏のライフカーブをみると、戦時中、軍需工場に動員された時期が一番辛かったようであるが、その直後、軍関係の学校に入れたときは逆に大きく跳ね上がり、もっとも憧れのところに入れて、人生最良の時期であったようだ。この時期、精神的に大きな高揚がみられたものの、その後徐々に低下し、マイナスではないが、そのときほどの充実感を味わうことなく平坦に、今日に至っている。戦艦や戦闘機のコレクションは2度と味わうことのできないその時の精神的高揚を思い出させてくれるからかもしれない（図表Ⅲ―Ⅰ―6参照）。

図表Ⅲ－Ⅰ－5　定年前後の人間関係の変化（B氏）



図表Ⅲ－Ⅰ－6　ライフカーブ（B氏）



(3) 仕事が生きがいの事例（C氏）

① 定年期の職業的領域における生活の変化

保安関係の組織で通信関係、総務関係の仕事に従事し、50歳で定年となる。関係者の紹介でメーカーに再就職。移った当初、忙しすぎてやめようかと思った事もあったが、持ち前の頑張りでそれを克服していった。60歳の定年の際、会社から請われて身分はそのままで雇用延長。しかし、64歳、65歳、と手術が重なり、これ以上会社に迷惑をかけられない、年齢的にも健康管理をきちんとやらなければならない、ということで退職。現在は病気療養中であるが、社会保険労務士の資格を取得し、郷里の企業のために尽くしたい、という。

② 定年期の家庭的領域における生活の変化

妻は体が弱いという。子供はいない。60歳頃から、老後は、二人で郷里へ帰ろうと考え、土地を購入。妻とは同郷で、田舎にはお互いに兄弟姉妹や親戚がいる。昨年、家を建て、車で月に1回、帰るようにしている。全部引っ越すのは、病気の関係で5年くらい様子をみる必要があるので、3年後くらいになるという。

③ 定年期の地域活動的領域における生活の変化

会社と地域との共存共栄をはかるために苦労した話はあったが、自宅の近くでの活動はとくに出なかった。

④ 定年期の友人・知人とのつきあいの変化

とくに友人の話はでなかった。仕事一筋で友人とのつき合いや遊び仲間はあまりなさそう。

⑤ 定年期の趣味・学習面の変化

高等小学校卒であるが、運輸関係の組織の正規の職員の試験に不公正さを感じて発憤し、独学で中学3年の学力をつけて軍の関係の学校に合格するなど生来努力家である。保安関係の組織でも、幹部候補生の学校に入り勉強。さらに、夜間に、経理学校へ通い、計理士、伝票会計管理士、経営診断士、労務管理士などの資格取得。現在は、郷里で働くために社会保険労務士の受験勉強をしている。ただし、これらの勉強はいずれも仕事がらみである。

⑥ パーソナリティと適応

家が廃業し、兄弟も多かったので小さいときから苦労し、自分でやる事、人に迷惑をかけない、ということが身にしみている。それには、とにかく仕事で一人前になることだった。したがって、仕事の面に関しては、人一倍努力家で、自負心も強い。温厚であるが、なかなか機敏なところもある。身障者の雇用に尽くすなど面倒みのいいところもあるが、仕事上冷たいといわれることもある。

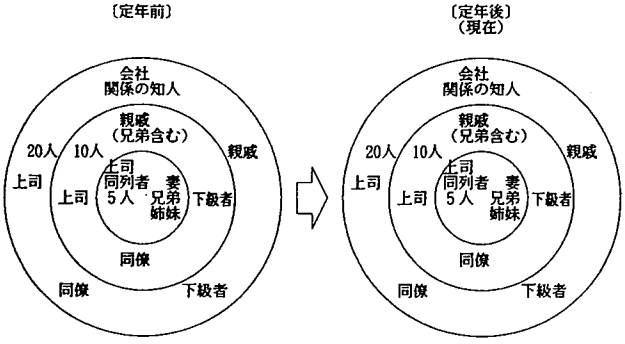
⑦ 定年期の人間関係

退職前も現在も、人間関係は基本的に同じであるという。もっとも大切な人の中に、退職後も職場の人を挙げる例は少なく、しかも上司を挙げる例は今回の調査の範囲では珍しい。妻はともかく、会社を中心に人的ネットワークが形成されていることが分かる（図表Ⅲ—Ⅰ—7参照）。

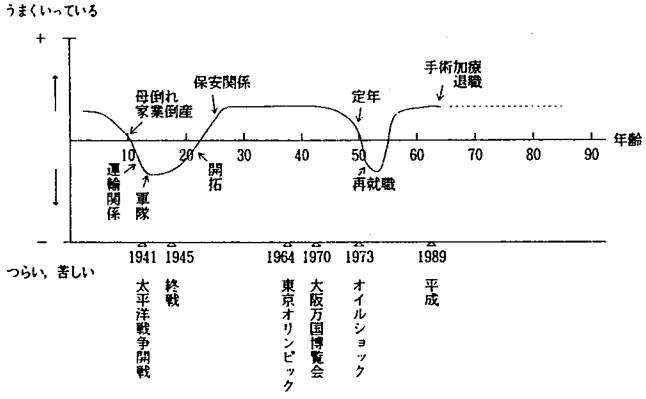
⑧　C氏の生きがい創造のメカニズム

その社会的活動、内面生活、人間関係すべての生活が仕事に中心化されており、C氏にとっては仕事が生きがいといってもよいだろう。40年間の総務業務の知識と経験を生かし、複雑多岐にわたる中小企業等での諸手続き処理、並びに従業員に対する安定定着率の施策と向上、その他諸官庁への提出書類の手続き等、直接業務について知り得た知識を十分発揮して支援してみたい。不幸にして、2回にわたり健康を害し、やむなく入院加療の時を過ごしたが、徐々に回復し、現在は静養と投薬で治療中である。したがって、健康を取り戻しつつあることから諸資格免許取得のための講座を受講中であり、常日頃からの生きがいである、企業等の発展と従業員の福祉ために働くことを願っている。仕事をすることが、C氏の生きていく力になっているようだ。ライフカーブによると、定年退職して再就職した頃にカルチャーショック的な落ち込みがみられるが、新しい職場に慣れるにつれて徐々に回復している。現在は、手術後で様子をみている段階であるが、精神面への影響はあまりないとのことであった。とにかく、がむしゃらにきたので、今は直そうということのようである（図表Ⅲ―Ⅰ―8参照）。

図表Ⅲ－Ⅰ－7　定年前後の人間関係の変化（C氏）



図表Ⅲ－Ⅰ－8　ライフカーブ（C氏）



(4) 早期に妻と死別した事例（D氏）

① 定年期の職業的領域における生活の変化

早い出世で、45歳で合弁会社の役員となり、50歳で副社長となる。もともと技術関係であるが、役員になってからは営業関係にも取り組む。65歳で勇退し、現在は、友人の事務所で、経営コンサルタント的な仕事をしている（週2回程度）。

② 定年期の家庭的領域における生活の変化

早くに妻を亡くしたが、再婚はせず。子の成長に責任を感じてきたという。仕事に打ち込んできた時期は、家事はお手伝いさんに頼んだ。ただし、現在は家事は全部自分でやっているとのこと。長女は結婚。現在、長男（未婚）と同居。

③ 定年期の地域活動的領域における生活の変化

退任前も現在も地域的活動はとくに行っていないようだ。

④ 定年期の友人・知人とのつきあいの変化

人との出会いを大切にし、知人・友人をできるだけ数多くもっている。中学の友人、軍隊の友人、大学の友人、会社の友人、そのほかいろいろなつきあいの友人がいる。そのなかでも、早くに妻を亡くしたこともあるかもしれないが、とくに女性の友人を大切にしているようだ。

⑤ 定年期の趣味・学習面の変化

退任前は、出張や遊びで国内・海外を問わず旅行することが好きだったようだ。自分が楽しむために、行く前にいろいろと調べたり、計画をたてたりするのも、また、楽しみであった。現在は、友人と飲み、食べ、共にスポーツ（スキー、ゴルフ）を楽しんでいる。また、今まで忙しくて出来なかった鉄道模型を徹底的にやりたいという。子供の頃からやってみたかったようだ。しかし、本格的にやるためには、少し広い場所が必要なのでM県に土地を物色中であるという。そこに、セカンドハウスを建て同好の士と楽しみたいという。また、場合によっては、そこでオモチャ屋をやってみたいという夢を持っている。オモチャ屋には、これまで営業で培ってきた知識がすべて活かせるとも。当面、東京とM県との間を行ったりきたりし、いよいよになったら移るつもりもあるという。

⑥ パーソナリティと適応

楽天家でくよくよしない性格である。妻を亡くしたときも、ずっと長く患っていたのでほっとした面もあったという。立ち直りは早い。また、早くにリーダー的存在になったために、そうした面でのワークパーソナリティも身につけて行ったようだ。部下が多少へまをしても、部下が心配しないように平気な顔をするとか。心配してなんとかなるんなら心配するが、どうにもならないことは心配しない。落ち込んでしまう人はリーダーには向かないという。自信がなければ駄目とも。部下を育てるのは、忍、がまんしろという。未熟な部下の悪口をいうと育たない。運も能力の一つであると考えている。日頃、努力していないと、運がきたときにつかまえられない。

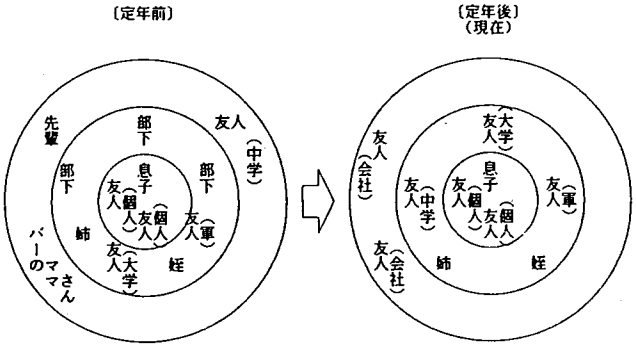
⑦　定年期の人間関係

人間関係の布置からみると、退職前も現在ももっとも大切な人として、息子と友人二人を挙げている。なお、この友人は二人とも女性である。早くに妻を亡くしているので、ある面で妻に代わるサポートを求めているのかも知れない（図表Ⅲ―Ⅰ―9参照）。

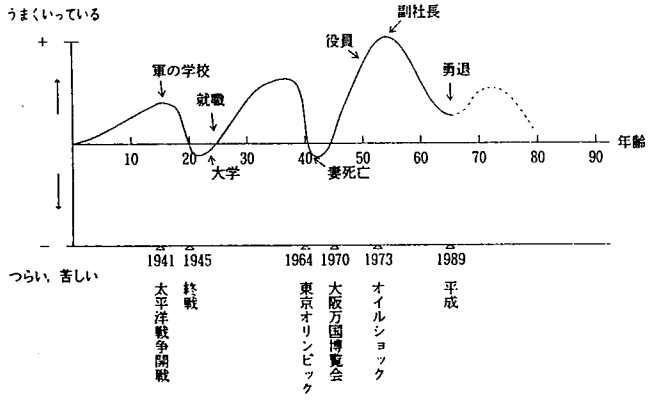
⑧　D氏の生きがい創造のメカニズム

これまで生きがいというものを感じた事がない。感じる必要がなかったということかもしれない。生きがいというものは、それを失ったときに意識するものかもしれない。生きがいというものは、無理して作ってもしようがない。結局、個人のやる気の問題であるという。それは、口でいうだけでは効果ない。D氏の場合はとにかくやりたいことをやれるということが生きがいと考えているようだ。D氏は退職後やりたいことをやって楽しく生きる条件として次のことを挙げている。a.やりたい事があること（仕事でも、運動でも、趣味でも）、b.適当に健康であること、c.やりたい事が出来る収入があること、d.住む場所があること、e.言動を共に出来る友人があること（異性も含めて）、f.年を気にせず楽天的であること、g.世の中の動きを知ること。ライフカーブをみると、副社長となった50歳頃がピークで、50代半ばくらいからは徐々に低下していき、65歳で勇退している。その後の予想として、新たな生きがいの構築により70代にかけてまた楽しくなり、少なくとも60代前半よりは退職後の方が充実していると予想しているようだ（図表Ⅲ―Ⅰ―10参照）。

図表Ⅲ－Ⅰ－9　定年前後の人間関係の変化（D氏）



図表Ⅲ－Ⅰ－10　ライフカーブ（D氏）



(5) 定年後に転居した事例（E氏）

① 定年期の職業的領域における生活の変化

55歳、経理部の係長で定年退職。定年ショックは感じなかった。年金業務の関係で、既に金融機関へ再就職が決まっていた。現在も仕事を継続中。

② 定年期の家庭的領域における生活の変化

定年前は、都内にある勤務先のマンションに住んでいた。定年退職の頃、在職中に購入した勤務先の分譲地を手放し、近所のマンションを購入した。都内は便利でおもしろいので、移る気はなかった。しかし、日当たりが悪く（11時にならないと日が当たらない）、嫌気がさしてきた。二人の実家の近くを見て歩いていた頃、ちょうど県の分譲地があった。見晴らしのよい角地があり、妻が行って決めてきた。この他、2箇所の別荘を持っている。42歳頃、免許をとり、年に5回くらい別荘で生活する。妻も62歳になってから免許をとる。前は自転車で最寄りの駅まで出て通勤していたが、今は妻が車で送迎してくれる。長女も次女も結婚し、両家族とも比較的近くに住んでいる。

③ 定年期の地域活動的領域における生活の変化

定年前も現在もとくに地域的な活動はしていないようだ。

④ 定年期の友人・知人とのつきあいの変化

定年前も現在も前の職場の友人、同じ退職者仲間でのつきあいが中心。

⑤ 定年期の趣味・学習面の変化

退職者仲間との年1回の海外旅行が楽しみ。これまでにシンガポール、ハワイ、台湾、桂林、オーストラリア、中国、サイパン、ガム2回、タイ、ニューヨーク、カナダ、などに行ってきたという。一人世話役の人がいるようだ。妻は海外はあまり好まず、国内旅行や別荘行きが多い。他には、魚釣り、ギャンブル、畑。

⑥ パーソナリティと適応

妻によれば、短気であるという。一方、妻は、わがままで、こうと思ったら自分でやってしまう性格という。

⑦ 定年期の人間関係

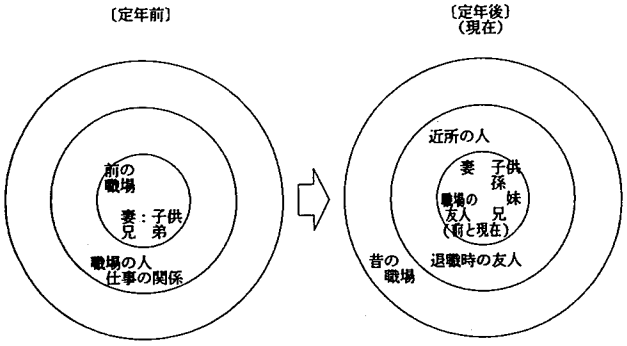
もっとも大切な人として、現在は孫が加わっている。また、前の職場の友人だけでなく、現在の職場の友人も挙げている（図表Ⅲ—Ⅰ—11参照）。

⑧ E氏の生きがい創造のメカニズム

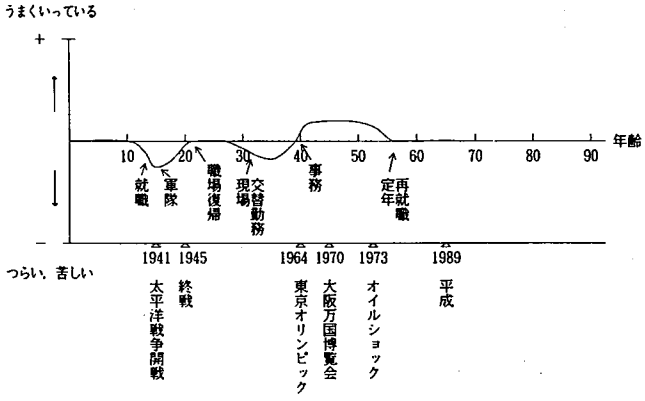
E氏が二つも別荘をもっているのは、驚きであった。夫婦共稼ぎによる経済力や蓄財の仕方が上手だったのかもしれない。また、そうした蓄財の仕方には、経理関係の仕事をしてきたことが影響しているかも知れない。ただ、経済的にかなり豊かでも普通のサラリーマンで異なる高級別荘地に別荘を二つも持つということはあまりないのではないか。そうした多少人よりいい生活ができるということが、夫婦共稼ぎで頑張ってきたE氏の働きがい、生きがいになっているように思われる。海外旅行の回数もかなりの回数に上っている。ただ貯めるために働くの

ではなく、そうした普通のサラリーマンにはなかなかできない海外旅行を経験することが、E氏の生きがい、働く楽しみになっているように思われる。E氏の場合は働くこと自体が楽しみというよりは、そのことによってさらに豊かな生活や経験をすることに生きがいを感じているのではあるまいか。しかし、もうかなりやってきたので、そろそろ引退して、のんびり生活したいという気持ちも強くなってきているようだ。ライフカーブからみると、現場の交代勤務の頃に落ち込んでいる。これは肉体的にきつかったようだ。再び事務的職場になってからはプラスの状況になっている。別荘を購入したり、自分の家を持ったりを目標にして充実した時期を送ったようである。定年退職後はそれに比べると低下しているが、プラスもマイナスもない状態と感じているようだ（図表Ⅲ—Ⅰ—12参照）。

図表Ⅲ－Ⅰ－11　定年前後の人間関係の変化（E氏）



図表Ⅲ－Ⅰ－12　ライフカーブ（E氏）



(6) 悠々自適の引退生活の事例（Ｆ氏）

① 定年期の職業的領域における生活の変化

定年の４～５カ月前に社長から、関連会社の役員の話がきた。関連会社なのでよく知っていた。65歳で退職したときは、労務士をやろうと思っていた。資格は持っていた。少し休んでからやろうと思っていたが、休んでいるうちに、考えが変わってやめてしまった。年からいっても長続きしない、と。

② 定年期の家庭的領域における生活の変化

１男２女。みな独立し、１時間半前後のところに住んでいる。みな健康である。生きがいをもつためにはみな健康であることが大切であるという。

③ 定年期の地域活動的領域における生活の変化

定年後、近所の方の勧めで俳句を始めるようになったり、近所の人とドライブ、旅行に行ったり、結構つきあいがある。縦割り社会より横割り社会になった。

④ 定年期の友人・知人とのつきあいの変化

定年後、趣味の俳句や卓球の仲間が増えた。

⑤ 定年期の趣味・学習面の変化

卓球は小学校の頃からやっており、興味をもっていた。しかし、我流でやっていたので、公民館で基本を教えてもらった。高齢になってからスポーツを始めるためには、公民館のようなアクセスしやすい場が近くにあるということが、重要であるようだ。年齢に関係なく組み合わせるので、若い人や女性と交流があり楽しいようだ。１週間に２回はちょっときついので、土曜はさぼることがある。また、小さい頃から旅行で写真を撮るのが好きだった。ＮＨＫでＶＴＲの勉強をした。ドライブにいって、ＶＴＲをとる。マイクでナレーションを入れる。音楽は後から入れる。ＶＴＲの装置はもう４台目とのこと。俳句だけは近所の人の勧めで、仕事をやめてから始めた。ＮＨＫの通信教育を半年受けた。クラブに入って６年になる。ずっと勉強という。

⑥ パーソナリティと適応

心配しない、くよくよしない、忘れてしまう方だという。また、えこひいきをしないとも。人間関係に適しているという。人にいわない。本心はわからないといわれることも。はでなことはきらい。ぜいたくはきらい。粗食。うまいものに興味ない。

⑦ 定年期の人間関係

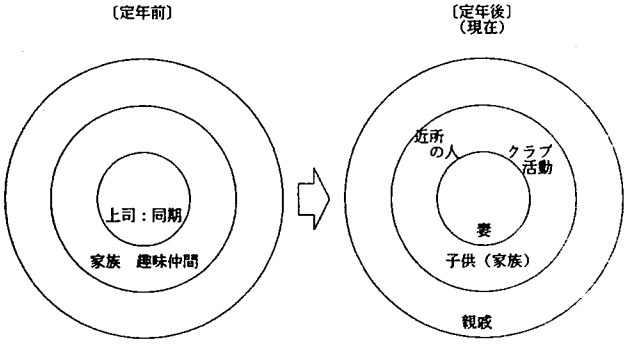
定年前は会社の関係を重視しているが、定年後はむしろ近所やクラブ活動が入ってくる（図表Ⅲ―Ⅰ―13参照）。

⑧ Ｆ氏の生きがい創造のメカニズム

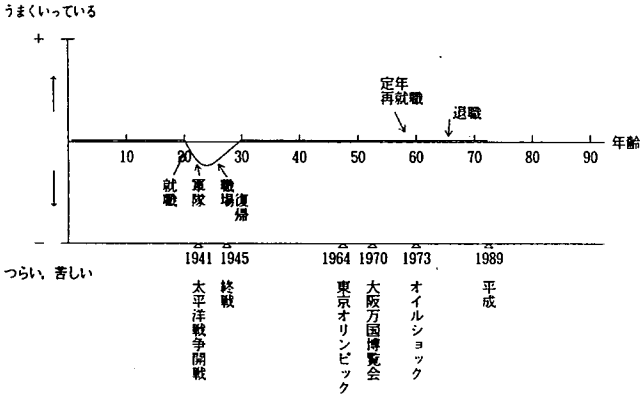
卓球の翌日は予定をもたない。何もしない。ＴＶ、ごろ寝、マイペース。それでも飛び込みがあったりする。あんまりいろんなことやっていると自分が苦しくなる。生きがいのある生活と言うのは、こころにわだかまりがなく、明日につながる生活ということだ。そのためには自

由な自分の時間がもてるということ、そして健康が大切だ。勤めているときは、宮仕えで自分の時間がもてない。自分のペースで時間がもてる。気持ちがゆったり、そういう気分的なものが大きい。あまり増やさないようにすることが大切だ。全部やれればいいが、時間と体力的に無理。その準備や整理にも時間がいることを忘れてはならないという。そのためにも、思い立ったときに、すぐにやれるような場が身近にあることが重要である。気儘な生活とは、このような自由時間の使い方ができる状況をいうのではあるまいか。ライフカーブからみると、戦後の食糧難と子育てが多少苦しかったようだが、後は特にいいこともないが、特に悪いこともないという。その頃の苦労に比べると、その後は特に苦労と感じないのかもしれない（図表Ⅲ—Ⅰ—14参照）。

図表Ⅲ－Ⅰ－13　定年前後の人間関係の変化（Ｆ氏）



図表Ⅲ－Ⅰ－14　ライフカーブ（Ｆ氏）



(7) 海外での生活を決意した事例（G氏）

① 定年期の職業的領域における生活の変化

建設土木の営業中心に40年間。セールスエンジニア。45歳、業務の関係で初めて海外出張。ホンコン、シンガポール。行きは飛行機で帰りは船。船旅はいいなと思う。60歳で定年退職後、関係会社の顧問に。1～2年でつまらなくなり、退職。

② 定年期の家庭的領域における生活の変化

体が弱く妻に心配をかけてきた。50歳頃、喀血・下血。ストレスがたまり潰瘍。自分の体を大事にしなければと思う。54歳頃1カ月入院。会社の取引先とのつながりで海外とのつながりができ、定年後、海外での生活を考えるようになる。定年退職した折り、夫婦でオランダ、ドイツ、スイス、オーストリア、フランスと回る。また、義姉夫婦とオーストラリアを旅行。最初は、方角の問題や妻の不安で思いとどまる。しかし、今年の4～8月夫婦でロングステイにトライする。12月より本格的な長期滞在生活を決意。目下準備中。海外移住について、妻は、夫のいくところならどこでも行く気持ちである。ただ、健康が気がかりというところ。年に1度、お盆の時に帰国する約束。子供達も、賛成している。

③ 定年期の地域活動的領域における生活の変化

S市に住んで30年になり、地域とのつき合いもあるようだ。とくに、妻は地域とのつながりが強いようだ。

④ 定年期の友人・知人とのつきあいの変化

一人息子であったせいか、友達を大切にしてきた。会社でも同僚、部下を大切にしてきたようだ。

⑤ 定年期の趣味・学習面の変化

結婚当初から夫婦とも音楽好き。50歳頃、二人で地元の合唱団に入る。ドイツ語で第九が歌えるようになる。また、夫婦とも動物好きで、二人で乗馬もならっている。ゴルフ歴も長いが、55歳頃関節を痛め、アップダウンきつい。つき合いゴルフはやめた。

⑥ パーソナリティと適応

頑固な人間で、自己主張が強い。上司に対するゴマスリはへたである。「すり鉢とすりこぎを机の上においておきまっせ」といわれたものだ。しかし、部下は慕ってくれる。定年後はいい思いをしている。息子の就職も部下とのつながりが縁になっているという。息子達へは、いい友達を作れといってきた。

⑦ 定年期の人間関係

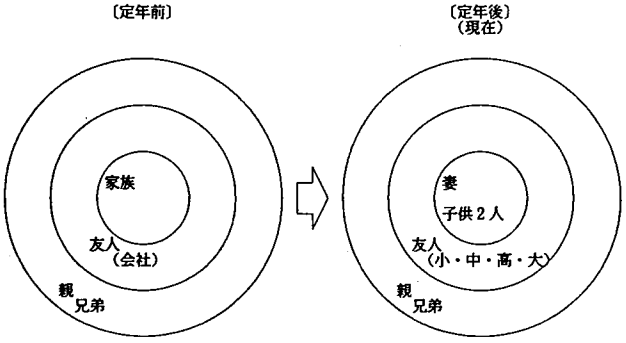
定年前も現在も、もっとも大切な人としては家族、妻と二人の子供を挙げている。その次に大切な人としては、定年前は会社と友人を挙げているが、定年後は小、中、高、大、その他の友人のみを挙げている。会社を離れると職縁は遠ざかる（図表Ⅲ―Ⅰ―15参照）。

⑧ G氏の生きがい創造のメカニズム

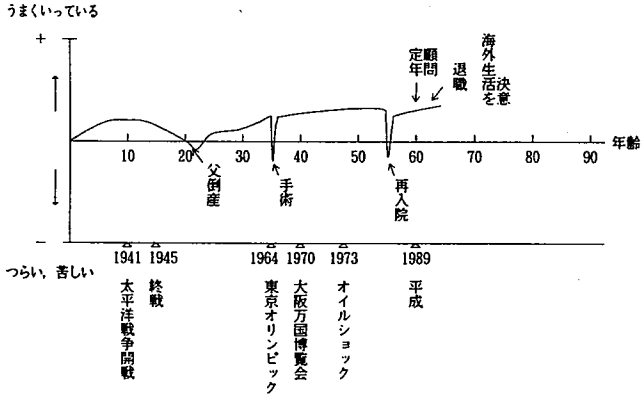
50代後半、定年後の生きがいを模索する。仕事が生きがいと62歳まで2、3の会社で働いた

が、現役時代とは違い意欲を失い、諦念をいだく。しかし、海外旅行をしてみてセカンドライフの準備を始めた。現在は、目標をもち、それに挑戦することが生きがいと考えている。好きな事をやり、家族が共に幸せな生活が出来る事。妻と同じ趣味で助け合い老後を美しく過ごす事。健康のために自分に向くスポーツをすること。海外で、前向きに誰にも粗大ゴミと言われない生活をする事。日本では元気なうちは働く事が当然と思われ、働く事が出来ないと居ずらい。G氏によれば、こころが豊かでないと幸せになれないと言う。二人三脚で自由にやっていきたいという。ライフカーブからみると、学生時代、父が倒産しアルバイトなどで苦労した時期が少しマイナス。後は、後になるほどカーブが上昇している点が興味深い。現在も上昇中。ただ、30代半ば、50代半ば、入院している時期が一時的に落ち込んでいる。しかし、今回の入院では落ち込みはみられない。健康面の気がかりはあるようだが、海外での生活に夢と希望をふくらませているようだ（図表Ⅲ—Ⅰ—16参照）。

図表Ⅲ－Ⅰ－15　定年前後の人間関係の変化（G氏）



図表Ⅲ－Ⅰ－16　ライフカーブ（G氏）



(8) 社会奉仕が生きがいの事例（H氏）

① 定年期の職業的領域における生活の変化

42歳で工場の職長、52歳で検査課の課長になった。55歳で管理職定年を迎え、近隣の傍系工場に出向、57歳でその工場に転籍となった。出向時の給料は現状維持、転籍後は給料自体は下がったが、差額を手当としてもらった。この５年間は単身赴任。転籍後は親会社とのパイプ役になった。60歳で定年退職し、その後、職にはつかず、現在（68歳）にいたる。

② 定年期の家庭的領域における生活の変化

現在の一戸建ての家は金融公庫から借金して建て、55歳までの15年で返済した。退職後は年金暮らしで、昨年の年収は300～400万。贅沢できないが、さほど不自由はないという。若い頃から健康だったが、昨年、趣味の菜園での農作業の疲労から血圧、血糖、肝臓に影響が出て25日間入院した。現在は調子いいが、酒は飲まず、食事も制限している。これは夫婦ともに実践している。また定年後の10年間は万歩計をつけ、朝はジョギングをしている。

③ 定年期の地域活動的領域における生活の変化

39歳で今の土地にやってきた「よそ者」のH氏は地域にとけ込み難かったという。しかし、45歳の時、あることがきっかけで始めた地域子ども会の育成を積極的に行ったことで親や年寄りに認めてもらい、徐々に地域にとけ込めたという。この活動も定年前は土日に片手間にやっていたが、定年後はその他の地域活動も含めて本格的に始めた。現在、市の社会福祉協議会副会長をはじめとして様々な地域活動や会社のＯＢ会活動を行っており、活動の年間、月間計画表を綿密に作成し、実行している。ただし、男の平均寿命は76歳、自分の社会的活動は70歳で定年と考えているという。社会奉仕活動も60歳から10年間やった後は、50代、60代の人に譲り、70歳以降は自分の身の回りのことをするつもりであるという。

④ 定年期の友人・知人とのつきあいの変化

現役時代は会社の同僚や部下との付き合いが中心であった。定年後は地域活動の中で知り合った人々との付き合いが中心である。

⑤ 定年期の趣味・学習面の変化

現役時代からやっているゴルフを現在も年８回はやっている。また妻の親から受け継いだ土地で菜園を営んでいる。とれた野菜の多くは１人暮らし老人の給食、配食等に使用。

⑥ パーソナリティと適応

じっとしているのは嫌。現役時代、仕事には極めて厳しく、人にはあたたかかった。まわりからは、よく頑張る人と評価されていた。一生、勉強だという。自分の限界に挑戦しながら、どんな小さなことでも何か目標に向かっていく努力が必要。不言実行。何事もまず義務を果たしてから主張する。時代に合った信念を持って生きるべき。変化に対応できるような生き方をすべき。人は皆お互い助け合い。人生は楽しく、ほがらかで、潤いのあるものにしたい。

⑦ 定年期の人間関係

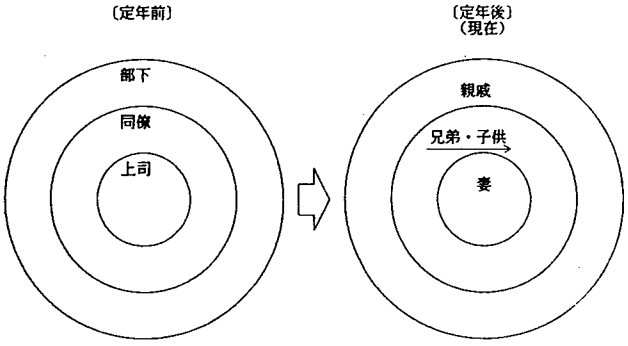
定年後、子どもより兄弟を重視している（図表Ⅲ―Ⅰ―17参照）。年をとったら兄弟が大切

だという。

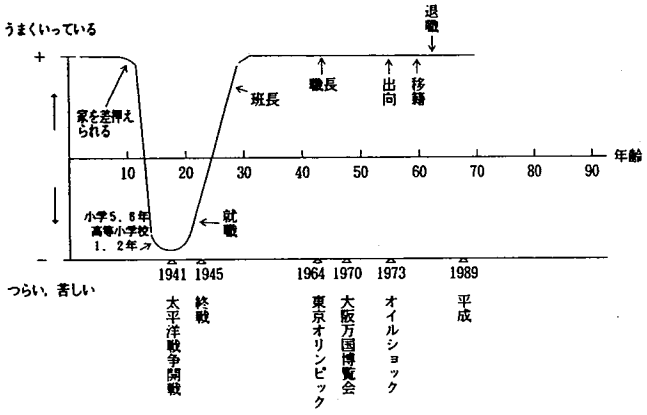
⑧　H氏の生きがい創造のメカニズム

定年前の生きがいは、会社のために全力を尽くすこと；上司、部下との人間関係；趣味と健康のためのゴルフ；家族との対話；家族の健康であった。現在の生きがいは、人と人との心のふれあいの場を持つこと；人の心の支えになれること；困っている人の相談相手になれること；人に信頼される人間になれること；年金生活範囲内で趣味を生かすことである。H氏は定年のかなり前から定年後の準備を行っている。定年前に家のローンは払い終えるようにし、定年後の年金生活を圧迫しないようにした。また定年後に体の健康のためのゴルフを安くやるために必要な会員権も現役時代に取得した。また、会社にいるうちに体の悪いところは全部治しておき、定年を迎えたら、すかっとして社会に奉仕することに決めていたという。H氏はかなり裕福な家庭に育ったが、小学4年生の時、父親が知人の保証人となり全財産を失った。高等小学校卒業まで人生で最も辛い日々が続いたという。しかし、近所の人が何かにつけ親切にしてくれ、人のありがたさをしみじみと感じたという。そして、将来、社会に対して必ず何かお返しをせねばと思ったという。こうした体験が、H氏の社会奉仕という生きがいの原点となっている。定年期のライフカーブは高い状態のまま変化しておらず、定年によって仕事という生きがいが喪失されたかわりに、新たに社会奉仕からそれに匹敵するほどの生きがいを得ているようである（図表Ⅲ―Ⅰ―18参照）。

図表Ⅲ－Ⅰ－17　定年前後の人間関係の変化（H氏）



図表Ⅲ－Ⅰ－18　ライフカーブ（H氏）



(9) フリーの仕事が生きがいの事例（Ｉ氏）

① 定年期の職業的領域における生活の変化

電気関係のメーカーにおいて、32歳で営業所の所長に抜擢された後、国内営業担当および責任者として全国各地の支店長を歴任。他のメーカーとの競争の中で、売れない地区を担当し、売れるようにしていくことが楽しみであったという。42歳から58歳までの17年間、大規模な長期的プロジェクトの全国統括業務の本部責任者をまかされる。人生で最も充実した日々であったという。ところが、17年間の長期にわたって携わってきたそのプロジェクトが完全に軌道に乗ったという時点で、関連子会社の再建のため嘱託として赴くことを命じられる。がっくりきたという。60歳でその会社へ転籍となるが、様々な難問題が山積しており、苦難の日々が続いた。５年間の業務を通じて何とか会社再建が果たされ、自分の役割は終わったということで希望退職した。以後は、フリーの経営コンサルタントとして活躍している。45歳の時に、民間資格ではあるが、経営診断士の免許を取得した。その動機の一つは、40歳前半に専門的知識の不足から大失敗をおかしてしまったという挫折経験から芽生えた、専門知識を習得して何らかの形で資格を得たいという思いであるという。もう一つの動機は、将来、定年退職した後に社会に参加していくためには資格を持たねばならない、資格のない人間は社会が認めてくれない、という考えからくるものであった。実際、経営診断士という肩書きのおかげで、現在、県からも講師として招かれるなど社会参加ができているという。現在71歳。

② 定年期の家庭的領域における生活の変化

28歳で結婚。１女２男あり。それぞれに男女１人ずつ計６人の孫がいる。同居家族は妻のみ。定年期における変化は特にない。

③ 定年期の地域活動的領域における生活の変化

退職前は、全国を飛び回っていたこともあり、地域との交流はほとんどなかった。退職後は、戦没者遺族会の仕事を、母親の後を継いだ形で手伝っている。

④ 定年期の友人・知人とのつきあいの変化

現役時代は会社の友人とのつきあいが中心であったが、退職後はシベリア時代の戦友や会社のＯＢ会を通じての交流が中心である。

⑤ 定年期の趣味・学習面の変化

現役時代から俳句、短歌、カラオケ、ワープロ、ファミコン、ビデオ録画・鑑賞を継続。

⑥ パーソナリティと適応

シベリア抑留時代の、地位も財産もない、裸一貫の男同士の付き合いが忘れられない。良き人々との交流が大切。自分に対しては、我を抑え、地位が上がれば上がるほど厳正でなければならない。ただし、清貧であれとはいわない。他人に対しては、寛容であること、目上であろうと目下であろうと相手の人間性に敬意を払うことが大切である。

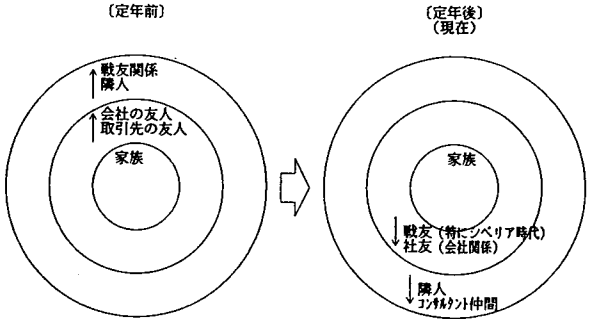
⑦ 定年期の人間関係

人間関係の布置は図表Ⅲ―Ｉ―19に示す通り。

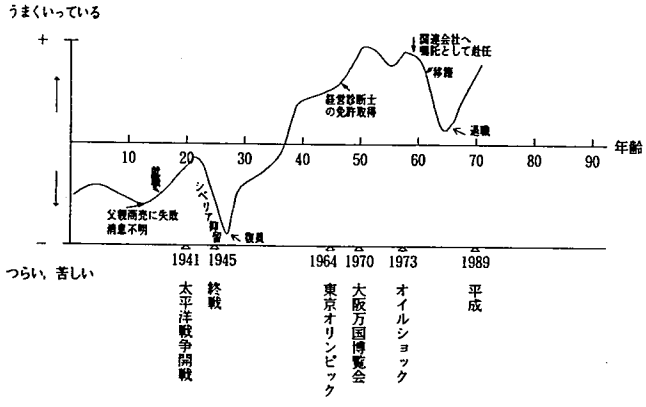
⑧　Ｉ氏の生きがい創造のメカニズム

定年前の生きがいは、仕事（国内の新規市場の開拓と育成拡大／子会社の新工場の建設および設備改善・経営方式の新規導入・従業員の意識改革／２つの県の研修会講師）；家庭（家族の調和と団らん）；将来設計（定年後も社会参加を継続するための手段としての資格取得／定年後の生活安定の手法として、株式投資も適当な範囲で実施）；人間関係の形成と持続（良き人との交流を深める）；座右の銘の生涯実践。現在の生きがいは、一言でいうと、健康で社会参加ができること。具体的にはボランティア活動の継続（各種研修講師／戦没者遺族会の地区委員）；元勤務先会社との交流継続（ＯＢ会）；個人的な趣味の活性（俳句、短歌、カラオケ、ワープロ、ファミコン、ビデオの録画と鑑賞。ファミコンは孫たちとの交流に役立っている）である。Ｉ氏にとって、17年間手がけたプロジェクトこそが定年前の大きな生きがいであった。しかし、それも関連子会社への移籍によって失われる。子会社再建への努力を定年前の生きがいとして挙げてはいるが、充実感はあまり感じていなかったようである。これも希望退職の理由の一つであるという。フリーの経営コンサルタントになってからは実に楽しいという。家族にも恵まれ、人間関係もＩ氏の人柄の故に、心温まる関係が定年前も定年後も続けられている。Ｉ氏にとって、良き家族、良き友人に恵まれながら、定年後も社会参加ができ、それを長く続けられそうだという明るい将来展望が大きな生きがいを生み出しているようである。（図表Ⅲ—Ｉ—20参照）。

図表Ⅲ－Ｉ－19　定年前後の人間関係の変化（Ｉ氏）



図表Ⅲ－Ｉ－20　ライフカーブ（Ｉ氏）



⑽　地位の落差を感じている事例（Ｊ氏）

①　定年期の職業的領域における生活の変化

37歳の時、ヨーロッパ進出のために派遣されたドイツで現地法人を設立し、その社長として工場建設、販売網の構築・拡大に全力投球した。46歳の時に、ヨーロッパ進出が軌道に乗ったのを機に帰国。その後３年間は海外事業部に営業部長として勤務、その後８年間は国内営業部に勤務。その間は単身赴任。56歳の時に、親会社では営業部長として籍を置きながら、アメリカの会社と新しく技術提携して設立したジョイントベンチャーの社長に就任。雇用延長された親会社は60歳で定年退職。61歳の時に過労から２カ月通院生活。やむなく社長を辞任。療養後、嘱託の取締役として復帰し、現在（63歳）にいたる。

②　定年期の家庭的領域における生活の変化

現在、同居家族は妻と未婚の娘。定年期における変化はない。将来、海外、例えばオーストラリアに移住したいと思っているが、妻は言葉の面で壁を感じており、消極的であるという。

③　定年期の地域活動的領域における生活の変化

地域活動は特に行っていない。

④　定年期の友人・知人とのつきあいの変化

会社関係の友人が現在も中心であるようだ。

⑤　定年期の趣味・学習面の変化

特に定年期で変化があるわけではない。趣味は植物鑑賞、美術鑑賞、観劇など。学習面では講演会や講座などを聞きにいき、知識吸収欲求は高い。

⑥　パーソナリティと適応

きまじめで、１つのことを集中してこつこつやる。人からあれこれ指示されるのは嫌い。小市民的ギャンブルが好き。人はいいほうで、人情もろい。悲しい映画にはほろりとする感受性あり。人から信頼され、兄貴肌。人にあまり深くは干渉しない。酒はよく飲むが、付き合いはマイペース。信頼できる人と言われる。ただし、人にあまり干渉しないので、時として冷たい人であると思われることもあった。座右の銘：省みて至誠の道にもとることなかりしや／最善を尽くしてその時その時を生きよ／仲良きことは美しきかな。

⑦　定年期の人間関係

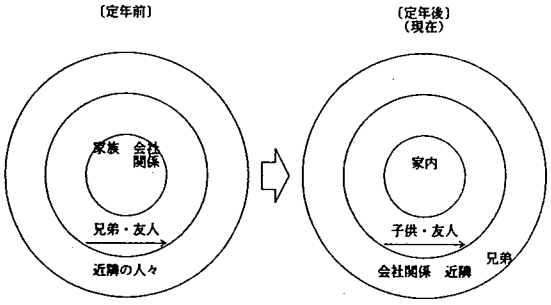
人間関係の布置は図表Ⅲ―Ⅰ―21参照。

⑧　Ｊ氏の生きがい創造のメカニズム

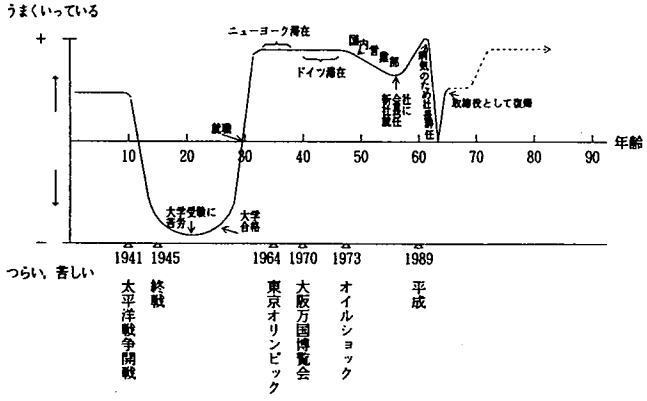
定年前の生きがいは、会社繁栄のために貢献すること（半永久的建造物の建設など任せられた職務の遂行を通じ、単に会社の繁栄のみならず、自己および家族の幸せを求めた）；国際性の養成（米・欧の海外駐在を通じ、広く外国を知り、知己を得、また自らの啓発に努めた）；国際性の養成を通じ、会社の国際化あるいは海外市場の開拓；ある程度の蓄財をなし、自宅を持つこと；家族の幸せ（子弟の教育を計り、そのため懸命にはたらくこと）；自分が手がけた外国とのジョイントベンチャー会社の発展とその協力；同僚、後輩との歓談やスポーツ（ゴル

フ）；より広い分野での先人との交流を広げていくこと；更に高い栄達を求めること（社内身分、給与等）であった。；現在の生きがいは、働くこと（定年後の現在も、同一企業の嘱託として勤務しているが、その情熱は定年前と比べ得るものではない。しかし、限定された範囲において今尚働くことに生きがいを感じている）；また、現在の生きがいとまでいえないものとして、自己啓発のため、できるだけ多く講演会、美術館などに出向くこと；定期的に妻と、寺院、神社（近辺）の参詣を信仰とは別に楽しむこと；各種団体あるいは地域主催による小旅行、スポーツ、観劇などへの参加；植物園や展示会などに出向くこと；妻と好きな物を食べに出ること；今後何かささやかでも社会のため、人のためになることをやってみたい、ということを挙げている。55歳で管理職定年のところを60歳まで雇用延長されたので、自分は必要とされていると、満足感にひたった。50代前半はもちろん、後半になっても定年後のことは全く心配しなかったという。Ｊ氏は、まだほとんど現役に近いといってよいが、それでも社長から、嘱託の一役員となったことは、かなりの心理的ダメージとなっているようだ。Ｊ氏の場合、地位的な面での欲求よりも、むしろ自分の思うように会社を動かしていきたいという欲求が強いようである。社長から取締役になったことによって、仕事の量は60％に、仕事の質は30％に落ちたという。きっかけは本人の病気ということではあるが、業務内容の点で落差のある仕事にかわることで生きがいをいくらか喪失してしまうという、定年期における生きがい喪失の一つの例であるといえよう（図表Ⅲ―Ⅰ―22参照）。

図表Ⅲ－Ⅰ－21　定年前後の人間関係の変化（Ｊ氏）



図表Ⅲ－Ⅰ－22　ライフカーブ（Ｊ氏）



(11) 最近妻を亡くした事例（K氏）

① 定年期の職業的領域における生活の変化

大手メーカーにおいて支店の経理課長、本店の経理課長を経て、53歳で監査室長となる。56歳で関連会社へ移籍。常務を経て専務となり、会社再建に貢献。その手腕を買われて65歳まで雇用延長。退社後、また別の関連会社の社長を69歳まで4年間まかされた。ただし社長といっても週に2泊3日で見回りにいく程度で、やりがいはあまり感じられなかったという。そして、さすがに69歳ともなると、もう仕事はいいという気になり退任を希望し、退職した。以後、職にはついていない。現在74歳。

② 定年期の家庭的領域における生活の変化

引退後2年間は妻と二人で海外旅行へ出かけるなど楽しく時を過ごした。ところが、3年前の9月、盲腸から小腸癒着を起こして小腸の3分の1を摘出。退院後、今度は前立腺異常で2カ月入院し、11月末に退院。翌年1月に妻が子宮癌で入院。5月にはK氏が再び前立腺に異常をきたし、手術のため入院。夫婦ともに入院状態になった。そして、K氏が退院した2日後、妻が突如、意識不明となり、そのまま他界。何がなんだかわからないうちに妻がいなくなってしまった、しばらく呆然とした日々が続いたという。また現実問題として、それまで妻と二人きりの生活で、家の中のことはすべて妻に任せきりだったので、しばらくは様々なことでかなり苦労した。食事その他は、週に1度お手伝いさんがきてくれるが、それ以外の日は自分一人で食事を作って食べている。現在は、妻の死のショックからまだ完全には立ち直っていない。自分自身の健康にも自信を失っている。しかし今後徐々に上向きにかえていきたいという。

③ 定年期の地域活動的領域における生活の変化

退職後2年して、本社の厚生年金基金関係のボランティア活動の支部会長を依頼された。老人を訪問し感謝されるとうれしく、やりがいを感じるが、既に4年を経過し、且つ手術後の後遺症と高血圧の関係で医師より無理をせぬよう注意あり。労力的に限界と考えたため、適任者を選び若返りを考えている。

④ 定年期の友人・知人とのつきあいの変化

（特に話はでなかった。）

⑤ 定年期の趣味・学習面の変化

趣味は写真、釣り、ゴルフ。退職後には園芸を始めた。

⑥ パーソナリティと適応

きわめてきちょうめんで「A型」的な性格だという。長年の日誌を実に緻密に帳面につけていた。人から高圧的に出られると強く反発するが、下手に出られると弱い。年をとるにつれて気が短くなってきた。人からは、ものを頼みやすい、面倒見がいいと言われる。世の中いかにabout人間が多いかを最近、特に感じる。自分もある程度aboutにならねばと思う。

⑦ 定年期の人間関係

人間関係の布置は図表Ⅲ—Ⅰ—23参照。全体として、人間関係の布置を記入するのにかなり

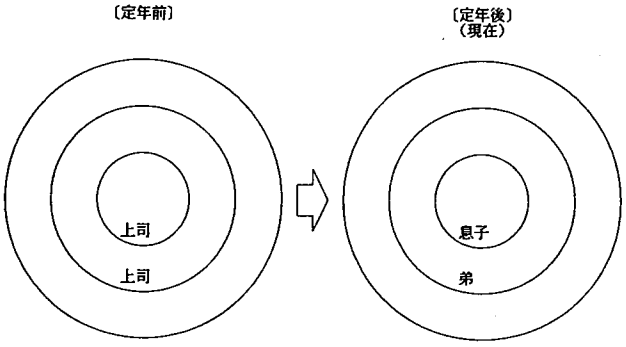
の時間を要した。妻の死ということが記入への心理的抵抗となっているようである。

⑧　K氏の生きがい創造のメカニズム

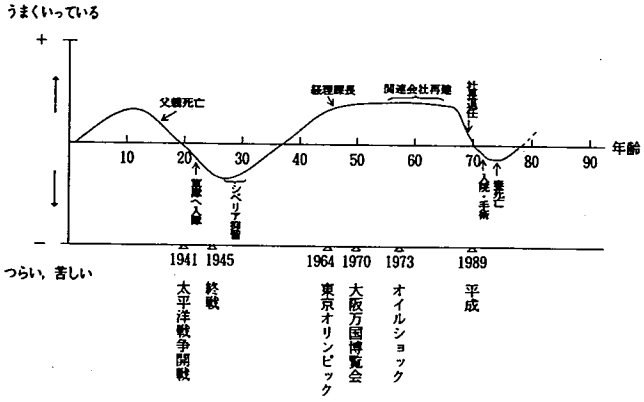
K氏にとって生きがいとは、「大きい小さいに関係なく、目的ないし目標を置き、行動・努力することであり、自己実現、達成感、評価などの満足感」であるという。定年前の生きがいは、会社人間として48年間、地位の向上と経済的ゆとりの追求とともに仕事の充実感を感じたこと；特に関連会社では、経営者として会社再建計画を立案し、再建を達成したこと；子供や孫の成長；写真、囲碁、ゴルフ等での人との交流、親睦であった。現在の生きがいは、厚生年金基金関係のボランティア活動に参加すること；囲碁、写真、ゴルフ、旅行等による心のやすらぎと気晴らし；２人の孫の成長；積極性と和を大切にすることである。なお、定年後の生きがい喪失について、K氏自身が以下の５つの要素をあげている。社会的地位の喪失；仕事に対するはりあいの喪失；健康に対する自信の喪失；豊富な余暇の発生；妻の他界。

K氏は50代も、56歳からの10年間も、仕事を止めた後のことはあまり考えなかったという。実際、K氏は関連会社での10年間を、定年後ではなく定年前の生きがいとしてあげている。引退後３年目に起こった妻の死という出来事のショックは相当大きく、豊富な余暇の発生ともつながって、今、そしてこれから自分は何をすればよいのか模索している段階であるという。趣味もあくまで、心のやすらぎや気晴らしのためであって、それに打ち込むというような対象ではないようである（図表Ⅲ―Ⅰ―24参照）。

図表Ⅲ－Ⅰ－23　定年前後の人間関係の変化（K氏）



図表Ⅲ－Ⅰ－24　ライフカーブ（K氏）



⑿ 趣味に打ち込んでいる事例（Ｌ氏）

① 定年期の職業的領域における生活の変化

大手塗料メーカーにおいて異例のスピードで出世し、課長を経て、40代前半でＯ工場の工場長となった。しかし、オイルショック後の経営合理化の中、47歳の時にＨ工場に次長として格下げ転勤。ただし給料は維持された。転勤後、皆よりも１時間早く出勤して機械の始動点検をするという努力や、経営会議での卓越した改善提案、部下の掌握力等を認められて、54歳で工場長に返り咲いた。しかし、社長に魅力を感じることができず、58歳頃から60歳になったらすっぱり辞めると社長べったりの施設課の課長に宣言し始めた。そして、予告通り60歳で退職。生きのいいまま格好よく辞めたかったこともあるという。現在、なんの未練もないとのこと。退職後１年間は、失業保険で生活。その後、やったことのない仕事をしてみようと思いたち、職業紹介所で探した近所の小規模な工場でアルバイトの職人として勤務。現在のものも含めてこれまで３つのアルバイトを経験した。現在64歳。

② 定年期の家庭的領域における生活の変化

現在、妻、養母と同居。定年前と現在とで家庭生活は特に変化していない。

47歳の時にぎっくり腰になった。その後、治っていたが、定年後の最初のアルバイト（精密板金）を１年半やったところで再発し、半年ほど療養。２つめのアルバイト（チョコレート工場）で流れ作業のベルトコンベアーに前かがみになっているうちに再びぎっくり腰。半年ほど療養。現在３つめのアルバイト（鉄工場）でバフ研磨を半年ほどやっているが、とりあえず腰の調子はよい。休みの日は、弓道をやって体を動かしている。

③ 定年期の地域活動的領域における生活の変化

地域活動は特に行っていない。

④ 定年期の友人・知人とのつきあいの変化

定年前も現在も、短歌や弓道などを通じた交流が盛んであるようだ。

⑤ 定年期の趣味・学習面の変化

短歌、弓道、鉛筆淡彩、古城址めぐりが趣味。特に短歌と弓道は現役時代から真剣に打ち込んできた。これらはいわゆる「趣味」と呼ばれるような生半可なものではなく、生活の一部であり、生きている印であり、楽しみであると同時に苦痛でもあり、仕事となんらかわらないという。定年退職によってその打ち込みように拍車がかかったといえる。

⑥ パーソナリティと適応

物事はじっくりと考えるが、いったん決断すると行動は極めて迅速。リーダーシップを強く発揮する。朝礼などで大勢に演説したり、大部隊を動かすのが大好き。下の者には慕われるが、同僚や少し目上の者には敵が多い。強烈なシンパと強烈な敵とがはっきりとわかれる。皆から、年の割にはよくやっていると思われたまま死にたい。老いさらばえて死ぬのは嫌だ。

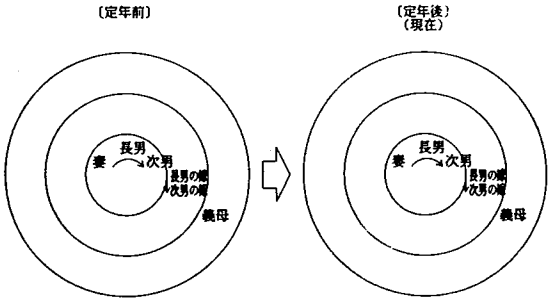
⑦ 定年期の人間関係

人間関係の布置は図表Ⅲ―Ⅰ―25参照。

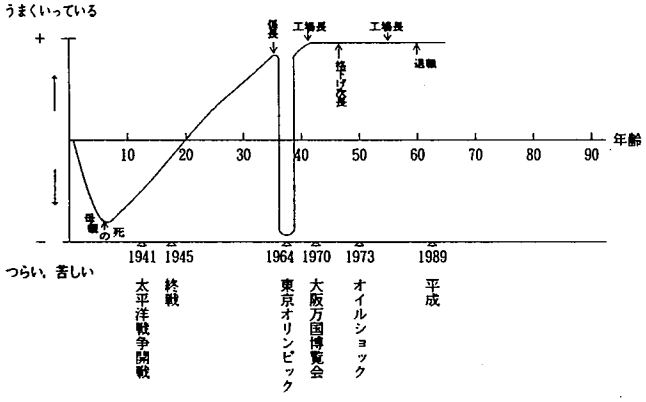
⑧　Ｌ氏の生きがい創造のメカニズム

定年前の生きがいは、工場の完全かつ安全操業・生産計画の達成・工場の建設・拡張工事・設備の増設工事；工場長という肩書き；安全管理や公害防止対策を他の誰より良くやったという自負；業界の会合で他社の工場関係者から工場長と呼ばれること；短歌（会社で逆境時は短歌に逃げ込んだ。短歌を持っていることが助けにもなり、自負にもなった）；先祖の土地を守ることの密かな誇り、であった。現在の生きがいは、家族の生活基盤固め（家族仲良くできるための配慮）；人間の幅を広げるための趣味（短歌の結社の運営委員および評者を担当し、後進の指導もしている。足腰がきかなくなってもできる。歌歴40年。／弓道。弓歴18年。現在弓道三段。暇があれば半日くらい道場で弓を引く。快く疲れて良い。そのうち四段をねらいたい。優勝トロフィー目下５個。もっと増やしたい／鉛筆淡彩。目下樹のシリーズで取り組み中。気が向けば、スケッチに歩く程度。巨木大樹に向かうと畏敬の念を生ずる／古城めぐり。県下の古城址を歩く。時々行く程度。古城址にはロマンがある）；アルバイト（今までに三カ所変わった。体験したことのない仕事をする事は人間の幅を広げてくれる。３Ｋの仕事ばかりで、仕事中はつらいが、過ぎてしまえば楽しい思い出。職場の苦労は短歌の材料）である。今も、現役時代と同じように、毎朝、その日やるべきことをメモ帳にリストアップし、それをこなすのに精一杯なくらいで、充実した日々が続いているという（図表Ⅲ―Ⅰ―26参照）。

図表Ⅲ－Ⅰ－25　定年前後の人間関係の変化（Ｌ氏）



図表Ⅲ－Ⅰ－26　ライフカーブ（Ｌ氏）



⑬ 解放感を味わっている事例（M氏）

① 定年期の職業的領域における生活の変化

33年間で115回、海外出張した。持ち前の探求心とねばり強さをフルに生かして、数多くの特許技術の考案・開発を手がけてきた。係長から課長、製造部次長、部長代理、工作部部長を経て、専務取締役まで急スピードで昇進した。最後の18年間は役員を務めた。しかし、仕事になかば禁欲的に専念するのとは裏腹に、もっといろいろなことを楽しみたいという気持ちが心の底に強くあり、定年と同時に、仕事はもういいという気持ちになったという。61歳で勇退し、１年間相談役を務め、その後、顧問となり現在にいたる。現在68歳。

② 定年期の家庭的領域における生活の変化

現在は妻と２人暮らし。定年前後で家庭生活に変化はない。26年間、糖尿病を患っており、左目が眼底出血、手がしびれて字が思うようには書けない。また66歳の時に、肺炎で入院した。しかし、お酒はウィスキーを晩酌として欠かさないという。近所に大きな公園があり、そこを歩きながら歩行速度と距離を向上させることで健康管理をしている。

③ 定年期の地域活動的領域における生活の変化

定年前は地域活動は全くしていなかった。定年後、地域の会報を見て、国際友好クラブに入り、ボランティア活動として各種の行事や教室に参加している。しかし、ボランティア活動はやればやる程、金と時間と労力がかかるので、やや負担だという。

④ 定年期の友人・知人とのつきあいの変化

定年前は会社の付き合いがほとんど。定年後は、軍関係の学校の同期生との付き合いがぐっと増えた。それについで地域の活動を通じた交流がある。

⑤ 定年期の趣味・学習面の変化

定年前は、趣味といえばゴルフくらいであった。定年後は、仕事を忘れ、趣味や学習を楽しんでいる。66歳の時に肺炎で入院したとき、運動ができないので本を読み始め、音楽をきき始めたのがきっかけで、それ以後、音楽に凝り始めた。音楽や45インチの大画面テレビを中心に、かなり手の込んだＡＶシステムを構築し、クラシック音楽やオペラをＬＤやビデオで楽しんでいる。63歳頃から放送大学や市民大学へ通ったり、ＮＨＫのラジオ講座を聞いたりしている。海外旅行もすでに12回行った。仕事では行けなかった所へ妻や軍の学校の同期生と行ったりした。

⑥ パーソナリティと適応

じっとしていない。よしこれをやろう、今度はこれをやろう、と常に何かを追い求めている。何かをやり出すと、とことんつきつめる。探求心が旺盛。常に、今後こういうことが大事になってくる、といった先を見る目が鋭く、新しいことを押し進めることが好きであり、かつ得意である。仕事の時は厳しく、白黒をはっきりさせる方である。いい加減なことが嫌い。

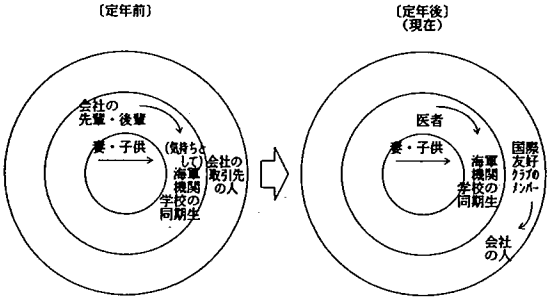
⑦ 定年期の人間関係

人間関係の布置は図表Ⅲ―Ⅰ―27参照。定年後に医者が重視されていることが注目される。

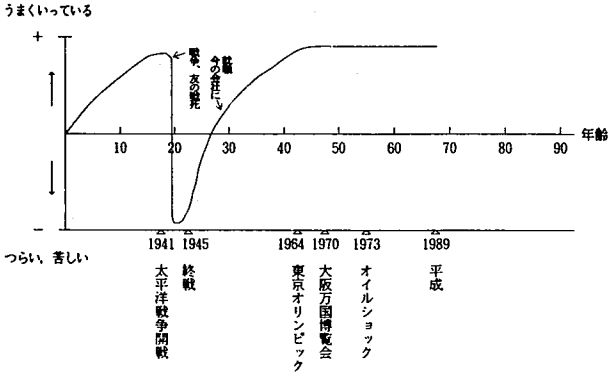
⑧　M氏の生きがい創造のメカニズム

定年前の生きがいは、よい家庭を造り、子どもを育て上げ、世の中に送り出すこと；自分でやろうとしたことをやり遂げること（同業他社に常に先んじた特許取得技術開発、海外進出等）であった。現在の生きがいは、より健康であるための血糖値管理と歩行運動速度と距離の向上；国際友好クラブの発展と外国人を含めた人との交流；ライオンズクラブの会員として、人との交流とボランティア活動；クラシック音楽のＬＤ、ビデオによる集大成を作り、ワープロまたはパソコンによる索引を作る。また作曲家の生き方と当時のヨーロッパ事情を知る；国内、海外を問わず、まだ行ったことのない処へ旅行すること、である。前は退職後のことは何も考えていなかったという。退職後は、若い頃にできなかったことの取り戻し感に突き動かされている。軍の学校では軍事関連のことしか学べなかったので、もっと幅広いことを学びたいという気持ちが、様々な教養講座への参加を動機づけている。また現役時代、様々な特許を考案し、会社での地位は向上したが、気楽な楽しみということがほとんどできなかった。海外に行くことはあっても、のんびりとした観光気分とはほど遠いものがあった。こうしたことを取り戻そうと、妻や戦友との海外旅行、音楽などの趣味へ没頭しているようである。なおこれらの前提には健康があるという意識があり、近所の公園を歩きながら、様々な楽しみのために健康な体作りをしているという充実感も感じているようである。ただし75歳になったら旅行は止めて、音楽や読書といった体を使わないですむ趣味に集中するつもりであるという（図表Ⅲ―Ⅰ―28参照）。

図表Ⅲ－Ⅰ－27　定年前後の人間関係の変化（M氏）



図表Ⅲ－Ⅰ－28　ライフカーブ（M氏）



Ⅰ・4　全体的考察

(1)　仮説1についての考察

仮説1は、「定年退職は生きがい喪失の要因となりうる」というものである。ここでは、仮説1について考察する必要上、一応、本考察における生きがいの定義を明確にすることにした。

神谷(1966)は、「生きがい」という言葉には、①「生きがい対象」：生きがいをもたらしてくれる対象ないし源泉と、②「生きがい感」：生きがいを感じている状態、という2つの側面があるとした。また小林(1989)は、「生きがい感」とは、生存充実感、すなわち感情の起伏や体験の変化を含み、生命を前進させるもの、つまり、喜び、勇気、希望などによって自分の生活内容が豊かに充実しているという感じであるとした。

本考察では、「生きがい」を以下のように考える。自分が生きていることあるいは生きていくことの意義、これから生きていくことによって得られるであろう幸福や利益、これから生きていく中で達成すべき目標などを得たとき、生きるための原動力としての心的エネルギーが涌いてくる。「生きがい」とは、そうした生きる原動力となる心的エネルギーを高めるものである。そして、そのような心的エネルギーのみなぎりを感じている状態が「生きがい感」である。「生きがい対象」は、「生きがい」を見出す対象ないしは源泉である。「生きがい」は、個々の「生きがい対象」から得られるが、本考察では個々の「生きがい対象」から得られるそれぞれの「生きがい」の総和としての「生きがいレベル」という概念を考える。「生きがいレベル」が十分に大きいときに「生きがい感」が感じられる。

ところで、今回の面接調査において実施した事前の自由記述では、「定年前は、あなたは何に生きがいを感じていましたか」「現在は、あなたは何に生きがいを感じていますか」といったように「何に」という聞き方をしている。そのため、実際の回答でもおおむね「生きがい対象」としての生きがいが答えられている。

一方、面接調査当日に実施したライフカーブ記述において、「人生の浮き沈みのカーブを大まかに描いて下さい」という質問文によって、横軸を人生の各時点とし、縦軸を「うまくいっている（＋1）」から「つらい、苦しい（－1）」までのレンジとし、ライフカーブを記述してもらった。本考察は、縦軸すなわちカーブの各地点の高さでもって測られているものは、人生の各時点での、充足感－不充足感、満足感－不満足感、幸福感－不幸感、楽しい－楽しくない、心の張り合いあり－心の張り合いなし、やる気に満ちている－やる気なし、などといった「感情および動機づけの状態の総体」の記憶であると考える。例えば、過去のある時点において、自分は張りのある毎日を送り、やる気に満ち、充足感も十分で、毎日が楽しく、幸福感を感じていたと記憶している人は、その時のライフカーブの位置を高く記述するであろうし、辛く、苦しく、面白くない日々が続いていたと記憶している人は、ライフカーブの位置を低く記述するであろう。

本考察では、こうしたライフカーブの高さに反映される、人生の各地点で経験される様々な

「感情および動機づけの状態の総体」を「心的エネルギーレベル」と呼ぶことにする。

「心的エネルギーレベル」は、「生きがい」その他のプラス要因と、「苦痛、苦渋」などのマイナス要因の総和として決定される。

「生きがい」は「心的エネルギーレベル」を高めるプラス要因であると考える。なお、「心的エネルギーレベル」を高めるプラス要因としては「生きがい」だけではなく、経済状態が良くなることなどもあるであろう。

他方、「心的エネルギーレベル」を低めるマイナス要因も存在する。われわれは生きていく中で様々な苦難、苦渋にぶつかる。肉親の死、病気の苦痛、家業の倒産、経済的困窮、人間関係のトラブル、ライバルとの競争における敗北、左遷、捕虜生活、迫害、過去に犯した罪に対する後悔の念などは「心的エネルギーレベル」を低める働きをもつ。

このようにライフカーブの上昇・下降は、「生きがい」の喪失・創造という要因だけでなく、経済面その他の要因や、「苦難、苦渋」の発生あるいは解消などによっても規定されるので、「生きがい」の喪失・創造の純粋な反映とは言えない。しかしながら、個々の事例の内容を具体的にみていくことで、ライフカーブの上昇・下降という「心的エネルギーレベル」の変化の要因の中から、「生きがい」の喪失・創造という要因を取り出すことは、ある程度、可能であるし、被面接者の「生きがい」の喪失・創造を知る上での重要な手がかりの一つとなると考える。

さて、かりに、以上のように考えると、１３の事例のライフカーブは、定年移行期におけるカーブの高さの変化のパターンから、３つのタイプに大別できると考える。

《タイプ１》定年後に、関連会社あるいは別会社へ再就職したことによってライフカーブが下降する。（A氏；C氏；I氏；E氏）

《タイプ２》親会社あるいは再就職先の関連会社において、副社長あるいは社長を経験し、しばらくはライフカーブが上昇または現状維持するが、その後、ライフカーブが下降する。（D氏；K氏；J氏）

《タイプ３》定年後、ライフカーブがほとんど変化していない。（B氏；F氏；G氏；H氏；L氏；M氏）

① タイプ１

A氏は、健康保険組合へ嘱託として再就職した。しかし、そこでは現役時代と同様の仕事のやりがいを感じることはできなかったようだ。そしてそのことがライフカーブの高さの落ち込みとなっている。A氏は定年前の「生きがい対象」として仕事と子供の成長をあげている。定年前は「生きがい」ということを意識したことはなかったが、今思えば、仕事が「生きがい」そのものであったというくらいがむしゃらに働いたという。再就職後、いったんライフカーブは落ち込んでいるが、健保組合での定年を迎えて退職した後、現役時代ほどではないが、ライフカーブの高さが復活している。A氏は現在の「生きがい対象」として、現役時代にはできな

かったこと、例えば、勉強、読書、音楽などをやることや、シルバー農園に参加することなどをあげている。いったん、仕事から得ていた「生きがい」を喪失した後、別の対象からの「生きがい」を創造できた事例であるといえる。

C氏は、保安関係の大組織において定年に達した後、別会社へ再就職した。再就職後、数年間はあまりに忙しすぎて自分には勤まらない、止めようと思ったこともあるという。この頃のライフカーブはかなり落ち込んでいる。しかし、数年して何とか落ちつき、現役時代と同程度の高さまで復活している。C氏の、定年前の「生きがい対象」は仕事のみであった。しかし、再就職後のライフカーブの落ち込みは仕事から得ていた「生きがい」を喪失したことによるというよりも、むしろ新しい職場での過度の忙しさからの疲労感によっている。そして、数年かかったものの、何とか忙しさに適応できてからは、ライフカーブは現役時代と同じ高さに戻っている。その後、60歳で関連会社での定年を迎えるが、会社の要請で雇用延長された。しかし、65歳で退職。その原因は病気であり、病気がなければ、自分に替わる人が現れなければ、まだまだ仕事を続けたとみられる。こうしたことからも関連会社での仕事には「生きがい」を見出していたといえる。退職後の現在は、郷里で仕事をすることを考えて社会保険労務士の資格取得を「生きがい対象」としている。病気という「苦難」にもかかわらず、ライフカーブが下降していないのは、将来の目標設定が明確になっており、仕事という点では変化はないが、新たな「生きがい対象」を見出しているためであると考えられる。

I氏は、58歳で定年に達した後、関連会社へ、その再建のため嘱託専務として赴き、60歳で専務取締役として移籍した。その頃からライフカーブは下降している。この理由としては、仕事にやりがいを感じなかったためというよりは、関連会社再建があまりに困難を極め、自分の思うように進まなかったことの辛さによると、面接時に本人が述べている。会社再建が一段落したため、64歳で希望退職した。その後は、フリーの経営コンサルタントとして充実した日々を過ごし、ライフカーブは上昇し、今も上昇中である。定年後は、資格を持たねば社会参加ができないという考えから40歳の頃に経営診断士の資格をとっていたことが効を奏し、職務を通じたフリーの仕事が「生きがい」創造を可能にしている。

E氏は、運輸関係の組織において55歳で定年に達した後、金融機関へ再就職した。その時点でライフカーブはプラスマイナス0のレベルまで落ち込んでいる。定年前から再就職のことがわかっていたので定年ショックはなかったと本人は述べているが、現役時代ほどの「心的エネルギーレベル」ではないようである。そして、可もなく不可もなくという状態のまま現在に至っている。現在も仕事を続けていられることに加えて、別荘を2つ持っていることや、頻繁に海外旅行にでかけているということが、「心的エネルギーレベル」を維持していると思われる。ただ、E氏が将来、現在の仕事を止めた場合に、ライフカーブが変化するか、それとも現状が維持されるかはわからない。

② タイプ2

D氏は、電気関係の会社において50歳で副社長となる。したがって、事実上、定年というものはなかった。ライフカーブは副社長となる頃は登り調子で、55歳の頃がピークとなっている。その後、カーブは65歳で勇退するまで下降している。ライフカーブ下降の要因は、ややわからないところがあるが、実際の業務でふるえる指揮権が縮小していったことのあらわれかもしれない。D氏は、将来のライフカーブの予想を点線で描いているが、それは70代前半までは上昇し、その後下降するというものである。D氏は、現在の「生きがい対象」として第一に、今まで忙しくてできなかった趣味・模型製作、中でも鉄道模型の製作をあげている。そして、模型をつくるためにM県に土地を買い、セカンドハウスを立てることを計画しており、そうした夢から「生きがい」を得ていこうとしている。それが「心的エネルギーレベル」の予測の上昇に反映されていると推測される。ただし、予想されるカーブの高さのピークは、副社長時代のピークには到底およばないということを本人も感じているようである。退職、引退後に趣味に「生きがい」を見出そうとしている事例であるといえる。

K氏は、大手メーカーにおいて56歳で定年に達した後、関連会社へ、その再建のため再就職し、常務を経て専務となった。ライフカーブはまったく落ち込むことなく、それまでと同様高い位置を維持している。会社再建計画を立案、実行し、再建を達成し、その手腕を評価されていたことが「生きがい」となり、そしてそれが「心的エネルギーレベル」を高めていたと思われる。しかし、65歳で、また別の関連会社の再建のためにその社長となるが、就任してすぐにライフカーブは下降し、69歳で退任した。社長といっても週に2泊3日で見回りに行く程度で、あまりやりがいを感じられなかったという。そして、69歳ともなると、仕事はもういいという気になって希望退職し、現在は無職である。K氏は、退職後、自分自身の健康を害したことに加えて、ほぼ同時期に妻を亡くし、「心的エネルギーレベル」はかなり低下している。まだ2年ほどしかたっていないこともあって、なかなか辛さを忘れられないようである。K氏は、現在の「生きがい対象」として職域型の福祉事業への参加や趣味をあげているが、自分の健康状態、妻の死という「苦難、苦渋」要因がトータルな「心的エネルギーレベル」を引き下げているために、それらがポジティブな「生きがい感」を感じさせてくれるにはいたっていないようである。また、K氏自身が自分の定年後の「生きがい」喪失の要素としてa.社会的地位の喪失、b.仕事に対する張り合いの喪失、c.健康に対する自信の喪失、d.豊富な余暇の発生、e.妻の他界を自由記述している。

J氏は、メーカーにおいて56歳で定年に達した後、60歳まで雇用延長された。また同時に56歳から、新しくできたジョイント・ベンチャー企業の社長となった。40代まで海外で勤務し、会社の海外進出に貢献することに「生きがい」を見出してきたJ氏は、帰国後、国内関連の業務に対するやりがいをそれほど感じず、ライフカーブも下降しているが、社長就任と同時に、一気に上昇している。そして、かつてないまでの最高の高さにまで達している。ところが、過労のために倒れ、やむなく社長退任となったことによって、ライフカーブは急降下する。その

後、間もなくして、今度は取締役として復帰するが、仕事の量や質の点で満足できず、ライフカーブの復帰した高さも社長就任前の高さにとどまっている。J氏にとってはまだまだ仕事が「生きがい」である。しかし、職業上の地位の低下や職務内容の量、質の面での低下が、仕事から得ていた「生きがい」を喪失させ、トータルの「心的エネルギーレベル」を低下させているといえる。なお、J氏は将来のライフカーブの予測も点線で描いている。しばらくは現状維持で、その後、ライフカーブは再び最高の高さにまで上昇し、その後、それを維持するというものである。

③ タイプ3

B氏は、大手酒造メーカーに就職後、35歳の時に大手建設会社に転職し、そこにおいて管理職を経験し、定年に到達した後、嘱託となる。また、その後、現在の建設関係の会社へ再就職し、管理職として現在にいたっている。このように、仕事上では何回かの変化があるが、B氏のライフカーブは、10代後半の急激な高揚以来、全く変化していない。B氏は面接していてほとんど仕事の話は出てこず、水を向けても少しだけ話をして終わってしまったことからも判断して、仕事に「生きがい」を見出しているとは考えにくい。B氏の話の大半は、軍艦や軍用機のコレクションの話に終始した。B氏自身は、「生きがい対象」についての自由記述の中で、こうしたコレクションが自分の「生きがい」かどうかはわからないと述べている。しかし、B氏のコレクションの量と質は並大抵ではなく、それにかける情熱はかなりのものであり、B氏にとっての「生きがい対象」とみなしても差し支えないと考える。戦時中、軍関連の学校でエリートとして過ごした頃の精神的高揚を思い出させてくれるのかもしれない。本人は意識化してはいないが、こうした打ち込みが、仕事上の変化に関わらず「心的エネルギーレベル」を高く維持している一つの要因となっているのかもしれない。なお、B氏は現在も職についているわけであり、将来、退職したときに、ライフカーブがどのようになるかはわからない。

F氏は、食品関係のメーカーにおいて総務部長として58歳で定年に到達し、関連会社の役員となる。その後、65歳で退職。辞めてから8年になる。F氏のライフカーブは会社就職後、可もなく不可もなくという状態で全く変化していない。F氏は定年前の「生きがい対象」として仕事をあげてはいるが、その具体的内容は、一仕事遂行したとき、休日、休暇で体を休めるとき、昇進、昇給であり、現在の「生きがい対象」として自由に時間が使える、心身のわずらわしさがない、などをあげている。これらから判断すると、F氏は仕事そのものに「生きがい」を見出していたというよりも、仕事からの解放感や、昇進、昇給という仕事に付随することがらに喜びを見出しているといえる。そのために、仕事上の変化が「生きがい」の変化ももたらさず、退職・引退後もむしろ自由に時間が使えてうれしく感じているため「心的エネルギーレベル」も変化していないものと推測できる。

G氏は、建設関連の会社において60歳で定年に達した後、関連会社の顧問となった。しかし、1、2年でつまらなくなり、夫婦での海外移住を決意し、現在準備中である。G氏は、病気が

ちであったが、仕事一筋の人生であった。ライフカーブは、途中、病気による手術、入院によって落ち込んでいるところはあるが、就職後、徐々に上昇しており、現在も上昇中である。定年後に再就職した会社での仕事がつまらなく感じた時期のライフカーブが落ち込んでいない理由の一つとして、55歳から60歳までは定年のことをかなり意識し、定年後の生きがいを模索していたという、一種の準備期間があったため、定年後に再就職した先での職務に満足できないということをある程度予想していたためかもしれない。あるいは、海外で第二の人生を送ることを決意し、それに向けて準備しているという現在の状況が、むしろ、そのきっかけともなった、再就職先でつまらない仕事についたということを肯定的にとらえさせているためかもしれない。海外移住という将来の実現可能な夢、目標があることがG氏の「生きがい」となり「心的エネルギーレベル」を高く維持しているものと推測できる。

H氏は、大手メーカーにおいて55歳で定年に達した後、関連会社へ出向し、57歳で移籍し、60歳で関連会社の定年に達した後、退職。H氏のライフカーブは、定年移行期において高い状態のまま全く変化していない。H氏は、少年時代に、父親が財産を差し押さえられたことに始まる貧乏のどん底状態を経験した。その中で、近所の人々のあたたかい援助を受け、人のありがたさをつくづく感じたという。そして、将来、社会に対して必ず何かお返しをしなければと思ったという。H氏はかなり早い時期から定年後のことを考慮しており、健康を維持しながら、定年を迎えたらきっぱり仕事を止め、すかっとして社会に奉仕することを決めていたという。もちろん、H氏の現役時代の「生きがい対象」の筆頭には仕事があげられているが、仕事そのものというよりもむしろ、会社のために全力を尽くすこと、上司、部下との人間関係という言い方がなされており、他者のためになること、人と人との心の触れあいを大切にすることというH氏の考えは定年前と定年後とで、一貫しているようである。H氏の地域での社会奉仕活動はかなりのものであり、定年後に片手間にやるというようなものではなく、まさにH氏の長年の夢であった社会への恩返しの実践となっている。定年によって仕事から得ていた「生きがい」は喪失しているといえるが、新たに社会奉仕からそれに匹敵するほどの「生きがい」を得ていることが、「心的エネルギーレベル」の維持をもたらしているといえる。

L氏は、塗料メーカーにおいて工場長にまで出世し、60歳で希望退職した。その後、家の近所の町工場でアルバイトとして勤務している。L氏のライフカーブは、定年移行期において高い状態を維持したまま変化していない。L氏の現役時代の「生きがい対象」は仕事と短歌であった。そして、現在の「生きがい対象」として、家族らの生活基盤を固めること、人間の幅を広げるために短歌、弓道、鉛筆淡彩、古城址めぐりに力を入れること、およびアルバイトをあげている。歌歴40年、弓道歴18年であり、短歌と弓道は、気軽な、暇つぶし的ないわゆる「趣味」ではなく、真剣勝負であり、自分にとっては仕事となんら変わらない重みを持つものであるという。L氏のライフカーブの高い位置での維持は、こうしたことの反映であると推測できる。L氏の「心的エネルギーレベル」を支えているものの中で、他者との比較によるポジティブな自己評価や他者からのポジティブな評価ということが大きな比重を占めているようである。

現役時代、L氏は工場長という肩書きが大好きであったという。また、他の誰よりもよくやったという自負に「生きがい」を感じたという。短歌を持っていることは逆境時の助けにもなったが、自負にもなったという。L氏は短歌雑誌の評者としても活躍しており、L氏にとっての短歌には、他者の目に格好よく映った自分を感じさせてくれるという意味もあったといえる。弓道もトロフィーの数に自信をもっており、年の割にはよくやると皆から言われたいという。また、60歳で工場長をきっぱりと辞めた一つの動機として、生きのいいまま、格好よく去りたいという意識があったという。L氏にとって、工場長という肩書きを失い、誰よりもよく仕事をやったという自負感を失うことは、そこから得ていた「生きがい」を喪失することではあった。しかし、短歌や弓道という、真剣勝負的に自分を打ち込ませることができ、同時に他者からのポジティブな評価も得られるものから別の「生きがい」を得ているために、「心的エネルギーレベル」は変化していないのだと推測できる。定年前から真剣に打ち込める趣味を持っていることが「心的エネルギーレベル」を維持している事例である。

M氏は、メーカーにおいて最後の18年間役員を務め、61歳で退職して相談役となり、62歳で顧問となり現在に至っている。M氏のライフカーブは定年移行期において高いまま維持されている。M氏は、現役時代は、仕事に「生きがい」を見出し、特許技術開発、海外進出など自分でやろうとしたことをやり遂げることを「生きがい対象」としていた。「心的エネルギーレベル」が高いまま維持されている理由の一つとして、定年後の今こそ若いときにできなかったことを楽しめるという新たな「生きがい」を創造していることがあるようである。軍関係の学校にいるときには、軍事に関係したことしか学べなかったので、もっと幅広い勉強をしたい。現役時代は、遊びもあまりせず、ひたすら禁欲的に仕事に没頭してきたので、妻や戦友との旅行、音楽などの趣味など自分の好きなことをして楽しみたい。こうした「取り戻し」が可能となっていることによってM氏は「生きがい」を得ているといえる。「心的エネルギーレベル」が維持されていることの理由として、まだM氏は元の会社の顧問をしているということがあるかもしれない。完全に引退した場合に、旅行や学習や趣味によって、現在の心的エネルギーレベルを維持できるかどうかはわからない。

④ まとめ

タイプ1とタイプ2は、タイプ1では定年後すぐにライフカーブが下降しているのに対し、タイプ2では定年後すぐにライフカーブが下降しないという点が異なっている。しかし、タイプ2においては社長あるいは副社長就任というプラス要因がその時期はたらいたということが異なるだけで、最終的にはタイプ1と同様ライフカーブは下降している。タイプ1とタイプ2は、定年移行期において、職業を失うことや職業上の地位の低下が「生きがい」の喪失をもたらし、それが「心的エネルギーレベル」の低下に反映されている事例であるといえる。

いったん低下した「心的エネルギーレベル」がその後、上昇している事例とそうでない事例とがある。

いったん低下した「心的エネルギーレベル」がその後、上昇している事例はA氏、C氏、I氏、D氏、J氏である。ただし、「心的エネルギーレベル」上昇の原因は事例によって異なっている。

A氏の場合、現役時代にできなかった勉強や読書や音楽に熱中することおよびシルバー農園という地域活動へ参加することが主たる原因となっている。C氏の場合、再就職先の会社への適応がうまくいったことが主たる原因である。I氏の場合、フリーの経営コンサルタントとして職業を通じた社会参加ができていることが主たる原因である。D氏の場合、長年の夢であった鉄道模型に熱中できること、そのためのセカンドハウスを物色中ということが主たる原因である。J氏の場合、取締役として復帰したことおよび病気のため社長を退任したことをしかたないと割り切り、幅広い学習や趣味に打ち込もうと考えていることが主たる原因である。これらの事例においては、いわゆる定年ショック後の「生きがい」創造が、すべてが完全というわけではないが、ある程度なされているといえる。

いったん低下した「心的エネルギーレベル」がその後、上昇していない事例は、E氏、K氏である。E氏の場合、仕事が終わったらのんびりすることを楽しみとしており、特に可もなく不可もなくという状況に本人なりに満足しており、特に「心的エネルギーレベル」を高めるような強烈なものがないことが原因である。 K氏の場合、手術を経験し、自分の健康に自信がもてなくなっていることと、妻の死からまだ2年しかたっていないということから、「心的エネルギーレベル」復活にはまだ至っていないという状況である。本人は、今後、趣味に打ち込むことや職域型ボランティアに力を注ぐことでライフカーブが上昇するという予測をしている。

タイプ3は、定年移行期においてライフカーブがほとんど変化していない事例である。しかし、その原因は様々である。

B氏は、そもそも仕事にはあまり「生きがい」を見出していなかったために、仕事上の変化は「心的エネルギーレベル」にほとんど影響を及ぼさなかったものと考えられる。F氏は、仕事に「生きがい」を見出してはいたものの、むしろ仕事からの解放感を楽しんでいたところがあり、定年後の自由な生活を楽しんでいるためと考えられる。この2つの事例は、仕事そのものにそれほどの「生きがい」を見出していなかったから仕事を失うことによっては「生きがいレベル」はほとんど変化せず、「心的エネルギーレベル」も変化しない事例であるといえる。

G氏は、55歳頃から定年後の「生きがい」を模索してきていたので、再就職先でのつまらない仕事に対しても心の準備ができていたということと、現在、海外移住を考えていて明るい将来展望があることが主たる原因であるといえる。H氏は、早期から、定年になったらすかっとして社会に奉仕することを決めていたためと考えられる。L氏は、現役時代から仕事以外に真剣勝負的に自分を打ち込める短歌や弓道を持っていたためためと考えられる。M氏は、現役時代にやれなかったことをやれるという楽しみと現在も元の会社の顧問をしているためと考えられる。これら4つの事例は、定年後、仕事以外のことからの「生きがい」を得ることができているので「生きがいレベル」が変化せず、心的エネルギーレベル」も変化していない事例であ

るといえる。

以上のことから、仮説１は支持されたといえる。

(2) 仮説2についての考察

仮説1の考察では、個々人のなかで様々な意味でとらえられている生きがいを一つの心的エネルギーという側面に投影し、その総量、すなわち生きがいレベルからとらえたときに、生きがいの喪失・創造に定年移行期のどのような要因が絡むかを考察した。しかし、仮説Ⅱでは、個人がそれぞれどのような意味合いで生きがいということをとらえているのか、そうした生きがいのとらえ方は定年期に変容するのかどうか、といったことが問題である。

生きがいというのは、個人の生きる原動力となる心的エネルギーを高めるものであれ、そのエネルギーのみなぎりの感覚であれ、本質的に個人によって認知されたものである。言い換えると、個々人の生きがいは、それぞれの内的世界ないし認知構造のなかで独自に意味づけられている。そうした個人によって独自に意味づけられた生きがいを、断片的に表出した言葉から分類することはかなり危険である。とくに、質問紙調査法によって強制的に表出させた場合には、比較的近い表現を選ぶにせよ、本来、意識していないものまで意識してしまうという側面がある。

事実、B氏などは、質問紙のなかでは、選択肢に○をつけたが、あらためてそれが生きがいかと問われると、そうでもないということを明確に表明している。したがって、本研究では、質問紙調査法のように、強制選択的に断片的なメッセージを表出させ、それを分類するという手法はとらなかった。そのような手法では、本当に生きがいのとらえ方が変わったのか、たまたまそういうカテゴリーがあるからそれを選んだのか、一概に言えないからである。そこで、本研究では、構造化されない自由な面接ないしは投影法的な文章完成法やコンボイ調査法で自発的に表明された言葉を手がかりとした。

もとより、自発的に表明された言葉も断片的で、その言葉自体から、その個人の内にある生きがいの独自の意味づけを理解することはきわめて困難である。したがって、本研究では、その言葉自体の分類よりも、どのような文脈のなかで、どのような意味あいでそうした言葉が表出されたかに注目した。このような観点からすると、仮に、同じように仕事が生きがいと答えたとしても、会社からも家族からも働くことを期待され、働くことによって会社から報酬が得られる状況の中で仕事が生きがいというのと、会社からは働くことを期待されていないが家族から働くことを期待され、働くことによって家族から感謝される状況で仕事が生きがいというのでは、個人の内にある生きがいの意味づけが食い違ってくる可能性があるということである。

このような文脈的な観点からみていくと、定年によって生きがいのとらえ方は変容すると考えざるをえない。なぜならば、定年によって、個人をとりまく状況が構造的に変化すると考えられるからである。たとえば、定年前後で、多くの方達のコンボイが大なり小なり変動する傾向がうかがわれた。とりわけ、いくつかの事例で、定年にともない会社の関係、すなわち、上司、部下、同僚、職場を縁とする知人などが、コンボイの中心から軌道の外へ遠のいていく様子が明瞭に示された。これは、本人自身も、定年後は会社の関係を自分の安心や充実のネット

ワークとして評価していないことを意味しているが、逆にみると、ある意味では、会社の関係者もその人を会社の安心や充実のネットワークとして評価していないということを反映しているようにも思われる。

こうした状況の中で、会社に義理人情を感じる会社人間でとどまることはきわめて困難である。たんに、会社や仕事に対する愛着が減少するという量的な問題でなく、その人にとっての会社や仕事の意味あい自体が変容せざるを得なくなるということである。そのように自分も期待せず、会社からも期待されない状況では、定年前のように、会社や仕事に生きがいを感じることはできなくなってくる。これは、会社や仕事に生きがいを感じなくなったとみることもできるが、その人の中での会社や仕事の意味づけが変化したとみることもできる。生きがいの量的側面と質的側面は密接に結びついており、一概に切り離して考えることはできない。

こうした考察を拡張していくと、推測の域を出ないがいくつかの興味深い考察が可能である。たとえば、生きがいに懐疑的なB氏の場合、面接の中で仕事の話があまり出てこず、仕事に生きがいはさほど感じていないのではないか、ということが感じられた。はたして、B氏の場合は、定年前も定年後もコンボイの中に会社の関係者は一人も登場していない。このことは、会社の関係者がB氏をどうみているかはともかく、少なくともB氏の方は会社の関係者を自分の安全や充実の重要なネットワークとはみていないことを物語っているのではないか。こうしたB氏の認知構造がB氏の会社や仕事に対する生きがいの感じ方と密接に関連しているように思われる。

一方、コンボイ調査から、定年後、比較的重要性を増してくるネットワークがいくつか示唆された。例えば、A氏のコンボイ調査の場合には、定年前は妻よりも子供に比重が置かれる傾向があったのに対して、定年後は子供よりも妻に比重を置く傾向がみられた。事実、A氏はこれまで苦労をかけてきた妻の期待に応え、妻の教室をサポートすることに大きな生きがいを感じている傾向がうかがわれる。また、一般的にも、働き盛りにおいては、妻のために働くと言うよりは、子供や家族のために働くという意識の方が強いとみられる。

また、定年退職し会社や仕事の関係をあまり重視しなくなったいくつかのケースで、人によっても様々で一概に言えないが兄弟姉妹、親戚、友人、近所、地域のいずれかとの交流を重視する傾向がうかがわれた。これは、定年退職にともない生きがいのとらえ方を、会社や仕事一辺倒からこれまで顧みることのなかった会社や仕事以外の領域に、新しい生きがいを求めようとする傾向があることを反映しているように思われる。

以上、とくにコンボイ調査の結果と絡めて、定年期の生きがいのとらえ方が変容する可能性について考察してきたが、こうした人間関係を含む様々な状況の変化が、個人の内にある生きがいの独自な意味づけに影響を及ぼしていることが考えられる。また、そうした生きがいのとらえ方に影響を及ぼす状況的な変数のなかでも人間関係の変数がきわめて重要な変数の一つであることが示唆されたといえよう。また、このことは、個々人の生きがいの問題を考える場合には、その個人の内にある様々な要因を探ることもさることながら、個人の外にある様々な状

況要因、とくに人間関係を的確に把握することが大切であることを物語っている。

もとより、個人の生きがいの意味づけは、個人をとりまく環境の変化によって変わることもあるが、個人のうちなる欲求の変化によって変わる可能性もある。たとえば、何人かの方が、現役のときには仕事によって忙殺されてできなかったが、引退して自由な時間が増え、かつてやりたかったことを存分にできることを生きがいに挙げている。これなどは、物理的な時間的状況の変化もさることながら、そうした外的時間的状況とあいまって、内的な欲求構造の変容が生きがいの意味づけに影響したことを物語っているといえよう。

また、本研究の中で、何人かの人が、生きがいというのは、生きがいレベルが高いときには、意外と意識されない可能性があることを示唆している。たとえば、振り返ってみると、そのときは仕事が生きがいであると思えるようであるが、仕事に夢中になっていたときには、ほとんど生きがいなどということは意識していなかった、ということを何人かの人が述べている。逆に、生きがいというのは、病気になったり、地位が低下したり、配偶者が亡くなったり、様々な喪失によって逆境に陥っているときに、言い換えると生きがいレベルの低いときに、かえって強く意識されてくる、という側面があるようである。これはなぜなのだろうか。ここには、生きがいの認知の問題における本質的な秘密が隠されているかもしれない。

かりに、そのような生きがいの知覚機構があるとするならば、生きがいという人間の知覚システムは、ある面で人間の生きる上での本能的な防衛的な知覚体制を反映しているのかもしれない。生きがい喪失の知覚という現象は、ある意味で、自分が自分に対して、生きる上での新たな生きがいの創造の必要性を警告しているのかもしれない。そのようにみると、生きがい喪失の問題は、むしろ生きがい創造の問題として生産的にとらえることも可能であるように思われる。

(3) 仮説3についての考察

仮説3は、「定年後、生きがいを得る場は変容する」というものである。「生きがいの場」とは、どこで「生きがい」を得ているか、ということにかかわるものである。「生きがいの場」としては、これまでの研究から大きく職場、職域、地域、家庭、個人生活などが考えられる。

ここでは、それぞれの事例の「生きがいの場」を知る手がかりとしては、事前に実施した自由記述において被面接者が回答した「生きがい対象」のリストを用いた。どこで「生きがい」を得ているかということは、何に「生きがい」を感じているか、ということと密接に関連していると考えるからである。

そこで、それぞれの事例の「生きがいの場」および「生きがい対象」を仮説1で用いた3つのタイプごとに整理してみた。図表中の（　）内は「生きがい対象」を示している。

定年前	現在
（タイプ1）	
A氏　職場（仕事） 家庭（子供の成長）	個人生活（現役時代にできなかった勉強、読書、音楽・ビデオ鑑賞） 家庭（孫、子供との団らん） 地域（シルバー農園；ボランティア）
C氏　職場（仕事）	職域（社会保険労務士の資格取得のための受験対策）
I氏　職場（仕事；人間関係） 職域（資格取得） 家庭（家族との団らん）	地域（ボランティア） 職域（元勤務会社との交流；経営コンサルタント） 個人生活（俳句、短歌、カラオケ、ワープロ、ファミコン、ビデオ）
E氏　職場（仕事） 家庭（家族の幸せ） 個人生活（健康）	家庭（海外・国内旅行） 個人生活（健康；海外・国内旅行；のんびりした生活）
（タイプ2）	
K氏　職場（仕事；地位；経済的ゆとり） 家庭（子供、孫の成長） 個人生活（写真；囲碁；ゴルフ）	職域（職域型福祉のボランティア） 家庭（2人になった孫の成長） 個人生活（囲碁；写真；ゴルフ；旅行）
D氏　職場（仕事；講演会の講師） 家庭（子供の成長） 個人生活（国内・海外旅行；人間関係）	職域（経営コンサルタント） 個人生活（鉄道模型；友人との飲食・スポーツ）
J氏　職場（仕事；会社の繁栄；；昇進；蓄財） 家庭（家族の幸せ；子弟の教育） 個人生活（同僚、後輩との歓談・スポーツ；人間関係）	職場（仕事） 家庭（夫婦で寺社・神社の参詣；妻との外食） 個人生活（自己啓発；植物鑑賞；小旅行；スポーツ；観劇）

（タイプ3）	
B氏　生きがいに懐疑的	現在の「生きがい対象」は戦闘機や軍艦の模型のコレクションであると推測される。
F氏　職場（仕事からの解放感；休日・休暇で体を休めるとき；昇進；昇給） 家庭（子供の成長；家族の健康） 個人生活（麻雀；スポーツ）	個人生活（自由な時間；気ままな生活；健康；趣味が自由にできる） 家庭生活（家族の健康）
G氏　職場（仕事）	個人生活（好きなことをやる；健康のためのスポーツ；クラシック音楽） 家庭（妻と同じ趣味で助け合い老後を暮らす；海外移住）
H氏　職場（仕事；会社のために全力を尽くす；人間関係） 個人生活（健康のためのゴルフ） 家庭（家族との対話；家族の健康）	地域（人と人との心の触れあい；人の心の支えになれること；社会奉仕活動） 個人生活（年金生活範囲内で趣味を生かす）
L氏　職場（仕事；工場長という肩書き；誰よりもよくやったという自負） 家庭（先祖の土地を受け継ぎ守る） 個人生活（短歌）	職場（町工場でのアルバイト） 家庭（家族らの生活基盤を固めておく） 個人生活（短歌；弓道；鉛筆淡彩；古城めぐり）
M氏　職場（仕事；自分でやろうとしたことをやり遂げる） 家庭（よい家庭をつくり、子供を世の中に送り出す）	個人生活（健康のための公園散歩；クラシック音楽のＬＤ、ビデオの集大成をつくる；国内・海外旅行） 地域（国際友好；ライオンズクラブ）

以上のように、定年前と定年後とでは、「生きがいの場」は変容している事例が多い。また、同じ「生きがいの場」であっても、その中のどのようなことがらを「生きがい対象」としているかも変化しているようである。したがって、仮説3は支持されているといえる。なお、3つのタイプそれぞれに特徴的な変容のパターンはみられないようである。

(4) 仮説4についての考察

仮説4は、「生きがい喪失・創造のプロセスと性格との間に一定の関連がある」というものであるが、この仮説の検証は、本研究の範囲ではきわめて困難であるということをお断りしておく必要がある。本研究では、少ない回数の面接にもとづいて分析しているわけであるが、個人の性格をそうした面接の印象から把握するのはきわめて困難であり、危険である。たしかに、性格面の検討には第一次調査のなかの性格に関する項目を使うということも可能である。しかし、第一次調査では、性格の項目数が少なく、信頼性・妥当性が低く、多数の集団内の傾向分析に使用するのはともかく、個々人の性格の把握に使用するのには無理がある。

そこで、本研究では、自分の性格に関する自己評価、あるいは他者評価に関する情報を得るようにした。例えば、「自分で自分の性格をどのように思っていらっしゃいますか」「なにか、信条のようなものはありますか」「まわりの方は、あなたのことをどのような方だと思っていると思いますか」など。しかし、それぞれその人らしさを反映しているとみられる言葉や信条も多数あるが、現段階ではまだまだ断片的なものであり、十分な吟味がなされておらずそれを性格の指標とするのはきわめて危険である。したがって、本研究の範囲では、性格に関する確かな情報はあまり得られていない。したがって、性格を自己評価や他者評価によってとらえ、生きがいとの関連について考察するのも、現状では困難であるとの結論に達した。

ただし、性格というものをより広義にとらえ、その人の欲求のあり方、興味の持ち方、ライフスタイルなどを含めておおざっぱに考えると、個々人の生きがい創造のあり方はそれらによってかなり異なる傾向があり、性格と生きがいのもち方とは密接な関係があると考えられる若干の証拠は得られたように思われる。例えば、B氏は生きがいについて懐疑的であり、これがB氏の生きがいであるということは一概に言えないのであるが、しかし、コレクションがB氏の生きがいであるとするならば、これはB氏のとことんやる性格を反映しているとみられる。また、CDやレコードのコレクションにしても軍艦や軍用機のコレクションにしてもB氏の独自な興味を反映していると見ることができる。また、D氏も、自分の設計にもとづく壮大な鉄道模型づくりに情熱をもっているが、なぜ鉄道模型なのか考えてみると、これはもうD氏の独自の興味を反映しているとしか考えられない。つまり、なぜそれがその人の生きがい対象となったのか考えるとき、その人独自の興味や欲求、ライフスタイルがそこに反映されてきているとしか考えようがないという場合があり、その違いはパーソナリティからきていると考えてよいように思われる。しかし、その関係のあり方は、個人によってケースバイケースであり、そこに一定の法則性があるかどうかは一概にいえない。それゆえ、この仮説については、今後さらに研究を進めていく必要があろう。

(5) 今回の面接調査で示唆されたことがら

最後に、本研究から示唆されたことならびに本研究の限界や残された課題についていくつか言及しておきたい。

① ライフカーブに基づく生きがい喪失・創造の分析の有効性

本研究では、生きがいを生きる原動力となる心的エネルギーを高める要因の一つとしてとらえた。そして、ライフカーブを心的エネルギーレベルの変化の反映と見なし、その変化を手がかりとして生きがいの喪失、創造を推測した。しかし、a．ライフカーブの変化が心的エネルギーレベルの変化をどの程度正確に反映しているのか、b．心的エネルギーレベルの変化の要因の一つとしての生きがい喪失・創造をどの程度正確に抽出できているのか、といったライフカーブに基づく生きがい喪失・創造の分析の有効性については、今後さらに検証していくことが必要である。

② コンボイ調査に基づく生きがいのとらえ方の分析の有効性

生きがいというと、個人の内面的な問題と考えがちであるが、個人の生きがいのとらえ方は、個人をとりまく様々な状況、とりわけ人間関係によって影響を受けているという点に留意する必要がある。本研究におけるコンボイ調査の狙いもそうした人間関係と生きがいの感じ方との関連をみることにあったが、一応、一定の成果があったといえよう。しかし、生きがい研究におけるコンボイ調査の有効性についてもさらに検証していく必要があろう。

③ 生きがいを意識するメカニズムについて

人は自分の生きがいというものを、心的エネルギーが充実しているときにのみ意識するわけではない。逆境時や健康を害したときや自分の死を意識したときなど、「心的エネルギーレベル」が落ち込んだ時にも、「何のために生きるのか」、「自分にとっての生きがいは何か」などを問うのではないだろうか。例えば、K氏の場合、シベリア抑留中はライフカーブが落ち込んでおり、心的エネルギー状態が低いとみられるが、生きて日本へ帰ることが当時の「生きがい」であったと述懐している。しかし、生きがいの知覚におけるこうしたメカニズムについては今後さらに検討する必要があろう。

④ 時間的側面からみた生きがいについて

「生きがい」の多くは、現在の生活の中から得られるものであるが、それ以外にも、将来の生活の展望から得られるものや過去の生活の記憶から得られるものがあるかもしれない。13の事例のなかには、たとえばG氏のように将来の海外での生活に対する期待が生きがいとなっている例など、将来の生活の展望が生きがいとなっている例がいくつかみられた。一方、B氏のように、青年期に経験した軍の学校のエリート養成学校の生徒時代の精神的高揚を思い出させてくれる軍用機や軍艦のコレクションが生きがいとなっている場合もある。これは、過去の栄

光や過去の楽しかった時期のことを思い出すことから生きがいを得ていると考えられよう。

⑤ その他

本研究では、興味深い知見が多数得られた。しかし、これらの知見を一般化するには、本研究はいろいろと弱点も少なくない。第1に、本研究では少ない回数の面接にもとづいて様々な分析を行っているため曖昧な点が多々残されている。第2に、本研究は記憶に依存するところがきわめて大きい。したがって、記憶の変容、修正の可能性に対する多角的なチェックを行う必要がある。第3に、対象者を大都市及び大都市近郊に住む男性管理職・役員経験者に絞ったこともあって、地方の中小都市や市町村に住む人々や、管理職・役員経験者以外の人々、女性、サラリーマン以外の人々などの生きがいの問題についてはほとんど明らかにしていない点に留意しなければならない。

第Ⅱ章　シニア期の夫婦関係と生きがいのパラドックス

（聖心女子大学　藤崎　宏子，(財)統計研究会　西　三郎）

II・1　課題と方法

(1)　問題関心

近年、いわゆる「生きがい論」は花盛りの感がある。政府各省庁や地方自治体による「生きがい対策」に始まり、カルチャーセンターや新宗教のブーム、さらに「生きがい」をテーマとしたハウツー物的な書物の氾濫まで、さまざまな現象にそれはみることができる。こうした傾向は、とりわけ高度経済成長期以降にあらわれ、時代を下るにしたがいいっそう顕著になりつつある。

こうした「生きがい論」への関心の高まりの背景要因として、まず「豊かな社会」の実現があげられる。マズローの欲求階層説を持ち出すまでもなく、人間は生命を維持するための物質的欲求や安全の欲求などの基礎的欲求が満たされれば、より高次の欲求に関心を向けるようになる。すなわちそれは、自己実現や真理を追求したいという精神的、形而上学的欲求である。第二次世界大戦の敗戦により壊滅的な打撃を受けた日本の経済や社会生活が再建され、さらに驚異的な発展を遂げた1970年代以降、「生きがい論」への関心が高まったのも、当然の成り行きといえる。

さらに、シニア期の生きがいに限定して考えると、平均寿命の延びによる「人生80年時代」の到来が、もう一つの大きな要因としてあげられる。医療技術の発達や生活水準の向上によりもたらされたこの長寿化は、個人の生き方に、また社会のあり方に大きな変容を迫るものであった。個人の立場からみれば、職業や家族役割を全うして以降も、おおよそ20年から30年の人生が残されている。かつての時代は、この期を「余生」とみなし、穏やかな「隠居」生活のなかで、遠からず訪れるであろう自らの死を待つことができたかもしれない。しかし、今日のように人生の三分の一前後の期間が残されるということになると、もっと積極的にこの期を生きたいという欲求がおのずと強くなる。

他方、社会の側からみると、今日進行しつつある人口の高齢化、そして21世紀には確実に到来すると予測されている超高齢化社会を前提として、いかに社会活力を維持・発展しうるかということが大きな社会的関心事となる。ここでは、個人個人の生きがいを求める活動を、いかに「社会貢献」の方向に関連づけることができるかが問われているといえる。

「生きがい」の一つの側面が、社会的存在としての人間の自己確認や、存在意義の確認であるとすれば、この社会的レベルと個人的レベルの問題状況は、相互に重なりあう部分をもつ。しかしもう一方で、完全に同一のものとしてとらえることもできず、それぞれの視点から見えてくる問題状況はおのずと様相を異にする。本稿では、この二つのレベルのうち、前者、すなわち個人の立場に立って「生きがい」を問題にする。

ところで、「個人の立場」から生きがいを問題にしようとすると、まず直面する困難は、生きがいの多義性やその概念の不明瞭さである。個人の立場に重きをおくということは、一人ひとりの個人により異なる、現在の生活状況全般に対する意味づけや評価に注目するということ

であり、画一的な客観的指標による分析は困難である。極端な場合、客観的にはまったく同一の生活状況にある人が、一方はそれを「生きがいあり」とし、他方は「生きがいなし」と評価することもある。したがって、たんに生きがいの「ある」「なし」といった反応の結果だけでなく、各個人特有の「生きがい」についてのイメージ、人生に何をどこまで望むかという欲求水準のあり方、それらのライフコース全体にわたっての変化や浮沈、自らの状況を判断する基準となる身近な他者の生活状況など、多様な要因を考慮に入れておかなければならない。

このように、「個人の立場」に立つことにより、研究に着手するための最低限の条件である明確な概念定義を断念せざるをえなくなる。しかし、まったくの無前提では研究を進めることが困難であるため、ここでは、まず暫定的に、生きがいとは「個々人がみずからの生に見いだしている意味」であると、もっとも抽象度の高い定義を与えておく。

生きがいをこのようなものとしてとらえると、次に問題にしなければならないのは、いかにしてこの生きがいにアプローチするかという視点のおき方である。本稿では、次のような二種の相対立する特質が弁証法的に統合されたものとして、生きがいをイメージする。

第1は、生きがいの「対自的側面」と「対他的側面」である。「対自的側面」とは、先に述べた「個人の立場」に立った生きがいの把握からおのずと導き出されるものであり、ある対象に無条件に打ち込めるとか、ある状態を快適で好ましいものと感じられるといった、個々人の主観的評価を問題にする。この場合、第三者からみた本人の客観的状態がどのようなものであろうと、それによって「対自的側面」が左右されるものではない。他方、「対他的側面」は、以上のような対自的側面の重要性にもかかわらず、人々が実際に生きがいと感じるものの多くは、何らかのかたちでの他者とのかかわりを必要とするということに注意を喚起する。たとえば、愛情のような感情は、他者との深い情緒的なかかわりそのものが、みずからの生きる意味の確認につながる。また、具体的な活動を通して他者やより大きな全体社会に何らかの貢献をなしていると思えることが、みずからの有用感の源泉となり、そのことにより生きがいを感じることもできる。さらに、みずからの活動や行為、あるいは存在そのものを意味あるものとして他者が認めてくれることにより、生きがいを感じることもある。いずれの場合も、他者との関係性が必須条件となっており、生きがいは「個」のなかでは完結していない。

第2の対立する特質は、生きがいの「変化」と「連続性」である。人々の生活構造は、ライフコースの展開のなかで、幾度となく大きな「変化」を経験する。これに応じて、生きがいのあり方もまた、「変化」を求められることになる。こうした移行や変化への適応がうまくいかない場合、たとえば、定年退職後にいつまでも仕事や肩書きに執着するといったケースでは、これが原因となって、精神病理的な兆候があらわれることすらある。このことからも、生きがいの保持にとって、変化と適応はきわめて重要であるといえる。しかしもう一方で、人間には、自らの生のなかに基本的な「連続性」を堅持したいという欲求もある。それは「人生の基本的モチーフ」（藤崎，1987）であり、人生の全過程を貫く「テーマ」（カウフマン，1988）ともいえるものである。このような基層的なレベルでの「連続性」の感覚は、みずからが生き抜い

てきた人生の意味の再確認につながり、ひいては、「アイデンティティ」の基盤にもなりうるものと思われる。

以上のような、「対自／対他」、「変化／連続」の２種の対照的な特質の組み合わせとして、各個人の「生きがい」の観念にアプローチする。各対をなす特質は、対照的であり、かつ相互に矛盾するかのようにもみえる。しかし、これら各対は、決して排他的な関係にあるわけではない。むしろ、一方が他方の特質を成り立たせるための前提として、互いに不可欠の要件になっている場合もある。たとえば、みずからの生の基層的な部分で「連続性」が維持されているがゆえに、表層的な部分での「変化」が容易になるといったような、パラドクシカルな関係が成り立っている。本稿では、このような生きがいのパラドックスの解明に、一つの関心をおいている。

とくにシニア期との関連でいえば、対自／対他の面では、「定年退職」により職業キャリアの終焉を迎えることで、職業という役割を通して無条件に与えられていた生きがいの「対他的側面」が失われがちである。加えてそれは、ライフコースと生きがいにおける「連続性」の感覚の喪失として意識されやすい。したがってそれは、場合によっては、一種のアイデンティティ・クライシスをもたらすこともある。

本稿におけるもう一つの主要な関心は、社会的ネットワークのあり方が個々人の生きがいにどのような影響を及ぼしているかという問題である。すでに述べた、対自／対他という特質から考えても、各個人を取り巻く人間関係の総体（社会的ネットワーク）のあり方は、生きがいについて考えるうえできわめて重要である。社会的ネットワークの概念は、あらゆる種類の人間関係のすべてを包含しており、家族関係、親族関係、友人関係、近隣関係などのインフォーマルな関係から、職業などの社会的役割を通して形成されるフォーマルなものまで、多岐にわたる。本稿では、このうちとくに夫婦関係に重点をおいて、この点について検討する。

日本の家族関係は、欧米先進諸国のそれに比べ、タテ関係中心であるといわれている。すなわちそれは、夫婦というヨコの関係よりも、親子というタテの関係に重きがおかれていることを意味する。その背景には、「家」制度的な規範の影響が今日でも残っていること、「働き中毒」とも揶揄される男性の企業への献身が、家庭へのコミットメントを弱いものにしたこと、などの社会的要因がある。いずれにしても夫婦関係を家族集団の基本に据える意識は、つい最近まできわめて弱いものであった。

しかし近年、「家」制度的規範のさらなる衰退、個人主義的価値観の浸透、女性の自我意識・自立指向の強まり、離婚率の上昇などの変化により、夫婦関係のあり方をもう一度見直そうという機運が高まっている。個々人の「生きがい」との関連でも、対自／対他という特質については、夫婦は互いにもっとも身近な他者であることから、夫、妻それぞれの生きがいのあり方は、密接にかかわり合っているものと思われる。連続／変化については、夫婦の役割関係のライフサイクルの展開に応じた変化と、夫婦関係についての社会規範の変化とが、今日では複合的に影響を及ぼしあっている。しかし同時に、それぞれの夫婦が家庭生活の歴史のなかで永

年培ってきた基本的な愛情や信頼関係などは、一朝一夕には変わりにくい。

とりわけシニア期においては、夫の職業からの引退により、「男は仕事、女は家庭」という伝統的な性別役割分業体制が改めて問いなおされることが多い。加えて、今日浸透しつつある夫婦家族制の規範のもとでは、「連続性」より「変化」が、「対他的側面」より「対自的側面」が強く意識されやすい。いずれにしても、今日のシニア期夫婦は、伝統的な夫婦関係をモデルとして想定しにくい状況におかれており、このことが、夫、妻それぞれの生きがいのあり方にも影響を与えているのではないかと予測される。

本研究では、こうした二つの基本的関心にもとづき、サラリーマン・シニアの生きがいのあり方を検討する。

(2) 課題

以上のような基本的な問題関心にもとづき、つぎの四つの課題を設定した。

a．サラリーマン・シニアの職業キャリアの連続・不連続を客観的指標により検討するとともに、かれら自身がこのキャリアにどのような意味づけを与えているかを考察する。

b．職業キャリアと家族キャリア（とくに夫婦関係）が、かれらのライフコースのなかでどのうに関連しあっているかを検討し、さらに両キャリアの関連にたいするかれら自身の意味づけについて考察する。

c．職業キャリアの終焉、もしくは大きな転換点である定年退職前後における、かれらの行動、心理面での対応や意味づけについて検討する。

d．現在の心境や関心事について検討し、かれら自身が「生の意味」＝「生きがい」をどのように意味づけているかについて考察する。

(3) 方法

① 対象者の選定

a．第２次調査において、後日の個別訪問面接に応諾したものを母集団とて、以下の条件に合致するサンプルを選び出した。

イ．性別　　：男性

ロ．職業キャリアの段階：ＯＢ／現役

ハ．年齢　　：35-74歳

ニ．居住地　　：東京およびその近県

ホ．配偶関係　　：有配偶のもの（現役者については妻が有職であるものを含む）

ヘ．集団参加　　：複数の集団に参加しているもの／まったく参加していないもの

b．電話による個別交渉により面接を依頼した。なお、実際に交渉したものは、全員が調査に応じてくれた。調査を実施したのは８事例である（ＯＢ：６、現役：２）。

② 調査方法と調査内容

a．面接場所は、対象者の希望にしたがった。具体的には、本人の自宅４、勤務先２、喫茶店、インタビュアーの研究室１、である。

b．自宅で面接した事例については、妻やその他の家族が面接の一部に同席したことがある。

c．テープレコーダーは用いず、その場でメモをとった。

d．面接時間は、ＯＢ２時間、現役者１時間という目安で依頼したが、実際には、ＯＢの場合２～４時間、現役者２人はいずれも１時間半であった。

e．調査内容は、大まかな質問領域やポイントのみあらかじめ決め、大筋は本人に自由に語ってもらった。したがって、話の展開のなかで付随的に出てきた話題もあり、すべての対象者から同一範囲の情報が得られたわけではない。あらかじめ用意した質問領域は、以下のとおりである。

イ．ライフコースの概要～職業キャリア、家族キャリアを中心に

ロ．定年前後の心境や生活上の変化

（現役者の場合は、どのように予測しているか）

ハ．現在の日常生活の様子、関心事、人間関係、心境など

なお、「生きがい」もしくは「生きる意味」といった直接的な表現は面接場面ではとらず、関心事や心境を尋ねるなかで、対象者自身のこれにたいする意味づけを探っていくという方針をとった。

③ 調査方針の変更

当初の調査計画では、サラリーマン・シニア本人に併せて、妻にもほぼ同様の調査をおこなう予定であったが、時間的都合等により実施できなかった。

また同じく当初の方針では、ＯＢと現役者が同数になるように、また現役者についてはある程度年齢幅が出るように配慮しようと考えていたが、これも諸般の事情により断念した。とくにＯＢと現役者の標本数については、現役者につき実施できたものが２人にとどまった。このため、以下の考察でも、現役者については参考程度に言及するにとどまる。

④ 実施日時

平成４年10月５日～11月27日

II・2　調査対象者のプロフィール

本節では、今回の事例研究の対象者のプロフィールを紹介する。各事例についての記述の方法は、まず冒頭に、第1次調査、事前調査の二度の質問紙調査の結果などを参考に、本人夫婦の基本的属性を示す。その後に、事例研究の結果を、①生い立ちと職業キャリア、②仕事からの引退、③家族キャリアと職業キャリア、④現在の関心事と人間関係、⑤現在の心境、の順に記述する。もちろん各事例のインタビュー結果は、必ずしもテーマごとに順を追って述べられているわけではないので、内容そのものを変えない程度に、最低限の編集は加えてある。

(1)　事例A

	本　　人	妻
年　　齢	73歳	65歳
退職時年齢	60歳	——
現　　職	無職	無職
集団参加	カラオケ・陶芸・囲碁のサークル等	趣味サークル／ボランティア活動等
年　　収	200～300万円	不明
世帯構成	夫婦のみ／子どもなし	
住宅状況	一戸建て持家／20~30年居住	

①生い立ちと職業キャリア

1919（大正8）年、関西に生まれる。小学校の5年生までここで過ごすが、その後、一家で東京に移り住む。高等科を卒業後、電機関係の専門学校に進学。1935年に卒業して金属加工関係の会社に就職する。この会社は、もともと貿易関係の会社としてスタートしたが、本人の就職時には、アメリカから輸入したスクラップを用いて錫をつくり、もっぱら軍需品として供する仕事が中心になっていた。

1940年には召集令状がくる。42年秋に除隊になるまでに、実戦は経験しないものの、きつい土方仕事や、負け戦と知ってなお悪あがきともいえる抗戦準備の労働を強制されることを通して、兵隊の辛さをいやというほど味わった。2回目の召集は、45年2月である。この時も外地には赴くことのないまま、半年後には終戦を迎えることになる。

本人が初就職した会社は、戦時中に大手の製鋼所に買収されていた。終戦後、工場に戻ってみると、幸い建物は焼け残っている。本人の家は戦災に遭って焼かれてしまったので、とりあ

えず会社の寮に住み込んで、当面の生活の算段をする。工場はあっても、多くの同僚たちはいまだ帰還せず、大がかりな仕事はできない。そこで、残っていた鉛と錫でハンダをつくったり、モーターの部品をつくったりして、細々と食いつないでいた。やがて、生き残った同僚たちも復員し、工場の操業が再開される。しかし、戦後の混乱期の煽りを受けて工場の再建はうまくいかず、経営建て直しのために、大量の人員整理をすることになる。本人は当時、組合の副委員長をしており、このクビ切りに際して中心的な役割を演じた一人である。会社の将来を考えるとき、やはりやむをえざるクビ切りの原則は、「小さい虫を殺して、大きい虫を生かす」ということになる。このため、年寄りや体の不自由な人は、真っ先に整理の対象になった。辛い立場だったが、とにかくこの問題を処理し、一段落した50年、本人は辞表を提出した。他人のクビを切っておいて、自分だけが会社にとどまるのは潔くないと思ったからだ。

その後、大手の機械関係の会社に再就職し、営業畑で52歳まで勤める。このまま、この会社にとどまるのではと本人自身が思っていたが、当時の仲間の紹介もあって、新しい会社に転職することになる。この会社は、大手の自動車アンテナメーカーが、アメリカのアンテナ専門メーカーと技術提携してつくったテレビ用の室内アンテナを販売するという仕事をしていた。親会社の系列ではあっても、資本は別で、全国に支社をもつ。本人は、東京支社の社長のポストに迎えられる。「社長」とはいっても、会社設立時には社員が３人という小規模なものだった。だから配達、注文とり、帳簿、請求書づくりから経理の一端までやった。

テレビ用の室内アンテナは、当時のテレビブームにも乗って好調な売れ行きだった。扱っていたアンテナの性能が高く評価されたことも、売上げを伸ばした原因である。しかし、このアンテナは１台1000～2000円ほどの金額で、いくら多くを売りさばいても、それほど大きな利益にはつながらない。このため、最少の人数で、最大の効果をいかに上げるかということを考えなければいけない。幸い売上げは順調に伸びて、もっともいいときには、３～４人の従業員で年商1500～1800万円を記録した。

しかし、このような順調な経営は長くは続かなかった。やがて各世帯が室内アンテナを備える時代は終わりを告げ、屋外アンテナ及び共同アンテナに取って替わられた。ところが、会社の経営が順調だと良くしたもので、周りからいろいろな新製品を扱ってほしいと話が持ちかけられる。その後、主として扱ったのはカラオケである。最初はテープ式のものが主流だったが、これは故障が多いため、ほどなくレーザーディスク・カラオケに取って替わられた。

そうこうしているうちに、60歳の定年年齢を迎える。しかし、創業時からの業績を評価され、もう少し会社にとどまってもよいといわれて、さらにこの会社に勤めることになる。ただし、「社長」のポストは後進に譲り、顧問という立場になる。以降の仕事は、社長時代のものとは内容的にまったく異なるものだった。もっぱら庶務的な仕事が中心であり、法務省などの役所に提出する書類作成などをおこなっていた。ＯＡ化の波のなかで、こうした書類もワープロで作成するのが常識となっており、ワープロの扱い方も習い覚えた。しかし、ある程度年齢がいってからの機械の操作は楽ではなく、肩がこったり目が疲れたりで、肉体的な疲労が蓄積して

いった。

小規模の会社だけに、何歳で辞めなければならないといったきまりがあったわけではない。しかし、何年かするうちに、体にガタがきた。体が異常にだるいので医者にかかったところ、血圧と血糖値が高く、心臓にも不整脈がでた。体調が悪いと、おのずと仕事にも力が入らない。このままでは、自分にとっても会社にとっても良くないと思い、68歳のときに自ら退職した。

② 仕事からの引退

自ら「引き時」と思って退職しただけに、後悔はとくにない。体が悪いのに、命を縮めてまで働き続けたいとは思わない。実際、引退前はあれほどあちこち悪かったのが嘘のように、今ではすっかり丈夫になった。妻の協力で食事療法をして、できる限り歩くように努めたおかげで体重も落ち、医者にびっくりされるほど各種の検査数値も正常になった。仕事による肉体的な疲労だけでなく、精神的なストレスも影響していていたのだろう。その意味でも、あのときはやはり限界だったのだと思う。

しかし、すべてがいいことばかりというわけにもいかない。ある程度予測はしていたが、やはり「手持ちぶさた」の感は、多少なりとも味わった。「家にいてばかりではだめだ、外にでなければ」という気持ちはあったが、なかなかきっかけがつかめないでいた。そんなとき、電機業界の厚生年金受給者の集まりにカラオケクラブがあることを知り、入会する。現役時代には、仕事柄しょっちゅう大きな声を出していたが、引退後はその必要もなく、だんだん声が小さくなるようで気にしていたことも入会の動機である。このクラブでは、部長に選ばれ、さらに評議委員も引き受けることになり、そんな経験のなかで外に出ることがしだいに億劫ではなくなってきた。その後は、自治体の主催する講座に積極的に参加して、趣味の幅を広げることに努めている。定年後の生活には、やはり仕事に代わる「核」のようなものが必要だとつくづく感じている。

③ 家族キャリアと職業キャリア

妻とは、戦時中、現役満期で還ってきたときに知り合い婚約をした。式の日取りも決まり、いよいよ新生活がスタートすると思っていた矢先、2回目の召集がかかる。このような事情で、実際に結婚したのは46年に入ってからである。妻は、結婚以来、専業主婦として家庭を守ってきた。子どもはおらず、ずっと夫婦二人の生活である。

現役時代を振り返ってみると、やはり仕事に追われる毎日で、自分のなかに「家庭人」の要素はほとんどなかったといってよい。とくに52歳で転職して「社長」の地位についたころがもっとも忙しく、当時は帰宅が夜の10時、11時になることもざらだった。しかしそんなときでも、妻は文句をいったことがない。ただし本人の方も、妻が頻繁に外出したり、帰りが自分より遅くなることがあっても、文句はいわないことにしている。要するに、夫婦関係については、基本的なところで信頼関係が成り立っていれば、あとはそれぞれが好き勝手なことをしている方がかえっていいと思っている。いつも行動をともにしていれば、互いの批判もでてくるだろう。夫婦のなかは自然が良いと思うし、実際、自分たち夫婦は最初からかなりそれに近いかたちで

やってきた。そのことはまた、夫婦が時には恋人であり、時には友達でいられるための秘訣だと思っている。

夫婦が前述のような関係を維持するためには、住宅条件も大切だ。とくに定年後は、おのずと家にいる時間が長くなり、夫婦が顔を突き合わせている時間も増える。しかし、これは望ましいことではない。そもそも夫婦といえども、そんなに多くの話があるわけではないし、ひとつ部屋に一緒にいる時間が長くなれば「粗大ゴミ」といわれるぐらいが落ちである。これを避ける上で大切なことは、自分の部屋があるということ。本人はかつて、老後の生活の安定も考え、自宅の一部を学生アパートとして貸していた。しかし、騒音やその他の煩わしいことも多く、定年後3～4年でやめてしまった。この空いた部屋の一つを、今では自分の書斎として使っている。もちろん、妻は妻で自分の部屋をもっている。

夫婦とも、今ではそれぞれが好きなことを自由にやっているし、子どもがいないこともあって、共通の話題は必ずしも多くはない。女性は概してそうなりがちだが、妻も近所や友人の噂話を好む。現役時代は、たとえ妻が熱心に話していても、生返事ばかりしていた。退職後は、家にいる時間も増えるので、近所のことや妻の友人のこともある程度は分かるようになり、多少は話に応じられるようになった。一番のコミュニケーションの場は夕食の時である。妻も少しは酒をたしなむので、二人でビールを1本程度のみながら、1時間ぐらいかけてゆっくり食事をとる。この習慣は現役時代からのものであり、自分の帰宅時間がどんなに遅くなっても、妻は食べないで待っていた。

要するに、夫婦関係でもっとも大切なことは「思いやり」ではなかろうか。自分たち夫婦は、どちらかというと「亭主関白」だとは思うが、それでもいつも妻に要求ばかりしているわけではない。自分も要求するが、相手の要求も聞き入れ、さらにいわなくても相手の望んでいることを察してやることが大切だと思う。つまり、求めることもあってしかるべきだが、与えること「夫は妻になにをしてあげられるか」「妻は夫にどんなことをしてあげられるか」を考える、それが愛情だと思われる。

④　現在の関心事と人間関係

定年退職後にもっとも大切なことは、趣味をもつことである。何でもいいから趣味を一つでも二つでももっていれば、それが自分の支えとなる。無趣味な人は早くボケやすいし、「現在」に興味がもてないので、いつまでも「過去」に執着する。

自分は、現役時代からかなり多趣味な方だった。ただし三日坊主で長続きしないことも確か。たとえば、彫金、革細工、油絵、植物画など、いずれも教室に通ったり、通信教育を受けたりしてけっこう本格的にやった。しかしこれらは、いずれも金がかかりすぎることもあり、老後の趣味としては不向きかもしれない。

現在の趣味は、カラオケ、陶芸、囲碁である。カラオケは、先にも述べたように、年金受給者のクラブに入って始めたもので、退職後、積極的に外に出始めるきっかけになったものだ。陶芸と囲碁は、いずれも自治体主催の講習会から始まった趣味で、それぞれ、週に1回か2回

ずつ通っている。今の時代は、こうした行政による趣味の会がたくさんあるので、大いに利用して安く楽しむのがよいと思う。

また、こうした集まりに参加することで、新しい人間関係も広がっていく。本人は、陶芸の会を通じていい友だちを二人得た。一人はプロの写真家で、もう一人は西洋史に造詣の深い人だ。二人とも、話題が豊富で、話していてとにかく楽しい。一般に男の場合、年をとると多くの人のなかで親しくなることは難しいといわれているが、この二人については、最初に「陶芸」という共通の趣味があったので、そのことを糸口にして話題の範囲を自然に広げていくことができた。それから、陶芸にしても囲碁にしても、たとえ「趣味」とはいえ意欲や向上心をもって取り組むことが大切だ。実際多くの人を見ていて、たんに暇つぶしで来ているだけで向上心の感じられない人はけっして上達しない。そのような人はまた、人間としても魅力が感じられない。おそらく趣味に対する姿勢と、人生に対する姿勢とは深くかかわっているのだろう。

このような趣味を通じての友人とは、政治や社会の話、世界情勢についてなど、さまざまな話ができる。妻との会話も大事だが、女の好む話題はどうしても身近な人の噂話的なものに偏ってしまう。仕事を辞めたことで家のなかに閉じ込もっていたのでは、人と話をする楽しみがなくなってしまう。それは、社会というよりも世間といったほうがよいと思うし、より広い世界を知るうえで意見を言い合う友達が必要だ。その意味でも趣味をもつことは大切ではないか。

近所づきあいについては、現役時代に比べれば、周りの人の顔や名前を覚えたが、深いつきあいはない。やはり近所だというだけではダメで、同じ趣味をもっていたり、話していて楽しめなければ親しくはなれない。

⑤　現在の心境

今の年寄りを見ていると、概して要求がましく、社会に対する甘えが目立つ。長年働いてきたのだからと、家庭内でも自分の権利ばかり主張している。恵まれた老後を送れるかどうかは、基本的にはその人の自助努力にかかっている。経済的な問題も、精神的な問題も、やはり最後は、自分が若いときからどれだけ努力したかが試されるのではないか。たとえ学歴がなくとも、努力さえすれば、出発点の遅れは取り戻すことができると思う。

もう一つ大切なことは、老年期になっても年寄りくさくなってはいけないということ。服装一つとっても、いかにも爺くさい格好をしている人が多いが、あれでは見かけだけでなく気持ちまで爺くさくなってしまう。そういう人に限って、過去の栄光が忘れられずに、偉そうにしている。そんな人は外で嫌われるだけでなく、家庭でも妻や子どもに相手にされないのではないか。やはり何といっても大切なことは、いつまでも若々しさを保っていられる気持ちの持ち方だと思う。そうした若々しい気持ちを保つためにも、定年後、仕事に代わる「核」をもつことが必要ではなかろうか。

(2) 事例B

	本　　人	妻
年　　齢	70歳	66歳
退職時年齢	50歳／63歳／65歳	——
現　　職	無職	無職
集団参加	教養講座ＯＢ会／高齢者教室講師／高齢者工作教室（準備中）等	趣味サークル／地域のサークル等
年　　収	400～500万円	不明
世帯構成	本人夫婦と次男夫婦および孫二人の三世代家族	
住宅状況	一戸建て持家／10～20年居住（玄関、応接室は共用、生活はﾄﾞｱ一枚で独立）	

① 生い立ちと職業キャリア

1922（大正11）年、関東で生まれる。小学校に上がるまでは生家で過ごすが、母方祖父の名跡を継ぐため、養子に出されることが生まれる前から決まっていた。祖父は跡継ぎの男子に農業をさせ、長女に婿をとって跡をとらせた。しかしその娘夫婦には子どもができなかったため、本人を養子にと決めたのである。

養家先は、老舗の呉服屋であった。祖父は、本人が２歳の時、すでに他界している。さらに11歳の時、養母である叔母が亡くなる。養父は19歳年下の後妻を迎え、その後、二人のあいだに何人か子どもが生まれる。もともと、祖父の名跡を継ぐ跡継ぎがいないということで自分が養子に迎えられたのだが、祖父も叔母もおらず、養父母には実の子ができた今となっては、本人の立場はきわめて微妙なものになっていた。しかしともかくも、養家の商売のことを考え、地元の商業高校に進んでそこを卒業、その後は家業の手伝いをしていた。

やがて太平洋戦争が勃発、1942年の適齢召集により翌年入隊。幹部候補生に合格して予備士官学校に入校中、原隊は外地で玉砕した。本人は、戦闘場面にはまったく遭遇しないまま転属し、1945年１月に少尉に昇進し、同年８月、東京で終戦を迎えることになる。

終戦後は、ふたたび郷里に戻り、生家の手伝いをする。1947年に結婚、後に二人の男児をもうけた。この時期には、呉服屋という商売の将来性にあまり希望をもてなくなっていた。また、子どもたちのこれから先の教育を考えると、都会に出たいという気持ちも強まった。幸い養家には、弟妹もおり、血のつながらない自分はむしろ身を引いたほうがいいと思えてきた。

そんなこともあって、思いきって転職を考える。しかし、この時期は就職状況が厳しく、なかなか思うような就職先は見つからない。折しも、警察予備隊から再編された自衛隊で、多く

の採用が予定されているとの情報を得る。とりわけ、旧日本軍関係者はより多く優先的に採りたいとのことでもあり、思いきって応募する。結果は、もと少尉の位にあったものということで、通常よりワンランク地位を上げての採用となった。

自衛隊には、1954年、本人が32歳の時から、50歳の定年を迎えるまで勤め続けた。この間、勤務地は関東地方内で3カ所変わった。自衛隊在職中の本人の中心的な仕事は、「従来人のやらなかった」ようなユニークな分野であり、もっぱら視聴覚教育に関する教材づくりに携わった。たとえば、スライドや8ミリなど、実戦場面でも使われる視聴覚機器の使用法に関する教育をおこなうため、テキストを作ったり、訓練教材を作ったり、さらにそれらの普及のため1日8時間の連続講義もした。これらの仕事は、自衛隊の本来業務からはいささか離れたものであり、「出世」という点ではいささか遅れている。しかし本人は、これらの仕事が、現在の趣味や社会活動の素地を形づくるうえで大いに役だったと感じている。また、本人のユニークな仕事ぶりは周りからも高い評価を受け、「発明中隊長」との異名をとり、賞詞を5回授与された。

自衛隊の定年は、50歳である。こんにちではもう2、3歳ほど年齢が上がったかもしれないが、いずれにしても一般企業に比べて格段に早い。これは、自衛隊の中心業務がきわめて肉体的負担の重い激務であり、一定の年齢以上になるとその負担に耐えられないと考えられているからである。しかし、かといって50歳で完全に仕事から引退するわけにもいかず、知り合いの紹介により、首都圏北部にある大手精肉加工業の工場に庶務課長として再就職することになる。

一般企業の世界をまったく知らないものにとって、50歳からの再就職はかなり辛いものがあった。自衛隊という世界は、何をやるにもあらかじめルールや形が決まっており、いかに忠実にそれに沿ってできるかが問われる。これに対して一般企業は、多くの場合決まったやり方がない。また、たとえあったとしても、その時々の状況を的確に判断して、自分の裁量でやっていかなければならないことも多い。そのあたりの違いにうまく適応するには、かなりの努力を要する。実際、自衛隊を退職した後に多くのものは再就職するが、とくに企業にいった場合、ダメになるものも少なくない。その点、本人はうまくいった方だと思っている。

この企業には、50歳から13年間勤めた。初めから「庶務課長」という要職に就いたために、本当に大変な思いをした。まず、就任2日目、経済団体の関係者が工場見学にきて、その折に工場を代表して挨拶をした。仕事の内容等についていまだ十分わかっておらず、冷や汗ものだったのだが、端からみれば堂々とした挨拶に見えたという。また、最初の3カ月間は「研修期間」ということで、この期間が終了した後に報告書の提出を求められる。この作成作業も大変なものだったが、とにかく謙虚な気持ちで一生懸命勉強し、分厚い報告書を完成して提出した。この報告書が、さらにその後の職業キャリアの大きな転機をもたらすことになる。

まず、最初に読んだ工場長が、その内容を高く評価してくれた。そして、本社の社長に本人のことを「有能な人物」だと報告するとともに、この報告書を見せた。社長もひどく感心して、是非自分の秘書にしたいと言い出し、工場のある地に転居してまもなくだったにもかかわらず、

東京本社勤務となる。この時のポストは、総務課長、兼消費者サービス室長、兼秘書室長ということで、社長が亡くなるまでの10年間、そのもとで働いた。

社長は、創業者にありがちな、きわめて個性の強い、人物だった。しかし本人は、この社長の信頼厚く、亡くなるまでの10年近くのあいだ、秘書室長を務めることになる。おそらく、本人の歯に衣着せぬ率直な物の言い方が、社長との信頼関係を築くうえで役だったものと思われる。ただし、この間の苦労は大変なもので、いつもポケベルを携行し、昼夜を問わず呼び出されることもしばしばだった。おそらく社長との関係は、たんに雇用者と社員というだけにとどまらず、友達づきあいのようなところもあったと思う。また社長は、人使いは荒かったが、それに見合うだけの報酬も十分に考えてくれ、通常のボーナスとは別にポケットマネーで金一封をくれるなどの配慮をしてくれた。おかげで、自衛隊在職期間には貯金などもほとんどなかったが、二人の子供の独立もあって完全に仕事から引退する65歳までには、何とか人並に格好がついた。

ところで、この企業は、定年が57歳である。しかし本人は、初代社長の信頼が厚かったために、65歳までいてよいといわれており、自分でもその気になっていた。ところが、63歳ごろ、二代目社長の知り合いの官僚が選挙に立つことになり、かねてから面識のあった本人を秘書に欲しいと言ってきた。本人は一旦は断ろうとするが、社長から是非にといわれ、恩人の息子のたっての頼みとあっては無碍に断ることもできず、「65歳まで」という条件つきで引き受けることにした。

こうして、職業キャリアの最後を飾る仕事は、議員の秘書となった。この仕事も、それなりに苦労も多く、自分の性格に合わないところもあったが、当初からの約束のとおり、65歳で引退した。

② 仕事からの引退

65歳での職業からの引退は、自分自身で前々から決めていたことである。老後をうまく生きていくためには、まず打ち込める趣味があること、そして人間関係が大事だと思う。人間関係については、家族も大切だが、友人も必要だ。「趣味」については、子どものころから亡くなった祖父が器用だったという話を聞かされ、謡曲、書道、囲碁、居合道に励み、日曜大工的な工作をしたり、現役時代から幅広くやっていたのであまり不安はなかった。

こうしてある程度の心づもりをして迎えた定年ではあったが、それでもなお、精神的に大きな落ち込みがあった。仕事からの引退は、いろいろな意味で、大切なものとの「別れ」である。「会社との別れ」「肩書きとの別れ」「金との別れ」「情報との別れ」「人間関係との別れ」等々。とりわけ「肩書きとの別れ」は大きく、それまでどんなに高い地位にあった人でも、結局「ただの人」になってしまう。多くの定年退職者は、このことを素直に受け入れることができず、いつまでも過去に執着したがる傾向がある。自分自身、このことは頭ではわかっていたにもかかわらず、やはり「ただの人」になってしまったことのショックは大きかった。

しかし、落ち込んでばかりもいられない。とりあえず気持ちを切り換え行動することが先決

だと、引退後の半年間は自分から進んでいろいろなところに出かけた。まず、毎日のように高齢者センターのような公共施設に出向き、友人をつくるためにおしゃべりをした。また、さまざまな種類の市民向けの講座に顔を出し、趣味の幅をさらに広げようとした。そんな試行錯誤のなかで、自分が本当に打ち込める趣味や活動は何かが見えてきたころには、「会社」や「肩書き」にこだわらない新しい人生を、心から楽しめるようになっていた。

③　家族キャリアと職業キャリア

1947年に結婚、48年に長男が、52年に次男が誕生する。妻は、ずっと専業主婦として家庭を守っており、夫婦関係は、どちらかといえば「亭主関白」型だと本人は思っている。

職業キャリアのなかで、自衛隊在職中と精肉加工業勤務の時はとにかく忙しかった。家庭を顧みる暇もなく、「仕事一点張り」の生活だったといってよい。時代がそれを求めていたのかもしれない。とくに人の上に立つようになると、部下に対して、当然ハードに仕事をすることを要求する。しかし、他人に厳しさを求めるためには、まず自分自身がこれだけハードにやっているんだということを形として示す必要がある。たとえば、どんな家庭事情があろうとも、部下より先に職場を後にすることは絶対にしない。そんな小さなことの積み重ねがあれば、やがて部下の方でも、いちいち言葉でいわなくても自ら進んで仕事をするようになる。

そのようなハードな仕事のなかでも、自分なりに妻や子供のことをあれこれと考えてきたつもりである。しかし当時は、早朝に出かけ、夜子どもたちが寝静まってから帰宅するのが当たり前の生活であり、妻の目には完全な「仕事人間」として映っていたことだろう。

子どもたちは、あまりかまってやれなかった割には、それぞれにしっかりと自分たちの人生を歩んでいる。また、二人とも仕事はハードではあるが、時間をうまくやりくりして家庭生活も大事にしている。自分たちの時代との一番大きな違いは、経済的な豊かさだろう。昔は、薄給のなかで、心身とも捧げ尽くさなければ企業も成り立たなかったし、自分自身の家庭生活も保ってはいけなかった。いまは金もモノもあり余るほどある。たとえ仕事はハードでも、精神的には余裕をもっていられ、そのことが家庭生活を重視する姿勢につながっている。

現役時代は、「仕事一点張り」にならざるをえなかったため、夫婦関係についてはどうしても内助の功を求めることになる。ただし、妻の行動を細部にわたって拘束するようなことはしなかった。妻は妻で、子どもが手を離れてからはけっこう自由な時間をもっていたし、そのなかで個人的な趣味や、交友関係などを楽しんでいた。また、料理をつくったり繕い物をしたりといった家事は、軍隊生活の経験があるので、やろうと思えばできないことはない。ただ、正直なところあまり好きではないのでやらないだけ。その意味では妻に完全に依存しているが、いつも感謝の気持ちだけは忘れないようにしている。夫婦関係も長くなると、しだいにやってもらうことが「当たり前」のような感覚になってしまうが、これはいけないことだと思う。

仕事からの引退により、ふたたび夫婦関係について考えさせられた。自分の場合も、ある程度予測して心の準備をしていたつもりでも、やはり気持ちの落ち込みを避けることはできなかった。そんなとき、妻の理解がとても大切だと思ったが、一般にはなかなか難しく、「濡れ落

ち葉」などといわれるのがオチである。妻は妻で家庭や地域を中心に自分の世界をつくってきたのだから、いきなり亭主にそのリズムを壊されたくないはずだ。やはり、相手の立場にたって考えることが大切だと思う。それぞれが自分の世界をもって、しかし同時に、共に楽しむ時間ももって、そのバランスがうまくとれていることが大切だ。仕事からの引退は、それまでのバランスを崩すきっかけになるので、そこでどう対処するかが問われることになる。

④　現在の関心事と人間関係

現在すでに自分の生活の一部になっている趣味は、ちょっとした工芸、工作的な作品をつくることである。いまの住まいを新築したときに、２階建ての小さな離れをつくったが、そのなかにはプロの大工や細工師顔負けの道具が揃っている。好きなときに建築現場で貰った木切れなどを利用して、生活に便利なものや面白いアイデア品をつくっている。この趣味が高じて、高齢者工作教室の開催を依頼され、現在はその準備中である。

また、自治体などの主催するさまざまな講座に顔を出しているうちに、会のリーダー的な役割を務めるようになった。講座の期間が終了した後にはＯＢ会が組織され、それについても会長に選出された。さらに、高齢者センターの職員から高齢者教室の講師をやってくれないかといわれ、これも引き受けることになった。まず半年ほどの準備期間をおき、実際に教壇に立つようになったのは、今年の５月からである。講義の前には、ほぼ完ぺきな原稿をワープロで作っている。以来、常に新聞などの情報を集め原稿の修正を心掛け、また「私の主張コンクール」に入賞して自信をつけた。

ボランティア活動にも関心があり、現在は「盲導犬仔犬の飼育」と「弱視者用拡大図書の製本」のお手伝いをしている。また、旅行も好きでよく行っている。夫婦で行くこともあるし、それぞれが友達同士で別個に行くこともある。長期の旅行は四国お遍路や北海道一周など年に１回ぐらい、短期は折に触れてちょくちょく行く。妻にスキーを教え毎冬出掛けている。

このように趣味の幅を広げたり、積極的にいろいろな場に出かけることで、現役時代とは友人づきあいが変化した。概して、仕事関係のつきあいはしだいに遠くなり、新しく趣味を通しての友人が生まれる。新しい人間関係をつくったり、頼まれ役的な仕事、例えば幹事役などはたいてい嫌がらずにやる方だが、やりたくないのは、町会関係と老人クラブ。町会については、この辺りは新興住宅地ということもあっていろいろな経歴の人がおり、容易に意見がまとまるとは思えないし、また老人クラブも、自分が元気な故かものたりないし、時間的な余裕も少ない。

⑤　現在の心境

一般に現代の高齢者は、優遇されて当然という思いこみが強く、行政や家族に対して要求することが多すぎる。自分としては、他人に要求する前に、まず自分ができることを進んでやるという気構えを大切にしたい。例えば自分は比較的幸運な道を歩んだと思っているが、運は自分でつかむものと心得、思うように進展したのは協力者のお陰、不満を感じたときは自らの努力不足と考えることにしている。たとえ仕事から引退しても、ボランティア活動などで、社会

に貢献することはできる。さらに、たとえ将来寝たきりになったとしても、介護者が介護しやすいように協力するすべを学んでおく必要がある。かたちは変わっても、周りの人や社会に役立つ好ましい高齢者でいたい。そんな心構えをうえつけるための、高齢者教育が大切だと思う。将来仮に配偶者を失ったあと、世話になるかも知れないお嫁さんに遺贈の遺言を残しているし、尊厳死宣言もすませた。

最近、祖先のことを調べて自分自身のルーツを探ってみたいと、家系図を作成した。残っていた家系図をもとに、あちこちの役場から戸籍謄本や除籍簿を取り寄せたり、古文書を調べたりで、時間的にも労力的にもかなり大変な作業であった。しかし、こうやってできあがったものを眺めていると、歴史の流れのようなものを感じ、感慨深いものがある。特に歴代長齢の家系が明らかになり現在比較的若く健康でいられるのは祖先のお陰であると感謝している。祖先とのつながりということでいえば、最近、親戚などからよく、自分が祖父に似てきたといわれることがある。物心ついたときにはすでに亡くなっていたが、立派な人だったとの話を聞き、尊敬もし、祖父のような人になりたいと目標にもしてきた。そもそも、この祖父の名跡を継ぐということで養子に出されたことにより、自分の人生の方向づけが左右されたところがある。その祖父に似てきたということは、何かの因縁のようにも思えるし、またうれしいような気持ちでもある。

(3) 事例C

	本　　人	妻
年　　齢	69歳	67歳
退職時年齢	60歳	——
現　　職	無職	無職
集団参加	郷土史サークル／仕事関係のＯＢ会／戦友会／同窓会／自治会／老人クラブ等	宗教団体
年　　収	300万円	80万円程度
世帯構成	夫婦のみ／他出子：一男三女	
住宅状況	一戸建て持家／９年居住	

① 生い立ちと職業キャリア

1923（大正12）年、東京の下町で生まれる。その10年程前、酒小売業をやめた父親は、酒問屋に勤めており４人兄弟の三男であった。小学校卒業後、深川の府立商業学校へ進む。この進学は父親の勧めによるものであり、生徒の半数以上は、自分と同じく下町の商家の子弟であった。

入学した翌1937年、日中戦争が勃発。さらにその翌年、父親が病死する。当時、長兄は大連の満鉄本社勤務で次兄は中国へ出征中、残された家族の生活費を捻出するため、長年住み慣れた家を売り払い、母、弟と３人、東京西郊の借家住まいとなる。

1941年に卒業。同期に卒業した友人の誘いにより、石炭配給統制法にもとづく国策会社に勤務する。しかしこの会社には１年ほど勤めただけで、翌年春には、東京支社に帰任した長兄のすすめで、同社経理課主計係に転職、もっぱら予算編成の仕事に従事した。

満鉄入社と同時に、本人は神田の私立大学文科（二部）に入学している。これは、41年12月に勃発した太平洋戦争のなかで、学生の身分を取得することにより、当面の兵役を免れたいという意味が強かった。ところが、その後の戦局の悪化のなかで、学生といえども徴兵猶予の対象とはならなくなる。43年12月、学徒出陣により金沢の砲兵連隊に入営。さらに翌年、幹部候補生として８カ月の訓練を受けた後、見習士官として北千島の１部隊に配属された。その間、1945年春この部隊が沖縄救援の命を受けて南進中、北海道日高の沖で乗っていた船を撃沈されて、乗船者中半数近くが戦死するという劇的な経験もした。「一体この戦争における自分というものは何であろうか。聖戦のためでもなければ醜（しこ）の御盾（みたて）となる積もりでもない。親兄弟、同

胞、国土のため、皆が行くから私も行く。この様に止むを得ない自己の責務として自覚し、ただ最後に残されたわずかな人生を如何に美しく燃焼しきるかという気持であった。」と本人は回顧する。

さて、戦争は終わったものの、東京の実家は空襲で焼け、満鉄はＧＨＱにより閉鎖され、還るべき職場もない。さらに、東京は大変な食糧難だという。このため、最後の部隊が駐留していた東京近県で農家から畑地を借り、生まれて初めて農業に取り組む。母と弟も呼び寄せ、しばらくここで暮らすことになった。

翌46年９月に上京、就職活動を始める。幸い開廷された東京裁判の弁護団事務局に就職出来た。約１年間ここで仕事をしたが、その間、裁判の傍聴は自由にできたし、膨大な資料にも目を通すことができ、「太平洋戦争」ほか「昭和史」についてはかなりいい勉強になった。しかし「勝てば官軍、敗ければ賊軍」の悲哀を痛感する。

47年末、知人の紹介により、ラジオ専門メーカーの銀座店に経理担当および住み込み管理人としてどうかといわれ、ちょうど結婚したばかりで住宅に困っていたこともあり、転職を決意する。しかしこの仕事も長くは続かない。景気の落ち込みにより会社の経営は急速に悪化、50年には同社は倒産する。その後、大蔵省管轄の戦後処理関係の機関に就職、さらにその機関の生活協同組合の専務理事として就任することになる。しかし、母体となる機関の縮小と景気の悪化がたたり、55年にこの生協組織も解散となり、本人は翌年までかかって清算業務に従事した。

このように、本人の職業キャリアの滑り出しは、戦中・戦後の社会的混乱期ということもあって、けしって平坦なものではなかったが、漸く1956年、33歳にして機械メーカーの同業者団体職員のポストを得、ここに60歳の定年まで勤めることになる。しかし当時は輸入機全盛の時代にあり、その団体も零細な組織であったが、高度経済成長期を経て、業界そのものが発展するにつれ、団体の組織体制も整っていく。本人はそこで、総務部長、調査部長を歴任し、もっぱら業界の需要動向や景気変動についての調査や資料分析をおこなったり、業界の意見をまとめて金融、税制等業界育成策を政府に陳情するといった業務に従事した。さらに、業界の厚生年金基金（現在の資産残高700 億円）の設立も、本人の尽力によるところが大きい。30年近い在職期間の間には、日本経済全体の景気や産業構造の変化などの影響による景気変動や、日米貿易摩擦への対処ほかさまざまな苦労もあった。辞表を胸に秘めたこともしばしばである。しかし、仕事の内容は企画、調査、立案、研究的な性格が強く、また『産業史』の編纂のように、本人が個人的にも興味をもつ歴史にかかわる部分もあり、担当部署としては大変にやりがいのあるものだったといえる。

②　仕事からの引退

本人はかねがね、「60歳定年になったら、絶対にやめる」、と家族ほか周りの者にも宣言していた。もちろん、定年後についての漠然とした不安はなくはなかったが、いつまでも宮仕えをする気もなかった。ところでこの団体は、もともと定年制をもっていなかった。これは、初

代専務理事が、職場の家庭的な雰囲気を大切にし、働く意志がある限り一生面倒をみるという持論を持っていたためである。本人は、業界の景気動向から考えても、また一人ひとりの職員の将来の生活設計という点でも、これは望ましいことではないと考え、「定年制の導入」を進言する。これがきっかけとなって、60歳定年制が実現したのは、実際に本人が退職する数年ほど前のことであった。当然のことながら、本人もこの制度の規定に従い、1983年、60歳で退職した。

ここでようやく本格的に「第三の人生」（後述）に踏み出すことができた。その後は、これまで個人的に興味をもって、コツコツと勉強してきた歴史研究を好きな時に好きなだけやれる毎日である。

③　家族キャリアと職業キャリア

1947年に結婚、48年、50年、52年、59年に女児を、そして56年に男児をもうけている。次女は、56年に病死し、現在は一男三女がいる。

これまで、家庭生活も大事にしてきたつもりではあるが、現役時代はやはり仕事中心の生活だった。とくに機械団体に在職していた期間は、時間的な制約がきびしい中央官庁相手の仕事が多かったため年末の予算編成頃にもなると、職場で徹夜をすることも珍しくはなかった。それだけ妻の負担は重かったことと思う。子育てについては、次女が5歳で亡くなったこと、さらに長女が子どもの頃に股関節炎を発病し、その後、何度も入退院を繰り返したことなど、辛い思い出も多い。

妻との関係では、とくに子どもたちが自立して以降は、それぞれの関心が違うため、つかず離れずといったところである。本人は、歴史関係の本を読んだり、ワープロで書き物をしたり、趣味を同じくする仲間との会合に出たりすることで、毎日飽きることがない。他方妻は、1950年頃より宗教団体に入っており、その会合出席に忙しい。本人自身、宗教の必要性を認めていないが、妻の活動や交友関係について、とくに干渉したり口出ししたりすることはない。もともと夫婦とは別々のものであると思っており、こんな状態にとくに不満はない。

4人の子どもたちについては、結婚や進学などの重要な人生上の選択にあたっても、本人の意志を尊重し、あまり口出しはしなかった。毎年、正月には、子ども家族十数人が集まり、新年の顔合わせをする。夏休みなども、それぞれが家族ぐるみでやってきて、屋上でバーベキュー・パーティーをしたりたまには小旅行もする。この家を建てるとき、四人の子供のうち将来一人ぐらい同居しようと言い出すかもしれないと思い、二世代で住めるように造ってある。しかし、これはあくまでもこちらの勝手な意向であり、夫婦二人の暮らしも、時代の趨勢でやむを得ないのかもしれない。

④　現在の関心事と人間関係

定年後、まず最初に取り組んだことは、家の建築である。現役時代は生活や通勤の利便性を重視して、30年以上同じ住居に住んでいた。しかしかねてより、定年後はもっと自然環境の良い、富士山の臨めるところに住みたいと考えていた。現役時代から土地をあちこち物色し、

1972年に居住していた市の南西端に位置するこの土地を買っておいた。ここは、まだ畑地や林も多く、西に箱根、富士、丹沢山系を臨むことのできる理想的な環境である。その後も約10年かけて、住宅雑誌やメーカーのカタログなどで、建築計画についてじっくり検討してきた。だから、定年退職の数カ月前より工事に着手し、退職後2カ月足らずで完成という計画の徹底ぶりだった。それまで住んでいた住居は娘家族に譲り、さっそくここに移り住んだ。

また、もともと歴史が好きで、若いときから折りに触れて書物を読んだり、史料を調べたりしてきたが、退職後は本腰を入れてこれに取り組む。退職後に移り住んだこの地は、いまだ開発が進んでないだけに自宅周辺にも中近世時代の史跡や石仏が残っている。数年前、区役所を基盤にして約70名からなる郷土史研究会を編成したが、その調査結果を本人が記録、編集、出版している。

さらに、本人の歴史に対する興味は、いわゆる「自分史」の作成にも向かっていく。87年に父母の法事をおこない親戚が一堂に会したとき、昔話に花が咲いたものの、祖父母の生年など細かな事実関係まで正確に記憶しているものがいない。その時、このままでは自分や両親たちが生き抜いてきた足跡が遠からず風化してしまうのではとの懸念を抱き、せめて子や孫に記録を書き残しておきたいと思ったのが執筆の動機である。まずは、1850年代の祖父母の代まで遡って、個人史と社会史とを兼ね合わせた年譜の作成に取り組んだ。この作業は意外に手間取り、1年近くを要する。その後、本文の執筆にとりかかり、さらに1年半近くを費やし、400字詰め原稿用紙に換算して800枚にものぼる大作が完成する。これは自費出版して子どもや親族、その他親しくしている人たちに贈呈した。執筆終了時で昭和天皇が逝去し、昭和の時代が終焉を告げたこともあり、本書の完成は本人にとっていっそう感慨深いものであった。

本人は、定年後の生活において大切なことは、一つは打ち込める趣味をもっていることであり、もう一つは交友関係を大切にすることだと思っている。二十数年来継続しているものとしては、小学校時代のクラス会と、軍関係の学校の同期会がある。また仕事関係では、機械団体に就職後、仕事を通じて知り合ったほぼ同世代の仲間と研究会を結成し、その付き合いはもう30年以上にわたって続いている。勉強と親睦とを兼ねて結成されたものだが、メンバーが1部上場会社の役員、部長級であったから、随分と勉強になった。大半のメンバーが現役を退いた今でも、定期的に会合をもっており、昨年末それは五十回を越えた。

他方、定年後、新たに開拓した交友関係は、もっぱら地域に根ざすものである。これらの多くは自治会の役員をやった関係で知り合った人や、郷土史研究会の仲間なども新しく始まった付き合いである。ただ、地域の人とは、互いに「過去」については触れないのが暗黙の了解事項となっている。それだけに、付き合いはどちらかというと表面的なものになってしまう。本当の「親友」という意味では、学校時代の友人や職場関係から知り合った人が何人かあげられるがすべて亡くなってしまった。代わりに新しく親友をつくるという訳にはいかない。親友とは、そうした意味で取り替えのきかないものだ。また健康管理は自分自身でせねばならない、本人は国立病院で毎月、血圧と尿検査を、6ヵ月毎に心電図と血液検査を、1年に1回、胸部

と胃の精密検査を欠かさない。

⑤　現在の心境

定年後に大切なことは、何といっても打ち込める趣味をもつことだと思う。本人の場合は、郷土史研究がそれにあたる。いくら仕事から解放されたとはいえ、人間は何もすることがなくなったらおしまいだ。そうならないためにも、趣味を大切にしたい。ただ、現役時代にまったく何もしていないものが、退職後に急に始めようといっても無理がある。少なくとも10年前ぐらいから、各自が何らかの計画をもっておかなければならない。それからもう一つ「自分自身の意見を持つこと」が大切だという。

例えば1992年春地域のある団体が、現在計画されている市営地下鉄の建設に対して「全て地下形式にせよ」との要望書を提出した。これに対して本人は①環境保全問題の心配は少ない②地上を走る地下鉄は世界的傾向③多くの地下鉄は赤字④新線建設費の高騰度⑤建設資金調達の問題点⑥利用者的立場からの問題点⑦ルート決定の経過等の見地から「計画原案にて１日も早い着工と開業」を市長宛に要望している。

そのほか「長崎市長銃撃事件」「靖国神社参拝問題」「ＰＫＯ法と憲法」「湾岸戦争」等々に対する一考察をその都度まとめており、これらは郷土史の研究成果と合わせて現在原稿用紙にして約300 枚、「子供達に贈る私の昭和史－ある酒徒の長過ぎる墓碑銘」に続く「私の平成史」の一環にしたい、という。

今ふりかえって、自分の人生はほぼ三つの時代に分けられる。第１の段階は、1945年の太平洋戦争終結まで。確かに忌わしい時代ではあったが、かといって本人の場合、まったく否定的な感情でとらえているわけではない。生と死とが紙一重のなかで味わう緊張感は、まさに「生きとし生けるものの時代」であった。第２の段階は、60歳の定年に至るまでの38年間。時間的にはもっとも長いが、本人の意識のなかでは「余りの時代」という位置づけである。戦争のなかで、いったんは死ぬものと覚悟を決めたことが、「余り」という意識につながっているからだ。そして60歳以降の第３段階が、「私自身の時代」だと思っている。拘束の無いところで、自分の好きなことを存分にやれる、まさに「私自身」の時代である。「わが人生に悔いはない」。

(4) 事例D

	本　　人	妻
年　　齢	67歳	66歳
退職時年齢	60歳／65歳	56歳
現　　職	食品会社・顧問	無職
集団参加	宗教集団／スポーツクラブ／ 仏像彫りの趣味サークル	宗教集団／教員のＯＢ会／木目込み 人形・草木染め等の趣味サークル
年　　収	500～600万円	不明
世帯構成	夫婦のみ／他出子：一男二女	
住宅状況	一戸建て持家／20～30年居住	

① 生い立ちと職業キャリア

1924（大正13）年、九州にて生まれる。旧制中学入学は日中戦争の開始と重なる。さらに、地元の師範学校に進学してほどなく太平洋戦争が始まり、勉学もそこそこに学徒動員がかかる。予備仕官学校の候補生となり、内地に配属。しかし、実際の戦闘を経験することなく終戦を迎える。予備仕官学校の１期上の先輩では亡くなったものが多く、１年の違いが人生の明暗を分けたといえる。ただちに学校に戻るが、戦後の混乱期の渦中にあり、同年10月には繰り上げ卒業となる。大正末期生まれの人間の宿命か、人間形成のもっとも重要な時期に時代や社会に翻弄され、荒削りのまま社会に押し出された感がある。

しかし、終戦直後は食っていくことが先決だった。もともと教師を目指しての師範学校進学であり、また他にこれといった就職口もなかったため、翌46年４月から、出身県で中学校の社会科教員として勤め始める。しかし、この教員生活は長くは続かない。知り合いに誘われて、48年には戦後の花形産業であった石炭産業に転職し、以降16年間、人事の仕事に従事した。

炭坑の人事担当は、文字どおり命がけの仕事である。当時、炭坑で働いていた人たちは、右から左まできわめて幅が広かった。つまり、ヤクザもいたし、警察から追われている元共産党員もいたということ。殺人事件が起こることも珍しくはなく、そんな時、警察に通報しても恐がってこないほどだ。そんな殺伐とした雰囲気のなかで、荒くれ者たちを相手に、採用や給与関係の仕事をすることになる。恐いと思ったこともあるが、命がけで仕事をしているという充実感があった。

1960年前後から石炭産業の合理化が始まり、仕事の先行きがしだいに見えなくなってきた。当時はすでに結婚もし、３人の幼い子どももおり、このままでは一家の生活が支えていけない

のではないかと不安に駆られた。折しも、知り合いが東京の大手製パン会社の人事担当のポストにこないかと、声をかけてくれた。郷里を離れることに少なからず迷いはあったが、子どもたちや家族の将来を考えると、ここが決断の時と思い踏ん切りをつけた。

1964年、37歳の時、転職のために上京する。新しい職場は、同じ人事関係とはいえ、炭坑時代とはその雰囲気も仕事の内容も大きく違うものだった。まず、以前のような斬ったはったの殺伐とした雰囲気とは無縁の世界である。また、以前はまったく“男の世界”だったものが、こんどは従業員全体の4分の1が女性である。そんな違いに最初のうちこそ戸惑いを感じたが、ほどなく新しい水にもなじみ、これまでのキャリアを生かしながら、存分に仕事ができたと思える。そして60歳の定年を迎えるまでには、管理職のポストに昇進していた。

この間、本人の仕事ぶりは会社からも認められ、定年後は、新しく設立された関連の合弁会社の総務部長職に迎えられることになる。この合弁会社は、それまで勤務していた製パン会社と他の製粉会社が共同出資して設立されたもので、クロワッサンなどの高級なパン生地の材料となる粉をつくっていた。この会社の定年年齢も60歳であったが、設立されたばかりだということ、さらに、一般に合弁会社の経営は難しいとされていることなどの理由により、本人のキャリアを生かして会社の経営を軌道に乗せて欲しいという期待が強く、特例として65歳まで勤務することになった。

65歳以降は、以前勤務していた製パン会社の系列会社に就職を世話される。ここは、弁当やサンドイッチ、惣菜などをつくり、もっぱらコンビニエンス・ストアにおろしている。企業としての歴史は浅いものの、昨今の食生活の変化の波に乗って急成長し、現在では年商400億円の実績を誇っている。勤務地は自宅近くの営業所となり、「顧問」という肩書きで、週1回位の割合で営業所か都心の本社に出向いている。

② 仕事からの引退

教員時代から数えると5つ、東京に出てきてからでも3つの職場を経験してきた。そして今日でも職業人としての肩書きは一応保持している。しかし、気持ちの上では、65歳以降は、完全に「現役」から引退したつもりでいる。

それ以前の45年間は、激しい競争社会のなかを、ひたすら「選ばれる」ことを目標に斜めに駆け抜けてきた。今思えば、あそこまでしなくてもという気持ちもなくはないが、それはそれで充実していたし、実際にそのような働き方を企業から求められるのだから、仕方がない。しかし、人生最後までこんな生き方はしたくない。人生の1周目が、「選ばれる」ことをめざしてひたすら駆け抜けることが目標なら、2周目は、「選ばれない」位置に自分をおき、心底「人生は面白い」「生まれてきてよかった」と思えるような走り方をしたいと思っている。

振り返ってみると、仕事がもっともハードだったのは、炭坑時代と製パン会社の時代である。その当時は、自分の人生の8割以上は、職業人としての役割が占めていた。それが、合弁会社に移ってからは少し比重が下がり、その分、これまでの人生を振り返ったり、今後について考える余裕ができた。だから、65歳からの2周目の人生に入るにあたっては、きわめてスムース

であり、晴れ晴れとした気持ちだった。

③　家族キャリアと職業キャリア

結婚したのは、教師をしていたときのことである。妻もまた小学校の教員をしており、それが縁で知り合った。1948年に結婚、この年、本人は炭坑へと転職するが、妻は結婚後も教師として働き続ける。子どもは、51年に長女が、53年に次女が、そして57年に長男がそれぞれ誕生している。以降、妻が55歳で退職するまで、ずっと共働きでやってきた。

妻は、心底子どもが好きで教師稼業を始めた。だから、結婚しても子どもが生まれても、教師をやめる気持ちは毛頭なかったようだ。もともと、性格的にも家庭人として十分に収まりきらないところがある。本人の方は、子どもが小さくていちばん大変な時期はちょうど炭坑時代にあたり、家庭人としての立場など顧慮する暇もなかった。また、夫婦関係についての本人の考え方は、生まれ育った九州の気風の影響もあり、基本的には「亭主関白」をよしとしている。だから、子どものことや家のなかのことにあまり手を出さないできた。また女房もそれほどやるわけではない。このため、子どもたちがおのずとしっかりしてきて、3番目の男の子は、長女、次女が母親代わりになって育てたというところもある。

共働きをずっと続けてきた理由は、一つには妻が教師という仕事を好きだったことによるが、もう一つは、若いころから、今がんばって二人で働き、老後を豊かに過ごしたいという気持ちが強かったことによる。人生は、最後を迎えるときにどうかで、全体の評価がかなり決まってくる。とくに、老後の豊かさを支える基本的条件は経済力だ。いくら家庭にコミットしないといっても、まったく手を出さないというわけにもいかず、共働きであることで、その負担はいっそう重くなる。もともと、男尊女卑、亭主関白の考え方を身につけているだけに、それは少々辛かった。しかし「豊かになる」という目標を達成するためだと思い、我慢した。

とくに娘たちは、そんな両親に育てられたことで大きな影響を受けている。二人とも、母親が教師として働く姿を見て、自分たちも教師を志し、実際に教員を何年か経験している。しかし、ずっとその生き方を貫くのは代償が大きすぎると思ってか、子どもが生まれたのを機に退職し、今は二人とも家庭に入っている。

夫婦の関係は、人生の後半期になって、いくつかの出来事により少しづつ変わってきた。まず、10年前に妻が教員生活から引退したこと。定年退職まであと何年か残しての引退であり、心底教師が好きだった妻にとって、とても辛いことだったようだ。その辛さを紛らわすかのように、習字、草木染め、木目込み人形、編み物と、すぐにさまざまな習い事を始める。同時に、今までよりも家庭や夫婦関係にいっそうの関心を向けるようになり、本人に対して、習い覚えた習字や草木染めを教えたいといいだす。しかし、夫婦で同じ趣味をもつということは、互いに相手の作品の出来不出来につき優劣をつけたりすることにもなりかねず、煩わしくて断った。

夫婦関係に変化をもたらしたその次の出来事は、本人の仕事からの徐々なる引退である。本人はかねがね、定年後の男は「家庭の不要物」のベスト・テンに確実にランクされると思っていた。年をとるとともに、夫も妻もしだいに変わっていく。概して女は、50・60歳ぐらいにな

ると、厚かましくなる。これに対して、男には「男のリズム」のようなものがあり、女房に疎外されると立つ瀬がない。だから、何もしないで手をこまねいていたら、夫婦の距離がどんどん開いていく。本人も、65歳になって、仕事から基本的には引退して以降に初めて見えてきたことだが、何といっても人間関係の基本単位は夫婦である。だから、開いた距離をそのままにしないためにも、「夫婦関係のルネサンス」が必要だ。男女それぞれの特性の違いを自覚して、どのように補い合えるかが問題だ。何十年と連れ添った夫婦は、長所も欠点も、もうコミでつきあっていくしかないと思っている。

仕事が暇になってからは、以前はまったく手を出さなかった家のなかのことも、結構やっている。師範学校は全寮制だったし、軍隊経験もある。また、製パン会社時代には単身赴任の経験もある。だから、食事づくりや洗濯、掃除などの家事をすることは、あまり苦にならない。妻は妻で習い事が忙しく、ほとんど毎日といっていいくらい外出しているので、今は自分の方が中心になって家のなかで動き回っているといった感もある。人事、総務といった細かなことに気配りの必要な仕事をしてきたために、家のなかのことをやっても、配慮が行き届く。生まれ年の干支は、自分は「鼠」で妻が「虎」なので、「いつも虎に鼠が追いかけられている」と、冗談を言い合ったりすることもある。ただし、九州の風土のなかで培われた気風は基本的に変わっておらず、今でも気持ちの上では、亭主関白なところがあるかもしれない。

また、自分たち夫婦の精神的な絆を強めるもう一つの要因になっているのは、7年前に、二人で入信した宗教である。もともと、妻が知り合いから誘われて入ったものだが、思想信条を同じくすることで、互いを思いやる気持ちが強まったと思う。

入信により、以前よりも「死の認識」をもつことの大切さを感じている。また「死」以前の「病」、とくに寝たきりになったらどうするか、といったことについても考えることが多くなった。妻ともそんなことを話し合うことがあるが、妻は、自分のような我の強い人間はとても子どもたちには看られないと思っているようだ。だから、「あなたが先に逝きなさい。私が看るから。」といっている。仮に逆になったら、当然、自分が妻を看る。家を売ってでも金を捻出して、ケアのいい完全看護の病院に入れる。でも、病院まかせにしないで自分も看病する。2年前に、妻が乳ガンになり手術をしたが、その時はまめに病院通いをして看病した。だから、そのようなことがあってもやれるという自信はある。

④　現在の関心事と人間関係

65歳以降、自由な時間が増えてからとくに心がけているのは、規則正しい生活をするということ。自由になると、どうしても生活時間がまちまちになりがちだが、心身の健康のためには、やはり生活リズムというものが大切だ。とくに定年後は、どれだけ「自己管理」ができるかということが大切になる。たとえば生活時間については、毎日、起床は5時半、就寝は9時と決めている。1週間の決まったスケジュールは、1日は会社にいくこと、そして毎週土曜日には、「仏像彫り」の教室にいくことである。それから、この5月までは、近くのスポーツセンターに夫婦とも週2回ほど通い、スイミング、マシン、サウナなどをやっていた（それ以降は、後

に述べる別荘暮らしが多くなり、あまり行けない）。入会金が一人25万円、それ以外に月々の利用料がかかり、けっして安くはないが、「健康投資」のためだと思えば惜しくはない。ただ、毎週かならず2回通うのは、案外億劫なもの。本人は、朝の着替えのときに、まず下に海水パンツを着けてしまう。そうすると、いやでもセンターにいくことになる。これもやはり「自己管理」の一種だと思っている。

仏像彫りは、入信している宗教との関係で始めたものだ。教室に行くのは週1回だが、それ以外も、家で時間があればやっている。仏様を彫っていると気持ちが落ち着き、精神修養にもなる。また、教室に行けば同世代の人たちと世間話もでき、楽しみの一つになっている。

宗教活動は、役職についている関係で、結構忙しい。この宗教は、親鸞の教えにもとづくものだが、いわゆる葬式仏教ではなく布教活動に力点をおくものだ。本院は北陸にあり、月2回はそちらに行く。また、今年の6月より東京支部の支部長になり、その関係で集会などに出かけることも多い。青年部の活動にもかかわっており、こちらも月に1回は会合に出席する。

人間関係という点では、自分はもともと交際範囲はかなり広い方だった。しかし、仕事から引退すると、やはり付き合いはおのずと限定される。たんに仕事のみでつながっていたような人間関係はしだいに少なくなっていくが、現在も続いている関係もある。たとえ付き合いのきっかけが仕事でも、もっとも深い人間的な部分で性が合う人とは、いつまでも付き合える。

最近、新たに付き合うようになった友人もいる。仕事が暇になってからは、年に1・2回、夫婦で海外旅行に出かけているが、その旅行が縁で付き合うようになった人物だ。古い時代の歴史に興味があるので、海外旅行の行き先は、エジプト、モンゴル、ペルー、中国など、どちらかというと辺境の地といわれているところが多い。その友人とは中国旅行のツアーでたまたま一緒になり、すっかり意気投合してしまい、その後2人だけで改めて中国を訪れたこともある。かれは中国の歴史に造詣が深く、話をしていて飽きることがない。

結局、興味関心を同じくしたり、人間的に深いところで触れあうものがあるような人間との付き合いは、いつまでも続くし、新たにできることもある。反面、たんに行きがかり上の関係では、友人関係には発展しない。たとえば、隣近所の人は、家が近いというだけの関係しかなく、その付き合いはけっして深いものにはならない。老人クラブも一応かたちだけは入っているが、実際の活動には参加しておらず、個人的な付き合いもない。

⑤　現在の心境

現在の生活のなかで、もっとも充実していると感じられる時間は、この夏、東海地方の保養地に完成した山小屋に一人こもって、思索を巡らせているときである。もともと自然が好きで、とくに緑に囲まれた生活に憧れていた。また妻は、海の近くで生まれたので、老後は海の見えるところで過ごしたいとかねがねいっていた。そんなこともあり、23年前に、土地を買っておき、いずれ永住するつもりでいた。最近になって、ようやく仕事も一区切りつき、また65歳を過ぎたという年齢的なものもあり、「今やらなければ」という心境で建築に着手したものだ。この年齢になれば、遠からず訪れる死を自覚して、あとどれだけ余命があるかを計算した上で、

いかに有効な時間配分、予算配分するかを考えなければいけない。死を自覚することで、今、生きることに対していっそう真剣になれる。また、残された時間が限られていることを思えば、若いときよりもむしろ大胆に行動する勇気も湧いてくる。本人の場合、これからの人生の中心をなすのが「自然のなかで生きる」ということであると思い、これまでの蓄えをほとんどすべてかけ、もう破産寸前といっていい位の状態のなかでこの山荘を建築した。

この山小屋には、完成以降、時間がある限りいっている。夫婦でいくこともあるし、子どもたちの家族を招待することもあるが、一人でいくことも少なくない。たとえ一人であっても、寂しいとは感じない。海で泳いだり、草花や野菜をつくったり、本を読んだり、思索を巡らせたり、まったく飽きることがない。何からも拘束されることがなく、まさに晴耕雨読の生活である。森羅万象のなかにわが身をおいて悠然と過ごす。時間さえ、日常のリズムとは違い、ゆっくりゆっくりと流れていくようである。

いずれ仕事との縁が完全に切れたら、現在の住居を息子に譲り、山荘の方に生活の拠点を移す予定だ。自然に恵まれているとはいっても、生活するにもけっして不便なところではない。駅から10分あまりでいけるし、歩いて５分のところには大きなスーパーもある。近所には永住者がかなりおり、そうした住人を対象にするサークル活動なども盛んなようだ。

残された人生をどう過ごすかを考えるとき、この山小屋での生活と、「宗教に近づく」ということが大きな核になるだろう。これまでの人生を振り返ってみると、現役時代、つまり１周目の人生は、カバンをもってひたすら駆け抜けてきた。それはそれで充実した時間だった。しかし、「それが生きがいか」と問われると素直にはうなずけない。それはせいぜい、「やりがい」とか「満足感」といったものに過ぎない。「やりがい」や「満足感」は、その時々の感情であり、持続するものではない。つまりそれは「点」にしか過ぎない。これに対して「生きがい」は、「線」とか「面」として意識されるものである。

では「生きがい」とは具体的にはどのようなものか、本人にも見えていないのだから分からない。ただ、それはけっしてカネやモノなどの物質的なものではないことは確かだ。そしてまたそれは、あくまでも自分個人の問題であり、一人で摑むものである。夫婦関係が大事だと最近しみじみ思うのだが、その夫婦ですら、この部分については関係ない。結局それは、自分が精神的にある一定の高みまで登りつめ、ある種の悟りの境地に達することではないかと、漠然とは思っている。

そんな心境に達するために、宗教は大きな助けになる。俗世間では損得感情で考え行動することが多いが、まずはそうした煩悩を断って、われわれは「仏により生かされている」という認識をもつことが大切だ。さらに、その上に立って、時間、空間を超越して自分自身を見つめることができれば、それで本望ではないかと思っている。

(5) 事例E

	本　　人	妻
年　　齢	63歳	56歳
退職時年齢	60歳	——
現　　職	無職	保育園の保母
集団参加	学校の同窓会	職場関係のサークル
年　　収	200～300万円	不明
世帯構成	夫婦と妻の父親からなる二世代家族／子どもなし	
住宅状況	一戸建て持家／10～20年居住	

① 生い立ちと職業キャリア

1929（昭和4）年、関西に生まれる。父母ともに教員をしており、他に3人のきょうだいがいた。本人が5・6歳のころ、父親は学校をやめて私塾を開いた。しかし、初めのうちは経営が苦しかったため、少しでも生活の負担を軽くしようと、母親が子ども2人を連れて父親の生家に身を寄せた。しばらくの居候の期間を経て、地元にある（産業組合）製糸工場の舎監室に住み込むことになる。そこで母親は教員の経験をいかし教育係として舎監を兼務し寄宿舎管理及び嫁入前の「女のたしなみとしての」裁縫や、お茶、生け花を夜工女たちに教えた。

この工場の生活により、幼いながらに製糸や養蚕の仕事を目の当たりにし、又この時代農村で活発になってきた産業組合運動の雰囲気のようなものを何となく感じて、成人した後に農業問題に強い関心を寄せるきっかけをつかむことになる。

一方、父親の方は塾経営もしだいに軌道に乗り始めていたが、しばらくすると戦争の影響によりこの塾を閉鎖せざるをえなくなる。そこで、両親は将来のことを考え、家族全員で外地にわたる決意をする。これは小学校5年生のときのことである。外地にわたってからは、母親はふたたび学校の教員、父親は教育関係の公務員として働く。いろいろな変転はあったものの、家庭には一貫して教育的な雰囲気があったため、兄も教員となり本人も自然に教師を目指すようになり、当地の師範学校に進学した。

師範学校進学時には、すでに太平洋戦争が始まっていた。2年生の時は動員で陣地構築にかり出され3年生の時は教育召集を受け師団本部の通信兵の訓練を受けた。その後も戦局はますます厳しいものとなるが、実際の戦闘に加わることなく終戦を迎え、翌46年4月、家族とともに内地に引き揚げた。

内地に戻り、とりあえず、父の出身地で本家に身を寄せる。本家は農業を営んでいたため、

その手伝いをしたり、親戚の商店で働いたりしたが、父と母が山奥の分教場の教員の職を得たので生活が安定し、学制改革で旧制中学が新制高校にきりかわった3年に編入学した。この農業高校は歴史が古く図書室にあった江戸時代の農書や明治時代の泰西農業の英語の原書があり興味をもったので校長が目をかけて農業史の手ほどきをした。これがきっかけとなり、関東地方にある農業教育に特色を持ち個性的な教授がいた全寮制の農業関係の学校に入学する。学校では、農業協同組合論を2年間みっちりと勉強する。また、そのかたわら授業とは別に農業史や民俗学を勉強した。卒業後は当然のごとく農業関係の就職を目指したが、適当な就職口を見つけることはできなかった。

そこで、無理に就職するより、さらに勉強してみようと考える。師範学校時代の恩師が卒業し、学長が郷里出身で親近感があった東京の大学を選んだ。大学では商学部を選び会計学を学んだ。他に単位とは別に共同組合論、東西交通史、外交史などの講義を聴いた。これは、1956年のことである。

大学在学中に、叔父が勤めていた大手の製糸会社でアルバイトを始める。このアルバイトは、大学を卒業するまで続けるが、その間に本人の仕事ぶりが認められ、卒業後には正社員として勤めることになる。しかし、もともと本人を引っ張ってくれた叔父が退職し、そのことも影響してしだいに居心地の悪さを感じるようになり、63年には任意退職することになる。

その後、知り合いの紹介により、中小の合板会社で総務課長職に就くことになる。この会社は、その業界では草分け的な企業である。本人の担当した仕事は人事関係、とりわけ従業員の採用が中心だった。従業員規模は200人ほどの中堅企業で、会社の性格から、従業員の大半は工場の現場労働に従事する。この種の現場労働は、今日でも「3K」などといわれて敬遠されがちだが、それは今に始まったことではなく、本人の在職期間25年にわたって、程度の差はあれ一貫して悩みの種だった。それでも東京オリンピックのころまでは、いわゆる建築ブームの影響もあり、あまり苦労はなかったが、それ以降の人集めは困難を極めている。

ともかくも、約25年間の在職期間の大半は、求人活動に費やした。平均して1カ月の内20日ぐらいは出張に出るという生活であった。全国各地の高校を回って求人を依頼したり、中途採用者を発掘したり、さらには出稼ぎ希望者を探して農村地帯を歩いた。ただし、それだけに集中して仕事ができるほど規模の大きな会社ではなかったために、社に戻っている時は、従業員の給料計算に始まって、新人の採用時の手続きや受け入れ体制の整備等があり出張中も毎日電話で、事務全般についての指示するなど、あらゆることをこなしてきた。

過労で倒れ入院するという事もあったがこんな生活は、若いころはけっこうやりがいもあったし、楽しんでもいた。それは中小企業で配置転換もなかったし凡てをまかせられ自分の思うとおりに仕事が出来た。まず何より「自由」な点が良かった。一人で行動し、仕事をするので、職場の人間関係に気を遣ったり拘束されたりすることがない。また、農村が好きだったので、地方に出張にいくと、仕事の合間に特産物を見てまわったり積極的に地元の人と交流をもったので、求人の地盤のようなものが出来た。この仕事についた初期の頃は各社とも求人のやり方

については手探りの時代で、紡績会社の「募集人」と言われる人々が僅かに残っていた。この人達の話を聞く事により自分なりの手法を摑みたいと努力していた時代で、立身出世をめざすエリートサラリーマンを横目で見、プロ意識を育てている一匹狼的な気風があった。

若いころに抱いた将来の夢とはずいぶん違った方向を歩んできてしまったが、そんな「求人屋」の仕事は、けっこう自分の性に合ったものだった。しかし、年とともにこんな生活にしだいに疲れを感じ始め、60歳の定年はちょうどいい引け時だった。

② 仕事からの引退

定年退職を迎えて長年勤めた会社に未練がましく顔出しはしたくない「ただ消え去るのみ」という「男の美学」は考えたが、これでいっさいの仕事から足を洗うといった気持ちは毛頭なかった。とにかく「働けるうちは働かなければいけない」という信念を持っていた。しかしこの気持ちはすぐに揺らいでくる。定年後に「働く」ことにより、支払わなければいけない代償があまりに大きいことに気づいたからだ。

このことに気づくまでのあいだ、短期間の仕事に就いたり、実際にやらないまでも、具体的に就職の話を進めたりした。まず、「人材派遣会社」に勤めた。求人を派遣し利潤を生み出していくノウハウは貴重な体験であった。1カ月位たつと腰痛が再発、又残り少ない自分の人生をこんな仕事で費やしていく事にむなしさを感じるようになり退職した。つぎに、雇用促進事業団の嘱託と市役所の臨時雇の仕事が同時にあり臨時雇の仕事を選んで半年就業した。老人病院の事務長補佐に、という話があった。仕事の内容がよくわからないので調べたところ、募集業務、入院患者の家族とのトラブル処理や、役所との折衝が主な仕事だという。やっかいな仕事でいまさら神経をすり減らしたくないと思い、これも話だけで終わってしまった。

こんな経験をして、人材銀行に登録した。すると間もなく、タクシー会社から是非にという話があった。仕事の内容を聞いてみると、社員募集、労務管理、事故処理などだという。また同じころに、クレジット会社から支払いの焦げつき処理を主な仕事とするポストにどうかという話もあった。いずれの話も、おそらく本人の総務部長のキャリアを評価してのことだったと思う。どこ迄もつきまとう募集業務とトラブル処理に期待されている事の誇りのようなものを感じるが、それら仕事内容のやっかいさを思うと、どうしても乗り気にはなれなかった。

定年退職後、1年ぐらいはこんな調子で過ぎていった。この間、当初の「働けるうちは働く」という気持ちはだんだん変わってきた。仮に、「働かなければ食べていけない」のなら当然働く。またそうでなくとも、体が非の打ちどころがないくらい健康ならば、やはり働くかもしれない。しかし、いずれの条件も当てはまらない。経済的な面についてのみ考えると、働くことで果たしてメリットがあるかどうか疑わしい。退職者の再雇用となると、雇う側は相手の足元をみて、できるだけ安く使おうとする。昭和1桁生まれの真面目さと不器用さで一生懸命働くので無理をしがちである。そのうえ勤労収入があると年金も減額されるので、実質的な実入りは5万円程度になる。そのなかから昼食代と通勤費を差し引くと、もういくらも残らない。おまけに神経をすり減らしたり体を悪くしたりでは、何のために働いているのかわからない。効

率第一主義の今の社会で健康に合せて働いてもらえれば良いという会社はどこにもない、その気持ちは良くわかる。そんなことを考え、求職活動から完全に足を洗ってしまった。結局、仕事をすることで得られるものとそれにより失うものとを天秤にかけて、どれだけつりあいがとれるかが問題だと思う。

③　家族キャリアと職業キャリア

妻は保育園の保母であり、共働きの夫婦としてスタートした。残念ながら、子どもに恵まれなかったこともあり、妻は保母の仕事をずっと続け、今日に至っている。子どもができなかったことや、共働きであったことにより、この30年ほどのあいだ、夫婦関係は基本的には変わってはいない。双方ともそれぞれに自分の世界をもち、その部分についてはあまり干渉せず、互いの世界に踏み込まない。「ほどほど」の関係を保つというのが、お互いの暗黙のうちの了解事項だったように思う。

ただし、家事のやり方については、自分の定年退職により大きく変わった。現役時代には、家のなかのことは全くタッチせず、妻に任せきりだった。何しろ、1年の3分の2は出張という生活では、手の出しようがなかったのも事実である。しかし今は、むしろ自分の方が中心になって家事をしている。食事に関しては、朝ごはんは完全に自分の役割だし、晩は、ご飯をしかけて、それから時間のかかる煮物を一品ぐらいつくっておく。そのころには妻が帰宅して、バトンタッチというかたちだ。後片付と風呂は自分が分担している。掃除にしても、大部分自分がやる。居間や台所はほぼ毎日、その他の場所は、たとえば「今日は風呂場」というふうに重点的にやるところを決めて、順繰りにやっている。それから、この家を建てたときに、庭を広めにとって鯉を飼うための池をつくったり、植木をたくさん植えたりしているので、その日の天候と気分により作業衣に着替えて手入れや世話をする。これを全部こなすと夕方になる。これらの仕事は、イヤイヤやっているのではなく、やるのが当たり前という感覚である。

これから何年かすると、今度は妻が定年を迎えることになる。そうなっても夫婦関係そのものは、今と大きく変わることはないと思っている。おそらく家事は半々にやることになるので、自分の負担は少し減るだろう。それ以外の時間は、それぞれが好きなことをやっていればよい。

④　現在の関心事と人間関係

現在は63歳であり、今の時代、完全な隠遁生活にはいるにはまだ若い。仕事を全くしていないというと、周りの人たちが必ずといっていいぐらい、「毎日、何をしてるんですか」と尋ねてくる。この種の質問には、いつも返答に窮してしまう。個人的な趣味に没頭したり、妻がまだ現役で働いているので、家事や庭の手入れをしたりと決して暇ではないが、一般にはそれだけでは意味ある時間の過ごし方とはみてもらえない。また、「もっぱら家のなかのことをしている」ということが、この世代特有の照れもあって、なかなか正直にはいえないでいる。

今もっとも興味をもって自分なりに勉強しているのは、大原幽学の人となりとその業績についてである。幽学はヨーロッパに先がけて日本で初めて農業共同組合を創った人物として知られており農村改良事業に大きな貢献をなすとともに、感化力の優れた教育者でもあり啓蒙思想

家でもあった。自分自身幼い頃産業組合製糸工場で過ごしたり農業の手伝いをした経験から農業問題に関心をもち、青年期には農業関係の学校で農学を学んでいる。また、両親ともに教員だったこともあり、一時は自らが教職を目指して勉強したこともある。そのような自分のこれまでの足跡や興味のありようと、幽学の業績をたどる勉強とは重なり合う部分が大きいし、彼の生き方に共感と尊敬を感じる。幽学について調べていくと、不明な点も多いので知らない事を知った時は推理小説を読んでいるかのような、わくわくとした気分に浸ることができる。

幽学の研究は、すでに30歳代のころから始めており、自分のライフワークといってもいいものだと思っている。ただし、本腰を入れて調べ始めたのは、やはり完全に仕事から引退してからである。この研究は、あくまでも個人的な興味に端を発しているものだし、多くの人と共有できる関心ではないので、一人でコツコツと書物や資料を調べている。ただし、農業関係の学校で学んでいた当時の教員で、やはり大原に造詣の深い人がおり、その人とだけは話が合う。かつては師弟関係にあったわけだが、今ではむしろ、尊敬の出来る先輩のような親しみを感じる。

それ以外の人間関係では、全学的な2種類の同窓会にかかわり、役員も経験している。一つは、農業関係の学校の同窓会で、もう一つは、師範学校の同窓会である。現役時代は自分もほとんど参加できなかったが今は余程の事情がない限り参加している。そろそろ引退者も増えてきたためか、40年ぶりに集まった今年の級会は全国にちらばっている全員が集まった。そこではやはり、今どうしているということが中心的な話題の一つになった。現役時代の仕事が、技術系か事務系かで大きくその後の生き方が左右されるようで、技術系の人は一般に、キャリアを生かした仕事を続けている。しかし事務系は、自分も含めてつぶしが効かず、警備会社勤務が関の山だ。何も仕事をしていない人の毎日は、囲碁や釣りなどの趣味に費やすというのがもっとも多く、なかには「主夫」業をしているというものもいた。

現役時代の仕事を通しての付き合いは、最近ではしだいに薄れていくようだ。それでも、定年後まだ「働かなくてはいけない」という気持ちがあったときは執着があったが、その気持ちが薄れていくにしたがって、関係を引きずっていることがかえって煩わしく感じられるようになった。現役時代の人脈は、意識的・意図的につくられたものであるのに対して、これからは、共通する趣味や関心にもとづき「類は友を呼ぶ」といった感じで、自然にできあがっていくものではないか。しかし、仕事を通じての人間関係が全く無くなってしまうのも、また寂しいものだ。最近、「退職者協会」といった会が結成され案内を受けた。まだ具体的な活動内容はよくわからないが、大いに興味がある。

⑤　現在の心境

今、これまでの人生を振り返ってまず思うことは、出来るだけ早い年代で“職業と人生”をみすえての自分なりの人生設計を立てることが重要だと思う。計画の実行はきわめて困難なことであるがやろうという意志を持ちつづける事である。人間の一生には、「ハード」面と「ソフト」面がある。「ハード」とは、いわば“中央幹線道路”のようなもので、各世代ごとに、

最低限なにをすべきかが問題になる。この部分については、その人の性格や立場を超えて、かなり共通する特徴が見出せる。しかし、もう一方の「ソフト」については、一人ひとりの個性や生いたちの影響が強く出て、マニュアルの役立たない世界である。しかもこの「ソフト」は、10歳代以前にすでにその基礎が形づくられている。言ってみればそれは、“けもの道”のようなものである。だからマニュアルはつくれないが、この部分こそが「生きがい」に直接つながるものになる。別の言い方をすると、それは、「生きがい」を探り当てようとする本能のようなものかもしれない。

このような考え方は、日本の伝統的な「道」の思想にもとづくものだ。自分自身、40歳代ごろからこうした思想の影響を受けており、当時、「ライフチャート」と称する詳細な人生設計を立ててみたことがある。いま思えば、とてもやれるはずのない高すぎる目標を掲げたものだった。しかし、だからといって、そうしたことが無意味だとは思わない。たとえできなくても、何がどれだけできていないかを判断するモノサシがあるとないとでは、ずいぶん違うと思う。重要なことは、どれだけ自己管理がきちんとでき、どれだけ自分の人生を自分自身の意志でつくっていけるかではないかと思っている。

(6) 事例F

	本　　人	妻
年　　齢	60歳	53歳
退職時年齢	58歳／60歳	——
現　　職	ニット製品製造会社	病院医療事務・パート
集団参加	同窓会／定年前の職場のＯＢ会	町内会
年　　収	800～1000万円	不明
世帯構成	夫婦と社会人の息子二人	
住宅状況	一戸建て持家／50年居住	

① 生い立ちと職業キャリア

1932（昭和７）年、関東で生まれる。生家は酒屋を営み、４人きょうだいの次男として育った。酒屋の家業は、先代から引き継いだもの。父は長男であったため、当然のごとく跡継ぎと目され、学業もそこそこに商売の世界に入った。このため、子どもたちには十分な教育を受けさせてやりたいという気持ちが強く、東京都近郊に家を買い、小学校を終えると子どもたちだけで次々にそちらに移住させ、よりレベルの高い学校に進学させた。本人の中学進学時はすでに太平洋戦争のさなかである。住まいの近辺にも、米軍の戦闘機はしょっちゅう飛来し、空襲も何度か経験した。当時は姉と二人とはいえ、子どもたちだけの生活では、いざというときどうすればいいのかと、不安な毎日だった。

やがて終戦を迎え、本人が中学３年のときに学制が切り替わり、在学していた旧制中学はそのまま新制高校に移行する。高校卒業後、４年制大学法学部に入学。当時はバンカラの校風そのもので、学部全体でも女子学生は10人のみであり、まさに男の世界だった。

56年に大学を卒業する。当時は厳しい就職難の時代で、就職先のより好みなどできる状況ではなかった。幸い大手地方銀行に就職でき、ここに30年以上勤続する。仕事の内容は、おもに企画関係や融資関係であった。県内ではあるが転勤を９回経験し、順調に出世もして管理職のポストについていた。ところが、勤続30年ほどたった86年、突然、人事部長から呼び出され、取引先企業への出向を命ぜられる。この時のショックは大きく、断る可能性は無くはなかったが、一晩考えて「よし、新しい会社で自分の力を試してみよう」と、この話を受諾した。

この出向先が現在の職場で、総務部長ポストに着任することになった。この会社は、セーターなどのニット製品の製造・卸を業務としている。ニット製品といっても、海外の有名ブランドと提携した高級商品を商社などの受注に応じてつくっており、扱っているのは、いってみれ

ば付加価値の高い商品のみである。いずれにしても、これまでの金融業務とはかなり性格の違う仕事で、とまどいも大きかった。しかし、実際にはとまどっている暇もない。86年2月に、出向してきて、来たその日から即仕事といった有り様だ。とくにこの時期は4月の決算期に向けて経理関係の仕事が忙しく、1年間の仕事の流れもつかまないまま予算書の作成をした。経理の仕事それ自体は、長年、銀行で培ってきた知識や経験をある程度生かすこともできる。しかし、商品に対する知識や、デザイナーや工員などの技術系の仕事をする従業員の扱いなどは、まったく初体験であり、新たに勉強しなければならないことも多かった。

銀行の社員としての身分のまま、この会社に出向して4年、この時本人は58歳でまだ銀行の定年まで2年を残していたが、任意退職する。この会社の定年も60歳であったが、残りの2年は正規の社員として勤務することになる。すでに今年の6月に定年退職の日を迎えたが、役員候補として慰留され、今日に至っている。

② 職業からの引退

制度的な退職年齢といえば、まず58歳の銀行からの任意退職であり、さらに60歳のこの会社での定年退職である。しかし、本人にとっては、54歳の出向が職業キャリアの大きな転機であり、以降は安定したキャリアを歩んでいると受けとめている。ただし、どの段階についても、それはキャリアの「転機」であって「終焉」ではない。今現在も「現役」として、会社全体をしょってたつような気概で働き続けている。現在の職場が中小企業であるだけに、自分の力が十二分に発揮できているという実感も得やすい。経済的にもかなり恵まれている。だから、一応退職を経験したとはいえ、実感がわかず、暗いイメージをもったこともない。

この先、本当の意味で退職することになったらどうなるかということは、それほど深刻には考えてはいない。ただし、経済的な備えだけはしっかりとやっておいて、いざというときには困らないようにしたいと思っている。

③ 家族キャリアと職業キャリア

夫婦関係は、「亭主関白」からスタートした。銀行時代は、今とは比べものにならないぐらい仕事の占める比重が大きかった。この会社に移ってからは、職業人としての部分は7割方に比重が落ちたが、かつては8・9割は職業人だったのではないか。それだけ仕事がハードだったということかもしれない。とくに終業時間が実際問題はっきりしておらず、徹夜になることすらあった。その点、今は6時半になれば帰宅することができる。

時間的な余裕がでてきたことにも起因するが、かつてより家庭を大切にしなければという気持ちが強くなった。「家庭」といっても、子どもはそれぞれ自分たちで選んだ道を進んでいくと思う。二人の息子はすでに社会人だが、まだ独身のため親元にいる。しかしこれもいつまで続くかわからない。結局、最後に残るのは夫婦しかない。「亭主関白」からスタートしたとはいえ、気がついてみたらいつのまにか関係が逆転していた。それはやはり、現在の会社に転職して以降のことだと思う。たとえば給料にしても、銀行時代は自分が全部握っていて、妻には適当な金額を当てがい扶持するということで通用していた。ところが今では、それでは不満が

でるようになった。何が変わったのか、きっかけが何なのかはわからないが、本人の方でも妻を大切にしなければという気持ちが強くなったことは確かだ。

夫婦で共通の趣味をもつことも、これからは大切だと思っている。しかし実際にはあまり共通する要素はない。だから意識して創り出すようにしている。たとえば、絵の展覧会を一緒に見にいったり、二人で旅行をしたり、妻から料理を習ったり。旅行は、銀行時代はほとんどいけなかったので、なるべく多くの機会をつくるようにしている。ただし、旅行にいくと、それぞれの好みの違いをかえって強く意識することもある。本人は、ツアーの一員として行く方が気楽だと思っているが、妻はそれだとゆっくりできないので、自分たちだけで行きたいという。また行く先についても、本人は自然の豊かなところを望むのに対して、妻は博物館や史跡などに興味惹かれるようだ。

いろいろなことがあるが、夫婦関係はまあまあうまくいっているように思う。何といってもいちばん大切な人間関係だけに、これからもいっそう妻を大切にしなければと思っている。

④　現在の関心事と人間関係

定年をすでに経験したとはいえ、まだ「現役」という意識が強いため、関心があることといえばまず仕事のことである。役員という立場になることで、直接、会社の経営に携わることになる。会社の経営に少しでも貢献できたらと、気持ちを新たにしているところである。

ただ、将来、完全に仕事から引退したときのことを考えると、趣味の幅を広げることや、人とのつながりを大切にすることを心がけなければと思っている。趣味については、のめり込むというほどではないが、若いころからけっこういろいろ手を出してきた。切手やコインの収集は若いころからやっており、かなりのコレクションになる。また習字も好きで、楷書は１級の腕前だ。最近は、海外旅行に備えて英語の勉強を始めた。資格取得にも興味があり、宅建取引主任者を始めいくつかもっている。将来やってみたいことは自分史を書くことである。

人間関係については、まだ「現役」なので、地域に関してはあまりないが、それ以外ではかなり付き合いは多い方だと思う。高校や大学の同窓生とは、会えば昔話に花が咲く。仕事関係では、やはり30年以上勤めた銀行時代の付き合いがいまだに多い。自分は、出向、退職と、立場が変わり、今では直接の関係はないものの、そんなことにこだわりは感じないで付き合える。ゴルフ、麻雀、酒と、ともに楽しめる仲間は多い。いずれの関係についても、職業上の立場の変化により、付き合いが変わったということはない。

⑤　現在の心境

銀行時代から比べて仕事の比重が下がったとはいえ、やはり生活の中心には仕事がある。ただ、以前に比べて家庭、とくに夫婦関係を大切にしなければという気持ちは強くなり、それなりに努力もしている。完全に仕事から引退して以降については、あまり実感をもって考えることができないが、人間関係と趣味、そして基礎的な条件としては住宅と経済だと思う。精神的な安定は、経済的な安定があって初めて得ることができると思う。住宅も大切。本人の場合、父親が子どもの教育のために買ってくれた東京近郊の地所に、ずっと住み続けており、その点

では恵まれていると思う。

(7) 事例G

	本　　人	妻
年　　齢	49歳	40歳
退職時年齢	——	33歳
現　　職	電気電子部品製造会社・取締役	無職
集団参加	なし	趣味サークル／教養サークル／ＰＴＡ／ボランティア活動等
年　　収	1000～1500万円	不明
世帯構成	本人夫婦と小学生の子ども二人	
住宅状況	一戸建て持家／10～20年居住	

① 生い立ちと職業キャリア

1943（昭和18）年、大阪で生まれる。3歳の時九州に移り、その後九州内で転居し、そこで高校を卒業するまで過ごす。九州は一般に、封建的な気風が強いといわれている。確かにそういう面もあったが、同時に進歩的な雰囲気もあり、本人の人格形成にはこの両面が影響していると思っている。

大学は東京の私大に進み、新設されたばかりの社会学科の一期生として学ぶ。4年生になると、残っている単位はゼミぐらいで暇になり、アルバイトを兼ねて大手電気機器メーカーに準社員として勤務する。週5日ぐらいの勤務で、1年余りここで仕事をする。当時は、東京オリンピックの直後でかなり景気の悪い時代だったが、卒業時には、本人さえ希望すれば正社員として採用される可能性もあった。しかし、この1年の間に、自分は大手ではとても勤まらないと感じていた。これはもっぱら性格的なものだと思うが、派閥のある人間関係のなかではうまくやっていく自信がなかった。もともとこの仕事は大学の先輩が世話をしてくれたもので、途中で投げ出すとその先輩に迷惑がかかるのではないかと懸念もした。

結局、その先輩の紹介により、小さな商社に勤めることになり、ここに7年間勤務する。そこで、他社の製品を販売するよりも、小さくても自社で製造したものを販売することに生きがいを求めて転職した。

こうして、1972年、本人が29歳のとき、現在の職場に転職した。この会社は、プラスチック樹脂を用いて、プレス製品と呼ばれる電気・電子部品を製造している。たとえば、ビデオ装置の回転部分には、必ず使われている部品である。特定のメーカーの下請けという形はとらず、主なメーカーにはたいてい製品を納めている。商社の仕事とは、もちろん全く性格が異なるが、

かつて勤務していた商社でプラスチック樹脂を扱っており、その種のメーカーによく出入りし、勉強もしていたので、比較的スムースに新しい仕事に入っていけた。

この会社に入って10年ほどして、新しい工場が出来ることになる。本人はそれまでの仕事ぶりが認められて、新工場の責任者を任されることになる。従業員は7人という小さな工場ながら、やりがいがある。もちろん、景気による影響もうけやすく、経営は必ずしも楽とはいえない。

就業時間は、午前8時から午後5時までとなっており、残業はほとんどない。また3年前から完全週休2日制を導入しており、時間的な余裕はかなりある。ただし、小さな会社であるため、取締役といっても全体の管理だけしていればいいというわけではなく、細かな雑用的な仕事も多い。

② 家族キャリアと職業キャリア

教員をしていた妻と結婚する。子どもをもうけたのは世間一般からみると遅く、本人が40歳代に入ってからだったので、現在は小学校の5年生と3年生である。子どもができたことで、本人の人生観はかなり変わった。それまではもっぱら仕事と遊びに夢中だったが、親としての責任を強く感じ、子どもが自立するまではできるだけ接してやりたいと思うようになった。

妻は教員の仕事が好きで、結婚後も、そして出産後も続けていた。妻としては、ずっとこのまま仕事をし続けていくつもりだったようだ。しかし、二人目の子どもが生まれ、やはり子どもには母親が十分に接してやらなければいけないと思い、説得して仕事を辞めてもらった。妻は仕事に未練があり、完全に納得したわけではないが、結局7年前に退職した。今でも、もうしばらくしたらふたたび教職につきたいと思っているようだ。今度は良い教員になれるとも言っている。

子どもができて、家庭人の立場を重視するようになったとはいえ、「夫」として「父」としての自分を自己採点すると、50点ぐらいしかあげられない。もちろん子どもとはできるだけ接するように努めてはいるが、実際問題、十分にというわけにもいかない。週末にハイキングにいったり、夏休みに海や山に連れていくぐらいだ。一番問題なのは、教育について、本人と妻の意見が必ずしも一致しないこと。妻は、勉強や成績のことに関心が強く、塾通いにも積極的である。本人としては、そもそもいまの偏差値教育そのものに、本質的に反対の意見をもっている。子どもはもっと自然とかかわったり、さまざまな経験をさせることで、たくましく育てたい。いろいろな経験を積むことで、強い精神を養うことができるし、その経験を通して子ども自身が人生の選択の幅を広げていくこともできる。理想論といわれるかもしれないが、勉強をし、いい成績を取るより、もっと大切なことがあるはずだと思っている。しかし妻は、もっと現実的な問題を重視する。かつて教員をしていたこともあり、勉強にかけては自分よりもよく知っているので、妻の意見を尊重しなければいけないという気持ちもある。またこれは個々の家庭レベルで解決できる問題ではなく、社会全体の問題だとも思う。しかし、やはり本人と

しては、妻の意見に全面的には同意しかねている。現状では、疑問を感じつつも、子どもの塾通いを黙認しているといったところである。

③ 現在の関心事と人間関係

現在の生活の中で、何が中心かと言えば、やはり仕事である。この仕事を通して、大きな社会的責任を果たしているという喜びがある。当社が製造している製品が順調に供給されないと、たちまち多くのメーカーが生産に支障をきたす。目立たない地味な仕事だが、不可欠な仕事でもある。かつて社員の慰安旅行で海外にいったとき、二つの工場で総勢50名ぐらいになるものを、二派に分けて飛行機の予約をした。万が一どちらかが飛行機事故があっても、当面の操業は何とかできるだろうとの配慮からだ。そこまで考えていると、仕事それ自体が大きなプレッシャーになる。しかし同時にそれは、生きがいでもありやりがいでもあると思っている。仕事をするということは、まず食べるため、家族を養うためという「手段」であるが、もう一方で、仕事をすること自体が「目的」でもあるのではないか。

もちろん、家庭は家庭で大切だ。とくに子どもが生まれて以降は、その思いをいっそう強くした。今は、子どもがまだ小さいこともあって、夫婦というよりまず親としての立場に重きをおいている。

そのような状況のなかでは、個人的な趣味や社会活動に力を入れるということは、なかなか難しい。また性格的にも、一つことを集中して長くやることは得意ではない。特にスポーツが好きなので、週末にプールにいったり、テニスをしたりしている。テニスは、近所に仲間がおり、妻や子を含め、家族ぐるみで楽しんでいる。

友人関係は、不特定多数の人と付き合うといった感じで、とくに親友といえるほどの人はいない。友人付き合いのうえでは、趣味が合うということが大切だと思っている。しかし何から何までまったく同じ趣味を持つ人はいないので、例えばテニスをやりたいときは同じ趣味の人を誘うといったかたちで、その時々で付き合う相手は変わってくる。妻とは、スポーツ好きという点では、趣味が合っている。

④ 現在の心境

今は、仕事のこと、子どものことなどで、精神的に余裕のある生活とはいえない。将来のことを考えると、とくに仕事から引退して以降、もっと違う人生を生きたいと思っている。現在の会社では自身については定年がない。だから体が続けば働き続けることはできるが、子どもの独立後は旅行に行くなど仕事以外のことにも時間をさきたいと思っている。

いま願っていることは、早く子どもが自立して欲しいということ。そうなれば、もっと自由に、自分のために時間を使うことができる。いまそれに向けて何か準備をしているか、と言われても、現在はとてもそのような段階ではない。ただ、将来に向けて大切なことは、人間関係と趣味などの体験を広げることだ、ということは日頃から自覚しているつもりだ。人間関係については、やはり将来は、妻との関係が一番大切になることだろう。「家を継ぐ」といった観念は、いまの時代はもう通用しないのだから、子どもは子どもで自由な道を選ばせてやりたい。

「年をとる」ということは、発想を変えれば、それまでやれなかった新しいものに挑戦できるということでもある。そうした生き方をするためにも、心身の健康は大切であり、いまから心掛けておきたいことだ。現在も教育と健康のためのお金は惜しまないという方針でやっている。

(8) 事例H

	本　　人	妻
年　　齢	37歳	36歳
退職時年齢	——	——
現　　職	自動車販売会社・営業	市保健センター・看護婦
集団参加	趣味サークル	職場のサークル／旧職場のグループ／町内会等
年　　収	400～500万円	不明
世帯構成	本人夫婦と小中学生の子ども３人	
住宅状況	借家／10～20年居住	

① 生い立ちと職業キャリア

1955（昭和30）年、東京近県で生まれる。農業を営む両親のもと、五男として育った。小中学校を通じて勉強はあまりできる方ではなく、ワルでもあった。このため、中学の担任から、高校進学よりも早く社会へ出た方がいいと、自動車整備の専門学校に入ることを勧められる。本人も勉強は好きではなかったので、この助言に従った。

専門学校卒業後、大手自動車メーカーの系列下にある自動車整備会社に就職、ここに８年勤める。その間、誘われて組合に少し首を突っ込んだことで、労使一体の問題など、いろいろ考えさせられた。整備の仕事は好きだったが、そのうち社内の人間関係がうまくいかなくなり、転勤させられる。しばらくは勤務を続けるが、通勤時間がかかり、通いきれなくなって辞めてしまった。その後、市場や運送の関係の仕事にかかわり、学歴の必要性を強く感じたりもした。

次は、それまでの仕事内容とは一変して、損害保険の代理店に勤め、外交員をする。３年間の在職期間中のもっとも中心的な仕事は、公立高校の自転車通学生のための保険の勧誘である。これは、当時新しく作られたもので、各高校を回って加入を勧め、わりと順調に営業成績を伸ばしていた。ところがある時、保険に加入している生徒が事故に遭い、ケガをする。その時ケガをした生徒の親が損害賠償の金額にこだわっているのを見て、人間の醜さに嫌気がさした。このことがきっかけになって客商売はもういやだと思い、ここも辞めてしまった。

次は、人間相手でなく、金のもうかる仕事をと思い、運送会社のトラック運転手となる。月給が70万円という破格な金額であることにまず惹かれた。しかし当然のことながら、勤務はそれだけきつい。朝の６時から夜中の12時までが標準的な勤務であり、仕事を終えても、事務所で仮眠してまた早朝から仕事に入るといった毎日だった。またこの仕事には、ヤクザの世界か

ら入ってくるようなものも多く、同僚との人間関係もうまくいきそうにない。結局ここは、1週間ともたなかった。しかしその後もまた、別の運送会社に勤める。ここは、前のところに比べれば多少はましだったので、1年ほど勤めた。

このように、安定した職を得ないまま30歳を目前に控えていた頃、初就職先である自動車整備関係の知り合いが、「人が足らないので、もう一度こちらで仕事をやってみる気はないか」と声をかけてくれる。本人も、もともと仕事自体は好きだったので、この誘いにのることにした。

本人が職場を離れているあいだに、組織の性格は大きく変わっていた。かつては、自動車整備や部品販売専門の会社だったものが、その後、自動車の販売店を兼ねて統合されるようになった。ここで本人は、今度は整備ではなく、営業の仕事に従事することになる。この会社の営業方針は、ライバル企業と目される会社のそれに比べて大きな違いがある。まずノルマについては、全くないわけではないが、かなり自由裁量の余地がある。営業計画は、一応、平均より上回るように設定すれば、各自が自由に立ててよい。このため、あまり強いプレッシャーを感じなくてすむ。またこのメーカーは、技術系の発言力が強いこともあって、ポリシーをもって車をつくっている。だから車をよく知っている玄人に受ける。とくに若い世代には強く支持されており、こちらが営業して回らなくともお客の方で店にやってきてくれる。そうした意味でも、営業の仕事はやりやすいと思っている。

勤務は、9時から5時半まで、お客の都合があればそれ以降まで延びることもあるが、とくに「残業」という意識はもっていない。ここに勤めて8年になり、今はこのまま定年まで勤め続けたいと思っている。

② 家族キャリアと職業キャリア

妻は1歳年下で、看護婦として働いている。看護婦といっても、現在は市職員として、保健センターに勤めているので夜勤などはない。子どもは中1、小5、小4の3人の男の子。

現在、妻との関係は、あまり良いものではない。日頃は話もあまりしない。話しているといやな面が出てくるので、あまり話さないようにしている。妻の方も自分に対してとくに期待はしていないようだ。お互い、それぞれ好きなようにやるというのが、暗黙のうちにできあがったルールかもしれない。ただ本人は、妻に、最低限子どもの食事だけはきちんとするようにといっている。しかしこのことも、時にはおろそかになっている。ただしある意味ではお互い様のところもあり、「夫」として自己採点すると、おそらく50点以下だろう。

父親としてもあまりいい点はもらえないかもしれない。つい仕事優先になってしまい、参観日にもいったことがない。ただしいきたくない、興味がないというわけではない。自分は考え方に少々過激なところがあるため、学校にいくと何を言い出すかわからないからだ。家庭では、十分とはいえないまでも、子どもとなるべく接するようにしている。夏休みやゴールデンウィークなどまとまった休みには、子どもの希望を聞いて、遊びにつれていってやる。今年は、遊園地、海、山などに行った。普段は、月1回ぐらいしかできないが、キャッチボールの相手な

どもすることがある。

しつけの面は、それほど細かく日常生活を見ているわけではないが、必要最低限のことはいっているつもりだ。一番大事なことは、子ども自身が自立できるように、親がかかわってやることだと思う。何でも先回りしてやってやるのでは、いつまでたっても自立はできない。何度か失敗しながら、そのなかで子ども自身が気づいてくれた方が奥が深いように思う。

③　現在の関心事と人間関係

趣味といえば、読書と写真。いずれも仕事のことを忘れて、集中できるところがよい。また人付き合いもけっこう好きな方で、いい友だちが何人かいる。職場の友人やお客として知り合い付き合うようになった人もいる。また、酒が好きなため、飲み屋の常連でグループができ、時々集まって飲んだり一緒に遊びに出かけたりもする。老後のことなどそれほど真剣に考えたことはないが、やはり茶のみ友だちというか、気心の知れた仲間が必要だと思う。

④　現在の心境

仕事の面では、いろいろと紆余曲折があったが、今は何とか安定した。できれば今の会社に、定年まで勤め続けたいと思っている。ただ、先のことを考えると、いつまでも働きつづけたいとは思わない。60歳まで働けば、十分ではないか。その後は、どこか田舎に引っ込んで、畑でもいじってのんびりと暮らしたい。もともと農家の出なので、畑作りもある程度はできるはずだ。今の状況では望めないが、子どもにも土になじむ生活をさせられたら、随分プラスではないか。

それ以外で大切なことは、仲間がいることと趣味があること。人間が人生の階段を踏み外しやすいのは、職を変えたり、周りの環境が大きく変わったとき。心の隙ができて、周りのもののいうことに流されやすくなる。そんなとき趣味をもっていたり、何でも話せる仲間がいれば、自分の気持ちを意識的に切り替えられ、自分を立て直すこともできるのではないかと思う。

II・3　考察

ここでは、前節で紹介した8人のサラリーマンＯＢおよび現役のプロフィールをもとに、かれらのライフコースにおけるキャリア特性と生きがいとの関連について考察する。考察に当たっては、(1)職業キャリアの連続・不連続、(2)職業キャリアと家族キャリア、(3)退職前の準備と退職時の心境、(4)現在の関心事と心境、の四つの側面に分けて検討を加えていく。

(1)　職業キャリアの連続・不連続

図表Ⅲ―Ⅱ―1は、調査対象者の職業キャリアにかんするいくつかの特性とキャリア・パターン類型などを一覧したものである。この表をもとにして、かれらの職業キャリアの特性について検討していく。

まず第1にあげられる特徴は、大部分の事例は、必ずしも安定的な職業キャリアを歩んできたとはいえないことである。経験職業数についてみると、もっとも多いものが7種（事例Ｃ）、もっとも少ないものでも2種（事例Ｅ、Ｆ、Ｇ）であり、転職を経験していないものは皆無である。まず、事例Ａ～Ｃの転職回数の多さは、かれらが歩んできたライフコースの時代背景との関連が大きい。いずれも兵役経験があること、そして初職への就職が第2次世界大戦開戦前であることなどにより、かれらの職業キャリアは、その出発点で大きな社会的影響を受けているのである。事例Ｄ、Ｅも兵役経験があるが、それは在学中の学徒動員であり、職業キャリアの出発点は戦後の時代になっている。このうち事例Ｄは、事例Ａ～Ｃなみに転職回数が多いものの、これは戦争の影響というより、戦後の産業構造の転換に負うところが大きい。事例Ｆ以下になると、社会的要因が主原因となった職業キャリアの不連続はみられない。

第2に、とりわけ戦前世代のサラリーマンＯＢにみられる職業キャリアの不連続は、たんに企業間の移動というだけにとどまらず、業種や職種の変化をもともなうものである。このことは、個人の立場からみれば、それだけ大きな職業上の変化として意識され、適応にともなう困難さもより大きかったものと思われる。たとえば事例Ｃについては、石炭関係の国策会社に始まり、続いて満鉄の経理、さらに戦後は、東京裁判の資料整理、ラジオ販売店経理、大蔵省管轄の戦後処理機関、生協専務理事と、最長職に至るまでにさまざまな職業上の変転を経験している。もちろんこれは、本人がみずから望んで選択したわけではなく、また結果的にも必ずしもマイナスの要素だけではないが、適応上の困難は戦後世代に比べてより大きなものであったと思われる。

しかし第3に、このような客観的属性のレベルからみた職業キャリアの不連続は、必ずしもそのまま、自分自身のキャリアにたいする主観的な意味づけの不連続につながるわけではないということもいえる。事例Ａは3回の転職を経験しているものの、その職業キャリアの大半は、学校時代に学んだ電機・機械関係の技術や知識を生かした仕事で占められる。かれがみずからの職業キャリアについて語ったなかで、もっとも大きな比重を占めていたのは、最終職である

図表Ⅲ－Ⅱ－1　職業キャリアとキャリア・パターン

事例	出生年 （年齢）	学歴	兵役経験	初職 （就職年）	最長職	最終職	退職年齢	定年後再就職	現職	職業キャリアパターン （経験職業数）
A	1919(T 8) 7 3歳	（旧）専門学校	1940-42 1945	金属加工業 1935	機械製造業 1950-71	電機製品販売業 （社長） 1971-79	6 0歳	最終職先の顧問 1979-87	無　職	同一職種・転職型 （4）
B	1922(T11) 7 0歳	（旧）実業学校	1943-45	呉服屋（家業） 1938年頃	自衛隊 1954-72	精肉加工業 （秘書室長） 1972-85	5 0歳 6 3歳 6 5歳	国会議員秘書 1985-87	無　職	異職種異業種・転職型 （4）
C	1923(T12) 6 9歳	（旧）実業学校	1943-45	石炭会社 1941	機械メーカー同業者団体 （総務部長） 1956-83	同　左	6 0歳	な　し	無　職	異職種異業種・転職型 （7）
D	1924(T13) 6 8歳	（旧）師範学校	? - 1945	教員 1946	製パン会社 （管理職） 1964-86	製粉会社 （総務部長） 1986-1991	6 0歳 6 5歳	食品会社・顧問 1991-	同　左	異職種異業種・転職型 （5）
E	1929(S 4) 6 3歳	大　学	1943-45	製糸会社 1958	合板会社 （総務部長） 1964-1989	同　左	6 0歳	アルバイト的な仕事をいくつか	無　職	継続型 （2）
F	1932(S 7) 6 0歳	大　学	な　し	銀行 1956	銀行（管理職） 1956-90	同　左 （ただし出向）	5 8歳 6 0歳	ニット製品製造業（総務部長） 1986-	同　左 （役員候補）	継続型 （2）
G	1943(S18) 4 9歳	大　学	な　し	商社 1965	電機電子部品製造業（取締役） 1972-	――	――	――	同　左	継続型 （2）
H	1955(S30) 3 7歳	専門学校	な　し	自動車整備会社 1972年頃	自動車販売会社 1984-	――	――	――	同　左	異職種異業種・転職型 （6）

注1）職業キャリアパターンの分類は、相対的な評価に基づく。
注2）ごく短期間のアルバイト的な仕事や、家業の手伝いなどは、経験職業数にカウントしていない。

電機製品販売会社時代のことである。時間的には8年ほどの期間に過ぎないが、社長というポストに迎えられ、小さいながらも一国一城の主になったことで、それまでに培ってきたキャリアをフルに生かすことができたと感じているようだ。そうした意味で、この時代は、かれの職業キャリアのハイライトとして位置づけられている。事例Cは、さきにも触れたように、もっとも変転の多い職業キャリアを歩んできた。しかし、かれの言葉の端々からうかがえるのは、いずれの職業についていたときも、仕事を通して時代や社会にたいする関心を温め続け、そのことに仕事の意味を見いだしてきたということである。さらに現役者の事例Hは、初職の自動車整備工から現職である自動車販売会社の営業の仕事につくまでのあいだ、さまざまな職種や業種の仕事を経験してきた。しかし、かれにとって現在は、まさに「古巣に戻ってきた」ということであり、むしろ初職からの連続性の方がより強く意識されている。このように、客観的にみた職業キャリアの不連続は、本人の意識にそのまま反映されているわけではなく、少なくとも意味づけのレベルにおいては、意識的に連続性を保とうとする姿勢がうかがえる。

(2) 職業キャリアと家族キャリア

図表Ⅲ—Ⅱ—2は、家族キャリア、とくに夫婦関係についてその質的変化に注目して、これを前項でみた職業キャリアの変化と関連づけながら考察するために作成したものである。

まず第1に注目されるのは、OBのすべてが、現役時代の生活は「仕事中心」であり、みずからを「仕事人間」であったと評価していることである。今回のOB調査対象者は、出生年が1919年から1932年までのものであり、終戦を迎えたときの年齢は13歳から26歳までの世代である。したがってかれらは、戦後の高度経済成長期の中心的な立て役者であったといえる。「早朝に出かけ、夜子どもたちが寝静まってから帰宅するのが当たり前」（事例B）の毎日であり、生活の8、9割が仕事によって占められる（事例D、F）。それは、今振り返れば、「カバンをもって斜めに駆け抜けるような人生」（事例D）であったと客観視することもできる。しかし当時は、時代や社会から当然のこととしてそのような働き方を求められ、さらにそれなくしては企業のなかで生き残っていくことはできなかった。このため、「仕事人間」であることは本人にとって選択の余地のないものとして受けとめられており、少なくとも当時は、そうした生活に対する疑問や罪悪感を感じることもなかったのである。

このことから、第2にいえることは、現役時代のかれらの家庭人としての部分が、それだけ不十分になりがちであったということである。そうした不足を補い、陰で支えていたのはかれらの妻たちである。OBのほぼ全員が、表現の違いこそあれ、家庭のことは「妻に任せきり」で、「内助の功」を求める「亭主関白」だったと述懐している。そのようななかでも、妻にたいする思いやりを忘れなかったと述べたものもいるが、家庭にコミットする時間が絶対的に少ないなかでは、おのずと限界があっただろう。ただし、このような現役時代に、とくに夫婦関係の危機が訪れたという話題もまったく出なかった。おそらく、「男は仕事、女は家庭」の性別役割分業規範が強い影響力をもち、また、男たちが家庭を顧みる暇もないくらい職業に献身

図表Ⅲ－Ⅱ－2　家族キャリアにおける夫婦関係の変化

事例 年齢	世帯構成 他出子	現役時代の家庭と職業との位置づけ	現役時代の夫婦関係	現在の夫婦関係	夫婦関係の「変化」についての認識
A ７３歳	夫婦世帯 子どもなし	家庭人としての要素は、ほとんどなし 仕事に追われる生活	亭主関白／妻の行動の自由も認める／つかず離れず／思いやり／共通の話題乏しい	亭主関白／お互いの要求を尊重する／つかず離れず／思いやり／妻の話題に若干はついていける／基本的な関心は違う	基本的には変わらないが、ある程度妻の話に合わせられるようになる／「粗大ごみ」にならないように個室の確保
B ７０歳	本人夫婦＋次男夫婦＋孫 他出子：長男（家族）	仕事一点張りの生活 在宅時間の少なさ	亭主関白／内助の功／妻の行動の自由は認める	亭主関白／生活面で妻に依存／家事はやらず／感謝の気持ち／相手の立場に立って考える	基本的には変わらず／「濡れ落葉」にならないよう、それぞれの世界を尊重／共に楽しむ時間も必要と思うようになった
C ６９歳	夫婦世帯 他出子：一男三女	仕事中心 在宅時間の少なさ	妻の家庭を支える負担の重さ	それぞれの関心・信条の違い／つかず離れず／妻の行動を理解しかねる部分も／しかし干渉せず／夫婦はもともと別々の存在	大きな変化はなし／子どもが自立して以降は関心の違いが明確に
D ６８歳	夫婦世帯 他出子：一男二女	仕事が忙しく、家庭人としての立場は考慮できず	亭主関白／ずっと共働きできた／夫婦とも家庭に十分コミットできず／家事をやることが苦痛	基本的には亭主関白／家事に手を出すことが多くなる／同じ趣味を持つことには積極的になれない／それぞれの趣味や関心の尊重／互いの距離が開かぬよう努力	妻の退職・本人の退職により、少しずつ変化／「家庭の不要物」にならないよう努力している／「夫婦関係のルネサンス」が必要／夫婦関係の重要性を認識
E ６３歳	夫婦＋妻の父親 子どもなし	１年の３分の２は出張で妻に任せきり	それぞれの世界を持つ／干渉しない／ほどほどの関係／ずっと共働きできた	それぞれの世界をもつ／互いに干渉しない／ほどほどの関係／妻が現役のため、本人が家事の中心的な担い手	基本的には変わらず／家事役割を多く引き受けるようになった／家事をすることは当たり前という感覚
F ６０歳	夫婦＋社会人の未婚子２人	８・９割は職業人 在宅時間の少なさ	亭主関白／家計は当てがい扶持／夫の意見に妻の反論はない	関係の逆転／妻の意見が通ることも／最後に頼れるのは夫婦しかないという認識／共通の趣味を意識的につくりだすよう努力／しかし同じ趣味をもつことは難しい	亭主関白からスタートしたが、気がついてみたら関係が逆転／妻を大切にしなければという意識が強くなり、努力もするようになった
G ４９歳	夫婦＋小学生の子２人	子ども出生以前、大半は職業人の部分が占めた。出生以降は大幅に縮小。	家庭は大切だと思うが、子どもが小さいので、夫婦関係より親としての立場を重視／子育てのために妻に仕事を辞めさせた／子どもの教育方針でしばしば妻と意見の対立／「親」としても「夫」としても５０点ぐらい		
H ３７歳	夫婦＋小中学生の子３人	仕事優先	夫婦関係はあまりよくない／話をすると相手のいやな面が出てくるので、あまり話さない／お互いそれぞれ好きなようにやる／お互い期待しあわない／「夫」としては５０点以下／ずっと共働き		

しなければ家庭生活そのものも成り立って行かなかった時代のなかで、妻も夫が「仕事人間」であることを当然のことと受けとめていたものと思われる。事例Ｂは、かれの息子たちの家庭生活や職業生活をみていると、まず物質的な豊かさが基礎にあり、それが家庭生活に関心を向ける精神的余裕を生み出していると指摘している。現役者の場合、事例Ｇについては、やはり現在が「仕事中心」の生活であると感じてはいるものの、子どもが生まれたことをきっかけにして、かつて生活の大半を占めていた職業人としての要素を大幅に縮小したと述べている。しかしなお、かれの生活が「仕事中心」であることには変わりなく、そのことに対する罪悪感から、父として夫としての自分を「50点ぐらい」であると厳しく評価している。また同じく現役者の事例Ｈは、妻にたいし「子どもの食事をきちんと準備する」こと以外の面では干渉せず、互いに「好きなようにやる」「期待しない」といっており、個別的な家庭事情も関係しているものの、やはりＯＢグループとの世代差、時代差を感じさせる。

第３に、そのようなＯＢたちも、今日では、現役時代のままの夫婦関係を続けているわけではない。夫婦関係に大きな質的変化をもたらす契機になったのは、やはり何といっても「定年退職」である。一般論として語られたにせよ、定年後の男は「家庭の不要物」（事例Ｄ）、「濡れ落ち葉」（事例Ｂ）、「粗大ゴミ」（事例Ａ）であると自嘲的に表現するものも少なくない。そのような表現の背後には、夫と妻との力関係の変化にかんする自覚がある。みずからもそのようなレッテルを貼られないための対処法として、さまざまな指摘がなされていた。たとえば、「個室をもってずっと一緒にいなくていいようにする」（事例Ａ）というように、相互に距離をおくことに重きをおくものから、「夫婦で共通する趣味を意識的にもつよう心がけている」（事例Ｆ）というものまで、対応の仕方も多様である。全般的には、「妻の世界を尊重する」（事例Ｂ）、「夫婦は別々の存在」（事例Ｃ）、お互いに「自主性を尊重する」（事例Ｄ）といった表現で、一定の距離をおいたほどほどの関係をよしとする傾向が目立っている。現役時代の夫婦関係は、性別役割分業を基礎におく、いわゆる夫唱婦随・一心同体的なタイプが多かったが、今日では夫と妻は別個の存在であり、対等の立場だとする意識が強まっている。事例Ｄは、こうした変化をより強く自覚しており、現役時代から退職後への関係変化を「夫婦関係のルネサンス」と表現している。ただし、こうした関係の「変化」や「再調整」は、当然のことながら、それ以前の夫婦関係の歴史のうえに成り立つものである。現役時代に、たとえ実質的には家庭にコミットメントが十分にできなくとも、「思いやり」（事例Ａ）や「感謝の気持ち」（事例Ｂ）をもち続け、その結果として培われてきた夫婦の絆が基礎になければ、適切な「変化」を望むことができなかったものと思われる。

(3) 退職前の準備と退職時の心境

退職前の準備について、対象者たちの指摘したことがらには、比較的共通する特徴がみられた。具体的な準備項目については、大きくはハード面（経済、住宅、健康等）とソフト面（心構え、趣味、人間関係等）に分けられる。以下では、このハード、ソフト両面それぞれについ

て検討したうえで、退職前後に心理的状況についても考察する。

第1に、このハード面については、程度の差はあれ、現役者も含めて全員が重要であると強調している。ただし、実際の準備ということになると、現役者はまだ具体的にその準備に着手できる状況にはないという。かれらは、子どもを育て上げることに当面の目標をおいており、みずからの老後について考える余裕までないのが実情である。ＯＢについては、実際におこなった準備として、「経済面の備え」が共通にあげられた。「住宅」については、ＯＢの全員が現役時代からすでに一戸建ての持家を確保していたことから、一、二のものにより、一般論としてその重要性が語られたに過ぎない。ただし、事例ＣとＤにおいては、たんにマイホームを確保するという以上の意味を「住宅」に求めており、「老後を過ごすにふさわしい家」をもつことを、退職後の一つの生活目標として位置づけている。事例Ｃは「自然環境が良く山を臨める家」を、事例Ｄは「豊かな自然」に恵まれた「海や山を臨める家」を終の住処として求め、いずれも現役時代から土地を購入して準備を始めていた。事例Ｄについては、現在もまだ「会社顧問」のポストにあるため、とりあえず別荘として使っているが、完全に仕事から引退したらそちらに居を移したいという。現役者の事例Ｈは、定年後の夢として、「田舎に引っ込んで土に親しむ生活」をしたいと語った。都市部に住むサラリーマン・シニアの場合、現役時代から終生住めるマイホームを確保して、退職後も環境面の連続性を保ちたいという意向をもつものと、まったく異なる環境のなかで老後を過ごしたいという意向をもつものとに、二分されるようである。

第2に、ソフト面については、退職を迎える以前から、退職後についての「心構え」や「自覚」をもつことが重要であるという認識をもって、実際にも「心の準備」をしたという答がＯＢに共通するものであった。ここでいう「心の準備」とは、肩書きを失い「ただの人」（事例Ｂ）になることを受け入れる、あるいは「いつまでも過去に執着しない」（同）といった表現に代表される、生活上の変化にたいする心理的な構えである。しかしかれらは、定年後に実際に生じる変化に適応するためには、「心の準備」だけでは不十分であることも自覚している。精神面以上にかれらが重要であると考えていたのは、「人間関係」と「打ち込める趣味」であった。このような認識は、現役者にも共通している。このうち「人間関係」については、「夫婦」が重要とするもの（事例Ｄ、Ｆ）と、「友人・仲間」が重要とするもの（事例Ａ、Ｃ、Ｈ）がいる。ただしこれは、必ずしも二者択一のものではなく、あくまでも相対的な評価の違いに過ぎないと思われる。もう一つの重要なソフト面の要素である「趣味」については、ＯＢの全員にその重要性が認識されていたものの、とくに「定年後生活への準備」という長期的展望をもって趣味に取り組むまでにはいたらなかったというものも少なくない。

第3に、実際に仕事から引退した後の心境については、たとえ「心構え」やある程度の具体的な準備があったとしても、それほどスムースに新しい生活に入っていけたわけではなく、多くのものは「手持ちぶさたの感」（事例Ａ）や「精神的落ち込み」（事例Ｂ）を味わっている。事例Ａは、定年後も同一企業に勤め続けたとはいえ、仕事の内容はまったく変わってしまった

こと、さらに健康を害したことにより、「命を縮めてまで働き続けたくない」と思い、任意退職をした。したがって仕事そのものに未練があったわけではなく、またこの時退職したことそれ自体に後悔の念を抱いているわけではない。また事例Ｂは、最終的には「定年」のない職場にいたものの、かねてより自分自身で「65歳でやめる」というラインを引いていた。そしてその後に備えて、人間関係の幅を広げたり、趣味を増やしたりして、かなり周到な準備もおこなってきた。にもかかわらず、両事例とも、無聊感や落ち込みの気分を味わっている。このことは、定年後に備えての準備は重要であるものの、必ずしもそれによって完璧な老年期への移行が達成されるとは限らないことを物語っている。そのようななかで、比較的スムースにこの移行を達成したのは、事例ＣとＤである。事例Ｄは、２度の定年退職を経験して、２年前より最終職先の顧問の立場にある。したがってかれの場合、「定年後」への段階的移行が可能であったことが、適応を促す一つの要因であったと考えられる。今一つは、現役時代を「１周目の人生」、定年後を「２周目の人生」と明確に割り切って、積極的な姿勢で「２周目」に取り組もうという姿勢がみられることである。ただし、このような事例はむしろ例外的であろう。より多数派は、現役時代にその生活の８、９割を占めていた「職業」がなくなったことにより、何ほどかの落ち込みの気分を味わっているものと思われる。

(4) 現在の関心事と心境

このような複雑な感情の動きやさまざまな試行錯誤の段階を経て、今日のかれらのＯＢ生活がある。おそらく「生きがい」という基本的テーマに直接つながるであろう、かれらの現在の心境と関心事について検討してみる。

第１にあげられるのは、調査対象者となったＯＢの大半は、何らかの「打ち込めるもの」をもっているということである。それは、陶芸や囲碁、社会教育のボランティアや自分史、郷土史への関心まで、幅広く、多彩である。なかには何十年とコツコツとキャリアを積み上げ、「趣味」という域をすでに超えて「ライフワーク」といえるほどの打ち込める対象をもっているものもいる。たとえば、工芸作品の製作（事例Ｂ）、歴史研究（事例Ｃ、Ｅ）などがあげられる。またもう一方で、事例Ａのように、現役時代にもっていた趣味は、定年後には不向きだと気づき、新たな趣味に取り組むものもいる。いずれにしても、退職直後に味わった無聊感のうちにとどまっているものは皆無である。かれらが「趣味」に与える意味づけは、必ずしも一様ではない。「仕事に代わる生活の核」（事例Ａ）というものから、趣味に打ち込める今こそが「私自身の時代」（事例Ｃ）であるというものまでいる。いずれにしても、現役時代に漠然と認識していた「趣味」の重要性を、実感をもって感じたというのが、ＯＢに共通する感想のようだ。ただしここで留意しなければいけないのは、この種の調査に応じてくれるのは、概して、現在の生活に意味を見いだし、おそらく語るべき「何か」をもっている人びとに偏りがちだということである。したがって、すべてのサラリーマンＯＢが、本人にとって「意味ある」といえる生活を送っているわけではないということも再確認する必要がある。

第2に、現役時代から、定年後には重要であると認識されていたもう一つのソフト要因である「人間関係」のうち、まず友人関係について検討する。ＯＢたちにほぼ共通する見解は、仕事を通して「友人」になったものとの絆は、退職後、時間がたつにつれてしだいに弱まっていくということである。しかし反面、そのような友人のすべてではないにせよ、ごく一部のものとはいい関係を保ちつづけているものもいる（事例Ｃ、Ｄ、Ｆ）。おそらく、退職後もなお関係を維持できる仕事関係の友人とは、現役時代にもたんに職務上の関係にとどまらず、「もっとも深い人間的な部分で触れあうもの」（事例Ｄ）があった人々であると思われる。またそれは、かつて本人の生活のもっとも大きな部分を占めていた仕事にかんする思い出を共有する人々であり、さらに人生の「一つの時代を共有した」（事例Ｃ）かけがえのない仲間である。この点は、戦友や、学校時代の同窓生にも相通じる面があるといえる。これにたいして、退職後新たにできた友人については、「趣味を共有できる」（事例Ａ、Ｄ、Ｅ）ということが、関係形成の必須条件であると指摘された。これは、職場の同僚や同窓生のように共有体験をもたないために、「趣味」という共通の関心事を通して新たに共有体験を作り出していく必要があることを物語っている。このため、とりわけ退職後においては、「趣味」と「友人関係」とがきわめて密接な関係にあるといえる。ただし、今回の調査対象者については、「趣味」に比べて「友人関係」の強調の程度はそれほど強いものではなかった。友人については、「趣味」や「打ち込めるもの」について言及されるなかで、活動そのものが楽しめると同時に、同じ趣味をもつ仲間ができるという効用にも触れられるといった傾向にあり（事例Ａ、Ｄ）、どちらかというと、友人関係は趣味活動に付随するもの、もしくはそれをより楽しくするものというとらえ方である。しかし、一般的な傾向としては、「人間関係」により重きをおき、これを充実させたいがために趣味活動を始めるものも少なくないであろう。おそらく、友人関係と趣味とは、互いに「目的」にも「手段」にもなりうるのではないかと思われる。

第3に、同じく「人間関係」といっても、夫婦関係の場合は、友人関係に比べれば、もう少し切実なものがある。何十年と辛苦を分けあった仲であれば、それは「人間関係の基本」（事例Ｄ）であり、これから先も「長所も欠点もコミでつきあっていくしかない」（同）。さらに夫婦は、いつまでも「永遠の恋人、永遠の友人」でありたいというものもいる（事例Ａ）。退職後に家庭生活の比重がおのずと高まり、また夫婦家族制の規範が浸透し、「最後に残るのは夫婦」（事例Ｆ）という意識が強まっている。ただし、第1に指摘した「打ち込めるもの」あるいは「生きがい」という言葉で「夫婦関係」が語られることがなかったのは、「友人関係」の場合と同様である。ここでも、人間関係それ自体を「生きる目的」としては位置づけにくいことが再確認される。さらに、「打ち込めるもの」や「趣味」を夫婦で共有しているものもほとんどいない。「友人関係」は「趣味」を共有することが必須条件として語られる傾向があったのにたいして、「夫婦関係」の場合は対照的な傾向にある。唯一事例Ｄによって、同じ宗教団体に入会したことで、夫婦の絆が深まったと述べられているのみである。しかしかれも、この宗教の助けを得ながら追求している「悟りの境地」への到達については、あくまでも個人の

問題であるとする。その他の事例では、さきにも述べたように、むしろ「つかず離れずの関係」であることが、「趣味」や「打ち込めるもの」については大切だとする意識が強い。世代がやや若い、事例Ｆでは、夫婦で共通する趣味をもつことが重要であるという認識はあるものの、現実にはなかなか難しいという。夫婦のあいだで、共通する趣味をもったり関心を同じくすることにより培われるコンパニオンシップの規範は、現代のサラリーマン・シニアには、いまだ定着しにくいようである。

Ⅱ・4　総括

最後に、今回の事例研究の主な知見を列挙して、シニア期の生きがいのあり方と関連づけるための基礎的考察をおこなう。

①現代のサラリーマン・シニアは、かれらのライフコースの背景をなした社会的条件の影響もあり、必ずしも安定的な職業キャリアを歩んできたとはいえない。しかし、ＯＢとなった現在、過去を振り返ってみずからの職業キャリアを意味づけるとき、むしろ連続性の方がより強く意識されている。

②現役時代の職業人としての比重の大きさゆえに、当時のかれらの家庭人としての要素は乏しかったといえる。しかし、職業人として企業に献身することこそが、家庭人としての役割を果たすことであると認識されていた面もある。

③このため、現役時代の夫婦関係は、おのずと性別役割分業を基礎におく夫唱婦随、一心同体的な性格が強かった。

④しかし退職を契機として、夫と妻とが別個の存在であるという認識が生まれ、相互の立場も対等に近づいている。ただし、互いに別個の存在であるという認識に立ったうえで、趣味などを通して共有体験を創り出そうという努力は十分なものとはいえない。

⑤退職前の準備としては、ハード面では「経済」「住宅」「健康」が、ソフト面では「趣味」「人間関係」そして「心の準備」が重要であるという認識が共通にみられた。しかし実際の準備という点においては、ハード面に比べてソフト面の方が困難であるようだ。

⑥退職前に、ハード・ソフト両面にわたって周到な準備をしていても、退職直後の精神的落ち込みは、多くのものにとって避けがたい。したがって、「定年退職」という出来事は、少なくともその時点においては、ライフコースの転機として、不連続性の方がより強く意識されている。

⑦しかしＯＢ生活の時間の経過のなかで、それぞれに「打ち込めるもの」や「趣味」を見つけだし、それにより現在の生活を充実したものと感じているものが多い。

⑧現在の「人間関係」のうち、友人については、仕事関係の友人の減少や絆の弱まりなど、ほぼ全員が現役時代のままではないと感じている。しかし退職後、新たに友人関係を創り出し

ているものも多く、その際、「趣味」を共有できることが友人になるための必須条件であると共通に認識されている。

⑨夫婦関係については、大部分のものがかつてに比べてその重要性を強く意識している。ただし、友人とは異なり、現在本人が打ち込んでいる「趣味」を妻と共有しているものはほとんどおらず、そのことが夫婦関係にとって重要だという認識も概して弱い。

⑩「趣味」については「生きがい」という言葉で語られることはあっても、「人間関係」についてはそのような意味づけを与えているものはみられなかった。

以上の要約を通してもっとも印象深いのは、シニア期の生活において、「趣味」と「人間関係」が重要であるという認識を多くのものがもっているということである。この知見と本研究全体の基本的関心事である「生きがい」との関連について、若干の考察をして、本稿のまとめとする。

サラリーマン・シニアは、現役時代の生活の核であった「仕事」から解放されることにより、肩書きをもたないひとりの個人としての自分に対峙し、みずからの生の意味を問い直すという課題に直面する。それは、多くのものにとり、辛い作業である。そのようなとき、安定した「人間関係」のなかに組み込まれているという実感はその辛さを癒し、「趣味」は日々の生活に具体的な目標を与えてくれる。

しかし、今回の事例・スタディを通して、かれらの生の意味の問い直しの作業は、おそらくこの二つの条件だけでは完結しないのではないかという印象を強くもった。「趣味」や「ライフワーク」は、まず何よりも当面なすべき具体的な「活動」として意識されるが、かれらの求めているものは、「活動」それ自体ではなく、そのような「活動」を通してみずからの生の意味を確認することではないか。また「人間関係」は、共属感情や有用感を通して生の意味を確信させる要件ではあるが、たとえどのように強固な人間関係の網の目に組み込まれていても、「死の受容」という課題の前では無力である。60歳前後というライフコースの段階は、そろそろ人生のゴールも視野のうちに入ってくる。前をみれば「限られた時間」が意識され、後ろをみれば修正のきかない「過去の生きざま」がある。そのはざまに位置する現在という時間のなかで、「生きる意味」と「死の受容」とを統合しながら、現在の生の意味を再定義しなければならない。それはまた、みずからのライフコース全体を通じて、一貫した意味をもつ何かがあったと確認する作業でもある。調査対象者の何人かが「生きがい」として言及した、自分史、ルーツ探し、歴史研究などの「趣味」は、そうした「生きる意味」の問い直しの作業の一環として、とらえることもできると思われる。

第Ⅳ部　調査結果のまとめ

第Ⅱ部、第Ⅲ部では、グループインタビュー調査・個人面接調査（第Ⅱ部）、デプスインタビュー調査（第Ⅲ部）のそれぞれの調査研究グループごとに、その調査結果をみてきた。ここでは、最後にそれらの結果を全体としてまとめ、仮説の検証を中心として総括する。

結果をまとめるにあたり、まず生きがい論の動向と、各調査研究グループの研究の枠組みについてふれておく。

1. 生きがい論の動向

これまでの「生きがい研究会」による研究（東　清和，1992，「生きがい」研究の展望）から生きがい論の動向をみると、生きがいに関する研究はそのアプローチが非常に多彩であるという現状が指摘されている。学術的、科学的アプローチをしている場合でも、主として自然科学的アプローチ、社会科学的アプローチ、人文科学的アプローチ、そして最近提唱されはじめた人間学的アプローチに分けることができる。また、自然科学的アプローチでは、精神医学的な立場で、生きがい喪失者が生きがいのある状態に復帰する過程に焦点をあてた研究が多く、その資料は何らかの精神疾患を患っている人から収集されるのが一般的となっている。いわば困難な状態から健常な状態への過程の研究が多く、広く一般的なサンプルの生きがいを対象とした、健常な状態をより高めていく過程についての学術的、科学的研究は、その蓄積が少ない状況であるとされている。

2. 各研究における研究枠組みと生きがいの定義

本調査報告は、一般のサラリーマンの生きがいについての３つの研究者グループによる調査研究結果をまとめたものである。前節でふれたように、広く一般的なサンプルを対象とした生きがい研究は、その研究蓄積が浅く、研究や理論の枠組み、それぞれの研究における「生きがい」ということばの定義などが、一般化されていないのが現状である。こうした現状をふまえ、本調査でも、３つの調査研究グループにおける研究枠組みや「生きがい」の定義等はそれぞれの立場に委ねており、あえて統一していない。研究の視点も各研究者の関心に沿ったものとなっているため、必ずしもそれぞれの研究において、本調査で設定した全ての仮説に関する結果が導かれているとはいえない。本調査報告は、生きがい研究に関して様々な視点を提供するものである。

また、３つの研究者グループの調査対象者は、共通に前回調査の回答者の中から選出しており、属性的な傾向として比較的年収が高く、健康上の問題が少ないという、特徴を持つ。健康や経済については生きがいの前提であるとも言われ、生きがいを論じる上で無視できない問題であるが、今回の３つの調査研究ではこれらが比較的満たされた対象者が多かったこともあり、一様にその重要性が指摘されるにとどまっている。本調査報告の３研究においては、生きがいに関与する問題として、健康、経済よりもむしろ、人間関係や役割の変化といった点を重点的にとりあげている。

以下に、それぞれの調査研究グループにおける研究の視点や枠組み、「生きがい」の定義などを簡単に紹介する。

〔グループインタビュー調査・個人面接調査／佐藤グループ〕（第Ⅱ部）

○「生きがい」について特に研究者側からの定義は与えず、対象者が主観的に「生きがい」と考えるものをその人の「生きがい」としてとらえた。対象者の生きがいの対象、生きがい感、生きがいの内容に関する情報を収集することにより、何を生きがいと考えているのか、という各対象者の生きがいの定義についても問題にした。

〔デプスインタビュー調査／西村グループ〕（第Ⅲ部第Ⅰ章）

○生きがいの概念が確立していないという現状をふまえ、研究者の持つ生きがいのとらえ方をあてはめるのではなく、できるだけ個々人の実際に感じている生きがいにアプローチするべきと考える。

○「生きがい」とは生きる原動力となる心的エネルギーを高めるものである。そのような心的エネルギーのみなぎりを感じている状態を「生きがい感」、生きがいを見いだす対象ないしは源泉を「生きがい対象」とする。また、個々の「生きがい対象」から得られるそれぞれの「生きがい」の総和としての「生きがいレベル」という概念を考える。「生きがいレベル」が十分に大きいときに「生きがい感」が感じられる。

○人生の大まかな浮き沈みをライフカーブとして対象者に記述させている。このライフカーブの高さは心的エネルギーレベルを反映しており、これは「生きがい」その他のプラス要因と「苦痛、苦渋」などのマイナス要因の総和として決定されるとしている。これらのライフカーブの変化の要因から「生きがい」についての要因を取り出すことにより、対象者の「生きがい」の喪失・創造の過程をとらえようとしている。

〔デプスインタビュー調査／西グループ〕（第Ⅲ部第Ⅱ章）

○シニア期の生きがいの問題は、平均寿命の伸びにより、職業や家族役割を全うした以降の期間を積極的に生きたいとする個人的レベルの問題と、超高齢化社会に向け、社会活力の維持・発展のために個人の生きがいを求める活動をいかに「社会貢献」の方向に関連づけることができるかといった社会的レベルの問題とがあると考える。このうち、前者の個人的立場に立って「生きがい」を問題にする。

○個人的立場から生きがいを問題とするため、画一的な客観的指標による分析は困難であると考える。そこでもっとも抽象度の高い定義として、「生きがい」は個々人にとっての生きる意味であるとする。

○「対自的側面」と「対他的側面」、「変化」と「連続性」という２種の対照的な特質の組み合わせとして、各個人の生きがいの概念にアプローチする。

○研究における基本的関心は2点あり、1つは、生きがいに関して上記の「対自的側面」と「対他的側面」、「変化」と「連続性」という、相互に矛盾するようにみえる対照的な特質が、排他的な関係ではなく一方が他方の特質を成り立たせるために不可欠な用件であるという生きがいのパラドックスの解明である。もう1点は、社会的ネットワークのあり方、その中でも夫婦関係の在り方が個々人の生きがいに及ぼす影響についてである。

3. 生きがい喪失のプロセス

まず最初に、第一の仮説として設定された以下の仮説についての結果をみてみよう。

仮説1. 職業を全く失うことや職業上の地位の低下は、生きがい喪失の要因となりうるか。その場合、それに関与する要因は何か。

(1)定年退職と生きがい喪失との関係

まず、「職業を全く失うことや、職業上の地位の低下は生きがい喪失の要因となりうるか。」という点については、全ての調査報告で、これを肯定する方向の結果が得られているといえよう。

グループインタビュー調査・個人面接調査（以下「グループインタビュー調査」とする。）結果では、対象者のほとんどが定年後の生活の変化について大なり小なり否定的な自己評価を持っており、これが直接的に生きがい喪失に結びつくものではないが、生きがい喪失の契機にはなりえるとしている。定年後、無職になることにより生きがいを喪失した事例がいくつかみられた。この中には、その後生きがいの再創造に成功しているとみられる事例も含まれ、これらの事例では定年直後の生きがい喪失状態がはっきりと自覚されている。

デプスインタビュー調査（西村グループ）では、対象者に人生の浮き沈みを図示させたライフカーブの結果をもとに、定年移行時に職業を失うことや職業上の地位を失うことが生きがい喪失をもたらし、ライフカーブが低下している事例があることを指摘している。

また、デプスインタビュー調査（西グループ）でも、ＯＢの多くの事例では仕事からの引退後、「手持ちぶさたの感」や「精神的落ち込み」を味わっており、スムースに新しい生活に入っている事例は少ないとの結果が示されている。

(2)生きがい喪失の要因

職業を失うことや、職業上の地位の低下が生きがい喪失をもたらす際の要因としては、各調査研究グループで様々な指摘がなされている。

まずグループインタビュー調査結果では、定年退職時に、家族とのつながり、地域とのつながりが少ない、趣味が少ないといった問題があることや、緊張感がなくなるといった定年の否定的側面は、ほとんどの事例で認識されており、これが直接生きがい喪失に結びつくものでは

ないと指摘している。むしろこうした否定的な側面を客観的に認識して具体的に対処しようとするか否かが問題であり、これに影響する要因として、以下のような仕事についての意識の持ち方をあげている。現役時代の仕事に対する不満や未練が達成感や充実感を上回っていること、会社に捨てられたというような否定的な定年イメージを持つことが定年後生きがい喪失の要因となりえる。また、現役時代に組織の中で自己拡大感を抱いている場合には、その職を失った時に喪失状態に陥りやすいことを指摘している。さらに、定年後に再就職を希望する場合、仕事に対してあくまでも現役時代と同じレベルの内容の職業を求めるなど、仕事に対する意識の転換がなされない場合に、生きがい喪失に陥る事例が多いとの結果がみられる。

また、後にもふれるが、グループインタビュー調査では、生きがい喪失をもたらす要因として、性格特性についても指摘している。

デプスインタビュー調査（西村グループ）結果では、定年期にライフカーブが下降していない事例は、その要因により以下の２つに大別できるとしている。１つは現役時代から仕事そのものに「生きがい」を見いだしていなかったというもの、もう１つは現役時代から真剣勝負的に打ち込める趣味を持つ、定年後の準備をすることにより、定年後に仕事以外のものから生きがいを得ているものである。これらの事例から、定年期の生きがい喪失を防ぐ上での示唆が得られる。

デプスインタビュー調査（西グループ）でも、生きがい喪失に陥ることなく、比較的スムースに定年後の生活に移行している事例が２事例報告されている。このうち１事例は定年後の変化が段階的であったこと、１事例は定年後を「２周目の人生」と明確に割り切って積極的に取り組む姿勢がみられることを要因としてあげている。

4. 生きがいのとらえ方

(1) 生きがいのとらえ方の変容

生きがいのとらえ方について、以下の仮説を設定した。グループインタビュー調査、デプスインタビュー調査（西村グループ）において、この仮説を肯定する方向の結果がみられる。

仮説2.　定年退職後、生きがいのとらえ方は変容する。

グループインタビュー調査において、生きがい対象についてのＯＢの意見は次の２つに分かれた。仕事に代わり得る生きがい対象はないとする意見と、仕事は生きがいを与えてくれるものではあるが、定年後は仕事以外のものにも目を向け、それが生きがいとなっているとする意見である。現役時代は対象者のほとんどが仕事に生きがいを感じていることから考えると、後者の仕事以外に生きがいを感じているとする者は、生きがいのとらえ方を変容させているといえよう。また前者の、仕事を唯一の生きがい対象と考えている事例では、現役時代の職場の人間関係の維持や資格取得による再就職の成功などの特殊な事例を除いて、生きがい喪失の状態

にあることが多かった。定年後の生きがいのとらえ方の変容は、生きがいの維持や創造につながることが示唆されよう。

デプスインタビュー調査（西村グループ）においては、個人をとりまく人間関係を定年前と定年後のそれぞれについて図示させたコンボイ調査で、定年前後に人間関係の構造が変動する結果が示されている。いくつかの事例で、定年に伴って仕事に関わる人間関係が個人により近い所から次第に遠のいていく様子がみられ、これはその人にとっての会社や仕事の意味あい自体が変容せざるをえなくなることであるとしている。また、定年後に重視される傾向のあるネットワークとして、夫婦関係、兄弟、地域などが示唆されている。

(2) 生きがい感

前回調査において、生きがいの構成要素のうち、『自己実現・達成感』、『有用感・評価感』は仕事からしか得られえない面があるとの結果がみられ、これらが本当に仕事からしか得られないのか、それともサラリーマンの生活が狭いためにそうなっているのかは検討すべき課題であるとの指摘がなされていた。

今回のグループインタビュー調査でも、特に男性のグループにおいて、生きがいに達成感や有用感を求める発言が多く、またそれらが仕事からしか得られないとする者も多かった。しかし、仕事以外に生きがいを見いだそうとする者の中からは、趣味において上の級に挑戦する、大会等に参加することなどで達成感、評価感を得ようとする傾向もみられた。また、社会的な有用感を得られるものとして、ボランティア活動への期待が非常に強く、地域社会で何かの役に立ちたいとの発言も目立った。このように、仕事以外の場で達成感、有用感といった生きがい構成要素を取得する可能性についての示唆がいくつか得られており、そのための場や機会の整備は望まれるところであろう。ただし実態としては、定年後、趣味や地域活動、ボランティア活動などの場で有用感、貢献感を得ているとみられる事例がさほど多くないことは事実である。定年後の新しい生活の場で生きがいを得ている事例には、柔軟性、楽観性を持ち、趣味や人間関係を楽しむことを生きがいとしているものも多く、生きがいを有用感や貢献感といった要素以外に求める姿勢の重要性も示唆されている。

5. 生きがいを得る場の変容

生きがいを得る『場』に関して、次の仮説が設定された。この仮説に関しては、いずれの調査研究グループでも、これを肯定する方向の結果が示されている。

仮説3. 定年退職後、生きがいを得る『場』は変容する。

グループインタビュー調査によると、対象者のほとんどは現役時代に仕事を生きがいとしてとらえており、仕事・会社が生きがい獲得の主たる「場」となっている。定年後、職業から引

退した場合には、生きる「場」そのものが変容し、仕事・会社という「場」がなくなるのであるから、生きがいを得る「場」は変容せざるを得ない。従って、この生きがいの「場」の転換に成功することが、定年後の生きがい創造の大きな要因となると指摘している。喪失経験グループでは、生きがいの「場」の転換がスムースにいっておらず、新たな生活の「場」が生きがいの「場」となっていない。

デプスインタビュー調査（西村グループ）では、定年前には多くの者が生きがいの対象として仕事をあげ、家庭とともに職場が生きがいを得る「場」となっている事例が多いが、定年後はこれが変容している事例が多いとしている。定年後に新たに加わっている生きがい獲得の「場」としては、個人生活（趣味、学習等）が多い。

また、デプスインタビュー調査（西グループ）でも、調査対象のＯＢ全てが現役時代の生活を「仕事中心」と評価しており、家庭人としての部分が不十分であったと指摘している。一方定年後の現在は、大半のＯＢが仕事以外に何らかの「打ち込めるもの」を持っており、現役時代に漠然と認識していた「趣味」の重要性を実感をもって感じている。また、それに付随するものとして友人関係や夫婦関係についての言及も多いとの結果が示されている。このように、定年後、仕事から趣味、友人関係、夫婦関係などへと生きがいを得る「場」が変容している様子がうかがえる。

以上のように、いずれの研究においても、定年期の生きがいを得る「場」の変容を示す結果が得られているが、その契機は定年退職というよりはむしろ、仮説1.で表現しているように、「職業からの引退や職業上の地位の低下」とする方が適切であるようである。これは前節で述べた生きがいのとらえ方の変容についても同様である。定年後も雇用継続により現役時代と同じ職場で勤務する、定年後も再就職後の職業が生きがいの対象となっているような場合には例外であり、生きがいのとらえ方や「場」の変容はみられない。デプスインタビュー調査（西グループ）の考察でふれられているように、主観的な認識のレベルでの「職業キャリアの不連続」が生きがいのとらえ方や「場」の変容をもたらすといえよう。

また、前回調査では、サラリーマン現役では生きがい取得に関して「仕事の場」を離れての第三の場の拡がりに乏しいが、ＯＢは新たな場で新たな行動を起こし、新たに生きがいを獲得している。問題はＯＢより現役にあるといえる、との指摘がされていた。今回の質的調査でも、前に述べたように定年後に新たな生きがいの獲得に成功しているＯＢは多くみられるが、グループインタビュー調査では、そのような者でも定年後の新たな「場」での生きがい獲得における難しさを表明している。定年後の仕事以外の生きがい獲得の「場」への期待としては、家庭、趣味・学習活動、地域活動、ボランティア活動などがあげられていた。しかし、これらの中でも特に地域活動、ボランティア活動については、参加意向は強いが実際には参加者は少ないという傾向がみられ、生きがい得る「場」として期待されつつも、それが阻害されている状況が示されている。

6. 生きがい創造のプロセス

定年後の生きがい創造に関しても、各調査研究においてその要因の指摘がされている。

グループインタビュー結果によると、前にも述べたが、趣味がない、地域や家族とのつながりがないといった実態は、多くのサラリーマンにみられ、マイナスに働くものではあるが、直接生きがい喪失と結びつくものではない。むしろ定年後の新しい生きがいの創造は、定年後の生活の変化に対する、肯定、否定の両面の客観的な認識からスタートしているとの結果がみられる。また、先に述べたように定年後の生きがい創造には、生きがい獲得の「場」の転換が、特に日常生活の上でなされることが重要であるとしている。

また、デプスインタビュー調査（西村グループ）では、生きがい喪失後の再創造がなされている事例において、その原因が趣味の充実や社会活動、地域活動、再就職の成功などであるとの結果がみられる。

7. 生きがい喪失・創造のプロセスと性格特性との関連

生きがい喪失・創造のプロセスと性格特性との関連についての以下の仮説については、グループインタビュー調査から、これを支持する方向の結果がうかがわれる。

仮説4. 生きがい喪失・創造のプロセスと性格特性との間には一定の関連がある。

グループインタビュー調査結果では、生きがいを獲得するきっかけは、与えられる、探索する、遭遇するなどさまざまであり、こうしたチャンスを生かすことができるか否かという点において、生きがい喪失・創造のプロセスと性格特性との関係が示唆されるとしている。

生きがい喪失経験グループでは、グループ間の相対的な評価として、構成員の社交上の未熟さが目立つ、行動を抑制するような考え方をする傾向がみられる、積極性や意欲の低さ、他罰的といった点が性格傾向として感じられ、生きがい喪失との関連が示唆される。この点については、今後さらに量的調査による検証が望まれるところである。

8. 今後の課題

本調査報告の3つの調査研究では、質的な手法を用い、生きがいに関する構造的な把握をすることを目的として調査を行った。構造化していない面接調査は、データとして曖昧な部分が目立つことがさけられないが、対象者の本音を聞き出すチャンスである。今回の調査もそれぞれの調査において本音を引き出すことにある程度成功し、サラリーマンの定年前後の生きがいに関して多くの知見が得られたものと思われる。このうち、性格特性と生きがいとの関連などについては、今後の量的調査による検証が望まれる点である。

また、今回調査の対象者には戦前、戦中世代が多く含まれており、彼らの生きがいの問題には時代背景による影響が強いことが感じられた。今後、さらに若い世代が定年期に達した時に

生じる生きがいの問題には、今回調査結果から指摘されるものとは異なった面が出てくることが予想される。今後定年期を迎える世代を対象としてさらに研究をすすめることが今後の課題の一つとしてあげられる。また、今回調査対象者の今後の生活変化に伴う生きがいの変容についても追跡調査が望まれるところである。

さらに、女性を対象に含めたグループインタビュー調査では、生きがいに男女の差があることが示唆されている。また、デプスインタビュー調査（西グループ）では、定年後の生活に夫婦関係が大きな影響を与えているとの指摘がある。今回調査では補足的にとらえるにとどまっている、生きがいの男女差、夫婦関係に焦点をあてた研究についても今後の課題であるといえよう。

（付）調査票及び単純集計結果

1．事前調査

「サラリーマンの生きがい」に関する調査【二次調査】

（ n = 275 ）　　平成４年８月

（ NAは無回答）　　財団法人　シニアプラン開発機構

記入上の注意

1）この調査のご回答は、封筒の宛名のご本人がご記入ください。

2）回答は、すべてこの調査用紙に直接記入してください。

3）問１．から順にお答えください。回答は、あてはまる番号に○をつけるところと、記入していただくところがあります。

〔例１〕 1．はい　2．いいえ　　〔例２〕 ［　　］年

4）とくに断りがないときは、１問につき○は１つだけです。

5）「その他」を選んだときは、番号に○をつけた上で（＿＿＿）に具体的に記入してください。

８月２８日（金）までにご投函ください。

問１．よく「生きがい」と言われますが、次の中で「生きがい」を表すのに最も適当なのはどれだと思いますか。あなたのお考えに最も近いものから２つまでを選んでください。　（%）

1．生活に活力やはりあいをもたらすもの	36.4	6．心にやすらぎを与えたり気晴らしになるもの	17.1
2．生活にリズムやメリハリをつけるもの	6.5	7．他人や社会の役に立っていると感じるもの	34.5
3．生きる喜びや満足感をもたらすもの	49.8	8．人生観や価値観をつくるもの	9.1
4．生きる目標や目的になるもの	18.9	9．その他	0.4
5．自分自身を向上させるもの	16.4		

NA 2.5

付問．そのような生きがいを、あなたは現在持っていますか。

1．持っている 83.6　2．前はもっていたが今はもっていない 4.0　3．持っていない 4.0　4．わからない 5.5

NA 2.9

問２．あなたは現在、地域活動やボランティアなど、何か社会に役立つ活動に参加していますか。団体活動でも個人の活動でもかまいません。

1．定期的に参加している 25.8　3．以前に参加したことがある 7.6 ⇨問３へすすんでください

2．ときどき参加している 13.1　4．参加していない 50.2

NA 3.3

付問〔地域活動やボランティアなどに参加している方に〕実際に参加されている活動の内容を具体的にご記入ください。

(1)
(2)
(3)
(4) 〜

問3．次のような日常生活におけることがらのうち、あなたにあてはまるものはどれですか。
（○はいくつでも）

1. 食事をつくることができる	57.1	8．日常の買物ができる	77.1
2. 部屋の掃除ができる	86.5	9．アイロンをかけることができる	49.5
3. トイレの掃除ができる	54.9	10. 外出の身じたくができる	87.3
4. 洗濯ができる	60.4	11. 出張や旅行の荷造りができる	83.3
5. 風呂の準備・片づけができる	82.9	12. 電気代の領収書等の書類の所在が分かる	47.6
6. 布団の上げ下ろしができる	83.6	13. 妻の友人を知っている	62.9
7. ゴミの出し方を知っている	78.5	14. どれもあてはまらない	0.4
			NA 1.1

問4．それでは実際には、次のようなことをどの程度しますか。（(1)から(13)のそれぞれに1つずつ○）

	いつもする	時々する	ほとんどしない	まったくしない	
(1) 日常の食事づくり	9.1	32.0	28.4	22.2	NA 8.4
(2) 食卓の準備・食後の片づけ	15.6	43.6	24.0	10.2	NA 6.5
(3) 部屋の掃除	17.8	48.0	21.5	8.4	NA 4.4
(4) トイレの掃除	4.4	26.2	24.7	36.0	NA 8.7
(5) 洗濯	10.2	26.2	27.3	28.0	NA 8.4
(6) 風呂の準備・片づけ	23.3	46.2	16.0	11.6	NA 2.9
(7) 布団の上げ下ろし	33.8	35.6	14.2	11.3	NA 5.1
(8) ゴミ出し	24.0	41.8	19.3	12.7	NA 2.2
(9) 日常の買い物	13.8	53.1	18.5	10.2	NA 4.4
(10) アイロンかけ	8.0	16.7	24.4	41.5	NA 9.5
(11) 外出の身じたく	65.1	20.0	6.9	2.2	NA 5.8
(12) 出張や旅行の荷造り	57.5	24.0	5.8	3.6	NA 9.1
(13) 老親の世話	2.9	15.3	9.8	4.0	該当する老親がいない 60.0　NA 8.0

問５．昨年10月の１次調査の時点から現在までの間に、次のような職業生活上の変化がありましたか。

1. 定年前の退職をした	0.7	3. 転職した	4.4	⇨問７におすすみください
2. 定年をすぎた	8.0	4. 特に変化はない	83.6	⇨Ｆ１におすすみください
				NA 3.3

問６．〔昨年11月以降に定年退職または定年前の退職を経験した方におたずねします。〕
定年後・退職後に、職業につきましたか。（ n = 24 ）

1. 退職とともに職業生活から引退した	25.0
2. 退職後も再雇用や勤務延長制度等により、前の会社に勤めた	12.5
3. 退職後は出向先に移籍した	4.2
4. 退職後は別の企業に再就職した	25.0
5. 退職後は自分で事業や商売を始めた（自由業を含む）	4.2
6. 退職後は家業を手伝うようになった	-
7. 退職後はシルバー人材センターで仕事するようになった	-
8. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）	4.2
	NA 25.0

問７．〔現在職業についている方におたずねします。〕
(1)あなたの就業形態は次のどれですか。（ n = 36 ）

1. 正規の社員・従業員	13.9	4. 内職	-
2. 嘱託・パートタイマーなど	33.3	5. シルバー人材センター（高齢者事業団）	2.8
3. 自営業・自由業・家族従業員	5.6		
			NA 44.4

(2)あなたの職種は次のどれですか。（ n = 36 ）

1. 専門技術職（研究職・技師等）	2.8	5. 技能職・技術補助・生産工程従事・作業者	8.3
2. 管理職（役員・課長以上の管理職）	25.0	6. サービス職（添乗員・ホテルマン等）	-
3. 事務職（一般事務・営業・経理事務等）	11.1	7. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）	8.3
4. 販売職（店員・セールス等）	5.6		
			NA 38.9

(3)あなたの役職や地位を具体的に記入して下さい。

(4)勤務先の従業員数は会社全体でどのくらいですか。（支店や営業所などがある場合は合計）（ n = 36 ）

1. 1～29人 22.2	2. 30～99人 2.8	3. 100 ～299人 13.9	4. 300 ～999人 5.6	5. 1000人以上 5.6
				NA 50.0

(5)あなたの１週間の勤務日 ……平均 4.4 日 （ n = 20 ）
（週によって異なる場合は平均を四捨五入してください）

(6)あなたの１日の勤務時間（所定の拘束時間） ……平均 7.1 時間 （ n = 20 ）
（日によって異なる場合は、平均を四捨五入してください）

【フェイスシート】

今までお聞きしたことを分析する上で必要な事項について伺います。

Ｆ１．未既婚
1. 未婚 0.4　2. 既婚（配偶者あり）94.2　3. 既婚（離別）0.4　4. 既婚（死別）5.1　NA 0.0

Ｆ２．〔現在配偶者がいらっしゃる方におたずねします。〕
あなたの配偶者（夫または妻）の現在の就業形態は、次のどれですか。（ n = 259 ）

1. 正規の社員・従業員	3.9	4. 内職	6.6
2. 嘱託・パートタイマーなど	16.6	5. シルバー人材センター（高齢者事業団）	-
3. 自営業・自由業・家族従業員	5.0	6. 無職 ⇨（最後に職を離れてから＿＿＿年）	66.0
		NA	1.9

Ｆ３．あなたはご自分について、どのようにお考えですか。（(1)から(10)のそれぞれに、一つずつ○）

	そう思う	まあそう思う	あまりそうは思わない	ぜんぜんそうは思わない	NA
(1) 私は他の人と同じだけの値打ちのある人間だと思う	44.0	49.8	3.3	-	2.9
(2) 自分にはいくつかの見どころがあると思う	35.3	55.6	6.9	-	2.2
(3) 自分はまるでだめだと思う	0.4	1.1	37.5	57.5	3.6
(4) 私は普通の人と同じくらいには物事ができる	51.3	44.4	2.9	0.4	1.1
(5) 私にはあまりとりえがない	1.8	9.5	43.6	42.9	2.2
(6) 私はいろいろなことをうまくやれると思う	26.9	57.1	13.8	0.4	1.8
(7) 自分に満足している	30.9	52.4	13.8	0.4	2.5
(8) もう少し自分を尊敬できたらと思う	6.5	36.4	44.0	9.8	3.3
(9) 時々、自分は役に立たないと思う	0.7	7.3	49.8	39.3	2.9
(10) 自分はできの悪い人間だと思ってしまう	0.4	4.4	40.0	53.1	2.2

F 4．次の(1)から(17)のそれぞれについて、あなたのお考えに近いものをお選びください。（○は、一つずつ）

(1) 人生は、年をとるほど悪くなっていくと思う	1.そう思う 13.8　2.そうは思わない 83.6　NA 2.5
(2) 去年と同じように元気だと感じる	1.はい 80.4　2.いいえ 18.9　NA 0.7
(3) さびしいと感じることがある	1.ない 35.6　3.時々感じる 27.3 2.あまりない 34.5　4.いつも感じる 1.1　NA 1.5
(4) 最近になって小さなことを気にするようになった思う	1.はい 19.6　2.いいえ 78.9　NA 1.5
(5) 家族や親戚、友人との行き来に満足している	1.満足している 77.8　2. もっと会いたい 20.7　NA 1.5
(6) 年を取るにつれて、前よりも役に立たなくなった思う	1.そう思う 25.1　2.そうは思わない 74.2 NA 0.7
(7) 心配だったり気になったりして眠れないことがある	1.ある 23.3　2.ない 75.6　NA 1.1
(8) 年をとることは、若いときに考えていたよりも良いことだと思う	1.良い 39.6　3. 悪い 11.3 2.同じ 47.6　NA 1.5
(9) 生きていても仕方がないと思うことがある	1.ある 1.5　3.ない 73.1 2.あまりない 24.0　NA 1.5
(10) 若い時と同じように幸福だと思う	1.はい 86.5　2.いいえ 12.0　NA 1.5
(11) 悲しいことがたくさんあると感じる	1.はい 13.5　2.いいえ 85.5　NA 1.1
(12) 心配ごとがたくさんある	1.はい 17.5　2.いいえ 81.5　NA 1.1
(13) 前よりも腹を立てる回数が多くなったと思う	1.はい 22.2　2.いいえ 76.7　NA 1.1
(14) 生きることは大変厳しいことだと思う	1.はい 69.8　2.いいえ 29.1　NA 1.1
(15) 今の生活に満足している	1.はい 82.9　2.いいえ 16.0　NA 1.1
(16) 物事をいつも深刻に考える方である	1.はい 30.2　2.いいえ 68.4　NA 1.5
(17) ちょっとのことでおろおろする方である	1.はい 8.4　2.いいえ 90.2　NA 1.5

F 5．性別　1. 男　2. 女
100.0 —— 0.0

年齢（平成４年８月１日現在）　61.6 歳

F 6．現在のあなたの健康状態

1. 非常に健康	17.8	4. 注意する点があり、日常生活に制限がある	1.8
2. まあ健康	44.7	5. 病気がち・療養中	2.5
3. 注意する点はあるが、日常生活に支障はない	33.1		
			NA 0.0

〔最後に、定年退職や定年前後の生活、生きがいなどについて、日頃感じていらっしゃることがございましたら、どんなことでもけっこうです、ご自由にご記入ください。〕

2．グループインタビュー実施時調査

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿様

サラリーマンの生きがいに関する調査第２次調査

グループインタビューに際してのアンケート調査

本日は、御多忙中にも関わりませず、「サラリーマン生きがい調査第２次調査」の座談会（グループインタビュー）にご参加いただき誠にありがとうございます。このアンケートは、本日の座談会でお話しいただいた内容を分析するために、必要な事項についていくつかお伺いさせていただくものです。また最後の頁は、本日の座談会についてのご感想や、座談会では十分にご発言いただけなかったお考えなどを、ご自由に記入していただくためのものです。

アンケートに関しましては、座談会の前にご記入を始めていただいて結構でございますが、自由記述に関しましては、座談会終了後、ご自宅でご記入いただき、アンケート用紙とともにお手元の封筒にてご返送ください。お忙しい中、誠に恐縮ですが、何卒よろしくお願いいたします。

それでは、次のページのＱ１から順に、ご記入ください。

Q１　（１）から（30）まで文章が二つずつ組になっています。自分の考えや意見に近い方を選んで、記号（ＡかＢ）に○を付けてください。

			(%)	
（１）	A.	活動的に動き回る生活が、自分に合っている。	62.9	
	B.	じっくり腰を落ち着けて何かをする生活が、自分に合っている。	34.3	NA 2.9
（２）	A.	困ったことが起きた時は、人に相談する。	45.7	
	B.	困ったことが起きた時は、自分で解決する。	51.4	NA 2.9
（３）	A.	楽しそうな事は何でもしてみたい。	51.4	
	B.	ひとつのことに打ち込みたい。	45.7	NA 2.9
（４）	A.	日常的な生活の雑事でも、能率的にできる方法や、より良くできる方法を工夫する。	80.0	
	B.	日常的な生活の雑事は、一応のことができればそれで 十分で、工夫するほどのことではない。	17.1	NA 2.9
（５）	A.	変化に富んだ生活をしたい。	42.9	
	B.	平穏な生活がしたい。	51.4	NA 5.7
（６）	A.	趣味ならば、自分の好きなことを気ままにしたい。	42.9	
	B.	趣味であっても、その道を少しでも極めるようにしたい。	54.3	NA 2.9
（７）	A.	皆でまとまって、団らんを持てるような家族がいい。	51.4	
	B.	互いにそれぞれの 生き方を認めて、それぞれがやりたいことのできる家族がいい。	45.7	NA 2.9
（８）	A.	話し合いがもめたりすると、人がおさめてくれればいいと思う。	11.4	
	B.	話し合いがもめたりすると、自分で何とか取りまとめたいと思う。	82.9	NA 5.7
（９）	A.	手掛けたことは何でも、自分なりに工夫してやってみたい。	71.4	
	B.	物事は、できれば決まった道筋から外れないようにやる方がいい。	25.7	NA 2.9
（10）	A.	何をするにしても、一定のやり方に従っていれば無難に過ごせる方がいい。	31.4	
	B.	何をするにしても、自分の意見が尊重される方がいい。	65.7	NA 2.9
（11）	A.	成功や失敗は、友達や家族とともに分かち合いたい。	82.9	
	B.	成功も失敗も、一人でかみしめたい。	14.3	NA 2.9
（12）	A.	趣味は、心を踊らせるような活動的なものがいい。	37.1	
	B.	趣味は、安らぎをもたらすような落ち着いてできるものがいい。	57.1	NA 5.7
（13）	A.	ゲームや遊びは、複雑で難しいものが好きだ。	14.3	
	B.	ゲームや遊びは、手軽に楽しめるものが好きだ。	82.9	NA 2.9
（14）	A.	一人でいても、孤独を楽しめる。	25.7	
	B.	できれば、心の通う人と一緒にいたい。	71.4	NA 2.9

(15)	A.	毎日ゆとりをもって、落ち着いた人生を送れれば良いと思う。	60.0	
	B.	毎日精力的に活動するような人生を送れれば良いと思う。	40.0	NA -
(16)	A.	何かの会などのときは、人の先頭に立って働くのが良いと思う。	71.4	
	B.	何かの会などのときは、先に立つ人が働いてくれれば良いと思う。	28.6	NA -
(17)	A.	一人で楽しめるような趣味を持ちたい。	45.7	
	B.	大勢で楽しめるような趣味を持ちたい。	48.6	NA 5.7
(18)	A.	人生は、目標を持って努力すれば、必ず報われると思う。	88.6	
	B.	人生、先のことはどうなるか 分からないから、今をのんびり 楽しく生きるほうが 良い。	8.6	NA 2.9
(19)	A.	友人や知人と楽しく付き合える生活をしたい。	94.3	
	B.	人間関係のわずらわしさを離れて、静かに過ごしたい。	5.7	NA -
(20)	A.	なるべくなら、自分を試すような、緊張するようなことは避けたい。	11.4	
	B.	自分の能力が発揮でき、力を試せるようなことをやってみたい。	88.6	NA -
(21)	A.	何かの会で活動するときには、それについて 知っている人に色々と教えてもらいたい。	51.4	
	B.	何かの会で活動するときには、進んで世話役などをしたい。	48.6	NA -
(22)	A.	忙しいことは良いことだ。	74.3	
	B.	忙しくて落ち着きのないのはいやだ。	25.7	NA -
(23)	A.	人前で出しゃばるよりは、控え目でいる方が良い。	37.1	
	B.	引っ込み思案よりも、人の先に立つぐらいの方が良い。	60.0	NA 2.9
(24)	A.	人と一緒に何かをしてみたい。	68.6	
	B.	一人で何かをしてみたい。	25.7	NA 5.7
(25)	A.	人をまとめる役割を持ちたい。	62.9	
	B.	できれば、世話役は人にやってもらいたい。	37.1	NA -
(26)	A.	生きがいは、目標を成し遂げることにある。	48.6	
	B.	生きがいは、生活を楽しむことにある。	48.6	NA 2.9
(27)	A.	静かでのんびりした生活がしたい。	28.6	
	B.	積極的に何かに挑戦するような生活がしたい。	68.6	NA 2.9
(28)	A.	失敗した時は、誰かに励ましてもらいたい。	42.9	
	B.	失敗した時は、そっと一人にしておいてもらいたい。	57.1	NA -
(29)	A.	会の運営などでは、責任のある立場でいたい。	60.0	
	B.	会の運営などでは、なるべく責任のない立場でいたい。	40.0	NA -

(30)	A. 人間の生活は、元来、一人では何もできない。	82.9	
	B. 人間の生活は、元来、孤独なものである。	14.3	NA 2.9

Q 2．あなたは現在の生活について、どのように感じていますか。
((1)から(4)のそれぞれについて、あてはまるところに一つずつ○をしてください)

	非常にそう思う	だいたいそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	
(1) 今の生活は、努力すれば報われる、充実した生活であると思う	31.4	60.0	8.6	-	NA -
(2) 今の生活は、のんびりした気楽な、楽しい生活であると思う	17.1	57.1	17.1	5.7	NA 2.9
(3) 今の生活は、自分にとって大切な人たちと良い関係にある生活だと思う	31.4	62.9	2.9	-	NA 2.9
(4) まわりの人に惑わされずに、自分の生活ができていると思う	31.4	60.0	2.9	2.9	NA 2.9

Q 3．次の（1）から（20）のそれぞれについて、いつもの自分に当てはまるものはその番号の「はい」のところへ○を、当てはまらないものには「いいえ」のところへ○をつけてください。

	はい	どちらでもない	いいえ	
(1) むずかしい問題を考えるのが好きである	54.3	31.4	11.4	NA 2.9
(2) 色々違う仕事がしてみたい	34.3	28.6	34.3	NA 2.9
(3) 一人きりでいたいと思うことが時々ある	22.9	31.4	45.7	NA -
(4) 計画を立てるよりも早く実行したい	37.1	31.4	31.4	NA -
(5) 人のすることの裏を考えることが多い	5.7	20.0	74.3	NA -
(6) じっとおとなしくしているのが苦手である	57.1	17.1	25.7	NA -

	は　い	どちらでもない	いいえ	
(7) 実行する前に考えなおしてみることが多い	45.7	28.6	22.9	NA 2.9
(8) いつも何か刺激を求める	42.9	28.6	25.7	NA 2.9
(9) 会話の最中にふと考えこむくせがある	20.0	14.3	62.9	NA 2.9
(10) よく考えずに行動してしまうことが多い	20.0	22.9	54.3	NA 2.9
(11) 何でもよく考えてみないと気がすすまない	37.1	31.4	28.6	NA 2.9
(12) 人といっしょにはしゃぐことが多い	25.7	57.1	14.3	NA 2.9
(13) 用心深いたちである	28.6	31.4	34.3	NA 5.7
(14) 口数が多い方である	22.9	54.3	20.0	NA 2.9
(15) たびたび考えこむくせがある	8.6	31.4	57.1	NA 2.9
(16) お祭りさわぎがすきである	22.9	40.0	34.3	NA 2.9
(17) のんきなたちである	48.6	31.4	17.1	NA 2.9
(18) 早合点の傾向がある	34.3	25.7	37.1	NA 2.9
(19) 深く物事を考える傾向がある	22.9	40.0	34.3	NA 2.9
(20) 気がるなたちである	48.6	37.1	11.4	NA 2.9

Q4　今までの人生を振り返って、あなた自身にとって主要な出来事、あなたの人生に影響を与えた出来事としてはどのようなものがありますか。以下に示す年齢軸の、その時のあなたの年齢に見合う箇所に、その出来事を記入してください。出来事の下には、当時のおおよその年齢を数字で記入してください。

（例）

10　20　30　40　50　60　70　80　（歳）

高校卒業・就職（18）　結婚（28）　長女結婚（45）　定年退職（60）　母死去（65）

年齢軸

10　20　30　40　50　60　70　80　（歳）

〔この頁については、座談会終了後にご記入ください。〕

最後に、座談会に関してのご感想や、座談会中にお話しいただけなかったお考えなど、どのようなことでも結構です、ご自由にご記入ください。

以上で終わりです。ご協力ありがとうございました。
お手数ですが、返送用封筒にてご返送お願いいたします。

3．デプスインタビュー（西村グループ）実施時調査

Ｑ１．あなたは、今現在、何に（人、もの、ことがらなど）生きがいを感じていらっしゃいますか。
いくつでもかまいませんが、それぞれをできるだけ詳しく書いて下さい。

私は、今現在

1
2
3
4
5

に生きがいを感じている。

Ｑ２．あなたは、定年前は、何に（人、もの、ことがらなど）生きがいを感じていらっしゃいましたか。
いくつでもかまいませんが、それぞれをできるだけ詳しく書いて下さい。

私は、定年前は

1
2
3
4
5

に生きがいを感じていた。

※　欄が足りない場合には、紙を追加して下さっても結構です。

（財）シニアプラン開発機構は……

厚生省、厚生年金基金連合会および民間企業の協力により、昭和62年11月に設立された財団です。概ね50歳以上の企業在職者および企業退職者の方々を＜シニア＞と位置づけ、豊かな人生経験を持ち、広範な分野で活躍できるこの年代の方々が、その持てる力を活かして、充実したシニア生活を送るためのシステム＜シニアプラン＞を企画開発し、社会に提案しています。

■主な事業

・サラリーマンシニアの生活実態調査、ニーズ調査
・シニアの生きがい、社会活動、生涯学習等の研究
・年金生活設計（ＰＬＰ）セミナーの研究、教材等の作成
・職域を基盤としたシニア施設、シニアサービスの企画・開発

この調査・研究費用の一部は、社会福祉・医療事業団（長寿社会福祉基金）の交付金により財団法人長寿社会開発センターが助成しています。

「サラリーマンの生きがいに関する調査〔第２次調査〕」
平成５年３月

財団法人　シニアプラン開発機構
（所在地）東京都千代田区九段南４－８－13　自動車会館ﾋﾞﾙ４階
（電　話）０３（５２７５）６６６１

〔調査委託機関〕㈱ＣＲＣ総合研究所 総合研究本部
（所在地）東京都多摩市落合１丁目15番地２号　NSKビル４階
（電　話）０４２３（３８）１２１５